

てんぽに
にんがし

かさだ
かな!

じよんな
がや〜

よ〜
ござった

えっぺ?
ちよっこ?

み

加

ま

藤

っ

和

小

き

く

松

ま

し

夫

著

の

っ

、

方

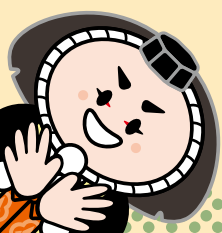
し

言

―「広報こまつ」連載 総集編―



読んで
みまっし



発刊のことば

広報こまつの人気コーナー、懐かしくあたたかい「みまつし、きくまつし小松の方言」。このたび、1998年4月号～2017年3月号まで約20年間、228回に及ぶ長期連載を記念して、総集編を発刊することとなりました。

本書は、日本語学を研究し、石川県内の多くの市や町で方言調査をされてきた金沢大学 加藤和夫教授による、小松の方言の魅力がターント（いっぱい）詰まった一冊となりました。日々の生活の中で伝えられてきた方言からは、人々の暮らしのいとなみを感じます。このすばらしい小松の方言を、次の世代にもエーガニ（大切に）つないでいきましょう。

長年にわたり執筆の労を取られた加藤和夫教授には心より感謝申し上げますとともに、ますますのご活躍をご祈念申し上げます。

資料や写真のご提供・掲載に格別のご協力をいただいた関係者の皆様に、深甚なる感謝を申し上げます、発刊のことばといたします。

平成29年3月

小松市長 和田 愼 司

も く じ

発行のことば	小松市長 和田愼司	3	冬の生活と方言	28
マタ キテガツシャイ	7	植物の方言〈みぞそば〉	31	
遊びの世界の方言	8	家族の呼び方の方言	32	
小松のギャルは蛙だった	11	〈男の子〉の方言	33	
生き物の方言	12	〈女の子〉の方言	39	
人の体と方言	14	〈お転婆〉の方言	40	
植物の方言	18	冬の生活と方言〈雪道に作る〉落とし穴	41	
〈胡座〉と〈正座〉の方言	21	挨拶の方言	42	
〈目高〉の方言	22	〈蛇の抜け殻〉の方言	43	
〈蛭〉の方言と〈蛭とり歌〉	23	〈桑の実〉の方言	47	
〈面子〉の方言	24	再び〈肩車〉の方言	48	
〈雷〉の方言	25	新しい方言	49	
〈びり〉の方言	26	虫の方言	50	
〈尻〉の方言	27	動物に関する方言あれこれ	57	
			61	

人の性向(性質)を表す方言	64	家族以外の人の呼び方の方言	130
植物の方言あれこれ	68	道具に関する方言	133
季節・気候に関する方言	71	勤怠に関する方言	135
感情を表現する方言	75	難易に関する方言	136
行動に関する方言	78	経済に関する方言	137
人体に関する方言	82	地理・地形に関する方言	140
食に関する方言	87	形容語の方言あれこれ	144
再び、遊びの世界の方言	94	小松方言の世代差	148
住居に関する方言	99	小松方言の語源	182
民俗と方言	103	方言談話資料に見る小松方言の特徴	223
時間に関する方言	107	みまつし、きくまつし小松の方言 最終回	234
空間に関する方言	109		
数量に関する方言	110	総集編の刊行にあたって	236
程度や物の様子に関する方言	111	金沢大学教授 加藤和夫	
農業に関する方言	115		
職業に関する方言	120		
衣生活に関する方言	123		
教育に関する方言	127		

平成8年夏に、調査で訪れた大杉中町で聞いた言葉です。「〜テガッシャイ」は、小松市内でも大杉だけに使われる方言の敬語のようです。

二十一世紀を目前にして、昔ながらの方言は大きくその姿を変えようとしています。そんな中、方言は、今さまでまな形で見直されつつありますが、全国的に見ると、残念ながら北陸地方の人たちの方



「おばあちゃんもう一度、ゆっくり言ってみて」平成8年10月1日〜3日まで大杉で行われた聞き取り調査
右が加藤和夫助教授

連載
1

マタ キテガッシャイ
(また来てくださいね)

言に対する意識は、まだまだ低いようです。改めて、周りから聞こえてくる、そして自分自身が使っている方言に耳を傾けてみませんか。そこには、共通語の世界とは違った、魅力的な方言のワンダーランドが広がっています。

小さいころ、胸をワクワクさせながら親の首にまたがった肩車。この肩車、大杉では「サルブンブ」、丸山や尾小屋では「チヨンノクビ」、他にも「サルマカ、オチヨンコビ、アバッチヨ」など、小松東部だけでも実に多くの不思議な方言が聞かれます。

今月からしばらく小松の方言の話にお付き合いください。来月は、肩車も再び登場する「遊びの世界の方言」です。お楽しみに！

例言

1. 本書は平成10年4月から平成29年3月に発行された「広報こまつ」の連載をまとめたものです。
2. 本書は、原則として原文通りとしています。
3. 本書において、編集の都合上、原文に収載されていた写真の一部を省略した箇所があります。ご了承ください。

連載
4遊びの世界の方言
〈片足跳び〉

「ねえ、ケンケンしよう」
元気に片足跳びをする子供たち＝白楊幼稚園で

今回は、片足でピョンピョン跳ぶ片足跳びの方言を取り上げます。前回の〈雪渡り〉の方言が次第に忘れられつつあるのに対し、〈片足跳び〉の方言は今の若い人たちからも聞かれることが多く、最近の全国的調査では、若い世代でケンケンという言い方が全国的に広がっていることがわかってきます。では、小松で年輩の人たちから聞かれる方言形にはどんなも

のがあるでしょう。今回も、これまでに調査を終えた小松東部を中心にみてみることにします。

まず、小松東部で広く聞かれたのはケンケンです。ケンケンは、もともと関西を中心に中国・四国の瀬戸内海側に分布する形で、〈片足跳び〉の方言としては歴史的に最も新しいと考えられているものです。小松のケンケンも、かつて関西方面から伝播し分布を広げたものに違いありません。それが、なぜか今また、全国の若い世代に受け入れられようとしているのです。

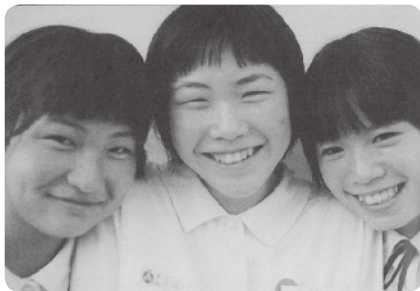
一方、ケンケンの分布と重なるように、大杉谷川下流域にはヒトンコ、シトンコ、ヒコンコ、郷谷川中・下流域にはストンコ、スットンコ、スツコンコ、ヘコンコ、さらに^{かすかみかわ}津上川流域にはストンコ、スットンコのほか、ステンコ、ヒトンコ、ツコンコなど、多くの似た形が聞かれました。小松西部にもスコンコが分布するらしく、微妙に発音の違う多くの方言形が聞かれることから、どれが元の形かはわかりませんが、この類がケンケンよりも古い形であるこ

とは間違いないでしょう。

大杉本町（大杉谷川上流部）ではヒンダリコツギ・ヒンダリコツギ、丸山（大日川上流部）ではチョンパン・チョンチョンという方言形も聞かれました。

これまで3回にわたってご紹介してきた遊びの世界の方言。〈肩車〉の方言に代表されるように、比較的狭い範囲に驚くほどたくさんの方言形が聞かれました。遊びの主役である子供たちの行動範囲が狭いこともあって、この世界の方言には細かな地域差が生まれやすいのです。

次回からは、生き物に関する方言をご紹介します。

連載
5小松のギャルは蛙^{かえる}だった

小松のギャルはとっても明るく元気だよ！

生き物の方言〈蛙〉〈おたまじゃくし〉

大杉町のあるお婆さんが、金沢に住む中学生の孫に電話で「きのう家の前にギャルがいっぱいおったぞ」と話したとしましよつ。その子はきつと「へえー、お婆あちゃん、ギャルなんて言葉よう知つとるねえ」と驚きの声を上げるに違いありません。

そうです。今やギャル^{ギャル}と言えは二十歳

前後の若い女の子をさす言葉。ところが、小松の方言ではギャルは〈蛙〉のこと。これまでの調査で、〈蛙〉をギャルと言うのは、大杉（大杉本町・大杉中町・大杉町）をはじめ、大日川上流部の丸山、津上川^{かすかみかわ}最上流部の中ノ峠といった山間の集落であることがわかりました。それ以外の地域では、ギャワズ（ギャオズ・ギユワズ・ギョワズ・ギワズを含む）が広く分布しています。ギャルは、カエル↓ガエル↓ギャルと変化したものと思われ、北陸地方では福井県嶺北地方の一部にも聞かれます。一方のギャワズは、カワズ↓ガワズ↓ギャワズと変化したものでしょう。

小松にはかわいいギャルがいっぱい

このように、〈蛙〉をさす方言としてはわずかに山間部でしか確認できなくなつたギャルですが、実は〈おたまじゃくし〉の方言の一部としては、小松東部の広い範囲で今なお生き続けています。金平より上流部の郷谷川流域と大杉谷川流域を中心に、「蛙+子」の意のギャルコ（ギャル

コ・ギャルンコ・ギャンノコ・ギャツリコなどを含む）が聞かれます。また、郷谷川下流部と津上川流域には、それらから変化したジャルゴ・ジャリコ・ジャレゴなどが聞かれます。このことは、ギャワズが分布を広げる以前に、〈蛙〉をさすギャルがこの地域に広く分布していたことを教えてくれます。

小松でかわいいギャルを見つけないと思つていた皆さん！大杉・丸山方面が穴場ですよ。

連載
6

生き物の方言〈鬼やんま〉



「ほら、こっちに来るよ」
芦城公園で昆虫採集をする博物館ジュニア友の会の子供たち

日本に住む蜻蛉とんぼの中で最も大きい「鬼やんま」。黒い体に黄色の横縞よこしまがあり、空中をスーッと直線的に、しかも悠然と飛び去る姿が人目を引くためか、小松でもさまざまな方言形が聞かれます。今回も昨年までに調査の終わった市内東部地域を中心にその方言をご紹介します。

郷谷川上流部の尾小屋にオンマトンボ・ウマトンボ、大杉谷川上流部の大杉に

ように思います。

もウマトンボが分布します。その大きさを「馬」に見立てた名でしょう。木場潟に近い本江・三谷・蓮代寺に分布するウシギリ・ウシトンボも、その大きさを「牛」に見立てて命名されたものでしょう。

郷谷川中流域の観音下から沢にかけてと、滓上川流域の原、そして今年の調査で伺った辰口町に近い里川などにはオコリトンボが分布します。「鬼やんま」の大きく恐ろしい姿が、「これを獲るとオコリ（熱病のマラリア）になる」との言い伝えを生み、オコリトンボの名となったようです。また、共通語の「鬼やんま」同様、怖い「鬼」のイメージを重ねたオニトンボが、滓上川上流部の中ノ峠から原にかけてと、大野・松岡などで聞かれました。

ほかには、ヤンマ・ヤンバ・ヤンマトンボの類が、郷谷川の下流域や滓上川の下流域にまとまって分布します。小松の「鬼やんま」の方言としては新しいものと思われます。

小松の皆さんが「鬼やんま」という蜻蛉に抱いてきたイメージや思いといったものを、その方言形から知ることができた

連載
7

生き物の方言〈かめ虫〉



「ヘクサンボって聞いたことあるよ」
博物館ジュニア友の会の子供たち

カメムシってどんな虫？

カメムシという虫の名を聞いて、皆さんはすぐにその姿を思い浮かべることができるでしょうか。普段の生活の中で、カメムシの名が話題に上ることが少ないせいか、方言の調査でこの虫の名をお聞きしようとしても、最初はどの虫のことだろうと首をかしげる方が少なくありません。

ん。ところが、「家の中によくまぎれ込んで来て、触ると嫌なおいを出す」と説明を続けていくと、「あー、ヘクサンボのことか！」といった答えがすぐに返ってきます。

触ると何とも言えない嫌なおいが…

そうです。地方の生活では今なお身近にいて、強烈なその臭気ゆえに人々の注意をひく「かめ虫」は、共通語の情報が少ないだけに、方言の共通語化が進んでいる現在でも、意外に方言名がよく生き残って使われています。

これまでの調査では、小松市に広い範囲で聞かれる代表的な呼び名は、先にも挙げたヘクサンボ（大杉谷川上流部・滓上川上流部・中ノ峠でヘッサンボ）です。「屁臭坊」の意で、東北から北陸地方にかけての所々でも聞かれる名です。ほかには、ヘクサンボの省略形のヘクサや、ヘクサンボとの関連で新しく生まれたと思われる「臭虫」の意のクサムシ（本江・蓮代寺・三谷など）、「屁こき虫」の意のヘコキムシ、ヘコキムシ（中海・軽海・荒木田・里川・大野・東

山・本江・北浅井など）などが聞かれます。

ところで、小松では今のところ聞いていませんが、全国的に見ると、嫌われ者のはずの「かめ虫」に、アネコムシ（東北地方）、ジヨロムシ（「上藹虫」の意。福井・若狭地方、近畿北部、山陰地方）、オヒメサン（中国地方）などといった美しい名を献じている地方があります。美しい名で呼んでやれば、「かめ虫」はきつと機嫌をよくして嫌なおいを出さずにいてくれる。そんな素朴な祈りにも似た気持ちが生んだ呼び名だと考えられます。

“エモライ”治すおまじないは

昔は、おまじないをしました。やがて“エモライ”のことを忘れてしまい、自然と治ったものでした(笑)。二人が向かい合わせに座り、「ワリヤ、ナンスル、わらの先を輪にして「エモライ、ムスブ」、「エモライ、ムスブナラ、シッカリムスベ」「ハイハイ、シッカリムスンダヨ」とそのわらを囲炉裏にくべました。「エモライできると、親せきに子供できる人おるんやわ」とも言いました。



生まれも育ちも符津町の北西栄作さん、雪さん夫妻
(共に喜寿の77歳)

連載
9

人の体と方言 「麦粒腫」の民間治療法

前回の〈麦粒腫〉の方言に続いて、今回は小松での〈麦粒腫の民間治療法〉(俗信)について見ることにします。

市内のほぼ全域で聞かれる代表的治療法(俗信)は、「藁の芯(ニンゴ、ヌイゴと呼ぶ)を二人で交互に言葉(うた)を唱えながら結び、それを囲炉裏の火などにくべると治る」といった内容のものです。この種の伝承は分布域が広いだけに、藁の芯の結び方、唱え言葉の内容など、市内でも様々なバリエーションが見られます。

藁の芯の結び方では、特に結び目の数のことを言わない所が多い中で、三回結ぶというのが数箇所で見られました。

また、結んだものを火にくべた時にパチンと音がしたら治るという所(尾小屋・観音下・河田館・草野・粟津など)が多く聞かれます。さらに興味深いのは、藁が身近な存在でなくなったためか、小松の平野部では「藁の芯」が、「糸」(荒木田・蓮代寺・小山田・津波倉など)、「紐」(里川・三谷・木場)、「蘭草」(矢崎)などに変化していることです。時代や環境の変化で俗信も内容を変えているわけです。

では、藁の芯や糸などを結ぶ時の唱え言葉を二例だけご紹介しましょう。

①エモライ エモライ ワリヤ ナニ ククル ウラ エモライ ククル ヒッククツテ キベル(松岡)

②オマエ ナンスル ワタシヤ エモライ ムスブ エモライ ムスブナラ シッカリ ムスベ(符津)

これら以外にも、集落によって微妙に異なる多くの唱え言葉が聞かれました。ここではこれ以上は紹介できませんが、これをご覧になって懐かしく思い出される方も多いことでしょう。

さて、この種の俗信のほかには、津上川・郷谷川・大杉谷川の上流部を中心に「ツゲの櫛を温めて麦粒腫にあてると治る」というのが聞かれました。分布域からみて、藁の芯を結んで……の俗信よりも古いものと考えられます。

メモライって共通語じゃないの？

今回は目に関係の深い〈麦粒腫〉を取り上げます。共通語ではモノモライと言いつ、瞼の縁に小さくぶつとできることのある腫れ物の呼称です。小松の皆さんにはモノモライよりもメモライと言った方が分かりやすいでしょうか。

こう書くと、「えーっ、メモライって共通



符津町の皆さんから方言の聞きとり調査をする加藤先生(左)＝南部公民館で

連載
8

人の体と方言「麦粒腫」

語じゃなかったの？」と驚く方がいるに違いありません。共通語形モノモライを普段耳にすることが少ない上に、北陸地方では福井県の北部から石川県の加賀・口能登地方、そして富山県と、広い範囲にメモライが分布しますので、てっきり共通語だと思い込んでいた人が多いのです。

では、これまでの調査(今夏の調査で小松市のほぼ全域の分布が見えてきました)から、小松ではメモライ以外にどんな〈麦粒腫〉の方言形が聞かれるかを見てみましょう。

まず、メモライと並んで、それからの音変化形と考えられるエモライ(イモライ・メモレ・メモリ・メモロー・イモリなども)が市内の広い範囲で聞かれます。

一方、大日川上流部の丸山には、ホッテ、それに隣接する大杉谷川上流部にはメブツ・メブツ・ネブツ・ネブツという形が聞かれました。これらはいずれも、舌の意の古語「陪堂」に由来するホイト・メボイトから変化した形と考えられ、メモライ以前の古い分布の名残だと思われる。ほかには、埴田・古府・平面でメチン

ボ・メチンボというのも聞かれました。

小松ではまだ聞いていませんが、〈麦粒腫〉ができた場合に、他人から何か品物をもらうと治るといった俗信が全国各地にあり、これが、共通語形モノモライやメボイト・メモライといった呼称を生んだと考えられています。

今回は、小松での〈麦粒腫〉の民間治療法(俗信)の分布について見てみたいと思います。

連載
10人の体と方言
〈つむじ〉〈旋毛〉

「この子のつむじはどこにあるのかな…」
外孫の中野秀星くんを抱く
田嶋輝雄さん・芳子さん夫妻（育成町）

〈つむじ〉と言うのは、一般に後頭部の頂上付近にある髪の毛の渦巻いた部分をさす共通語形です。「一目立たないもの」のようですが、渦が右巻きか左巻きか、頭部のどの辺にあるか、渦の数は一つか二つかなど、意外に注目されやすい身体部位の一つと言えます。

これまでの調査から、小松市内の〈つむじ〉の代表的方言形は、チリ、チジ、イジの

三つであることが分かりました。

チリは、津上川・郷谷川・大杉谷川流域や鍋谷川流域など市内東部の広い範囲に分布しています。チリという形は、小松だけでなく、すぐ北の辰口町・寺井町・川北町をはじめとする加賀地方から能登地方にまで分布する、石川県内の〈つむじ〉の方言形の代表とも言えるものです。チジは、チリの分布域の西に続いて、小松ハイパスとJR北陸線に囲まれた带状の地域と栗津を中心とした日用川流域、南の那谷・菩提・滝ヶ原などに、そしてイジは、安宅を中心とした日本海沿岸部に分布しています。

これらチリ、チジ、イジは音声的にも類似していて、おそらく最も広い分布を見せるチリが元の形で、チリからチジ、さらにチジからイジに変化したものと考えられます。

ほかには、大杉谷川上流部でズリ・ズイ・ズイダレといった方言形も聞かれました。また、ところどころで聞かれたズコは、本来頭頂部をさしていたものが、近い場所にある〈つむじ〉の方言形に転用され

たものでしょう。

ところで皆さんは〈つむじ〉の数や場所のことで何かおっしゃることはありますか？「〈つむじ〉が二つある人は意地悪な人」という話を小島・矢崎・栗津で、「〈つむじ〉が真ん中にある子は利口な子、横にある子は言うことを聞かない子（意地悪な子）」という話を古府・二ツ梨で伺いました。果たして心当たりのある読者はいらっしゃるでしょうか…。

連載
11人の体と方言
〈薬指〉〈小指〉

「ゆびきりげんまん」
平面町の平井愛子さんと孫の俊晃くん（小学2年生）
「昔は薬指はベンツキユビ、小指はコンチビと言うとったんね」

私たちにとって手の指は、日常生活でも身近な身体部位の一つであり、その呼称も比較的使用頻度の高いものです。しかもクスリユビを除く四本の指の呼称（共通語形）は、命名理由が理解しやすいこともあってか、全国的にもそれほど方言形は多くありません。特に〈親指〉〈人差し指〉〈小指〉は、全国の広い範囲にオヤユビ、ヒトサシユビ、コユビ（北陸地方では

コユビ以外の方言形も聞かれます）が分布し、〈中指〉も、近畿・中国・四国地方を中心にタカタカユビが分布するものの、そのほかの地方（石川県内全域を含む）はナカユビです。と言うわけで今回は、小松で共通語形と異なる呼称の聞かれる二本の指〈薬指〉と〈小指〉を取り上げます。

まず〈薬指〉では、市内全域に共通語形クスリユビが分布するほか、「最近はまだにしか言わない」「昔は言っていたが」といった説明つきで、女性を中心とした年輩の方々からベニサシユビ・ベンサシユビという方言形を広い範囲で聞くことができました。ベニサシ・ベンサシは「紅さし」で、かつて女性がこの指で唇に紅をさしたことに由来します。室町時代の終わりに京都で使われ始め、その後北陸を含む西日本全域に広がったものの名残です。素敵な名前ですが、〈薬指〉で紅をさすことをしなくなった今、ベニサシユビの名が忘れ去られようとしているのは仕方ないことでしょう。ちなみに共通語形クスリユビは、十三世紀ころ文獻に登場するクスシノユビ（クスシは薬師^{くすし}＝医者

意）が江戸時代に入ってクスシユビ→クスリユビへと変化し、東日本に分布を広げたものです。

一方〈小指〉はと言うと、共通語形コユビとともに市内全域にコンチビ（カンチビとも）という方言形が分布します。コンチビの「チビ」が「小さい」意のチビを連想させるかわいい名前ですが、コユビの普及でこれもまた遠からず小松の方言から消え去る運命にあるようです。

連載
12植物の方言〈かぼちゃ(南瓜)〉
―方言になった外国語―

珍しい白カボチャです。
「おいしいかな」とペロリ。
森下果南ちゃん(1歳・旭町)

〈かぼちゃ〉は、甘藷(かんしょ)馬鈴薯(じゃがいも)玉蜀黍(とうもろこし)などとともに、十六世紀末から十七世紀初めにかけて日本に渡来した作物で、中でも〈かぼちゃ〉は、十六世紀末にキリスト教布教のため日本を訪れたポルトガル人によって九州にもたらされ、その後全国に広まったとされています。現在共通語形とされ、方言形としても東日本を中心に広く分布するカボチャは、そのポ

トガル人たちが〈かぼちゃ〉をさして言うた「カンボジア産の瓜を意味する呼称の「カンボジア」に由来すると言われています。

さて、小松でも最近では、若い世代を中心に共通語形カボチャが急速に普及していますが、年輩の方々からは今もボブラ(ほかにボープラ、郷谷川中流域から梯川中流域にかけてのボクラ、大杉谷川上流域のボツバ、ボンバ・ボープバなど)という方言形をよく聞くことができます。ボブラの類の分布は意外にも広く、北陸では小松を含む石川県の全域とそれに続く富山県西部と富山県東部の一部に分布し、さらにナニキンの分布域(福井県嶺北地方から近畿地方)をはさんで中国・四国・九州地方の広い範囲に分布します。分布から見て、西日本ではナニキンよりも古い形と考えられるこのボブラも、実は中世末にポルトガル人によって伝えられた〈かぼちゃ〉を意味するポルトガル語 *bo-brá* (ボープラ) に由来するものなのです。中世末にポルトガル人が伝えたポルトガル語の中には、カステラ、パン、タ

バコ、ボタン、カルタなどのように日本語(外来語)として定着したものもありますが、方言の世界にだけその名残をとどめているボブラのような例もあるので

す。ところで、ボブラ(ボブラカス、ボブラスケなどの形でも)はまた、〈かぼちゃ〉の中が空洞であることに喩えて、頭が空っぽ、つまり「頭の悪い人」「馬鹿な人」などをさして言うとの説明を、小松の平野部・海岸部を中心とした多くの町の方々から伺いました。人を褒めることばよりも貶すことばが豊富なのも方言の世界の一つの特徴と言えます。

連載
13

植物の方言〈露草〉



ツクサカ。青い花が咲く

夏に野や道端で可憐な青色の花を咲かせる雑草(露草)をご存じでしょうか。群生して日照りにも強いので、時に嫌がられるこの草の名の世界にも、意外な方言の花が咲き誇っています。

共通語形としての新しい呼び名と思われるツクサカ(ツググサ)は、小松市内の平野部を中心に広い範囲で聞かれますが、ツクサ以外にも、コーヤノタロベ、

コーヤノタロ、タロベグサ、タロベ、タロボシなどといった、一風変わった呼び名が年輩の方々から聞かれました。

コーヤノタロベ・コーヤノタロベは、北部の蛭川・長崎・小島、梯川流域の古府・一針・白江、海岸部に近い浜佐美本町などに分布します。また、大杉谷川中上流部には、似た形のコーヤノタロ(大杉中町)・コヤノタロ(大杉本町・赤瀬)・コーヤノヒコ(大杉中町・下大杉町。ヒコは「曾孫」も分布します。これらをまとめてコーヤノタロベ類と呼ぶことにします。

北部鍋谷川流域・南部地区・海岸部のタロベグサ・タロベ、津上川流域・郷谷川流域・大杉谷川下流域のタロボシ・タロベシ・タロフシなどを取り囲むように、市内周辺部に分布するコーヤノタロベ類が、タロベグサ・タロベ、タロボシなどの元の形であることは明らかです。

コーヤノタロベ類のコーヤとは「紺屋」で染物屋をさす方言です。おそらく、露草の花の青色から紺屋の染め物の青を連想して名付けたものでしょう。江戸中期の全国方言集『物類称呼』(一七七五年

刊)に〈露草〉を近江で「こんやたらう」、加賀で「こうやめん」、江戸後期の『諸国採薬記』(一八三・三六六年刊)に近江坂田郡で「こうやのたらう」の記載がありますので、小松で独自に生まれたものではなく、江戸期以降に近畿方面から伝わった呼び名と思われます。その過程で、「紺屋の太郎(染物屋の長男)」が「紺屋の太郎兵衛」に形を変えたのでしょう。

ほかには丸山・中ノ峠でハナガラ、尾小屋・安宅新でインクバナ、インキグサ、蓮代寺・木場でトンボグサ、平面でテングサなどといった呼び名も聞かれました。

連載
14

植物の方言〈彼岸花〉



「昔や、きのご採りに行くと、山のあせ道にいつぱい咲いとったね。真っ赤でかわいらしいもんです」と92歳の上田しかさん（加賀八幡、そばで水仙が香る）

今月は、秋の彼岸のころに田畑の土手、寺の境内や墓地などに、鮮やかな赤色の美しい花を咲かせる〈彼岸花〉の方言を取り上げます。別名を曼珠沙華、死人花とも言います。

美しいのに嫌われ者の花

あんなにきれいで魅力的な〈彼岸花〉ですが、「家に持ち帰るのはよくない」（遊泉

寺）、「オコリ（熱病のマラリア）になると言われ、避けて通った」（八幡）、「死体を埋めた後に咲いた花と言われ、嫌がって家には飾らなかった」（若杉）などの話や、別名「死人花」からもわかるとおり、実はかわいそうな嫌われ者の花なのです。この花や球根が猛毒成分を含むことがその理由のようです。

そんな〈彼岸花〉を小松では、ヒガンバナ、ベロマガリ・ヘラマガリ、テクサリバナ、ハミズハナミズ、ドクバナなどの名で呼んできました。ヒガンバナは咲く季節に注目した名。市内中北部のベロマガリ・ヘラマガリの分布域を除いた広い範囲で聞かれます。丸山や郷谷川・大杉谷川上流部などの山間部にも分布しますから、小松では古くからの呼び名と思われま

なめると舌が曲がる？

これに対し、ベロマガリは北の辰口町・寺井町に接する鍋谷川流域とその西の地域、そして滓上川最上流部の中ノ峠に、ヘラマガリは隣接する滓上川下流域と南に続く郷谷川・大杉谷川下流部に分布しま

す。ベロ・ヘラはいずれも「舌」で、花卉の形が舌に似ていて、その毒性が「これをなめると舌が曲がる」といった伝承を生み、これらの呼び名が独自の分布域を形成したものでしょう。テクサリバナは滓上川中流域（原、麦口）に分布します。「触ると手が腐ると言われた」との説明も聞かれ、ベロ（ヘラ）マガリの分布域の中で、新たに派生した呼び名と考えられます。ドクバナ（毒花）は南部地区の林・栗津・白山田で聞かれました。

ハミズハナミズは、〈彼岸花〉に似た別の花をさすとの回答が多くの地点で聞かれたのですが、花茎が枯れたあとに葉が出るという共通の特徴から〈彼岸花〉の名に転用されたようです。南部日川流域と海岸部の9地点で聞かれました。

連載
15

〈胡座〉と〈正座〉の方言



「そういえば私の生まれた紀州の山奥（和歌山県西牟婁郡）では、あぐらのことをオタグラといいますな」と横矢盛雄さん（加賀八幡、写真右）
「小さいとき、アグチかいてメシを食べるとおこられたもんです（笑）」管理人の石田孝太郎さん（茶屋町）＝いいの森旧中村家のいろりを囲んで

生活様式の洋風化で、椅子に腰掛けることがめつり多くなってきましたが、床や畳の上ではやはり〈胡座〉や〈正座〉が似合います。今回はそんな〈胡座〉と〈正座〉の方言です。

〈胡座〉はアグチ一色の世界

〈胡座〉の方言は、動詞形ネマルを使う大日川上流部の丸山以外のすべてで、ア

グチ（カク）が聞かれました。アグチは石川県から富山・新潟両県の広い範囲に分布します。足袋などの足をはき入れる口を意味する「開口（あきくち）」の部分で足を組むところから、アキクチ→アイグチ→アグチと変化した形です。

〈正座〉は何と50種以上の方言形が

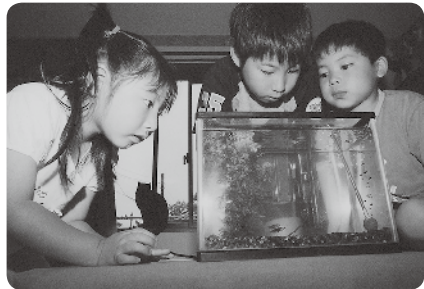
一方、〈正座〉の方言は対照的に実に多彩です。これまでの市内80集落の調査で、何と50種以上の方言形を聞くことができました。そのうち、動詞ツクバウに由来すると思われるオツクバイ（カク）の類がほとんどを占めています。

まず、オツクバイとそれに近い形が、市内周辺部の、大日川・郷谷川上流部丸山（オツッバイ）・尾小屋（オツクバイ）、大杉谷川上流部（ウツッバイなど）、滓上川最上流部（ウツッバイ）、海岸部に近い日末（ウツクバイなど）に分布します。一方、オツクバイの類から変化したと考えられるウツブラ、ウツブカイの類、ウツブカイ類がさらに変化したと考えられるウツブキの類が、それぞれまとまった分布

を見せています。ウツブラ類（ウツブラ・オツブライ・ウツブライ・オツバリ、ウツバリ・ウツッバイ・ウツッペなどは郷谷川流域と海岸部、ウツブカイ類（ウツブカイ・オツブカイなど）は木場潟周辺から南部地区、ウツブキ類（ウツブキ・オツブキ・ウツブケ・オツンバキ・ウツバキなど）は北の滓上川・梯川流域に分布します。

ほかに、辰口町・寺井町と接する一部地域ではオネマリといった形がまとまって聞かれました。

〈胡座〉と違い、「〈正座〉しなさい」とは大人が子供に向かって言うことが多いものの、〈正座〉に50種以上の方言形が生まれたのは、そんな事情と深い関係がありそうです。

連載
16めだか
「目高」の方言

卵からメダカの赤ちゃんが生まれたよ。かわいい！
蓮井皓貴くん(8歳・蓮代寺町)、英仁くん(6歳)、茉紀ちゃん(4歳)

昨年、環境庁が絶滅の恐れがあると発表した「目高」のことが最近よく話題になります。本誌6月号にも小松での「目高」の生息調査の記事が出ていました。

小学校唱歌にも歌われ、以前は日本中の池や小川で見ることができ、子供たちにとって格好の遊び相手だった「目高」。今回はその「目高」の方言について見ることにします。

全国で一番方言の種類が多い「目高」

子供の関心を引きやすい遊びや小動物、植物の名には方言の種類が多いと言われます。幸川十歩という人の調査では、「目高」の方言はなんと全国で5,000種ほどもあり、方言の種類のもも多いものとされています。となると、小松市内でもさぞ多くの「目高」の方言が、と期待したくなるのですが、意外にその種類は多くありませんでした。小松で聞かれる「目高」の方言は、大きく分けると2種類になり、一つは共通語形と同じメダカ。もう一つはメメジャコ、あるいはそれに似た形のものです。

江戸時代には関東でメダカ、京都ではメメザコ

メダカもメメジャコも文献では中世末ごろにすでに登場します。江戸時代の全国方言集『物類称呼』(七七五)には「めだか。東武にて、めだか。京にて、めめざこ(以下略)」とあり、共通語形メダカがすでに江戸期から関東地方で使われていた

ことが分かります。またメメザコ(目目雑魚)の類は現在、北は東北から南は九州までの広い範囲に分布しています。京都を中心に江戸期以降全国に広まったもののようにです。

小松のメメジャコの類には、メメジャコのほか、メメンジャコ、メメンジャンコ、メーメンジャコ、メメンジャツコ、メミンジャコ、メメンジャク、メメジャコなどがあります。中でもメメンジャコの分布が広く、辰口町に接する下八里・河田館あたりから小松バイパスに沿って南部の津波倉・粟津・矢田野あたりまでと、北部の梯川流域などで聞かれました。

「目高」の数が減少する中、メメジャコ類の方言も次第に聞かれなくなるかと思うと残念な気がします。

連載
17はたる
「蛭」の方言と「蛭とり歌」

想像してみてください。
静かな夜、夜露にぬれた苔のじゅうたんの上に飛び交うホタルの群れ：ひっきりするほどきれいです

よ
日用町にある「苔の園」で働く大西美根子さん(日用町・写真右)、高平百合子さん(加賀市)

6月末から7月、夜に淡い光を点滅させながら飛び交う「蛭」。一時期、数が激減したと言われますが、最近はまだ少しずつ増えてきたようです。普段、夜に出歩くことを許されなかった子供たちにとって、暗い中、ちよっぴりスリルを感じながらの蛭とりは実に楽しい遊びでした。

ホタル以外にホタルコ、ホツタルコ、ホツタリコも

これまでの調査から、小松での「蛭」の方言形は、共通語形と同じホタル(ホータルを含む)が最も広い範囲で聞かれ、ほかにホタルコ、ホツタルコ、ホツタリコが聞かれました。ホタルコは郷谷川流域の尾小屋・松岡、滓上川流域の中ノ峠・麦口・中海、南部のニツ梨・白山田・菩提などに、ホツタルコ、ホツタリコは滓上川中・下流域、大杉谷川下流域、鍋谷川流域とそれに続く梯川流域、小松バイパス沿いの集落にまとまった分布が見えます。おそらくホタルコが古く、それからホツタルコ、さらにホツタリコが生まれたものでしょう。

ホタルコ ツイコ ツリヤオル コイヤ

ところで調査では、「蛭」を捕まえるときに歌った「蛭とり歌」についても尋ねました。多くの集落では「ホー ホー ホータル コイ アッチノ ミーズワ ニーガイソ コッチノ ミーズワ アーマイ

ゾ」という一般的な歌でしたが、北部の鍋谷川流域、滓上川下流域の10以上の集落で「ホタルコ ツイコ」といった歌詞で始まるものが聞かれました。

ホタルコ ※ツイコ ※ツリヤ
オル
コイヤ アッチノ ミーズワ ニーガイソ
コッチノ ミーズワ アーマイ
ソ チャット コイ ノマス♪(荒木田)

ホツタリコ ツイコ アツチャノ
ミーズワ ニーガイソ コッチノ
ミーズワ アーマイソ ツイコ ツイ
コ ノマス♪(里川)

(注)ツイコ：露のことか。ツリヤ：連れ(仲間)は。

集落によつて微妙に歌詞は異なりますが、南部の白山田・那谷でも少し似た歌が聞かれたので、小松の「蛭とり歌」の古い形ではないかと想像しています。

連載
18

〈めんこ〉の方言



ババ「難しいよおー」
はじめてメンコにチャレンジ。堀口 浩さん(島町)
と琴絵ちゃん(8歳)、桃香ちゃん(3歳)の親子

たたきつけて、めくりっこ

〈面子〉というのは江戸時代からある玩具ですが、ボール紙製の紙面子が流行したのは明治後期からと言われます。40歳以上の人特に男性なら、小さいころ、丸い面子を地面や床にたたきつけてめくりっこなどしたことを懐かしく思い出されるに違いありません。今の子供たちが

面子遊びをしなくなったせい、共通語形メンコは意外に普及しておらず、小松でも高年層を中心に多彩な方言形が聞かれます。

小松で聞かれた〈面子〉の方言形は、マルウチ、マルケン、パス、パッチ、カッタの5種類に大きく分けられます。

丸い形からマルウチ、マルケン

マルウチ、マルケンの類のマルは、その丸い形からでしょう。マルウチの類は、郷谷川流域の尾小屋から金野までと、大杉谷川流域、梯川下流域、さらに旧小松町域などに分布します。「丸打ち」の意と思われます。マルケンの類は、津上川流域の中ノ峠から岩渕までと、それに続く鵜川・遊泉寺から古府までの範囲に分布します。「丸券」あるいは「丸拳」の意でしょう。

遊ぶ時の音からパス、パッチ

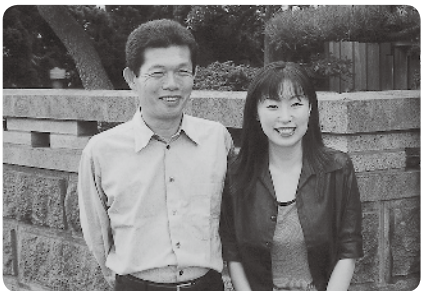
一方、パス、パッチの類、特にパッチは、〈面子〉をたたきつけた時の音を写した形でしょう。パスの類は、日本海沿岸部と木場潟周辺、大杉谷川中・下流域、さらに

日用川流域を含む南部地区までの広い範囲に分布します。パッチの類は、郷谷川上流部の尾小屋・西保、少し離れて北浅井、白江、佐々木、五国寺・花坂などの集落に囲まれた範囲に分布します。音を写したと言え、丸山でシッペン、尾小屋でベッタ、金平でベッタという形も聞かれました。

カッタの類は北部の中海、軽海、荒木田・千代、能美、大杉谷川上流域、加賀市との境に近い日末、佐美などに分布します。昔は四角い紙面子もあったようですが「カルタ」と関係があるかもしれません。かつて面子遊びを通じて、それぞれの方言形が子供たちの口から口へと伝えられていった様子が目に浮かぶようです。

連載
19

〈かみなり〉の方言



いつもは優しいお父さん。
でも、たまーに落ちる雷はコワ〜イゾー
休日と一緒に買い物に出掛ける仲良し親子。
木村建一さん、和美さん(義仲町)

あたかも、雲上の雷神が激しく太鼓を打ち鳴らすかのように鳴り響く雷(「神鳴り」の意は、地震・火事とともに、怖いものの代表の一つとされます。全国的に、雷の方言形に「サマ」という敬称がつくことが多いのも、それに対する人々の畏敬の念の現れと言えるでしょう。

北陸の雷は夏よりも冬が本番

雷は、太平洋側の地方では夏のもの、相場が決まっています。雷雲の発する光が古来イナビカリ(稲光)、イナズマ(稲妻)と呼ばれ、稲穂の実りを招くと信じられてきたのも、夏の雷に由来するものです。しかし、北陸など日本海側の地方では、冬、雪の降る季節に雷の鳴ることが多く、そのことが、共通語の世界にはない冬の雷に対する呼称(小松ではユキフリガミ、ユキガミ、ユキガミナリなど)をも生むことになりました。

小松の雷はゴロゴロではなくドンドと鳴る

小松市内での雷(総称)の方言形には、共通語形と一致するカミナリのほかに、ドンドカミ、カンバラ、ライサマなどがあります。

カミナリ類(カンナリ、カミを含む)は、郷谷川流域(尾小屋から東山の範囲)と、加賀市に近い南部地区の一部(下栗津・津波倉・林・栗津・矢田野・矢田・ニツ梨・那

谷・菩提・滝ヶ原などで聞かれます。それぞれに、次のドンドカミ類の分布域とは一線を画す形で、まとまった分布を見せていますので、ドンドカミ類が分布を広げる以前のものと思われる。

一方、カミナリ類の分布域を除いた小松の広い範囲で聞かれるのがドンドカミ類(ドンドガミ、ドンドンカミを含む)です。ドンドとは雷の音を写した形。「ドンド(と鳴る)神」の意でしょう。この類は、県内でも小松を含めた旧能美郡の範囲に分布に限られるようで、この地域で独自に生まれた形と考えてよさそうです。

カンバラ、ライサマは大日川上流部の丸山で聞かれました。ライサマは「雷様」でしょう。カミナリよりもさらに古い分布の名残ではないかと考えています。

連載
20

〈へびり〉の方言



ヨーイ・ドン!
(北部児童センター駅伝大会で)

秋は運動会のシーズン。さわやかな秋空の下、小松市内のあちこちで応援の歓声が上がったことであろう。ところで、運動会と言えば「かけっこ」。小松の方言ではハシリヤンコなどとも言いますが、「かけっこ」などの競争で1等賞の人がいれば、一方で必ずいるのが〈へびり〉になる人。今回はその〈へびり〉の方言をご紹介します。

一つの集落にたくさんの方言形が併存

昨年までの調査結果(約80集落をもとに〈へびり〉の方言形を整理していて、多くの集落で、何種類もの方言形が使用されていることに気づきました。最低でも2、3種類。4、5種類も決して珍しくなく、津上川流域の中海のように8種類もの方言形が聞かれた集落さえあります。親しい人間関係を背景とした、比較的遠慮のいらぬ方言社会であっても、〈へびり〉のような言葉はそう公然とは使えないもの。そうした隠語的性格が、同じ集落内での個人差や、個人の中での併用につながる、このような状況を生んだのではないかと考えています。

ゲット類、ゲベ類、ゲス類が代表形

比較的新しい形と考えられるビリ(ビリを含む)、身体部位の「尻」をさす形から派生したと考えられるケツを除くと、ゲット類(ゲット・ゲットクソ)、ゲベ類(ゲベ・ゲベス・ゲベソ・ゲベスト・ゲベツ)、ゲス類(ゲス・ゲスベ・ゲスツ・ゲスッポ・

ゲスツ)が小松での代表的な方言形です。このうち、ゲット、ゲベはともに「尻」の意の方言形から、ゲスは、「下衆(下種)」の意から生じたものかと考えています。中では、ゲットが市内の最も広い範囲で聞かれ、その強調形と思われるゲットクソは津上川・鍋谷川・梯川流域と、日本海沿岸部、そして加賀市に近い南部地区に比較的多く分布しています。ゲベ、およびそれからの変化形と思われるゲベス、ゲベツも広い範囲で聞かれますが、ゲベツは木場潟周辺に多く分布します。ゲス、ゲスベもまた広い範囲で聞かれますが、ゲスベは鍋谷川流域に多く分布しています。

共通語的なビリが勢力を伸ばす中、これらの方言形のうちのいくつかは、ビリとともに今後もひそかに使われ続けるのではないかという気がしています。

連載
21

〈尻〉の方言



はっけよい のこた のこた
(白江保育所で)

先月号でご紹介した〈へびり〉の方言形の中には、身体部位としての〈尻〉の方言形から派生したと思われるものがあります。今月は一九九九年最後(へびり)の月。そこで今回は、〈へびり〉とも関係の深い〈尻〉の方言を取り上げることになります。

〈尻〉と言えば、数ある身体部位の中でも比較的注目度の高いものの一つですが、場所が場所だけに、日常生活においてその呼称が公然と口にされることはあまり多くありません。主に、家族内やごく親

しい人間関係の中で語り継がれてきた言葉と言えるでしょう。

ヒチベタからケツ、ケツベタ(ケツべ)、そしてシリへ

小松市内での〈尻〉の方言形の分布を見ると、大日川上流部の丸山、大杉谷川上流部の大杉本町、津上川上流部の中ノ峠といった山間部や、市内に点々と聞かれるヒチベタ(シチベタ、シチビタ、ヒチビタ)が最も古い形と考えられます。シリベタがシチベタ、そしてヒチベタへと形を変えたものでしょう。辰口町に近い上八里や古府では、ヒチベタのヒチを数の「七」になぞらえた「ヒチベタ ハチベタ クラフシャ トンデク(子どもの尻をたたけば飛んで逃げて行く)」といった言い方も聞かれました。また、河田館・観音下・金平・本江・津波倉など、所々でヒチベタが「尻」から「尻の下太股」に意味をずらしているのも、この方言形の古さを物語るものとして注目されます。

ヒチベタの次に分布を広げたのは市内の広い範囲で聞かれるケツでしょう。

そして、ケツはヒチベタと混交して市内のあちこちでケツベタという方言形を生み、さらにはその下略形ケツべ(梯川流域ではケツじ)を生んだと考えられます。そしてさらに今、高年層世代にも共通語形シリ(オシリ)が使われ始めたのです。

北の鍋谷川・梯川流域にアカベの分布

これまで紹介した〈尻〉の方言形が市内の広い範囲に分布するのに対し、北の鍋谷川・梯川流域にのみ分布の見られる方言形にアカベ(アカビも)があります。能美郡・江沼郡内にはアカベが「肛門」をさす所がありますので、本来「肛門」をさしていたものが、この地域で意味をずらして「尻」をさすようになったと考えられそうです。

連載
22

冬の生活と方言〈氷柱〉

氷柱
写真提供 辻 久詩さん(三谷町)

連載3年目にあたって

新しい年を迎え、この連載も3年目に入ります。連載では、現在継続中の市内全域での方言調査の結果を少しずつご紹介していますが、登場する方言は主に70歳前後の皆さんがお使いの、あるいはお使いだったものです。中には、若い世代になじみのない方言も多いことと思います。最近、私の指導学生が、小松市内中心部で10歳代から70歳代までの世代別方言調査

をしてくれましたので、今年は若い世代も含めた、変化する小松の方言の状況も時にご紹介できればと思っています。

屋根の垂木の先に下がるからタロキって本当？

これまでに小松市内で確認できた氷柱の代表的方言形はタルキとタロキです。中でもタロキが圧倒的に優勢で、市内の全域に分布します。タルキ・タロキの類は、小松だけでなく、福井県嶺北地方から石川県(奥能登を除く)にかけて聞かれるもので、「屋根の垂木(タルキ・タロキ)の先から下がるのでタルキ・タロキと言つ」と考えている人が多いようです。しかしこれは、福井・石川の人が勝手に作り上げた民間語源と呼ばれるものなのです。

タルキ・タロキは古語「垂氷」が変化したもの

実は、小松の代表形タロキはタルキから変化したもので、タルキはさらにタルヒという形にさかのぼります。タルヒとは『源氏物語』(未摘花)に「朝日さす軒のた

るひは解けながら」のように登場する古語「垂氷」です。文字を持たない方言として京都から北陸に伝わる間に、タルヒの語源がわからなくなり、先の民間語源によりタルキ、そしてタロキへと形を変えていったのです。

ほかに、タルキ・タロキを方言形の一部に含んだタンタルキ(丸山・下大杉・本江)、タンタンタルキ(観音下・松岡・上江)、タンタンタロキ(波佐谷)、チンチンタルキ(中ノ峠)／タルキンボー(埴田・本折)、タルキンボ(沖町・園町・寺町・龍助町)、タロキンボー(本折)、タロキンボ(白江)／シンジンタルキ(軽海・日末)、シンジンタロキ(日末)、センダンタロキ(安宅)といった形も聞かれました。方言の自由で豊かな創造の世界を感じさせるものばかりです。

連載
23

冬の生活と方言〈(雪に足が)はまる〉

長ぐつが雪にうつって
歩けなかった日がなつかしい...
北陸の冬の日も期間が短くなりましたねえ

近年の暖冬傾向で、雪の生活とともに使われてきた方言が、少しずつ使われなくなってきたように思います。先月ご紹介した〈氷柱〉も、最近はめっきり見かける機会が減りましたので、タロキ・タルキに代表される方言形を懐かしく思い出された読者も多いのではないのでしょうか。今月も、そんな雪の生活に関係の深い言葉を取り上げます。

共通語は「はまる」「もぐる」それとも？

冬、雪道を歩いていて雪に足がはまつた経験のある人は多いでしょう。そんな時、皆さんは「足がどつした」と言いますか。積雪量が減り、融雪・除雪対策が進んだ最近でも、小松をはじめ北陸地方の多くでは、雪に限らず柔らかい土や泥に足がはまる場合も同じ言い方をしますので、日常まだまだよく使われる言葉だと思っています。

ところが、この共通語形は何かと言うと実ははっきりしません。「はまる」か「もぐる」かなとも思いますが、ほかの言い方もできそうです。雪がほとんど降らない東京あたりでは、まず必要とされない言葉だからでしょう。

高年層では代表形ウツルのほか、ハマル、シズム、ゴボル

市内の高年層の人たちが使っている言い方を見ると、ハマル(矢崎・島・木場・津波倉・粟津・那谷・滝ヶ原など)とシズム(木場・津波倉・林・矢田野・二ツ梨・那谷・

菩提など)が多く聞かれた南部地区を除いて、市内の広い範囲でウツルが聞かれます。ウツルは、北の寺井町・美川町・川北町にも分布し、市内山間部の丸山・大杉・中ノ峠などでオチルやオツルが分布することから、上二段活用型の古形「落つる」が変化したものと考えられます。ほかに、ゴボル(尾小屋・沢・本江・佐々木・浜佐美本町・矢崎・符津など)も少し聞かれました。ゴボルは、北は松任以北の金沢方面、南は加賀市から福井県北部福井市以北にかけて分布するものです。

市中心部ではウツルからハマルへ？

最近の市内中心部での世代別調査では、高年層の代表的方言形であったウツルは、40歳代以上でこそ使われているものの(10%から30%)、30歳代以下では全く使われていません。代わって増えているのがハマルとウマルでした。ウツルはいずれ消え去る運命にあるようです。

連載
24冬の生活と方言―再び
〈雪渡り〉の方言寒さなんてへっちゃらだよ。
冬の自然人学校in蓮如山

3月を迎え、春の足音が少しずつ近づいてきました。暖冬とは言え、雪に象徴される北陸の冬がそろそろ終わりを告げようとしています。福井県武生市^{たけふ}西南部の雪深い山村で生まれ育った筆者にとって、子どものころ、冬の生活の中で楽しかった思い出の一つが〈雪渡り〉でした。

こんな面白い日がまたとあるでしょうか！

冬の晴れた寒い朝、降り積もった雪の

表面が凍って、普段は足がウツツテ^{うつつて}（はまって）歩けない雪の原を駆け回って遊ぶ〈雪渡り〉。宮沢賢治も、童話「雪渡り」の冒頭で「雪がすっかり凍って大理石よりも堅くなり、…（中略）。こんな面白い日^ひが、またとあるでしょうか。いつもは歩けない黍^{あは}の畑の中でも、すすきで一杯だった野原の上でも、すきな方へどこまでも行けるのです。」と書いています。

〈雪渡り〉の方言については、この連載の3回目（98年6月号）で一度取り上げたことがあります。そこでは市内東部^{ひがし}郷谷川、大杉谷川、湊上川^{みなみ}流域の分布しかご紹介できませんでしたが、今回はもう一度、市内全域の〈雪渡り〉の方言を見てみたいと思います。

広い範囲で聞かれるソラルキとその変化形

前回ご紹介した市内東部をはじめ、北部の鍋谷川、梯川^{はし}流域、さらには南部地区の一部を含んだ広い範囲に聞かれる代表的方言形はソラルキ^{そらるき}（白い雪原を白い雲の上へ空に見立てた「空歩き」の意）

です。中でも、郷谷川流域と大杉谷川下流域には、ソラルキの頭にオを付けたオソラルキ^{おそらるき}がオソラクキを経て変化したと思われるオシヨラクキ^{おしよらるき}（松岡・沢・金野・上江・瀬・波佐谷・長谷、オシヨラク^{おしよらる}（観音下）、オシヨリキ^{おしよりき}（金平）、オシラク^{おしらく}（沢）、オシラク^{おしらく}（尾小屋）、オシヨライコ^{おしよらいこ}（尾小屋・西俣・波佐羅）、オシヤリコ^{おしやりこ}（大野・花坂・五国寺）などの多彩な方言形が聞かれました。

ソラルキの類以外では、ウワアルキ^{うわアルキ}（湊上川流域の中ノ峠・岩淵・中海・軽海^{かろ}や南部の日末^{ひま}・島、ウワノリ^{うわのり}（白用・馬場）、ウワノボリ^{うわのぼり}（菩提・滝ヶ原）のウワーを含んだ形と、シミニノル^{しみみのる}（矢田野）の分布が目されます。

一方、旧小松町域や海岸部集落では〈雪渡り〉にあたる語形が聞けません。町部や、雪の少ない海岸部では〈雪渡り〉をすることがなかったためでしょう。生活環境や気候風土がことばの存在に影響を与えた例と言えます。

は、若い世代を中心に、伝統的方言は明らかに衰退に向かっています。春になり、まもなく田んぼなど、あちこちで見かけるようになる〈おたまじゃくし〉の方言もその例外ではありません。今回は、本連載の5回目（98年8月号）に〈蛙〉との関連で少し触れたことのある〈おたまじゃくし〉の方言について、あらためて見ることにします。

〈おたまじゃくし〉はギャル〈蛙〉の子

小松市内での〈おたまじゃくし〉の方言形の分布を見ると、共通語形と同じオタマジャクシ^{おたまじゃくし}以外に、市内北部^{きた}湊上川・鍋谷川流域、東部郷谷川流域、南部日用川流域を中心に、オタマジャクシを取り囲むようにギャルノコ^{ギャルノコ}類が聞かれました。ギャルノコのギャルとは〈蛙〉のこと。つまり、ギャルノコとは「蛙の子」の意味です。ギャルは〈蛙〉の方言形として、小松市内でよく聞かれるギャワズよりも古い形です。今や大杉谷川や湊上川上流部の山間の集落にしか聞かれなくなったギャルが、〈おたまじゃくし〉の方言形としては今なお広い

範囲で聞かれました。ギャルノコはギャルンコ^{ギャルンコ}、ギャルゴ^{ギャルゴ}といった形にも変化していますが、先に〈蛙〉の意のギャルが衰退してギャルノコのギャルの意味が不明になった結果、さらにギャリゴ^{ギャリゴ}、ジャンノコ^{ジャンノコ}、ジャンゴ^{ジャンゴ}、ジャリゴ^{ジャリゴ}、ジャレゴ^{ジャレゴ}といった形に変化している地域が多く見られます。旧小松町域に近い梯川下流域にはギャロンバ^{ギャロンバ}（沖・本折^{もとひ}）、ゲーロンバ^{ゲーロンバ}（土居原）、ジャロンバンバ^{ジャロンバンバ}（白江）、ジャンガリババ^{ジャンガリババ}（打越）といったババ・バンバを含む珍しい形も聞かれました。

このほか、辰口町に近い下八里には辰口町西部や川北町に連続するボボタ、蛭川^{むし}・長崎・浮柳など北の海岸部に近い地域にはオタンボ^{おたんぼ}・符津^{ふつ}・島^{しま}・白山田^{しらやまだ}には〈目高〉^{めだか}の方言形から意味を変えたメメジャコ^{メメジャコ}、メメンジャコ^{メメンジャコ}、加賀市に近い菩提・滝ヶ原にはコボロといった形も聞かれました。しかし、これらの多彩な〈おたまじゃくし〉の方言形も、共通語オタマジャクシに確実に取って代わられ、年配の方々の記憶からも次第に忘れ去られようとしているのです。

連載
25

〈おたまじゃくし〉の方言



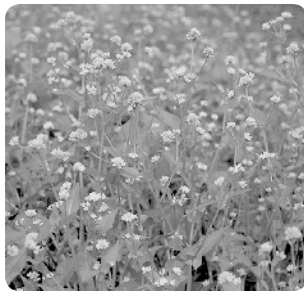
オタマジャクシは、僕らよりずっと早く大人になっちゃうだね。

共通語の普及と衰退に向かう方言

明治20年代以降の標準語政策に始まり、昭和30年代以降のテレビの登場で決定的となる共通語の普及は、全国各地で伝統的方言の急速な衰退を招きました。もちろん、これまで本連載で取り上げた中には、今なお方言が健在のものもありましたが、残念ながら大きな流れとして

連載
26

植物の方言〈みぞそば〉



ミゾソバ〔たで科〕
道端の水辺などに群生している1年
草。高さ30～70センチメートル。花
は、夏から秋にかけて咲く。

先月の〈おたまじゃくし〉の方言にも登場した〈蛙〉の古い方言形ギヤル。小松ではそのギヤルがある草の名の一部としても聞かれます。〈みぞそば〉という草です。溝や水辺の湿地に群生し、茎には小さなとげが多く、葉は矛盾形で、夏から秋に淡紅色の小さな花を咲かせます。果実はソバに似ています。写真を見ておわかりになるでしょうか。

渋柿の渋を抜くのに使う草

〈みぞそば〉の絵を見ながら、その草の

名とともに多くの方が教えて下さったのが「渋柿をさわす(渋を抜く)のに使う」ということでした。菓と〈みぞそば〉を煮出したお湯に渋柿を漬けこむと渋が抜けるそう、小松ではそうした利用法とともにこの草の名が伝えられてきたのです。

市内全域に多彩なギヤルグサ類の方言形が分布

市内のほぼ全域で聞かれる方言形がギヤルグサの類です。小松では、〈蛙〉の方言形がギヤルからギャワズ、そして共通語形のカエルへと変化する中で、ギヤルは〈おたまじゃくし〉と〈みぞそば〉の方言形の中に生き残ったのです。ただ、〈おたまじゃくし〉の場合と同様、ギヤルの意味が不明になった結果、ギヤルグサは多くの集落でギヤログサ、ギャリグサ、ギャレグサ、さらにギヤがジャに変化したジャログサ、ジャリグサ、ジャレグサなどと呼ばれています。

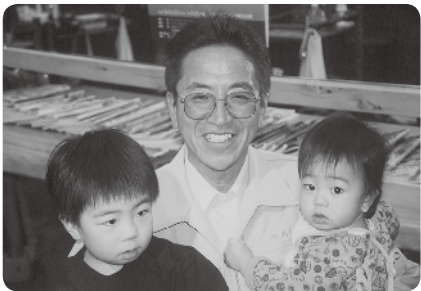
また「ギヤルグサも花盛り(それほど美しくない女性も年頃になって美しく見えるようになった)」といった、この草に関

する比喩表現も所々で聞くことができます。

ギヤルグサ類のほかには、金平糖のような花の色・形に注目したコンペートバナ類が点々と、花の咲く季節に注目したらしいハサカケバナ(稲を稲架にかけける咲く花の意)も千代・平面・梯町で聞かれました。

〈みぞそば〉と〈蛙〉はなぜ結びついたのか

〈みぞそば〉という標準和名は「溝のような湿地に生える蕎麦のような草」という特徴から名づけられたものと思われる。では、小松ではこの草がなぜ〈蛙〉の方言と結びついたのでしょうか。小松では「蛙がいそうな湿地に生えるから」との説明を時々聞きましたが、『日本方言大辞典』(小学館)には、「蛙を釣るところから」との説明もあります。どちらかが正しいのか、それとも別の理由があるのか、今のところはまだはつきりわかりません。

連載
27家族の呼び方の方言
〈お祖父さん〉

孫「ジージ」。
祖父「ジージじゃないつ、あんちゃんやぞお(笑)」。
内孫の仁義くん、力くんを両うでに、ジージじゃないと… 竹中義兼さん(茶屋町)

今月から数回にわたり、小松での家族の呼び方(家庭内で家族に直接呼びかけるときに言う)の方言をご紹介します。今回の〈お祖父さん〉を皮切りに、順次〈お祖母さん〉〈お父さん〉〈お母さん〉〈お兄さん〉〈お姉さん〉の呼び方を取り上げていきたいと思います。

方言の共通語化が進む中でも、家庭内での家族に対する呼び方の世界は、とり

わけ共通語化が進んでいるようです。最近では、全国どここの家庭でも、〈お祖父さん〉はオジちゃん、〈お祖母さん〉はオバちゃん、〈お父さん〉はオトサンかパパ、〈お母さん〉はオカサンかママ、〈お兄さん〉はオニーちゃん、〈お姉さん〉はオネーちゃんといった呼び方がされる時代になりました。しかし、かつては、そんな家族の呼び方の世界でも、全国各地に様々な方言形が聞かれました。日本中で同じような呼び方しか聞けなくなってきたのを寂しく思うのは筆者だけでしょうか。

一般的な呼び方はジージジージ

市内の広い範囲で聞かれた〈お祖父さん〉の呼び方の代表的な方言形はジージ、ジージです。ジージとジージは後ろのジが短く発音されるか、長く発音されるかという微妙な違いで、同じ集落で両方の形を聞くこともあり、それぞれに特定の分布領域をもつわけでもありません。小松の一般的な家庭での〈お祖父さん〉の呼び方がジージ、またはジージであった

と考えてよいでしょう。

家庭によって呼び方に違いも！

ジージ、ジージが一般的な家庭での呼び方であるのに対して、それよりも少し良い、丁寧な呼び方の代表形がオジジです。郷谷川中・下流域、大杉谷川流域、梯川下流域、そして海岸部の集落で多く聞かれました。逆にジージ、ジージより親しみをこめた、あるいは少し悪い呼び方とされるものにジ(市内全域)、ジンジ(郷谷川・津上川流域)、ジ(丸山、中ノ峠など)、ジーマなどがあります。このうちジーマは、その分布域と、呼び方が卑称化していることを考え合わせると、小松で聞かれた〈お祖父さん〉の呼び方の中では古い形だろうと予想しています。

ものの名前などとは異なり、家族の呼び方は、同じ集落内でも家庭によって違うことがあるのです。

連載
28家族の呼び方の方言
〈お祖母さん〉

ボランティアで老人会や障害者の人に手芸を教えるのが生きがいというハッスルおばあちゃん。
石本まつさん(島町)

さて、読者の皆さんの家では「お祖母さん」をどう呼んでいるでしょうか。おそらく、ほとんどの方はオバーちゃんとお答えになるのではないのでしょうか。前回も触れたとおり、家族の呼び方の世界は急速に共通語化が進み、全国的に同じような呼び方がされる時代になりました。しかし、かつては全国各地に様々な呼び方が聞かれ、旧来の社会構造の中では、時にそうした呼び方が家の格の違いを表すような場合もあったのです。今回は「お

祖父さん」に続いて、小松市内での「お祖母さん」の呼び方の方言(70歳前後の方々がかつて使っていた)をご紹介します。

ジージ、ジージーに対してバーバ、バーバ

小松での「お祖父さん」の一般的な呼び方はジージ、ジージーでしたが、「お祖母さん」の呼び方もそれらの形に呼応するように、バーバ、バーバが市内の広い範囲で聞かれました。バーバは南部地区でやや多く聞かれたものの、分布の広さからはバーバの方が小松の代表的な呼び方だったと言えます。

ほかには、オババが郷谷川中・下流域、大杉谷川流域、梯川下流域、旧小松町域、海岸部の集落、バーバの下略形バー、そしてバンバが全域、バーサが大日川上流部の丸山・津上川上流部の中ノ峠、鍋谷川流域の河田館で聞かれました。これらはそれぞれ「お祖父さん」の呼び方で聞かれたオジジ、ジイ、ジンジ、ジイサに対応するものです。

丁寧さの異なる複数の呼び方が併存

ところで、こうした家族の呼び方の場合、一つの集落で複数の形が併存していることがあります。「お祖母さん」の呼び方の場合、そこにはどのような違いがあるのでしょうか。具体例を少し見ることにしましょう。

例えば海岸部の安宅では、バーちゃんやオババは良い家での、バーバは一般的な家での、バーはより親しみを込めての呼び方とのことでした。また、郷谷川流域の波佐羅では、オババは最も良い、バーバ、バーバーは一般的で親しみを込めた、バーはややぞんざいな感じ、バサ、バンバは最も悪い呼び方との説明を聞きました。

かつての家の格のようなものの反映も含めて、同じ集落内でも家によって様々な呼び方がされていたことを感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

連載
29家族の呼び方の方言
〈お父さん〉

「お父さん好き?」「ううん、きらいっ!」「えっ!!」。
今江達夫さん(龍助町)、真人君(7歳)、綾子ちゃん(6歳)、健人君(4歳)

前回までの「お祖父さん」「お祖母さん」に続いて、今月は、家庭内での「お父さん」の呼び方について見ることにします。これまで同様、昨年夏までに終えた小松市全域(105集落)での言語地理学的調査(70歳前後の方を対象とした)の結果からご紹介します。

オトーサン。パパ以前には実に多くの呼び方

〈お父さん〉の呼び方には「お祖父さん」

「お祖母さん」の呼び方以上に多くの方言形が聞かれました。同じ集落内でも家によって様々な呼び方がされたことに加えて「お祖父さん」「お祖母さん」に比べて使用頻度が高いこと、などによるものでしょう。

小松市内の広い範囲に聞かれた「お父さん」の呼び方の代表は、トート類(トート、トートー、トト、トー)とツーツ類(ツーツ、ツーツー、ツー)です。

トート類は、大杉谷川と津上川の上流域を除く市内のほぼ全域で聞かれ、ツーツ類に比べて新しい呼び方で良い呼び方だと教えて下さる方が多かったように思います。それに対して、ツーツ類は一般的な家庭での呼び方として、トート類に次いで市内の広い範囲で聞かれました。

分布域はやや限られますが、トート類よりも良い呼び方としてオトー類(オトー、オットー、オトト)も聞かれました。

オトー、オットーは津上川流域の一部とそれに続く梯川流域、オトトは大杉谷川上流域、日本海沿岸部、旧小松町域の南、南部の日用川流域の一部で使われたよう

す。

小松のマーマは「お母さん」ではなく「お父さん」

「お父さん」の呼び方には、ほかにマーマーという形も聞かれました。トート類、ツーツ類よりも良い呼び方で、しかも古い形のようなです。郷谷川中・下流域、大杉谷川下流域、津上川・梯川流域、日用川流域を含む南部地区で聞かれ、分布からはマーマが元の形で、その後マーマが生まれたようです。今やママと言えば当然「お母さん」のことですが、これらの地域ではマーマと呼ぶと、何と「お父さん」が返事をしたわけです。

郷谷川流域ではオツツア、オトツツア、また、旧小松町域ではオトツツアンのほかにオトーサン、オトーちゃん、トーちゃんという形も聞かれました。町部ではいち早く、オトーサンに代表されるような新しい呼び方が行われていたことがわかります。

連載
30家族の呼び方の方言
〈お母さん〉

5人の子持ち、はつらつ母さん
勝木緑さん(写真手前・龍助町)
子育てがやっと一段落。今は家業に打ち込む毎日。
目下、母親業は休業してまーす。

お母さん、雪の降る夜に私を生んで
下さってありがとう。もつすぐ雪で
すね。(傍点筆者)

今や全国的に有名になった、お隣、福井
県丸岡町の「筆啓上賞」。右のものは、第
一回「日本一短い『母』への手紙」の「筆啓
上賞」受賞作品の一つです。もちろん、冒
頭での母への呼びかけは「お母さん」と
なっています。というわけで、今月は前回

の〈お父さん〉に続いて、〈お母さん〉の呼
び方を見ていきます。

急速に共通語化が進んでいる家族の呼
び方の世界。しかし、前回までにご紹介し
たように、小松市内に限っても、以前は、
実に多彩な呼び方が存在していたので
す。若い読者の皆さんは、あまりに多いそ
の呼び方のバリエーションに驚かれたの
ではないでしょうか。

呼び方でも〈お父さん〉と対をなす〈お
母さん〉

〈お祖父さん〉とお祖母さんの呼び方
が、ジージ⇄バーバ、オジジ⇄オババのよ
うに形態的に対をなすことが多かったよ
うに、〈お母さん〉の呼び方も〈お父さん〉
と対をなす形が多く聞かれました。

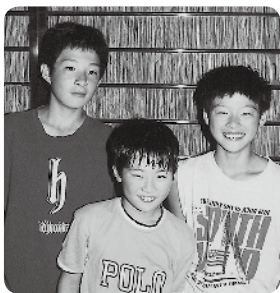
〈お父さん〉で市内の広い範囲に聞か
れたトート類と対をなすのが、カー力類
(カーカ、カーカー、カー)とオツカー類
(オツカー、オツカ)。カー力類は郷谷川中
流域、大杉谷川流域、津上川流域、加賀市
に近い日川上流部付近を除いた比較的
広い範囲に、一方、オツカー類は郷谷川流

域とその西の大杉谷川・下流域、そして
南部地区にまとまって分布します。同様に
〈お父さん〉で広い範囲で聞かれたツィ
ツ類と対をなすのがヤーヤ類(ヤーヤ、
ヤーヤー、ヤー)で、ツィツ類と同じよう
に、北の津上川・鍋谷川・梯川流域で聞か
れました。

古い呼び方ほど丁寧さが下がる傾向

中ではヤーヤ類が古く、次いでオツ
カー類、そしてカー力類の順に新しくな
るようです。言葉は使い古されるほど意
味(丁寧さ)が下降する傾向があると言
われますが、三つの呼び方が併存してい
る集落では、カー力が最もよい呼び方で、
オツカー、ヤーヤの順に丁寧さが下がる
傾向が確認できました。

ほかには、旧小松町域でカーちゃん、
オツカサン、オカーサンなどの新しい
呼び方が、珍しいところで、安宅新町で
ジャーマ、日末・串でジャサ(ー)、月津で
ジャー、ジャーサ、大杉谷川上流部の大杉
町でアンカ、アンニヤといった呼び方も聞
かれました。

連載
31家族の呼び方の方言
〈お兄さん〉

左から北本一朗くん、翔吾くん、
大地くんの3兄弟(千代町)。
野球したり、ゲームしたりと
仲良しです。

先月までに、小松での四つの家族呼称
(直接呼びかけるときの呼び方)の方言
をご紹介してきましたが、今月はさらに
一世代下がった〈お兄さん〉の呼び方を取
り上げます。

〈お兄さん〉の場合は、だれもがその呼
び方を必要とするわけではありません。
筆者、福井県武生市出身も兄がいませ
んでしたので、自身の方言の中での兄の呼
び方とは、弟が私に向かって呼んでいた
アンちゃんでした。

一方、家庭によって兄は一人とは限ら
ず、例えば兄が二人以上いる場合など、そ

の下の弟や妹が上二人の兄を呼ぶ場合
や、親がそれらの息子を呼ぶ場合に、長兄
と次兄で呼び方を変えることもあったよ
うです。かつて、長子相続が尊重された時
代、同じ兄でも長兄と次兄以下では、ある
格差が存在していたのです。それが呼び
方の違いにも反映していたと考えること
ができます。

アンカ、アンマが代表形ーアンカからア
ンマへ

小松市内で〈お兄さん〉の呼び方として
聞かれたものの代表は、アンカとアンマ
でした。一つの集落で両方の呼び方が聞
かれることもありましたが、大きな傾向
としては、アンカは津上川流域、鍋谷川流
域、郷谷川流域、大杉谷川流域、浜佐美本
町以南の日本海沿岸部、日川上流部を
含む南部地区を中心に分布し、アンマはそ
れら以外の梯川流域、郷谷川下流域、大杉
谷川下流域を中心に分布しています。市
内の地図を思い浮かべていただくと、ア
ンカがアンマを取り囲むように分布して
いることがわかります。分布の様子から、

アンカの方が古く、後にアンマが使われ
るようになったのではないかと想像され
ます。アンカ、アンマの前部形式アンはア
ニ(兄)に由来するものでしょう。

一般に新しい語形が早く受け入れられ
やすい市の中心部、旧小松町域では、アン
カ、アンマはほとんど聞かれず、新しい呼
び方のアンちゃんが使われています。

アンカ、アンマは石川県、富山県中心の
呼び方

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、
アンカは富山・石川両県、福井県北部、京
都府の一部、アンマは富山・石川両県、岐
阜県北部、和歌山県の一部に分布の見ら
れる形です。全国的にも、石川・富山両県
を中心とした地域の特徴的な呼び方であ
ることがわかります。

ところで、アンカ、アンマという代表的
な呼び方については、「長男だけの呼び方
で、次男以下は名前で呼んだ」といった説
明を所々で聞きました。先にも述べたよ
うに、長男が特別扱いされていた事実を
物語るものでしょう。

連載
32家族の呼び方の方言
〈お姉さん〉

病院を訪れるおじいちゃん、おばあちゃんに、優しく「ニヤニヤ」って呼ばれてみたいですね笑い。
新しくミス小松になった市民病院看護婦 杉本麻衣子さん（矢田野町）

6月以来〈お祖父さん〉を皮切りに、家族に直接呼びかけるときの呼び方の方言をご紹介しますでしたが、今回はその最終回として〈お姉さん〉の呼び方を取り上げます。

小松のニヤニヤは「娘嬢万頭」の、いや、あにやあと同じ？

小松市内での〈お姉さん〉の呼び方として全域にわたって聞かれた呼び方は、

ニヤニヤ、ニヤ（ニヤとも）です。ニヤニヤという形も聞かれないわけでは

ありませんが、最後が伸びて発音されないニヤニヤの方が圧倒的に多く聞かれました。ニヤニヤという呼び方で、小松からも遠くない山中温泉の名物「娘嬢万頭」を思い出す方もいらっしゃるでしょう。「娘嬢万頭」の説明書には、加賀の方言で〈娘さん〉の呼び方とあります。しかし、にやあにやあは本来〈娘さん〉の呼び方だったのでなく、家族の中の〈お姉さん〉に呼びかけるときの呼び方であったものが、他家の〈娘さん〉の呼び方としても拡大使用されたものと思われます。こうした現象は、これまでに取り上げた家族呼称にも見られるもので、かつて村社会が親密な人間関係で結ばれていたことを反映するものでしょう。もちろん小松でも、他家の未婚の「娘さん」に対する呼称としても用いられます。

『日本方言大辞典』（小学館）によれば、〈お姉さん〉〈娘さん〉の呼び方としてのニヤニヤの類は〈お兄さん〉の呼び方のアンカ、アンマ同様、全国的にも石川（加

賀地方）・富山（西部）両県を中心とした特徴的な呼び方のようです。

また、ニヤニヤとニヤではニヤニヤの方がよい呼び方と意識されている（中海、八幡、若杉、東山、長崎、串、矢田、二ツ梨、滝ヶ原など）。「自分の姉はニヤニヤ、近所の年上の女性はニヤニヤと呼んだ」（岩淵）という説明も、そうした意識を反映したものでしょう。

アンニヤ、ネー、チョコ、そしてネーちゃん、ネーサンも

ニヤニヤの類以外では、アンニヤが郷谷川流域、鍋谷川流域などでわずかに聞かれました。小松で〈兄嫁〉や〈他家の若いお嫁さん〉の呼び方として使われているアンニヤマと関連がありそうです。ほかに、ネーも点々と聞かれました。珍しいところで、津上川最上流部中ノ峠ではチョコ（長女の呼び方）という形も聞かれました。また、〈お兄さん〉の場合と同様、市の中心部、旧小松町域ではネーちゃん、ネーサンという新しい呼び方が使われています。

連載
33

〈男の子〉の方言



やんちゃでかわいい3人トリオ
（太谷幼稚園で）

今月で20世紀最後の年もいよいよ終わりとなります。街にはクリスマスの音楽や装飾があふれています。来たる新世紀が、次代を担う子どもたちにとって、明るく希望に満ちたものであることを願わずにはいられません。

今月はその子どもたちの中から、〈男の子〉の方言をご紹介します。と思います。ここで言う〈男の子〉の方言とは、先月までの家族の呼び方のように、直接呼

びかける時の言い方ではなく、話題の中で〈男の子〉のことをさして言う言及称をさします。例えば「どこそこの〈男の子〉はやんちゃで困る」と言うような場合の〈 〉内に入る言い方で、おおよそ小学生以下の男の子をさす言い方です。

一般的な言い方はボーとコワロ

旧小松町域の一部を除いて、市内のほぼ全域で聞かれた〈男の子〉の言い方はボーです。例えば「アノボー、イクツニナツタ（あの男の子は何歳になった。）」のように言います。ボーは「坊」の意でしょう。とくに良くも悪くもない、一般的な言い方として使われてきたようです。全国的にも、「坊」に由来すると思われる形は広い分布が見られます。また、ボーほどではないものの、コワロ（コアロとも）という言い方も広い範囲で聞かれました。コワロは「小童」に由来するものと考えていますが、『日本方言大辞典』（小学館）によれば、小松をはじめ、石川・富山両県の一部にのみ分布する形のようです。

良い言い方にはタンチ、悪い言い方にはガキなどが

ボー、コワロに対して、〈男の子〉の良い言い方、悪い言い方を教えて下さった方もいらつしやいます。良家の〈男の子〉や、かわいい〈男の子〉などをさす良い言い方としてはタンチが代表的で、一部地域でボン、ボンボン、ボンチが、一方、悪い言い方としては、ガキ、ガキのほか、ボーの前に悪い意味の語がくついていた、ダラボイ（ばかな男の子）ニテッカボー（腕白坊主）、クソッタレボー、ヤンチャボーなどが聞かれました。

以上のほかにも、タンコ（河田館・本河田・古府・金平・津波倉、タンコボ（打越）、ボンタラ（沖）、ボンサ（谷内）、ボンコー（日末、ボンコ（軽海・金野・金平・矢田野）、コボ（三谷）などの言い方が聞かれました。

自分は使わないけれど、小松にもこんなにたくさんの方の言い方があったんだと思いの方。あなたは今、〈男の子〉のことを何とおっしゃっているのでしょうか。

連載
34

〈女の子〉の方言



「メロ、メロンコ、それともタータ。近所のお年寄りには何て言われてるのかな。」
〈ひかり保育所〉

昨春秋のシドニーオリンピックをはじめ、最近日本では様々な世界で女性のめざましい活躍が目立ちます。男性ももちろん頑張らなくてはなりません。21世紀の幕開けにあたり、ますますの女性の活躍に期待したいと思います。今月は、先月の〈男の子〉に続いて、そんな期待される女性予備軍の〈女の子〉の方言を取り上げます。話題の中でどこそこの〈女の子〉はかわいらしいと言ったような場合の〈内〉に入る言い方(言及称)で、おおよ

そ小学生以下の女の子をさすものです。
〈男の子〉に比べバラエティーの多い〈女の子〉の方言

〈男の子〉の方言では、市内の広い範囲でボー、コワロの二つの言い方が聞かれたのに対して、〈女の子〉では、市内でも、地域によっていくつかの方言形が一定の領域を占めながら分布していることがわかりました。

市内北部から見ていきますと、津上川流域では、上流部でチョンコ、中・下流部でチヨ、チヨンコが聞かれました。チヨは、大杉谷川流域にもまとまった分布が見えます。津上川下流部から小松バイパスに沿った南側の地域(花坂・大野・三谷・本江など)にはチヨンへの形も聞かれます。

鍋谷川流域から梯川流域ではタータが聞かれました。この地域で同時に聞かれたメロ、メロンコよりはタータの方が良い言い方ようです。

旧小松町域から日本海沿岸部では、タータのほか、メロンコ、コメロなども聞かれました。例えば、「アコノ タータ

オーキナンマシター(あそこのお嬢ちゃんは大きくなられました)」「寺町)のように言うとのことでした。

さらに南部地区ではメロ、メーロ、メロンコ、コメロのほか、チヨ、チヨンコ、そしてチーコ(津波倉・粟津などの多くの言い方が、そして、東部の郷谷川流域では、ネンネという言い方がまとまって聞かれました。

以上の様々な言い方のうち、チヨ、チヨンコやタータの語源は不明ですが、タータは石川・富山両県に特有の言い方のようです。良い言い方と意識されていることや、市内中心部にも聞かれることから、比較的新しい言い方かと思われるます。メロ、メーロは江戸期以降の文献にも登場する「女郎」に由来するもので、メロンコは「女郎の子」、コメロは「子女郎」の意でしょう。ネンネは「姉」と関係があるかとも思われますが、よくはわかりません。

それにしても、言及称の数でも、男の子は女の子にかなわないようです。頑張るまつし、男の子!

連載
35

〈お転婆〉の方言



21世紀は女の子の時代だよ!

手元の、ある国語辞典には、〈お転婆〉について「女性としてのたしなみを忘れてふざけさぐ少女」と書いてあります。この記述からは、男の子は元気で強くあるべし、女の子はおとなしく控え目であるべしといった、かつての社会通念にもとづく差別意識を感じ取ることができるでしょう。しかし、最近のように、元気な女性たちのめざましい活躍ぶりが評価される時代となつては、このことは、めつき

り使われることが少なくなってきたようです。

オテンバはオランダ語から?

ところで、〈お転婆〉は従来、「馴らすことのできない。負けん気」の意のオランダ語 *Outenban* に由来するとの説が有力でした。しかし、『日本方言大辞典』(小学館)などで〈お転婆〉の方言の分布を見ると、語頭にオの付かないテンバの類が中国・九州地方に広く分布しており、オランダ語起源とすれば江戸も後期以降広まったと考えられるのに、なぜ東日本には分布が見えないのか、また、なぜオの付いた形が見えないのか、といった疑問が残ります。

バッチャメロが市内全域に

小松市内で70歳前後の高年層の方々から教えていただいた〈お転婆〉の方言の代表形はバッチャメロの類で、市内の全域で広く聞かれました。旧来の社会通念の中で生きてきた年輩の方々にとって、〈お転婆〉を意味するバッチャメロは今もなお使

用する、また、使用しないまでも記憶の中に鮮明に残っている言い方ようです。

バッチャメロのバッチャは「罰」からでしょうか。憎らしい相手に「ざまーみる」の気持ちを込めて言う、というバッチャ(五国寺)も関連がありそうです。メロは先月もご紹介した「女郎」に由来するもので、小松では女性への卑称として使われます。バッチャメロの類には、バッキヤメロ(北浅井)、バッシヤメロ(五国寺・串茶屋)、ガツチャメロ(波佐羅・下牧)があり、下略形としてのバッチャ、バッシヤ(丸山・金平・五国寺)も聞かれました。

共通語形オテンバももちろん聞かれましたが、ほかに、バッチャメロとは微妙にニュアンスを違えて使われていると思われる、オトコメロ、ヤンチャメロ、テッカメロなどの言い方も聞かれました。オトコメロ、ヤンチャメロはそれぞれ「男のよいな女の子」、「やんちゃな女の子」の意。テッカメロのテッカは「気質が荒い」の意の「鉄火」からで、「乱暴な女の子」といったニュアンスを持つようです。

連載
36冬の生活と方言
〈雪道に作る「落とし穴」〉大杉雪まつりで“雪像づくりにチャレンジ”
「さあ、何を作ろっかなー」

1月半ばに15年ぶりの大雪に見舞われた北陸ですが、この雪でかつての冬の生活を思い出された方も多かったのではないのでしょうか。これまでにも連載では、冬の生活と結びついた言葉として、「雪渡り」〈氷柱〉へ「雪に足が」はまるの方言を取り上げたことがあります。今回は〈雪に足がはまる〉との関連が見られる〈雪道に作る「落とし穴」〉の方言をご紹介します。みたいと思います。

福井の大野ではオチリン

監修者として2年間協力していた、NHK福井放送局「ふるさと日本のことば」記録事業の一環として、昨年2月に、福井県内でも有数の豪雪地帯、大野市の雪に関する言葉を取材したことがあります。その中で〈雪道に作る「落とし穴」〉の方言「オチリン」を取り上げ、放送ではリポーター役のアナウンサーに落とし穴作りを実演してもらいました。オチリンという愛らしい響きに誘われて、私にとっては30数年ぶりの楽しい落とし穴作りでした。

小松ではオトシアナのほかはウツリコ類が代表形

小松市内の雪道の落とし穴の方言分布を見ると、その語形を知らない人の多い旧小松町域や海岸に近い集落これらの地域ではそういう遊びをしなかったり、しにくかったのでしょう。を除いて、小松バイパスをはさんだ西の平野部と南部地区でオトシアナ、寺井町・辰口町に近い北部から小松バイパスをはさんだ東の地

域でウツリコの類が聞かれました。分布からはオトシアナの方が新しい言い方と思われまます。ウツリコの類は〈雪に足が〉はまるで市内に広く分布の見られたウツルという動詞形から生まれたものではない。ウツリコの類には、ほかにウツリゴ（金野・金平）、ウツツコ（上八里・里川・高堂・長田・平面・本江）、さらにウツツンドコ、ウツランコ、ウツリンボ、ウツリアナといった形も聞かれました。また、辰口町に近い鍋谷川の東側でオトシ、オトシコなど、大日川上流部の丸山でオチンコという言い方なども聞かれました。

「落とし穴全般をさすオトシアナは今後も使われていくでしょう。しかし、雪が減り、融雪・除雪対策が進んだ最近では、雪道に落とし穴を作ることも難しくなりました。そうした遊びの消滅とともに、雪道の落とし穴だけをさしたウツリコに代表される方言形も、いずれは忘れ去られる運命にあります。『雪道の落とし穴なんて作ったことがない』という方、スリル満点の落とし穴作りに一度挑戦してみませんか。

連載
37

挨拶の方言―東部地域の挨拶ことば

私たちはコンノヒト、ってよく聞くわ。尾小屋町で
井山貞子さん(写真左)
橋本百合子さん(写真右)

四月は出会いの季節。春の訪れとともに、学校や会社、そしてさまざまな場所で、新しい出会いの挨拶が交わされます。最近の人は挨拶が下手になったとよく言われますが、人間関係が希薄になっている時代だからこそ、円滑な人間関係を築くための挨拶ことばを大切にしたいものです。

挨拶ことばの世界も確実に共通語化が進んでいます。今月からはしばらく、小松で使われてきた挨拶の方言を取り上げてみたいと思います。今回は、市内東部の郷谷川・大杉谷川流域、特に郷谷川上流

部の、かつて鉾山の町として栄えた尾小屋町の例を代表に、この地域の特徴的な挨拶ことばをご紹介します。

他家を訪問した時の挨拶はコンノヒト、コンネなど

「他家を訪問した時の挨拶」では、尾小屋でコンノヒト、コンネが聞かれました。年齢の高い人たちが使うもので、例えば、コンネ、ダレカオッカイヤ（この家には誰かいるかい）のように言われます。「この家の人（は居るか）」の傍線部がコンノヒト、さらに「人」も省略された形がコンネ（丸山・大杉本町ではコンニヤとも）でしょう。コンネは郷谷川流域では西俣・松岡・沢・金平など、大杉谷川流域では赤瀬より下流部の集落でも聞かれます。尾小屋では、ほかにオルカ、オイデルカ、オイデマスカ（この順に丁寧）も聞かれましたが、オイデルカ、オイデマスカは東部地域ではここだけに聞かれました。この町が鉾山の町として他地域からの人の入り込みが多かったため、金沢・小松などの町部で使われる丁寧な言い方も必要とされ

たのでしょう。

感謝の挨拶はイトシゲニ、ショツシャナーなど多彩

人に何かをもらったり、お世話になった時の「感謝の挨拶」では、尾小屋でキノドクナ、アンヤト、イトシゲニ（イトシギニ）、ショツシャナーが聞かれました。キノドクナは北陸地方の広い範囲で使われ、アンヤトは、主に金沢や小松の町部で使われる感謝の挨拶ことばです。イトシゲニ（イトシギニ・イトシエゲニ）は「愛しげに」に由来し、ショツシャナー（丸山でショーシャノ、大杉本町・大杉下町でショーシャ）は「笑止な」に由来するものです。いずれも、自分のために気遣いをした相手を気の毒に、かわいそうに思う気持ちで感謝の挨拶ことばに変身したもので、キノドクナの精神に通じる相手のことを気遣う北陸の人の優しさが感じられます。東部地域ではほかに、「ゴゾーサナ」「ゴツサマナ」（ともに「ご雑作な」から）、モッターネー、ゴツツオサマナなどの言い方も聞かれました。

連載
38

挨拶の方言②——南部地域の挨拶ことば



お店やっとるといろんな人と挨拶して話が
出来て楽しいんや。符津町の荒木千代子さ
ん(写真左)と常連の横山敏子さん(写真
右)

五月は新緑の季節。あちこちの田んぼでは田植えの風景が見られます。筆者の郷里(福井県武生市)では、夕方田んぼなどで仕事をしている人に、「もうやめて家に帰ろうよ」の気持ちを含めてかける大人たちの挨拶ことばが、オシメナリヤンセでした。「(もう仕事を)おしまいなさい」の意の丁寧な表現ですが、子どもころは、オシメアライナリヤンセと聞こえて、なぜ夕方の挨拶に「オシメ(おむつ)を洗いなさい」と言うのか不思議に思っ

たことを覚えています。小松市内南部地域、JR栗津駅近くの符津町では、同じような夕方の挨拶をヨアガリ(ユアガリ)シヨカ、ユアガリヤツ、シマエヤーなどと云うようです。ヨアガリ・ユアガリは「夜あがり」でしょう。今月は、この符津の例を中心に南部地域の挨拶ことばをご紹介します。

客の訪問から送り出しまで

他家を訪問した時の挨拶はコンネ、コンネ オツテカ、コンネサマニ、マイドサンなどが聞かれました。東部地域でも聞かれたコンネの由来は前回すでに触れた通りです。その丁寧な言い方であるコンネサマニ(コンネサマネ、コンニサマニ)は、東部地域では全く聞かれなかったものです。符津以外にも、島津波倉・林・矢田野・二ツ梨・小山田・白山田・額見・月津・矢田などで聞かれました。マイドサンは金沢や小松の町部でも使われる新しい言い方で、符津以外では温泉の町栗津でも聞かれました。

家を訪ねて来た客を迎える挨拶は「オ

メー」ゴザツタカ、家に迎え入れた客に楽

に座るように勧める時は、ネマラツシエ、アグチカイテ ラクニシテクレ、アシクズイテ ラクニネマツテなどの言い方がされます。そして、ごちそうになった客は帰る際タエンナ ヨバレテ 「ゴツツオサンナツテ」のようにお礼を言うようです。南部地域のお礼の挨拶ことばには、ほかに、東部地域と同じイトシゲニ、エトシゲニ、ゴツツサマナ、キノドクナなどがありました。東部地域では山間部で聞かれたシヨツシヤナ、シヨシヤノの類は、この地域ではほとんど聞けませんでしたが、符津町では祝儀の祝いをもたらしたときのお礼の挨拶として、オイワイモロテ アリガトー ショシナンハ、が聞かれました。一方、そうした客のお礼に「こた」応える家の人の挨拶は、ナーモネーガニヨーコソ キテクサシタ、アイソモネーガニヨー キテクサシタのような言い方です。

以上、今回取り上げたものの以外にもありますが、小松市内南部地域の挨拶ことばの世界の一端を紹介しました。

連載
39

挨拶の方言③——旧小松町域の挨拶ことば



「おんましか」、
お隣どうしの大土素子さん(写真左)と二
木正子さん、玄関先でついつい話がはず
む。
龍助町で。

先月まで2回にわたって、市内東部地区と南部地区の挨拶ことばを見てきました。いずれも、70歳前後の年配の方々に使われる(使われた)ものを中心に取り上げましたので、若い方々にはなじみのないものも多かったかと思いますが、最近のように全国各地でも同じような挨拶ことばが聞かれるような時代には、かえって新鮮に感じられたのではないのでしょうか。3回目の今回は、旧小松町域の挨拶ことばの一端を見ることにします。

町部は新しいことばの受け入れ窓口、発信地

旧小松町域では龍助町の例を中心に紹介します。旧町域が小松市の中心であることから、これまでに見た東部地区、南部地区などの挨拶ことばに比べ新しい言い方が多いように思います。小松での新しいことばの受け入れ窓口、発信地がこの地域であったことを示すものでしょう。

「他家を訪問した時の(玄関先での)挨拶」としてはマイドサン、コンニチワ、そしてオンマシナ力が聞かれました。マイドサンは南部地区の符津や栗津でも聞かれましたが、旧町域では盛んに用いられるものです。小松の他家訪問時の挨拶としては比較的新しいものです。金沢では商売関係の訪問時の挨拶ことばとして今も聞かれます。オンマシナ力は、オル(居る)に尊敬の敬語助動詞マツシヤルと疑問の終助詞力のついたオルマツシヤル力がオンマツシヤル力(園町でオンマツシヤル力、オンマツシヤル力を経て変化し

たものでしょう。「いらつしやいますか」の意の丁寧な挨拶です。その客を迎える側の挨拶は、ヨー イラシタネ、ヨー オイデタネーです。また、招き入れた客に座布団を勧める時は、コレ シーテトンシ(これ敷いて下さい)のように言うようです。シーテトンシのテトンシは、小松を含む加賀地方北部に分布するテクタイ(「て下さい」の意の変種テクタンシが傍線部のクを落としてテタンシ、さらにテトンシに変化したものと考えています。

客は帰る時に、アリガトー、アンヤト(アンヤットーとも)、タイヘンナ オショバンナリマシテ、テンナ キノドクナ(テンナはタイヘンナの変化)、オジャマシマシタのようにお礼を言います。東部地区などで聞かれたイトシゲニ、シヨシヤ・シヨシナの類は龍助町では聞けませんでしたが、一方、客を送り出す側は、オアイソモネー、アンマリイガニ シェント キノドクナのように言うようです。

こうした多彩な、特色ある挨拶ことばが小松市内でも次第に聞かれなくなるのは、やはり寂しい気がします。

連載
40

挨拶の方言④——日本海沿岸地域の挨拶ことば



「まいどさん」スーパーを営む福井さんとあいさつ交わす松田さん。(安宅町で)

本誌連載コラム、雅樹・クリステイさん(市国際交流員)の「なんじゃこりや」の先月号では小松弁が話題になり、中に「ようござったのー」という挨拶ことばが登場していました。「ザルは「行く・来る・居る」の尊敬語で、共通語で言えば「いらつしやる」にあたるものです。石川県内では、白峰村などの白山麓地域と小松市の一部を含む加賀地方南部で、今も高年層の人たちから聞かれる比較的古いことば

です。筆者も先々月、符津町のゴザツタカを紹介しましたが、ヨー「ゴザツタノー」もまた、来訪者を温かく迎える挨拶ことばです。さて今月は、これまでの東部地域、南部地域、旧小松町域に続いて、日本海沿岸地域の挨拶ことばを安宅町の例を中心に紹介します。

これまでも度々取り上げた「他家訪問時の挨拶」はかつてはコンネ(コンノ)オツカーと言い、最近はおルカ(親しい家の場合)、マイドサン、コンニチワなどと言うとのことでした。「道などで親しい人と出会った時の挨拶」はマイドサンです。久しぶりに出会った場合には、シサシブリジャンネー、ドーシトッタ、ゲンキカのようにも言うようです。ただし、目上の人や改まった相手にはコンニチワになるとのことでした。「朝の挨拶」はおハヨサン、おハヨ、「夜の挨拶」はコンバンワです。夕方、仕事や仕事帰りの人と出会った時には、「もう仕事を終わりにしましよ」の気持ちを込めた、オシメーナサツタカ、ハヨコト、シモマツシエネー、モー、ヨカゲー、シモワンガカ、オシマイのよう

な挨拶が聞かれます。「ありがと」にあたる「感謝の挨拶」としては、アンギヤトー(アンヤトーからの変化形)が多く、時にキノドクナが、「謝罪の挨拶」は、カンニンシテ、スンマセンが聞かれます。

以上、安宅町では、旧町域ほどではありませんが、東部・南部地域に比べると比較的新しい挨拶ことばが使われていることがわかります。

日本海沿岸地域ではほかに、「他家訪問時の挨拶」でコンノヒト(長崎・浜佐美本町・草野・日末・佐美)、コンネ(安宅新・佐美)など、「辞去の挨拶」でイクワノー、ドクナのほか、イトシゲニ浮柳・日末、ゴツオサマナ(小島・安宅新・佐美)が聞かれ、また、「仕事の中の人への挨拶」では、長崎・小島でヒラガリ、シエンジャカ(お屋前・ヨダガリ、シエンジャカ(夕方、草野でアガラシジャカ、シモアンジャカなどが聞かれました。

これらの多様な挨拶ことばには、人間関係を大切にしながら生きてきた小松の人たちの心が反映されているのです。

連載
41

〈蛇の抜け殻〉の方言

間近で初めて蛇を見てビックリ!!と言っても博物館の標本だったから怖くなかった?
6年生の清水麻未さん(写真左)と谷美奈代さん。

今年も間もなく暦の上では立秋を迎えようとしています。しかし、まだまだ暑さ厳しいこの時期、草むらや山道、田んぼの畦道などを歩いていて突然出会うことのある蛇。中には蛇なんて怖くないという人もいるでしょうが、たいていの人にとっては出会いたくない生き物の一つでしょう。そんな嫌われ者の蛇の名にも方言(種類の違いを含め)はありますが、小松ではそれほどのバリエーションは聞けません。ところが市内全域の調査で、予想外に面白い方言形と分布が見えてきたの

が、その蛇が脱皮したあとに残される「蛇の抜け殻」の方言でした。今月はそれをご紹介することにします。

〈蛇の抜け殻〉は蛇が脱いだ着物です

小松市内で聞かれた〈蛇の抜け殻〉の方言の代表的な二つの形はキンとケンです。筆者の郷里福井県では聞いたことがありませんでしたので、小松で初めてキンやケンを目にした時は珍しい形だと思いました。すぐにその方言形の由来に気づきました。キンは着物・衣服を意味する「衣」からの変化だということです。キン、ケンのほかにキヌが数地点(中海・岩瀬・西保・本江・蓮代寺)で聞かれること、「蛇のキン脱いだる」「蛇がケン脱いだ」のような言い方がされることも、この考え方の妥当性の高さを示すものです。小松の人たちは〈蛇の抜け殻〉を蛇の脱いだ着物キヌに見立てたのです。

〈蛇の抜け殻〉を財布に入れるとお金が貯まる

キヌから変化したキンは小松旧町域を

含む市北部(津上川・鍋谷川・梯川流域)と東部の山間地(郷谷川・大杉谷川上流域)に分布し、それ以外の地域にはキンからさらに変化した形ケンがまとまって分布しています。

琉球方言地域では「衣」から変化したキン、チンなどが着物・衣服をさす方言形として用いられますが、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松を含む石川県のほか、山形、新潟、富山、岐阜、岡山県などでキヌ、キン、ケンが〈蛇の抜け殻〉を指すようです。

福井でも言われますが、小松でも〈蛇の抜け殻〉を財布に入れておくとお金が貯まると言われることがあるようです。あの光沢がお金を連想させるためでしょう。また、キヌから変化したはずのキンが「金」を連想させるためか、キンの分布域の一部地点(千代・安宅・小島)ではギン(「銀」の意)という形まで聞かれました。方言の世界ならではの自由で豊かな発想が生んだ方言形と言えるでしょう。

連載
42

〈桑の実〉の方言



小さいころは、向かいの山に桑畑がいっぱいあった。今は、もう少なくなってしまつて…。春に赤い実をつける。熟れるとおやつがわりに食べたもんや。口のまわりが赤くなるほど食べたなあー。中出寛さん（大杉町で）

五箇山ごかやまの合掌造り民家の構造にも見られるように、以前は北陸地方でも各地で盛んに養蚕が行われていました。筆者が子どものころ、実家（福井県武生市たけふ）には養蚕の道具がまだ残っていましたし、蚕を飼うために植えられていた桑の木も村の所々にまだその姿を見ることができました。

夏に熟した〈桑の実〉は子どものおやつ

その桑の木には、夏になると青黒く熟

した〈桑の実〉がなりました。今のよう
に市販のお菓子などあまりなかった時代、
〈桑の実〉は子どもたちのおいしいおや
つだったのです。記録的な猛暑だった今年
の夏も終わろうとしています。筆者にと
って甘く熟したツバメ（筆者の方言で
はこう呼んでいました）の味は、昔懐かし
い夏の思い出の一つでもあります。今月
はその〈桑の実〉の方言をご紹介します。今
月はその〈桑の実〉の方言をご紹介します。

小松ではツバメとツバミが多数派

市内の広い範囲にツバメ、ツバミが分
布します。かなりの地点で両形が聞かれ、
どちらが古い形かはよくわかりません。
中心部の旧小松町域とそれに続く北部地
域にツバメのみの分布が多いことから、一
見ツバミが古いようにも思われますが、
語末のメとミの違いだけです。ツバ
メが古く、ツバミがその変化形（例えばメ
から「実」を連想するなどして）として生
じた可能性も否定できません。

ツバメ、ツバミの類には、ほかに大杉谷
川中上流部でチーメメ（大杉本町）、ツマメ

（大杉中町）、ツマミ（大杉中町・赤瀬・上
り江）、チマミ（上り江）が、また加賀市に
近い額見・月津でツボミ（ツバミが「舊」の
発音に引かれて変化したものか）が聞か
れました。大杉谷川流域ではツバメ、ツバ
ミがツマメ、ツマミに、さらにツマミがチ
マミに、ツマメがチーメメに変化したも
のでしょう。

ほかにクワノミという形も全域に点々
と分布しますし、クワイチゴ（松岡・金
野）、珍しいところでカッポー（林）とい
う形も聞かれました。

民俗学者柳田国男の「桑の実」（『西は
何方』所収 昭23や『日本方言大辞典』小
学館）などによれば、全国には実に多くの
〈桑の実〉の方言が存在しています。養蚕
とともに桑の木が身近になり、各地で子
どもたちが〈桑の実〉に自由な名付けをし
た結果でしょう。中でもツバメ、ツバミの
ように三音節で語頭がツで始まる形は福
井県三方郡以北の北陸地方と岐阜県に見
られるものです。

連載
43

再び〈肩車〉の方言



パパの肩車、
ほら高いゾー、高いゾー
優太朗さんと
藤井勝司さん（今江町）

さわやかな季節を迎え、秋の行楽の計
画を立てている家庭も多いのではないで
しょうか。行楽地ではよく親に肩車され
た子どもを見かけることがあります。父
親の首に肩車して高い位置からつれしそ
うに周りを見回す子どもの姿は、幸せそ
うな家族の姿そのものです。以前、本連載
の2回目（98年5月）でその〈肩車〉の方言
をご紹介しますが、当時は市内東部32
地点の調査しか終了していませんでした
ので、今回はそれ以降の調査結果も含め、
市内全域の〈肩車〉の方言分布をあらため
てご紹介してみたいと思います。

1・5地点に一つの割で異なる方言形が！

以前にも書きましたが、全国的に見て
北陸地方はなぜか〈肩車〉の方言の種類
が非常に多い地域です。これまでに市内
約110地点での調査を終えましたが、
ちよつとした発音の違いも含め、これま
で何と74種類もの方言形を聞くことがで
きました。単純計算では約1・5地点に一
つの割で異なる言い方に出会ったことにな
ります。

紙幅の関係でここでは、70種余りの方
言形のごく一部しか挙げることはできま
せんが、形態的特徴（形の類似性）から、そ
れらはいくつかのグループに分けられま
す。

分布の広いものでは、チョンノクビ類
（チョンノクビ、チョンノコビ、チョンコ
ビ、オチョンコビなど）が東部の大日川上
流域と郷谷川流域、北部の津上川・鍋谷
川流域、根上町に近い梯川流域の一部に、
サルー系のサルマワシ類（サルマワシ、サ
ルマカ、サンマカ、サルマタなど）が大杉

谷川中・下流域、北国街道沿いの加賀市に
近い市西南部に、同じサルー系のサルコ
ボンボ類（サルコボンボ、サルボンボ、サ
ンカボンボ、サツサボンボなど）が大杉谷
川上流域、旧小松町域とその近辺に見ら
れます。連載2回目でも述べたように、分
布から見て「稚児の首」に由来するらし
いチョンノクビ類の方が、大道芸の「猿回
し」に由来するサルマワシ類・サルコボン
ボ類よりも古い分布と考えられます。特
に旧小松町域にまとまった分布を見せる
サルコボンボは金沢方面の影響を受けた
新しい形と思われる。

ほかには、アバー・アンマーの類（アバツ
チヨ、アバタ、アンマダカ、アブラカイな
ど）が小松バイパス沿いの一部（北の大
野・花坂付近と南の那谷・滝ヶ原付近）、ハ
ツンマが日本海沿岸部、サントメント・サ
ンドメントの類が小松バイパス沿いの西
南部地域などに見えます。

全部の方言形をご紹介しますのは残
念ですが、〈肩車〉が子どもの世界のことば
であることが、多くの方言形を生んだ理由
の一つであることは間違いないようです。

連載
44新しい方言①
タリン・シン

「これにシンかあ」「資料がタリンねえ」
小松短大キャンパス仲間の
中西郁未さん(左)、今田順也さん(中)、斉藤
彰一さん(右)

本連載ではこれまで、平成8年から12年にかけて、金沢大学教育学部国語研究室が市内全域で70歳前後の方を対象に行なった方言調査(小松市立博物館の委託による調査の結果から、主に高年齢世代で使われる小松の伝統的方言をご紹介してきました。従って、これまでに取り上げたものの中には、若い世代の方には耳慣れない方言・使わない方言も多かったに違いありません。そこで、今月からしばらくは、小松市中心部(旧小松町域)で若者

世代を中心に使われる新しい方言をご紹介します。最近では全国各地で伝統的方言が衰退し

共通語化が進んでいます。地域による共通語化の度合いの違いこそあれ、北陸地方として小松でもそれは同じです。しかしその一方で、今なお新しく生まれていく方言もあるのです。

参考にした資料は、平成11年の夏に小川有美さん(現在金沢大学大学院生)が筆者の指導で龍助町・東町の10歳代から70歳代の方々計189名の協力を得て行なったアンケート調査の結果です。

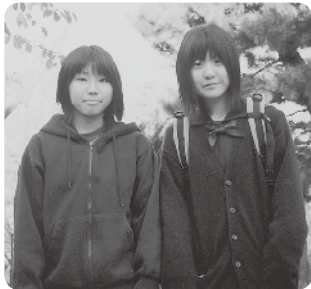
タリン、センが共通語の影響でタリン・シンへ

店で、ある品物を買おうと思って財布を見たお金が足りませんでした。「あ、お金が足りない」と思わずつぶやくとしたら「足りない」はどう言うでしょう。タリン(西日本方言形、五段活用「足る」の否定形)が小松での本来の言い方ですが、タリンと共通語形タリナイの傍線部が混ざったタリン(このような方言と共通語

の中間的スタイルを「ネオ方言」と言っています)という新しい形が生まれました。50歳代以上では男女ともにまだタリンが優勢ですが、女性では40歳代以下、男性でも20歳代以下では明らかにタリンの方が優勢になっています。20歳代以下では、男女平均でタリンが3割弱、タリンが5割程度使用されています。

同様に、「仕事をしない」と言うときの「しない」に当たる言い方でも、本来の方言形シン・セン(シンからの変化)が共通語形「しない」の影響によって、新しいシン(セン+シナイ)という形を生んでいます。タリンほどではありませんが、50歳代からわずかにその使用が見られ、20歳代以下では2割から3割の人が使っています。

こういう時代ですから共通語形タリナイ、シナイは今後も間違いなく小松にも浸透していくでしょう。しかし、それらとは使用場面を異にする形で(日常的場面で使用される方言として、新しい方言形タリン、シンもこれからさらに勢力を強めていくと予想されます。

連載
45新しい方言②
ンカッタ、ンクナッタ

「でっけハト見ンクナッタ」
「そうけ」
(芦城公園で)

書カンカッタ、書ケンクナッタの形も共通語の影響

前回ご紹介したタリン、シンのように、方言が共通語の干渉を受けて新しく成立した方言(方言と共通語の中間的スタイル)を「ネオ方言」と呼びます。井上史雄氏(東京外国語大学教授の言う「新方言」(共通語とは無関係に若い世代において新たに発生し、かつ勢力を広げつつあるもので、使用者にも方言と意識されているもの)と区別して真田信治氏(大阪大学

教授)が名付けたもので、タリン、シンのほかでは、小松を含む北陸地方や西日本地域で若い世代を中心に使われる、書カンカッタ(書かなかった)、書ケンクナッタ(書けなくなつた)のンカッタ、ンクナッタなどもその例です。それぞれ、方言形「書カン(書かない)」+共通語形「書力ナカッタ」、方言形「書ケン(書けない)」+共通語形「書ケナクナッタ」の傍線部が組み合わさって生まれた形です。

動詞によって差のあるンカッタの使用

小松市中心部の龍助町・東町では、ンカッタの形は、ンクナッタの形に比べ早くから使用されていたようで、「しなかつた」の意のセンカッタは全世代で5、6割の人が使用しています。シンカッタも40歳代以下で使用が増加し、本来の方言形だったセンダはあまり使われなくなっています。一方、書カンカッタ、見ンカッタ(見なかつた)、来ンカッタ(来なかつた)は、40歳代以下でも3、4割程度の使用にとどまっていて、今も本来の方言形の書力(ナ)ンダ、見(ナ)ンダ、来(ナ)ンダ

が優勢です。

ンクナッタは30歳代以下で急増

それに対し、書ケンクナッタ、見レンクナッタなどのンクナッタの形は、30歳代以下で女性中心に使用が急増し、20歳代以下では男女平均で7、8割が使用しています。また、共通語形のンクナッタも増えつつあり(平均で3割前後)、「書けなくなつた」見られなくなつたの意で使われてきた本来の方言形、書ケンヨーニナッタ、見レンヨーニナッタは、若い世代でほとんど使われなくなっています。それに代わって市中心部で確実に勢力を広げているのがンクナッタの形というわけです。タリン(足りない)、シン(しない)にしても、ンカッタ、ンクナッタにしても、共通語との干渉によって生じた「ネオ方言」形であることから、比較的フォーマルな場面でも使える(地方共通語的)形と意識されている傾向があります。そのような意識も、新しい方言形としての勢力拡大を支えているのだと考えられます。

連載
46新しい方言③
タッタ、メツチャ

「お昼や」
「タッタ腹へった」
フレッシュマンのランチタイム

新しい年を迎え、今回も引き続き小松中心部での新しい方言現象を取り上げることになります。先月、先々は、共通語との干渉によって生まれた「ネオ方言」の例をご紹介しますが、今回は、井上史雄氏の言う「新方言」の例を見てみたいと思います。井上氏は「新方言」を、(1)若い世代に向けて使用者が多くなりつつあり、(2)使用者自身も方言扱いしている、(3)共通語では使わない言い方、と定義しています。新しい方言の成立が共通語の干渉とは無関係であり、使用者にも方言と意識さ

「新方言」の生まれやすい強調表現

若い人はいつの世にも大げさな表現、強調した物言いを好むと言われます。例えば、「とても」「すごく」にあたる強調語もその例の一つです。そのせいか、強調語の世界では今なお全国各地(特に西日本)でさまざまな「新方言」が生まれています。東京を中心に主に東日本で使われるチヨ、関西地方のメツチャがその代表ですが、ほかにも、デーレー・デラ(愛知県)、ブチ(岡山県・広島県・山口県)、バリ(山口県・福岡県・長崎県)、シンケン(大分県)、タイギヤ・マーゴツ(熊本県)、ワッゼー(鹿児島県)など、実に多彩な言い方が新しく生まれています。

小松の強調語の「新方言」はタッタ、メツチャ

小松市中心部(龍助町・東町)での世代別調査によると、「とても腹が立った」と言うときの「とても」にあたる言い方に



「オキレやー」、「おやつ…」
やけど、もうちょっと
寝かしとこつ。と先生。
梅田保育所で

連載
47新しい方言④
オキレ、ミレ、アケレ

これまで3回にわたって小松市中心部での新しい方言現象を取り上げてきました。共通語の普及によって方言はただひたすら衰退に向かっていると考えられがちですが、意外にそうでもないことがわかっていただけたのではないでしょうか。今月以降も数回にわたって、井上史雄氏の言う「新方言」の例をご紹介しますことにします。

命令的表現には多彩な表現形式が

朝、なかなか起きて来ない家族に「早く

は、全世代で使用される共通語的なスゴク(スゴク、スゴイ、スゲーなどを含む)のほか、若い世代を中心にタッタ(タッタ、タダ、ターダを含む)、メツチャ(メチャ、メツサなどを含む)が見られます。スゴクの類は50歳代以上では6割から7割近くの人に使われていますが、40歳代以下では3割前後に減ります。それに代わって、40歳代以下でタッタが3割前後、また30歳代以下ではメツチャも3割近く使われ始めています。特に20歳代の女性でメツチャが4割近く使われているのが目立ちます。

タッタは副詞「ただ」の強調形として小松で独自に生まれた形と思われ、「タッタ腹へった」のように使われます。強調語タッタは、県内では七尾市など能登地方の一部でも生まれているようです。一方、メツチャは明らかに関西地方の影響を受けて使われ始めた形です。メツチャは、小松に限らず県内の若い世代で勢力を広げている形で、石川のことばがいまだに関西方言の影響下にあることを示す例です。両者とも今後さらに勢力を伸ばしていくだろうと予想されます。

い方が使われやすことがわかります。

一段動詞の命令形で「レ(オキレ、アケレなど)が増加

一方、共通語的なオキ口、オキテは、若い世代を含めてまだそれほど使用されていません。それに対し、20歳代以下で急増するのがオキレです。男性で3割から4割近く(女性では20歳代で1割、10歳代で2割ちょっと)使われています。この形は、五段動詞の中でも数が多いラ行五段動詞「取る」「走る」などの命令形「取レ」「走レ」などの形に類推して、「一段動詞」起きる」の命令形を「起きレ」としたものです。同様に「見る」「開ける」などの「一段動詞」の命令形でも「見レ」「開けレ」などの形が聞かれます。小松をはじめ、加賀地方の若年層で新しく広まりつつある「新方言」形の一つです。「一段動詞」の可能動詞化(「見レル」「起きレル」などの俗に言う「ら抜きことば」)が、ラ行五段動詞の可能動詞形(「取レル」「走レル」など)への類推によるものであるのと共通する現象として興味深いものです。

連載
48新しい方言⑤
書けレル、書けレン

「うまく書けたかな？」
と先生。
「だめや書けれん」
芦城小学校で

前回の最後で一段動詞の可能動詞化（「起きレル」「食べレル」などの俗に言う「ら抜きことば」）のことに触れましたが、今回は、それと関係の深い五段動詞の可能表現に見られる小松の「新方言」、書けレル、書けレンの類をご紹介します。

加賀地方は一段動詞の可能動詞化（ら抜き）の先進地域

少し固い話になりますが、動詞の可能表現は学校文法的に言うところ、「書かれる」「走られる」のような五段動詞未然形＋

レル（可能の助動詞）の形、「見られる」「起きられる」「寝られる」のような一段（上二段・下二段）動詞未然形＋ラレル（可能の助動詞）の形が本来の形でした。

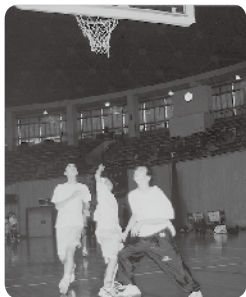
ところが、五段動詞のグループでは、江戸時代ごろから「書ける」「走れる」のような「可能動詞」形が現れ始めました。これは、助動詞「れる・られる」が「可能」の意味のほかにも「受身・尊敬・自発」という複数の意味を持つために、「可能専用の形が求められた結果でした。そして、五段動詞では今や可能動詞形が共通語としての地位を得ています。日本語の乱れとしてよく話題になる「ら抜きことば」は、五段動詞の可能動詞化の後を追って起こった、一段動詞の可能動詞化という合理的な変化なのです。

特に、小松市や金沢市を含む加賀地方北部の方言では、一段動詞の可能動詞化が非常に進んでいます。その結果、五段動詞でも数の多いラ行五段動詞の可能動詞形（「走レル」「取レル」など）と合わせて、動詞の可能表現は「〜レル」という形が多数を占める結果となったわけです。

五段動詞（ラ行以外）の可能表現でも、レル形が増加

一段動詞の可能動詞化が進んでいる金沢市や小松市の方言では、すでに可能の意味を含んでいるはずのラ行以外の五段動詞の可能動詞形「書ける」「話せる」「勝てる」「読める」などが、ラ行五段動詞の可能表現形や一段動詞の可能動詞形に合わせて、「書けレル」「話せレル」「勝てレル」「読めレル」という新しい方言形を生みつつあります。小松市中心部（龍助町・東町）での小川有美さんの調査では、「書けレル」「書ける」「書けレン（書けない）」の「新方言」形が高年層で既に見え始め、50歳代以下で次第に増えつつあることがわかりました。肯定形「書けレル」は40歳代女性で約半数、20歳代女性で4割強、否定形「書けレン」も20歳代男女で約半数の人が使っています。

多数派の形に一本化しているという合理的意識が、本来直さなくていいものまで直し過ぎてしまった現象（専門的には「過剰修正」などと言われます）です。

連載
49新しい方言⑥
ヤッキネー・ムズイ

「ヤッキネーときもあつけど…」、練習が始まれば、みな真剣です。芦城中の男子バスケット部、市末広体育館で

早いもので本連載も今月から5年目に入ります。今月も前回までと同様、小松での新しい方言（中でも井上史雄氏の言う「新方言」）をご紹介します。今回は、「やる気がない」の意のヤッキネーと「難しい」の意のムズイです。

ヤルキナイが若い世代でヤッキネーに

先に1月号で、若い人が好むと言われる強調語（「とても」にあたる）の新方言、タッタ、メツチャをご紹介しますが、最近の世の中、「やる気がない」にあたる言い方も若い人の口からよく聞かれるようになります。

小松市中心部での世代別調査によると、「やる気がない」にあたる言い方に、40歳代の女性と50歳代以上の人の6割以上がヤルキナイ（ヤルキネーを含む）を使っているのに対し、40歳代の男性と30歳代以下ではヤルキナイが2／3割に減り、5割から6割の人がヤッキネー（ヤッキナイ、ヤッキゼ口を含む）を使っています。60歳代以上では1割も見られないヤッキネーが40歳代を境に若い世代で急増しているわけです。形の上ではヤルキナイがヤルキネー、さらに「ル」が促音化してヤッキネーへと変化したものですが、日常場面では今後さらに若い世代で勢力を伸ばすに違いありません。

ムズカシーが若い世代でムズイ、ムッジーに

「難しい」にあたる言い方では、同じく小松市中心部の40歳代以上の人のほとんどがムズカシーを使っているのに対し、30歳代以下でムズイ、ムッジーが現れ始めます。先のヤッキネーに比べるとその使用はまだ多くありませんが、それでも20歳

代・10歳代の男性では、ムズイとムッジーを合わせると約半数の人が使っています。ムズイとムッジーも今後さらに勢力を伸ばすと思われます。

ヤッキネーもムズイも加賀地方全体の方言

ところで、ヤッキネーもムズイ、ムッジーも小松だけで使用が増加している新方言というわけではありません。筆者の指導で、4年前に、J・R北陸線に沿って金沢市から加賀市までの範囲（各駅周辺の12地点）で方言の地域差と世代差70・50・30・10歳代の4世代の調査をした小松市出身の田中鉄哉氏（現在金沢市立西南部小学校教諭）の卒論資料によると、「やる気がない」では金沢市から加賀市までの全地点の30歳代以下にヤッキネーが見られますし、「難しい」でも全地点の10歳代以下にムッジー、ムッジー、ムズイが見られます。つまり、これらは加賀地方全体での新方言でもあるのです。特にムズイは、ムズカシーの縮約形として全国的に広がっているものとも一致します。

連載 50
新しい方言⑦
ゝシ、ズッパスル



「先生に怒られるし、ズッパスルのやめよう」と。
西出祥子さん(右)と杉山千弥さん。
小松市立高校のロビーで。

昨年の11月以来、小松市中心部において新しく生まれている方言現象のいくつかを紹介してきましたが、「新しい方言」シリーズは7回目の今月で終わることになります。これまでに取り上げてきた、真田信治氏の言う「ネオ方言」や井上史雄氏の言う「新方言」の例からは、方言がただ衰退しているばかりではないことを知っていただけたのではないのでしょうか。今回最後に取り上げる「ゝシ、ズッパスル」は、ともに女性優位の新方言の例です。

「ゝから」は、ゝサカイ・ゝサケに代わってゝシが増加

アメ フットツタサカイ(サケ)キノー

ワイカンダ(雨が降っていたから昨日は行かなかった)

共通語の理由・原因を表す接続助詞「ゝから」にあたる形は、このように、かつて近畿方言の影響を受けて北陸地方に広がったゝサカイ・ゝサケが小松では使われてきました。市中心部(龍助町・東町)での世代別調査の結果でも、30歳代以上では、ゝサカイ・ゝサケが最も優勢ですが、しかし、20歳代以下になると、共通語形ゝカラ以上に、ゝシの使用が増加します。特に20歳代の女性では9割の人がゝシを使用していて、ほかの世代でも男性に比べ女性にゝシが多く用いられている傾向が見られます。今後は共通語形ゝカラとともに、ゝシが小松の「新方言」としてさらに勢力を伸ばしていくことになりそうです。

ズッパスルは学校で生まれた「新方言」

年輩の方には、ズッパスルがどういう意味か、わかる人は少ないでしょう。ズッパスルとは「ズックの踵の部分」を踏んで

履いて歩くこと、すなわち、「ズックをスリッパのように履く」という意味で、傍線部分をくっつけて名付けられたものなのです。30歳代以上ではほとんど聞かれないこの言い方が、市中心部では20歳代以下で突然現れます。ただ、かなり性差が見られ、20歳代と10歳代女性の4割余りがズッパスルを使うのに対し、男性では、20歳代でまだほとんど聞かれず、10歳代でようやく2割を超える程度になります。一般に「新方言」形は男性優位で広がる傾向が見られるのですが、ズッパスルの広がり方はその逆になっています。ズックの踵を踏んで歩くのが女性に多いということでもないと思うのですが、とにかくこの形が、ズックを履くことの多い学校で使用され、広がった、学校内「新方言」であることは間違いないさそうです。このズッパスルは、金沢市内でもすでに10年以上前から使われていたという報告があり、小松で独自に生まれたものか、金沢の「新方言」の影響を受けたものかは、はっきりしません。

連載 51
虫の方言(あめんぼ)

先月までの「新しい方言」に代わって、今回からは再び小松市内の高年層(主に70歳以上)の方々に受け継がれ、使われてきた方言をご紹介しますことにします。

本連載では、これまでも「鬼やんま」(98年9月)、「かめ虫」(98年10月)、「蛭」(99年8月)といった虫の方言を取り上げてきましたが、今月は「あめんぼ」の方言を取り上げてみたいと思います。

「あめんぼ」と「みずすまし」は同じ虫?

「あめんぼ」というのは、体が細長い棒状で長い足を持ち、池や水たまりなどの水面をスイスイ滑走している虫です。漢字では「水馬」「水亀」「飴坊」などと書き、共通語形でもあるアメンボという名は、体が飴あめのような臭いにおいがすること由来すると言われています。

小松市内で「あめんぼ」の方言形として一番多く聞かれたのがミズスマシ(ミ

ズムシを含む)です。これまでに調査した111集落のうち約半数の集落で聞かれました。共通語ではミズスマシというと川や池などで水面を旋回する体長1センチにも満たない黒色で卵形の小さな別の虫をさしますが、同じ水面で見られる虫同士ということで、ミズスマシの名が「あめんぼ」の方言形として横すべりしたのだろうと考えています。「あめんぼ」と「みずすまし」を比べると、その大きさなどからも明らかに「あめんぼ」の方が人の関心を引きやすい虫です。「この虫の足を食べると泳ぎが上手になると言われた」(荒木田)という話も聞きました。水面を軽やかに滑走する「あめんぼ」にはアメンボより「みずすまし」をさすミズスマシの名の方がふさわしく感じられたのではないのでしょうか。同時に調査した「みずすまし」では、共通語的なミズスマシもかなり聞かれましたが、無回答(どんな虫のことかわからない)虫はいるが名前はない「などの」集落も多くなっています。

ユニークな名の「あめんぼ」方言も

共通語形アメンボもミズスマシに混じって点々と聞かれますが、それ以外にも小松で独自に生まれたのだらうと思われるユニークな名も聞かれました。マンザイ(丸山)、オヨビカキ、オヨビカケ(松岡・金野・金平)、シオ、シオトリ(中海・軽海・荒木田・花立)、ジーカキムシ(小野・三谷・矢崎・林・矢田野)、カワノカンサマ(原・打越・大島)、そして大杉谷川上流部のアブラヤノカカサ類(アブラギカサ、アバイカカサ、アツバサ、アツバヤなどを含む)がそれです。ジーカキムシは「字書き虫」、カワノカンサマは「川の神様」、アブラヤノカカサは「油屋の母様」の意かと想像していますが、特にアブラヤノカカサについては、その名の由来を知りたいものです。

連載
52

虫の方言―再び「蛭」の方言



「ほら、見てごらん。大きいのが源氏ボタルで小さいのが平家ボタルだよ」、「ふ〜ん」。「オスはメスの2倍光るんだって!」、「ひえ〜」。
環境企画課が開催した日用川の「ホタル観察会」にて。

今年もまた蛭の飛び交う季節になりました。一時期農業などの影響で激減した蛭も、最近では再びその数が増え始めたようです。豊かな自然環境を守ること、夏の夜に淡く光る蛭の姿を、これから先も変わらずに見たいものです。

本連載では99年8月に「一度〈蛭〉の方言と〈蛭とり歌〉を取り上げましたが、その後の調査で明らかになった市内全域の分布をもとに、今一度〈蛭〉の方言をご紹介します。

全国的に方言量の少ない「蛭」の方言

我が国で方言量が最も多いとされているのは「自高」で、全国で五千種以上もの方言形が報告されています(連載99年7月参照)。ところが、『日本方言大辞典』(小学館)などによると、「蛭」の方言には逆に全国的にあまりバリエーションが見られず、ホーダ、ホータル、ホタロ、ホータロ、ホーたりなど、多くはホタルの音変化形です。源氏物語『第二十五帖の巻名「蛭」』、『枕草子』の冒頭(一段)の「夏はよる。月のころはさら也。闇もなほ、ほたるの多くとびちがひたる」の例など、ホタルの呼称は、古来、文学作品にもよく登場し、それが標準語的に長く使われ続けてきたものであることがわかります。

新たな方言形にホッター、ホタツコ、ホタルッコ

ところで、小松市内での「蛭」の方言形には、先に99年8月号で紹介した、ホタル、ホータル、ホタルコ、ホッターコ、ホタリコのほか、その後の調査で新たに、

ホッター、ホタツコ、ホタルッコの形を確認しました。

ほぼ全域に分布の見えるホタルは、小松での「蛭」の呼称としての古い分布と、共通語形としての新しい分布が混在した状態と見ることが出来ます。大日川、郷谷川、大杉谷川流域をはじめとする、市の周辺地域でのホタルは恐らく古いものでしょう。そして、そのホタルからは、ホータル(大杉中町・赤瀬・長谷・大野・東町)、ホツタル(梯・ホツタルコの省略形の可能性も)が生まれ、さらに「蛭」の小ささに注目したホタルコ(「ホタル+コ」(子)の意か)が生まれ、それをもとにホタルッコ、ホタツコ、ホッターコ、ホタリコの音変化形が生まれたと考えられます。このうち、小松市中心部の旧町域をはじめとして、JRや小松バイパス沿いの地域と津上川・鍋谷川・梯川流域にまとまって分布するホッターコ(ホタリコを含む)が最も新しい勢力のようです。

蛭の飛び交う姿はこれからも見られるでしょうが、こうした方言形はまもなく忘れ去られる運命にあるのでしょうか。

連載
53

虫の方言「蟻地獄」その1

「蟻地獄」という虫は、家の縁の下や神社の境内などの乾いた細かい土に、小さなすり鉢状の穴を作っているウスバカゲロウの幼虫のことです。「蟻地獄」の名は、「蟻にとつての地獄」、すなわち、この虫がすり鉢状の穴に潜み、そこに落ちた蟻などの小昆虫を捕食するところからきています。

ところで、全国的にみると「蟻地獄」の方言形もまた多彩です。民俗学者柳田国男は早く、『西はどっちー国語変遷の一例ー』(昭和25年)の中の「蟻地獄と子供ー特に疎開の少年の為にー」で、蟻地獄の方言形の種類が多く全国で100以上ありそうなこと、それが、この虫とともに遊んだ子どもによって名付けられたことと関係があったらしいと書いています。

これまでに本連載で紹介してきた方言の中でも、京都(中央)発信型の方言は別として、方言量の多いものには、子どもの世界と関係の深いものが多いのです。

おとなに比べて子どもの行動範囲は狭いので、狭い領域ごとに異なる方言形が生まれやすいのです。

小松では50種類近くの「蟻地獄」の方言形

柳田国男のことを裏付けるように、小松市内でも110地点から50種近い方言形(発音がわずかに違うものを含め)を聞くことができました。「肩車」方言(「広報こまつ」連載2001年10月号参照)にこそ及ばないものの、小松でも方言量の多いものの一つと言えます。今月と来月の2回にわたって、多彩な「蟻地獄」の方言の世界をのぞいてみましょう。

小松市内で聞かれた50種近い方言形のうちには、ほかに類似の方言形がなく、ある集落だけで聞かれたという方言形(「こ」の「を」を「孤例」と言います)も少なくありません。そのような方言形は来月で紹介することにして、似た方言形が複数の集落で聞かれたものから見ていくことにします。

イリコカキムシは「イリコ掻き虫」の意

まず、市内東南部の郷谷川流域と大杉谷川下流域にはイリコカキムシ(東山)、イリコカクムシ(波佐谷)、イリコカキ(尾小屋・波佐谷・日用・東山)、イリコムシ(波佐羅)、イッコムシ(波佐羅沢)の類が分布します。イリコカキムシが元の形で、「蟻地獄」を捕まえるときに、子どもがすり鉢状の穴の土をイリコ(麦焦がし:大麦を煎って焦がし、石臼でひいて粉にしたもの。これに砂糖を混ぜ、湯で溶いたりして食べた)に見立て、それを掻き混ぜるようにするところから名付けられたものではないでしょうか。

また、郷谷川下流域の金野・金平では、ウススリムシが聞かれました。穴から「蟻地獄」をおびき出す動作とウススリ(米を精米すること)がどこかで似ているからでしょうか。

小松の「蟻地獄」方言はまだまだたくさんあります。次回に続けますのでどうぞお楽しみに。

連載
54

虫の方言〈蟻地獄〉その2



小さいころ、よく遊んだ神社の境内へ。
「あつ、この穴は？」
「う〜ん、いないよオ〜」
この日、天眼鏡で蟻地獄は見られなかった。ああ残念。

先月号に続いて〈蟻地獄〉の方言について見ていきます。

共通語形と一致するアリジゴクは市内中心部(旧小松町域)にまとまった分布が見えます。それ以外に複数の集落(地点)で聞かれた方言形には、前回ご紹介したイリコカキムシ類、ウススリムシのほかにも、スリバチ類(スリバチ、スルバチ)、チジ類(チジ、チリ)、ジョンコ類(ジョンコ、オジョンコ、ジョンノコ)があります。スリバチ類は小松バイパスに沿った南部地区の津波倉・林・ニツ梨・馬場・那谷、そして南に接する加賀市栄谷に見えます。

〈蟻地獄〉のすり鉢状の穴の形に注目した命名でしょう。

チジは本江・滝ヶ原、チリは西俣で聞かれました。チジもチリも本来頭の旋毛を指す方言形であり、この虫を捕まえるときの子どもの動作(すり鉢状の穴を指で渦を描くように探る)から名付けられた名と思われまふ。

ジョンコ類は北部の上八里・下八里・中海、そしてそれに続く辰町和気・寺井町佐野に聞かれます。その名の由来はよくわかりませんが、下八里ではこの虫を捕まえるときに唱えることが「ジョンコ、ジョンコ、デテコイ、トトガ、ママ、クワス」だったと言います。

多彩な孤例が全域に点在

ある集落だけにしか聞かれない方言形を「孤例」と言っていますが、小松には実に多彩な〈蟻地獄〉方言の孤例が聞かれました。すべてを挙げることはできませんが、主なものを紹介しましょう。

〈蟻地獄〉が蟻を捕食する習性、あとずさりをする習性などに注目したと思わ

れる名に、アイクイムシ(矢田野)、アリズカ(蛭川)、スナジゴク(軽海)、アナホリ(那谷)、スナモグリ(松岡)、ウシオンザリ(後ろずさり)から。古府、スモトリムシ(本河田)があります。ジクボ(矢崎)は、〈蟻地獄〉を土の中の蜘蛛に見立てたものでしょう。

先のジョンコ類同様、この虫を捕まえるときの唱えことばに現れる名が答えられているのが、ジロータロー(中ノ峠)、カカツコ(里川)、エツ(安宅)、チンコバ(安宅新町)です。それぞれ「ジロータロー、カンポイ」「カカツコ、カカツコ、デテコイ」「エツ、エツ、デテコイ、オヤノウツチャ、カジャ」「チンコバーバ、ミズモツテ、オーイデ」という唱えことばを聞くことができます。

タニヒヨコ(花立)、トースミ(丸山)、トロンコ(大杉上町)、チチクビチンマ(大島)、サケノミジサン(日末)なども聞かれました。サケノミジサンは「すり鉢状の穴が盃の形に似ているから」とのことです。〈蟻地獄〉を捕まえるときの楽しげな子どもたちの表情が目につくでしょう。

連載
55動物に関する方言あれこれ
その1

本連載ではこれまで主に、小松市内全域約110集落で行った言語地理学的調査の結果をもとに、〈肩車〉〈おたまじやくし〉〈蟻地獄〉などの各項目ごとに、市内で聞かれる方言形を紹介してきました。

意味分野ごとに約2,300項目の生活語彙も調査

小松市立博物館の委託を受けて実施した方言調査では、言語地理学的調査以外に、毎年1集落を定めて約2,300項目にわたる生活語彙の聞き取り調査をしました。大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町の5集落です。約2,300の項目は意味分野で、「天地・気候」「動物」「植物」「人体」「衣」「食」「住居」「民俗」「遊戯」「教育」「人間関係」「社会・交通」「行動・感情」「時間・空間・数量」「職業」「農・林・漁業」「勤怠・難易・経済」「助詞・助動詞・その他」の18分野に大きく分けました。

今月からは、これまでとは少し趣向を

変えて、先の5集落で聞かれた生活語彙の中の方言を、分野ごとに見ていくことにしたいと思います。第1回目は、先月までの「虫」の方言とのつながりで、「動物」に関する方言を取り上げます。なお、これまでの連載の中でご紹介したものは省略します。

人間の男と女、動物の世界ではオンドとメンダ

動物には雄と雌がいますが、雄をオンド、オント、雌をメンダ、メンツなどと言います。もちろん人間の男と女をさしては言えません。牛の中でも雄の牛(牡牛)はボー、雌の牛(牝牛)はチチウシ、メンタです。

犬ではイン、イーヌ、馬はシマのように発音されることがあります。兎かオサギとなることもあります。また、牛や馬、犬などの尾のことはシッポのほか、オッポ、オノボと言います。

カワフソは今では見るこのことができなくなった川獺の音変化形、トバは鮑、ムジナは穴熊のことです。畑や田の畦などに穴

をあけて困らせる土竜はモクロと呼ばれます。

トリー(鳥)、イーヌ(犬)は南加賀地方の特徴

総称としての鳥はトリー(傍線部が高く発音される)と言われることがあります。このような発音はイーヌ(犬)、アーシ(足)などとともに、2拍名詞の一部に聞かれ、南加賀地方(旧能美郡を中心とした)の方言の特徴とされるものです。

トット、トットコは鶏のことを言う育児語、デッデポツポ、デッデポ、カッポカッポは鳩(山鳩)のことです。蝙蝠はコンモリコ、コンモリ、雲雀はビバリ、燕はツバク口、鼻はフクロ、鶴はイシタタキの方言形が聞かれました。鳩の方言デッデポツポ、デッデポなどはその鳴き声を映したもので、鶴のイシタタキは水辺の石の上で尾を上下に振る姿から「石叩き」と名付けたものでしょう。

動物に関する方言は、次回にまた続けます。

連載
56動物に関する方言あれこれ
その2

先月号に続いて、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町で聞かれた、生活語としての動物(生き物)に関する方言を見ていくことにします。

今年は例年になく暑い日が続きましたが、11月と言えば晩秋、あと1か月もすれば北陸はまた雪の季節を迎えます。私たち人間も冬支度をしなくてはなりません。が、自然界の生き物たちも同様に冬の準備を始めているに違いありません。

さて、冬眠する生き物に蛇がいます。蛇の方言では、総称のヘブ(大杉)、青大将のヌシ(符津)、ひばかりのヒワカリ(符津)を聞きました。ヌシは青大将が家の主のように住みついているところから、ヒワカリはこの蛇に噛まれると命はその日ばかりというので「日別れ」からとの説明が聞かれました。蛇がとぐろを巻くことをサラマクとかサラナットルと言います(大杉)。また、蛇と同じ爬虫類の蜥蜴では、トキヤク(尾小屋・符津)が聞かれました。

た。

井守に触るとメモライ(麦粒腫)ができる？

水中の生き物の方言に、井守をさすアカハラ(符津・龍助)、メモライ(尾小屋)があります。アカハラは、井守の腹が赤いことからの命名です。また、メモライは井守を触るとメモライ(＝麦粒腫の方言形)ができるからとの俗信によるようです。泥鰌ではジョジョ(大杉)も聞かれました。蛭の幼虫の餌になるという川蛭にはジナ(大杉・尾小屋)、田螺にはツープ(符津)の方言形も聞かれました。また、海の牡蠣は柿(カキ)と区別するためにカキガイ(龍助)とも言われるようです。

日中、野良仕事などしていると飛んできて血を吸う小さな虫、蚋はフト(大杉・尾小屋・符津・龍助・安宅)、ブト(大杉)です。昔はこの虫が近つかないように、カンコという、布を巻いて火をつけたものを腰につけたりしたものです。また、ブト同様に山中などで飛んで寄ってきて刺す嫌な虫の蛇。大型の蛇は共通語と同じア

ブと呼ばれるのですが、小型の蛇にはオロ(尾小屋)という方言形が聞かれます。

ハエボンボ、ハイボンボとは蠅のこと

蜘蛛でキボ(大杉)、百足でムカジヨ(大杉)、ムカゼ(尾小屋・符津)、蜂でバチ(大杉)、蠅でハエボンボ(安宅)、ハイボンボ(大杉・龍助)、ハエボ(尾小屋)、ハイ(符津)などの方言形も聞かれました。ハエボンボ、ハイボンボとは何ともかわいい名です。ちなみに、大杉町では蜂がバチとなり、ハチとは狸をさしたとのこと。

なお、前回取り上げた動物に関しては、ほかに以下のような方言形も聞かれましたので、追加で紹介しておきます。土竜のムツグオ(大杉)、梟のフクドリ(大杉)、蝙蝠のコーモリコ(安宅)などです。

今月はこれで字数が尽きました。次回もまた、魚の名前など動物(生き物)に関する方言を続けます。

連載
57動物に関する方言あれこれ
その3

今月も前回、前々回に続いて動物(生き物)の方言を見ていくことにします。まずは魚の名前を漁港でもある安宅町の例を中心に見てみましょう。

コヅクラ、フクラギ、ガンドは出世魚
「鰯」の方言

北陸を代表する魚「鰯」は、成長とともに名前を変える、縁起のよい出世魚としても知られています。その段階名特に小さい段階の名には全国で多くの方言形が聞かれます。小松では、鰯の小さい方から、コヅクラ↓フクラギ↓ガンド(ハマチ)↓ブリと名前を変えます。ハマチ、ブリは全国的にも広く通用する名ですが、コヅクラ、フクラギ、ガンドは北陸地方の地方名と言えるものです。鰯の体形に注目して、フクラギは「脹脛」からガンドは「鰻灯」(かつて盗賊が夜に使った釣鐘型の丸くて長い手提げ提灯)から、との語源説もあります。

安宅での魚の類の方言にはほかに、石鯛のチンダイ、飛魚のトンボウオ、河豚の

アオヤギ、かわはぎのバクチコキ、赤いいのコツペ、烏賊の工力、蟹のガン、水母のタブなどが聞かれました。中でも「かわはぎ」のバクチコキは、この魚の皮を剥いで食べる様を、博打うちが勝負に負けて身ぐるみ剥がされる様に喩えた、何ともユーモラスな名前です。安宅以外では、魚の総称のトト・オトト(尾小屋)、河豚のフクノミ(尾小屋)、フグノミ(符津)、雑魚をさすザツコ(尾小屋)、目高以外の川魚の幼魚をさすヘコタ(尾小屋・符津)、これを鍋で煮ると鍋が割れるという言い伝えがある、体長3〜4センチの泥鰌に似た魚をさすナベワリ(符津)などが聞かれました。

生活環境の変化で忘れ去られる虫の方言

これまでも本連載では、市内全域の分布をもとに、「鬼やんま」「かめ虫」「蛭」「あめんぼ」「蟻地獄」の方言を紹介してきました。前回も「蛸」「蛇」「蜘蛛」

「百足」「蜂」「蠅」を取り上げましたが、それら以外の虫の方言をあと少しだけご紹介すると、かぶと虫の幼虫のゴツトムシ(符津)、毛虫のケナムシ(安宅)、蝶のチヨチヨンボ(安宅)、あげは蝶のゴクラクチヨ(大杉)などがあります。

生き物の中でも、虫はかつて子どもの遊び相手でした。かわいい虫、きれいな虫は虫取りの対象として、こわい虫、嫌な虫は虫退治の対象として、子どもにとって身近な存在でした。そして、それらに方言としての様々な名づけをしました。しかし、生活環境が変化し、最近の子どもたちは虫と遊ばなくなりました。かつての子どもは、虫を捕まえ、虫と遊ぶ中で、自然に命の大切さを学んでいたようにも思います。子どもたちをめぐる環境の変化は、虫の方言だけでなく、人としての大切な体験をも奪おうとしているのかもしれない。

次回からは、「人の性向(性質)を表す方言」の豊かな世界を見ていきます。

連載 58 人の性向(性質)を表す方言 その1

本連載を始めて5回目の新年を迎えました。本年もご愛読いただければ幸いです。

昨年10月からは、平成8年から12年にかけて小松市立博物館の委託を受けて実施した小松市内の方言調査のうち、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町での生活語彙調査で得られた方言をご紹介しますが、今月からは人の性向(性質)を表す方言を見ていきたいと思います。

方言の世界は悪態語が豊富

方言の世界には意外に悪態語が多いのです。「だから方言には汚いことばが多くて」と嘆く人がいるかもしれませんが、筆者はそうは思いません。人間ですから、心底相手が憎くて悪態をつくこともあるでしょう。しかし、方言の世界に悪態語が多いのは、それが許される、温かで親密な人間関係が地域社会に成立しているからではないでしょうか。

連載 59 人の性向(性質)を表す方言 その2

先月号では、性向語彙の中から、子どもを褒めることばの世界をのぞいてみました。今月は逆に、主に子どもの悪い性向(性質)をさす方言から見ることになります。

性向語彙の悪態語は女性用が多い?

子どもの悪い性向と言えは、すでに連載の本紙2001年2月号で〈お転婆〉の方言を取り上げたことがあります。かつて、女の子はおとなしくて控え目であるべきだと考えられていたころ(今でもそう思っている人は少なくないようですが)、男の子だったら元気でいいと褒められるのに、同じことをした女の子はバッチャメロと言われたりしました。バッチャメロとは、小松市内の広い範囲で聞かれる〈お転婆〉をさす方言形です。「罰や」+「女郎(めづら)女性への卑称」からの変化形だろうと考えています。

ほかに、「男のような女の子」をオトコ

人の性向(性質)を表すことばも、決して褒める言い方ばかりではありません。この世界にも悪態語が意外に多いものです。が今回はまず褒めことば的なものから取り上げることにします。

カタイ子、リクツナ子、ハバシー子、ハツメナ子、コーシャナ子、ハシカイ子ってどんな子?

金沢で初めて、「○○さんこの子はカタイ子や」というのを聞いて、カタイというのは、筆者の福井(武生)方言で言う「丈夫な・健康な」の意味か、共通語的に言う「真面目で堅い」の意味かと勘違いしたことを今でもよく覚えています。金沢や小松などでは、カタイ(カテとも)とは「素直で言うことをよく聞く。真面目でおとなしい」といった意味になります。リクツナもこれと似ていて、人の性質を言う場合、「物分りがよくておとなしい」といった意味になるようです。

子どもを褒めるのに、ハバシー子、ハツメナ子といった言い方も聞かれます。ハバシー、ハツメナは、カタイ、リクツナよ

メロ、「乱暴な女の子」をテッカメロ、「やんちゃな女の子」をヤンチャメロなどといった言い方も聞かれます。「おしやべりな人・女の子」のことをオチャベ(チャベとも)と言います。どうもこの種の言い方では、女性の方が損な役回りとなって、色々と言われることが多いようです。

また、「気の強い女の子」をキカンコ(「言うことをきかない子」の意から)と言つことがあるようですが、男の子の場合はキカンボーになります。

男の子と言えは、尾小屋でダッチャンボーという言い方を聞きました。ダッチャンとは「埒明かぬ」から変化したダチャカンがさらにダッチャンと変化したもので、ダッチャンボーは「駄目な、出来の悪い男の子」といった意味です。女の子の場合は、ダッチャンネンネと言つたことでした。

テナワン大人の世界にも豊かな悪態語が

子どもに限った言い方ではありませんが、人の性向の悪さを言う類の方言を今少し挙げてみましょう。

りも頭のよさが強調されて、「利口な」の意味に近くなります。ハバシーは「幅しい」で、「羽振りが良い」の意味でも使われ、「人の目に立ちやすい」ことが「利口な」に近い意味を生んだに違いありません。ハツメナは「発明な」の字が当てられるものです。

コーシャナ子、ハシカイ子という言い方も聞きます。コーシャナは「巧者な」の字が当てられ、「利口な。甲斐性がある」に近い意味で使われますが、「要領がいい」という、ややマイナスの意味を含むこともあるようです。ハシカイもこれに似て、「知的に賢い」といった意味を表すと同時に、「ずる賢い」というマイナスの意味でも使われます。

ダラなどと叱つてばかりいないで、褒めて子どもにやる気を出させる。そんな大人たちの気配りが、これらの多彩な褒めことばを生んだのかもしれませんが、皆さんはどう使い分けていらっしゃるのか。

シヨール・シヨールワルイは「性悪・性の悪い」の意で、「性格が悪い人、根性の曲がつた人」のことを言います。似たことを言うのに、「性格が悪い」ことを言うドクシヨナ(「毒性」か)、「意地悪」なことを言うコンジョワル、「気位が高くて傲慢な」ことを言うキダカイなどの言い方も聞かれました。

符津や安宅で聞いたテナワンは、「手に合わない」のテナワンがテナワン↓テナワンと変化した形で、「手に負えない、乱暴な」といった意味です。福井県嶺北地方にも広く分布する言い方です。テナワンモンとなると「乱暴者」の意味となります。

今月はそろそろ字数が尽きました。性向の悪さを言う方言は、また来月に続けることにします。

ところで、昨年から小松郵便局のホームページに、「小松の方言」として本連載が転載されています。アドレスは、<http://www.hokuriku-yusei.go.jp/dpo/komatsu/hougen/hougen.htm> へ。ぜひ一度ご覧ください。

連載
60

人の性向(性質)を表す方言 その3

さて、方言が「田舎のことば」「汚いことば」「訛ったことば」といった言い方で、共通語・標準語(ひょうまふくご)に対して悪者にされていた時代は終わろうとしています。最近では石川県内でも方言見直しの動きがさまざまな形で見られるようになりました。本紙の記事の中にも方言が時々登場しますし、中でも市長さんの連載「コラム」で「くばらん」に登場する方言をいつも楽しみにしています。最近のニュースでは、小松の新しいファッション・ブランドに「sassy(さん・さんじゅるくへんな)」は「みんな残らず」の意の方言、36は小松市の位置北緯36度から」という名が付けられたと言います。また、昨年11月に某ローカルテレビ局で放送された「石川ふるさとCM大賞」でも、県内41市町村のうちの約四分の一にあたる11市町村が、何らかの形でCMの中に方言を登場させていて、これも歓迎すべき傾向だと感じました。本連載も、そのような県内の方言見直しのため

に少しでもお役に立てればと思っています。

コスカン、コンジョヨシからボコイ、ダラまで

では今回も前号に続けて、小松で聞かれた人の性向の悪さを表す方言を見ていくことにしましょう。

「憎たらしい。ずるい」ことを言うコスカン、コスカンを符津で聞きました。符津では「ずるい人」をスカンタラシとも言っています。

性格が悪いというより、むしろ気がよすぎて逆に「お人好し」といったマイナス評価を伴って使われる言い方にコンジョヨシ、コンジョヨシ(「根性良し」)からがあります。安宅・符津・尾小屋で聞きました。これに似たのは福井県でも聞かれ、筆者の郷里(武生)ではコンジョシと言っていました。

ジョンナヒトとは「変わった人」のことです。ジョンナは本来「つまらない。面白くない。怪しい」といった形容語ですが、人の性向をさすと「怪しい」に近い意味になる

ようです。符津で聞きました。

尾小屋では、「わざと他人に逆らったりするような人」をさすヘンクツモン、「我を張る。意地を張る」ことを言う「ゴハル」、「頑固な人」をさすイチガイモンなどを聞きました。イチガイナとは「徹な。強情な。偏屈な」といった意味の形容語です。

マセンコは「ませた子。大人びた子」、ケチンポーは「けちな人」、ヨクンポーは「欲張りな人」のことを言います。「欲張りな人」のことはヨクナヒトとも言います。いずれも安宅や符津で聞いたものです。ゴークは「強欲」からで、やはり「けち。欲張り」といった意味になります。尾小屋で聞きました。

安宅のボカス、符津のボコイは「馬鹿な。愚かな」に近い意味です。ほかに「馬鹿」を意味するものにはダラがあります。ダラは本来「知恵が足りない」の意の「足らず」が、タラズ↓ダラズ↓ダラと形を変えたものと考えられます。仏教用語の「陀羅尼經」「陀羅仏」の「陀羅」とは関係ありません。

連載
61

人の性向(性質)を表す方言 その4

1998年4月号から始めた本連載も、早いもので今月からいよいよ6年目に入ります。昨年10月号からは、大杉町、尾小屋町、符津町、龍助町、安宅町の5地点(集落)でお聞きした生活語彙の中からご紹介していますが、今月も人の性向(性質)を表す方言を続けます。先月、先々月は悪い性向を表す方言を取り上げてきましたが、今月は良い性向を表す方言を見ていくことにします。

メンコイは東北地方だけでなく北陸にも

龍助・符津では、容貌のなかまいさを含めた「かわいい」の意味でのメンコイが聞かれました。メンコイと言うと、上代語「愛し」が変化したものとして、東北地方で広く使われているのはよく知られているところですが、新潟や富山、そして小松を含めた石川の一部にも使われていることは意外でした。

「エチャケナ子やなあ」(大杉・符津・安宅)のエチャケナ(尾小屋・龍助ではエチャキナ、大杉・尾小屋ではエチャゲナとも)とは、「かわいい」「愛嬌がある」「無邪気な」といったプラスイメージの意味になります。主に女の子に対して使われることが多いようです。これに似たものに「愛嬌のある」「お茶目な」の意の、チャメナという言い方も聞きました(尾小屋)。オチャメ(お茶目)のオが落ちた形でしょう。

符津や安宅で聞いた、アイソラシーは「愛想がよい」ことをさし、アイソノエーも似た意味になります。また、尾小屋では「愛嬌をふりまく」の意のアイキョーマク(愛嬌(を)まく)を聞きました。

「賑わしい」から変化したと思われる「ンガシ」は、文字通りの「賑やかな」ことをさすだけでなく、人の性質をさして「陽気な」「愉快な」といった意味で使われています。

小松のイサドイはいい意味のイサドイ

ところで、皆さんはイサドイ、という形容語を使いますか。使ったとしたら、どのよ

うな意味で使っているのでしょうか。尾小屋では「元気がよい」「勇ましい」といった、いい意味になるようです。

実はイサドイは金沢でも使われるのですが、最近面白い現象が観察されます。金沢でも小松と同じように元来は「立派だ」に近い、いい意味で使われていたが、その後「威張っている」といった意味も表すようになり、最近の若い人には「生意気な」に近い、悪い意味で使われるようになってきています。

言語変化の法則の一つに「敬意低減(ていげん)の法則」というのがあります。これは、ことばの丁寧さの度合いが、使っているうちに次第に下降していく傾向を言います。例えば、相手を呼ぶことばの「きさま(貴様)」「あなた(彼方)」「おまえ(御前)」は、長い間使われているうちに本来の高い敬意を失ってしまったものです。金沢でのイサドイの意味の変化は、全く同じではありませんが、意味の下降という点では、一部似た現象と考えることができます。

連載 64 植物の方言あれこれ その3

これをお読みいただく7月初めは、梅雨の雨に濡れて植物の緑がひととき濃く見える頃でしょう。本紙先月号では、環境への小松市民の新しい挑戦が取り上げられていましたが、この豊かな緑を守り、次代に引き継ぐ責任が私たちにはあるのです。そして、本連載でご紹介している方言もまた、地域の豊かな言語環境を育ててきた大切なもの。方言が衰退に向かうのは一部にやむを得ない理由があるとしても、こういう時期だからこそ、自然環境だけでなく、言語環境を豊かにする方言の価値や役割を今一度見直したいものだと思います。

先々月は子どもに身近な植物、先月は野菜の方言を見ました。今月は、それら以外の植物の方言、そして植物にまつわる方言を見ることにします。

そのほかの植物の方言あれこれ

梅干し作りに欠かせない紫蘇はチソと

発音されます。この発音は北陸地方をはじめ、全国的にかなり広く聞かれるものです。コケが、苔よりも茸をさして用いられるのも、北陸全域に共通する特徴です。

田んぼの邪魔者、稗にはへーの発音、そして路にフーキ、柿にカーキ、梨にナース、藤にフージ、蔓にツールの発音(傍線部を高く発音が聞かれました。フーキからツールのように、2拍名詞の一部の語の1拍目が伸びて発音されるのは、クーツ(靴)、カーツ(夏)、アーシ(足)などと同様、旧能美郡域で聞かれる「能美郡ことば」の発音上の特色として知られています。

野生の山芋であるジネンジョの蔓にく実(むかご)にはゴンゴ、ゴンゴ、繁縷にはアサシラギ、アシャシヤギ(アサシラギの音変化形)が聞かれました。山の谷川の脇に生える水路は、尾小屋でカタハ(金沢辺でもこう呼ぶ)、ヨイナと呼ばれますが、大杉ではタニタニが聞かれました。山の谷に生えるからタニタニなのでしょう。グンドは大杉で山葡萄、ビンバナは尾小屋で鳳仙花をさします。

モチグサは蓬のこと。蓬の新芽を摘んで草餅を作ることからこう呼ばれるようです。ドクダメは薬草の「どくだみ」のことです。「どくだみ」の葉を熟して柔らかくし、化膿した箇所塗ると膿を吸い出してくれるので、「毒溜め」の民間語源による名でしょう。「どくだみ」が化膿に効くのは、筆者も子どもの頃に体験済みです。ぜひ一度お試しください。

「植物が腐って悪臭がする」ことを、ネグソナル、ネンソナル、「植物が水気を失って弱る」ことを、シナビル、シオレルのように言います。「植物の実が熟す」とは、ミガイル、イロクル、イロツク、イロズク、イロムなど、色々な言い方が聞かれました。大杉のヨーダは「熟した」の意です。どうぞお楽しみに。

以上、3か月にわたって植物の方言をご紹介してきました。来月からは、「季節・気候」に関する方言を取り上げる予定です。どうぞお楽しみに。

連載 65 季節・気候に関する方言 その1

今年もまた暑い夏がやってきました。北陸の夏は蒸し暑くてつらいとよく言われますが、東南アジアやアフリカなど、常夏の国から金沢大学にやってきた留学生の口からは、四季がはっきりしている日本が羨ましいといったことは聞くことが少なくありません。中でも、私たちの暮らす北陸地方は、太平洋側と違って冬には雪も降り、四季の移ろいをより強く感じるこののできる地域と言えるでしょう。

今月からは、そんな「季節・気候」に関する小松の方言を見ていくことにします。

日本語は自然に関する語彙が豊富

著名な国語学者、金田一春彦氏は『日本語新版(上)』(岩波新書)の中で「日本語には自然を表わす語彙が多いというのが定評であるが、これは日本の自然が変化に富んでいることと、もう一つ日本人が自然に親しみ、強い関心をもつて来たこ

とを意味する。」(161ページ)と書いています。とすれば、方言の世界でも自然現象、例えば「季節・気候」に関する語彙が多いと予想されます。

北陸の冬を象徴する雪の方言

ではまず、ヨーキ(天候、天気の意味)に関する方言から見ていきましょう。

季節の中でも、北陸と言えばやはり冬。そして、冬と言えば雪です。雪のことはユキとしか言いませんが、雪の種類を言う方言には色々聞かれます。粉雪には、コンカユキ(コンカは玄米を精米するときに出る「糠」のこと)、ふわふわした大きな雪には、ボタユキ、ボタンユキ、そして冬の初めなどの水気が多い雪(「みぞれ」)には、ベタユキ、バタユキ、バタバタユキ、ミズユキ、アマケノユキなどの名が聞かれました。

雪に関する方言と言えば、拙稿「日本海側の雪のことば―北陸地方の雪にまつわることば―」(『日本語学』21―1、明治書院、2002年)では、『現代日本語方言大辞典6』(明治書院)の「雪」の項に載る

雪の種類名の数を各県(代表地点)地点のみごとに調べて表に示しました。すると、沖繩をはじめ四国や九州ではユキ一語のみという県が多いのに、北海道から東北の日本海側、北陸地方では雪の名前の数が多くなることがわかりました。最も多いのが、青森(青森市)・長野(秋山郷)の15種類でした。

また、それとは別の資料ですが、天野義廣氏によれば、小松に近い福井県勝山市方言で、合わせて20種近い雪の名が報告されています。多雪地帯の生活が、多くの雪の名を必要としたに違いありません。

小松の方言に話を戻しましょう。冬の季節に関するものに「霰をさすアラネが聞かれます。市内でも雪の多い大杉町では、表層なだれをさすアワも聞かれました。アワ「デタ(表層なだれが起きた)のよう」に言うそうです。

今回はこれで紙幅が尽きました。次号に続けます。

連載
66季節・気候に関する方言
その2

雪の季節にはまだだいぶありますが、先月に続いて、冬の季節・気候に関する方言です。

市内全域(約110集落で行った言語地理学的調査の結果をもとに、本連載ではすでに、「雪渡り」(98年6月・2000年3月)、「氷柱」(同年1月)、「雪に足がはまる」(同年2月)、「雪道に作る」落とし穴(2001年3月)の方言についてご紹介したことがあります。「雪渡り」ではソラルキ、オシヨラキ、ウワアルキなど、「氷柱」ではタルキ、タロキなど、「雪に足がはまる」ではウツル、ゴボルなど、「(雪道に作る)落とし穴」ではウツリコ、オチンコなど、いずれも雪国ならではの多彩な方言形の分布を見ることができました。また北陸の冬の名物と言えは雪を呼ぶ雷。これも本紙99年10月号で紹介した「雷」の方言の中に、ユキフリガミ、ユキガミ、ユキガミナリがありました。詳しくは本紙バックナンバーをご覧ください。

大杉町・符津町の冬の季節・気候に関する方言

さて今月は、冬の季節・気候に関する方言を、市内でも雪の多い山間部の大杉町と、JR粟津駅に近い平野部の符津町を比較する形で見ていきたいと思います。

寒さで濡れた手拭や雑巾などが凍ることを大杉ではシミル、符津ではカチカチニナルと言います。シミルと言えは符津では「氷がはるほどに冷える」の意となります。また、寒さのために手足などにできる霜焼け(凍傷)は大杉でシンバリ、符津でシンバレです。シンバリは恐らく、凍るくらいに冷える(シミル)と腫れてできるというシミバレが、シンバレ→シンバリと変化したものです。寒さで凍えることを大杉でカンジル(寒じる)、符津でカジケル、カンジケルと言います。冬の前に吹く北風は符津でアイノカゼ、冬の雷は大杉がユキガミサマ、符津がユキガミナリ、雪掻きは符津でユキワリ、雪道を歩くときに履物につけた「かんじき」は大杉でカンズキです。

ところで、冬の生活と言えは、昔はどの家にもあった囲炉裏。暖をとるために家族が囲炉裏の周りに集まって話をする。

そんな生活の中で、方言は上の世代から下の世代へと受け継がれていったに違いありません。その囲炉裏のことを大杉ではジロ、符津ではイリリと言いました。ジロは小松市内では大杉・丸山・花立といった山間部にしか聞かれませんが、鳥越村から白峰村にかけての白山麓一帯に分布する方言形で、小松では最も古い方言形だろうと考えています。

囲炉裏と言えは、その上に吊つてあった棚のことを大杉でヒヤマ(火天)の変化した形)と言ったようです。また、囲炉裏や火鉢の灰をすくう金属製の十能はセンバ鍋・釜ややかんのをのせる三本足の金属製の道具はサントク(三徳)から)です。

では、次回も季節・気候に関する方言を続けます。

連載
67季節・気候に関する方言
その3

先月、先々は、季節外れの冬の季節・気候に関する方言をご紹介しましたが、今月も季節・気候に関する方言を取り上げることにします。

風の名前の方言

風の名前を「風位名」などと呼ぶこともありますが、皆さんは風の名前を日頃どれくらい使っているでしょうか。一般的に、内陸部や山間部に比べて、海岸部(漁村)では風位名が多くなると言われます。漁業という職業が、それだけ風に深い関心を払わざるを得なかったことの証拠と言えるでしょう。

小松市内を代表する漁村である安宅町では、アイノカゼ(冬の前に吹く北、あるいは北東の風)、タバカゼ(沖からまっすぐに吹く強い北西の風)、ボンボカゼ(春にフエーン現象が起ったときなどに吹く強い南風。春一番のこと)、クダリカゼ(南風)、ミナミカゼ(春に吹く南風)、タ

カカゼ(海からの風)、ヒクカゼ(陸からの風)などの名前が聞かれました。

アイノカゼは、一般的には秋から冬にかけて吹く北からの風をさす場合が多く、北陸地方をはじめ、青森から山陰地方までの日本海側の広い範囲に分布し、冬の風を代表する名前として知られています。また、同じ北風の仲間のタバカゼは、『日本方言大辞典』(小学館)では「玉風の音変化形と解しています。北から吹く突風を、風の固まり(玉)に喩えた名でしょう。タバカゼは、北風系統の名として日本海側の青森、秋田、山形、新潟(佐渡、石川、福井などに分布し、ほかに突風の名として奈良、和歌山、香川、愛媛、長崎などの西日本にも分布が見られます。

春の強い南風をさすボンボカゼは、安宅のほかは大杉町でも聞かれましたし、同じ風のことを、尾小屋町ではボンボカゼ、符津町ではボンボラカゼとも言うようです。尾小屋では、「ボンボコカゼガフクト ユキ キエル(春一番が吹くと雪が消える)」と言ったことでした。クダリ(カゼ)は春から夏にかけて吹く南風で、

この名もまた青森、新潟、北陸、そして山陰の一部の広い範囲に分布しています。

タカカゼ(高風の意)、ヒクカゼ(低風の意)はいわゆる海風、陸風にあたるもので、単に海から吹く、陸から吹くという方向だけでなく、一日の中で言えば、タカカゼ(海風が日中、ヒクカゼ(陸風)が夜というふうに、時間帯によって風向きが変わる場合)にも言うようです。

風の関係では、安宅ではほかにタツマキ(竜巻)、オーカゼ(台風)も聞かれました。また、これも共通語的に広く通用していますが、海が風で荒れることをシケとも言うています。「ウミ シケテクッロー(海が荒れてくるぞ)」といった具合です。ほかに、大杉・尾小屋では、アラシ(大杉では夏に吹く涼しい風、尾小屋では雨まじりの台風)も聞きました。

今回は風の名前で紙幅が尽きてしまいました。次回もさらに季節・気候に関する方言を続けます。

連載
68季節・気候に関する方言
その4

今年も早いもので残すところあと二月。旧暦霜月の名のとおり、晩秋の冷え込みが厳しい季節になりました。しかし、そんな寒い季節でも、方言の話題はなぜか地域に暮らす人の心をなごませ、暖かくしてくれるものです。今回も引き続き、小松の季節・気候に関する方言を見ていくことにします。

敬意を込めてヒーサマ、ホッサマ

私たち太陽系の人類にとって命の源の太陽。そんな太陽のことを、敬意を込めてヒーサマ、オヒーサマ、オヒサン、オヒーサンのように言います。日が昇り、日が沈むことも、「オヒーサン デサツシャッタ(お日様がお出になった)」「ヒーサマ シズマツシャル(お日様がお沈みになる)」「オヒサン エカツシャッタ(お日様がいらっしやった)お沈みになった」のように表現しています。太陽への素朴な畏敬の念が「デサツシャッタ」「シズマツシャル」「エ

カツシャッタ」の敬語助動詞「(サ)ツシャル」に込められているようです。

太陽(お日様)だけでなく、大杉町では夜の星も、ホッサマと「う様」づけで呼び、「ホッサマ ナガレテ」ゴザル(お星様が流れていつしやる)のように敬意を込めた「(テ)ゴザル」が使われたりします。

太陽の光、月の光をオテラシ(お照らし)からと言います。例えば、「ヒーサマノ オテラシ(お日様の光)」といった具合です。オテラシはまた、「ガンコナ オテラシヤ(強い日照りだ)」のようにも使われています。大杉町では、長期間雨が降らない日照りのことをカンカンヒデリと言うとのことでした。カンカンとは日差しが強いことを表す擬態語です。

太陽が出れば好天なわけですが、そんな良い天気を大杉町では、「テンポナ ムイヒヤッタナ(すごくいい天気だったねえ)」のように「ムイヒ」と表現します。「うまい(具合の)日」というわけですね。

日照り雨はキツネノヨメドリのせいで?

青空が見えるのに降る「日照り雨」の

連載
69感情を表現する方言
その1

感情表現は共通語には置き換えにくい??

昨今の方言見直しの機運は、一般の私たちにも方言の価値が正当に評価され始めたことを示すものだと思います。筆者は、方言の「現代的価値」とは、①地域の大切な文化、②生活のことは、③安らぎ・癒しのことは、④ウチのことは、⑤郷土への帰属意識を確認するもの、⑥言語的アイデンティティの拠り所、⑦共通語には置き換えられない・置き換えにくいことは、⑧多様な日本語の二つの選択肢、⑨個性の象徴、といったものがあると考えています。今回から取り上げる感情を表現する方言の中には、⑦の「共通語には置き換えられない・置き換えにくい」ところが多いように思います。従って、この類には、比較的若い世代にまで方言が使われ続けているものも少なくないようです。

ケナルイは古語「異なり」から

小松で「羨ましい」に近い意味で使われるケナルイ。ケナルイは古語「異なり」に由来する方言形で、もともとは「普通と変わっている様子。特別すぐれている様子」を表していました。が、「普通と変わっている、特別すぐれているから」「羨ましい」の意味に変化したもので、それが京都から周囲に広がったものです。小松だけでなく、北は東北の宮城・秋田をはじめ、北陸中部、近畿、中国、四国の広い範囲に分布します。「羨ましが」ることをケナルガルとも言います。

ハゲーって「はげ(禿)頭」のこと?

何か悔しいこと、嫌なことがあったときに思わず「アー ハゲー」ということは、口をついて出ることがないでしょうか。ハゲーということはを聞くと「はげ(禿)頭」のことかと勘違いする人もいそうですが、これは今なお共通語としても使われるハガイイ(「歯痒い」)がハガイ、そしてハゲーと音声変化した形です。小松で

ことをキツネノヨメドリと言っています。『日本方言大辞典』『小学館』によれば、青森県南部や富山県砺波地方でも「日照り雨」のことをキツネノヨメトリ(狐の嫁取り)と言ったようです。似た言い方のキツネノヨメイリ(狐の嫁入り)という形は、静岡・岐阜・三重・兵庫・島根・広島・香川・高知などの広い範囲に分布することがわかります。

雨に関する方言と言えば、しとしと降る雨をさすシブシブアメ、タ立のことを言うヨダチも聞かれましたし、ひどい雨を大杉町でガンコナアメ、大雨を符津町でガチャブリとも言ったようです。

ところで、田植え後の5月半ばの雨は苗の成長を助ける貴重な雨。「キョーノアメ」 エー コヤシヤデ(今日の雨はいい肥料だよ)」というわけで、大杉町では「コヤシノアメ」とも言ったそうです。

も大杉町などハガイと言った地域も見られます。金沢辺では、同じ「歯痒い」に由来するハガイシーの形も聞かれます。

イトツシャ、エトツシャは「愛しや」から

符津町などで聞いたイトツシャ、大杉町・安宅町などで聞いたエトツシャはともに、相手の悲しい出来事に対して、「かわいそうな」「気の毒な」といった感情を表現する方言形です。これらは、形容詞「愛し」+断定の助動詞「や」の形から変化したものです。「かわいそうな」「気の毒な」の意の「愛しい」は、中世末期や江戸前期の文献例も見られますし、現代方言としても東北の宮城・山形のほか、北陸三県、中国・四国の一部などに分布します。「愛し」と言えば、市内東部や南部で聞くお礼のことは「イトシゲニ」も相手の心遣いを思いやる優しい感謝のことはです。北陸三県で広く使われる感謝のことは「キノドクナ」(「気の毒な」に通じる心です)。

連載 70 感情を表現する方言 その2

新しい年を迎え、本連載も早いもので今月号で70回、足かけ7年目に入ります。本年もぜひ愛読ください。

今月も先月に続いて、小松での〈感情を表現する方言〉について見ていくことにしましょう。

怒りの感情はシャモメル、セーモム

安宅町で聞いた感情を表す方言にシャモメルがあります。「怒る」「腹が立つ」にあたる意味ですが、怒りの程度が強いのがシャモメル(動詞・下二段活用)で、弱いのがセーモム(動詞・五段活用)との説明が聞かれました。シャモメルは大杉町でも聞かれましたし、セーモム(シエーモムとも)は大杉町、尾小屋町、符津町でも聞かれました。恐らく、セーモムは市内の広い範囲で使われるものでしょう。シャモメルは「精(せい)がもめる」(シエーモメルからシャモメルに変化)、セーモムは「精(せい)もむ」に由来する形で、本来は似た意味だった

ものが、両形が併存した安宅町などでは、怒りの程度に差をつけることで意味の棲み分けをしようとしたものでしょう。意味の合理化の意識が働いた結果です。

ところで、セーモムには「いらいらする」に近い意味を表す場合もあるようですが、ほかに「いらいらしたり、焦ったりする」感情を表現するイリイリスルという言い方も大杉町や尾小屋町で聞かれました。

イジクラシーはウザッタイとは違う

最近では、東京発信型の新方言ウザッタイ(ウザイとも)が若い世代を中心に全国的に分布を広げていますが、北陸の石川・富山両県ではあまり使われていません。理由は、似た意味で使われる形容詞のイジクラシー(若い世代では金沢市を中心にそれからの音変化形イジッカシーも)が、今も根強く使われているからです。石川・富山両県の人に、「イジクラシーはイジクラシーでウザッタイやウザイとは違う」、「そんな気持ちがあるからに違いありません」、「煩(わづ)しい」「鬱陶(ふさ)しい」に近い感情

を表す方言です。

ヘシナイ、ヘシネーは「待ち遠しい」に近い意味

「待ち遠しい」「待ち遠しくて」「退屈だ」といった感情を表す方言の形容詞に、ヘシナイ、ヘシネーがあります。大杉町・尾小屋町などで聞きました。大杉では、「マツトツタラ ヘシナイ」(待っていたら待ち遠しい)のような言い方をしていました。これも石川・富山両県の範囲で使われる方言です。

ムサイは小松では「心配だ」の意味

ムサイという形容詞は、全国で多様な意味で用いられていますが、小松市を含む旧能美郡域では「心配だ」といった気持ちを表すようです。「ムソーテ ムソーテ オレン」(心配で心配でいられない)は符津町で聞いた用例です。

連載 71 感情を表現する方言 その3



「この子はなかなか芸達者でね、家中が『クツツリスル』まで楽しませてくれるわいね」。ひ孫の白方陽彩ちゃん(1歳6か月)と遊ぶ常田竹野さん(月津町)。

先月、先々月に続いて今月も〈感情を表現する方言〉について見ていきます。

クツツリスルは「満足する」

安宅町で聞いた方言に、クツツリスルというのがありました。「満足する」という意味です。クツツリスルのように発音されることもあるようです。クツツリ、クツツリという擬態語が何を表したのかはよくわかりませんが、満足した感じのよく伝わる面白い言い方だと思います。

ヨダンボシルは「油断する」

これも安宅町で聞いたのですが、「油

断すること」をヨダンボシルと言います。例えば、「ヨダンボシトツテ オクレタ」(油断をしていて遅れた)のように言うようです。ユダンオシル(油断をする)のユダンオがヨダンボと発音を変えたものかもしれない。ヨダンボシルの反対はヨージンシル(用心する)です。

アイソムネーは「さみしい」

アイソムネーはアイソモナイ(「愛想もない」)が、アイソモナイ↓アイソモネー↓アイソムネーと音変化したものです。小松の方言としては共通語の「愛想もない」とは意味が異なり、「さみしい」の意味になります。もちろん感情的に「さみしい」ことも表しますし、飾り付けなどが「さみしい」といった状態を表す場合にも使われます。

アセクラシーとは「落着かず焦る」感情

アシエクラーシーとも発音されますが、セワシナイ、シエワシナイに似て、「落着かず焦る」気持ちを表す方言です。また、

「急ぐ」ことをシエクと言いますが、これは「急ぐ」からです。「シエーテ イク」(急いで行く)、「シエカント ポチポチ イラッシ」(急がないでゆっくりいらっしやる)のように言います。

小松の高年層方言では、北陸方言の特徴として共通語のセ・ゼにあたる音がシエ・ジェとなりますので、「急ぐ」がシエクと発音されます。アシエクラーシー、シエワシナイのシエも同じです。〈感情を表現する方言〉の類で発音が変わったものとしては、先に挙げたアイソムネー(↑アイソモナイ)、「もつたいない」の意のモツテネー(↑モツタイネー)、「面白くない」の意のオモシネー(↑オモシロネー)、「うれしい」の意のウレシヤ(↑ウレシヤ)、「面白い」の意のオモシーなどもあります。

ほかに「愛想がつかない」の意のアクレル、「楽しみな」の意のオモイデナ、「気にくわない、嫌い」の「コスカン」などの方言も聞かれました。

以上で〈感情を表現する方言〉は終わりにします。次回からは〈行動に関する方言〉をご紹介する予定です。

連載
72

行動に関する方言 その1

3月の声を聞くと北陸の冬も間もなく終わりを告げます。暖冬傾向で雪が少なくなつたとは言え、北陸の冬の気候は人々の行動を大いに規制するものです。雪が解け、草木が芽吹き、屋外での行動が自由になる春がもう目の前にやってくる。

今月からは、屋外、屋内を問わず、そうした人々の行動に関する小松の方言を見ていくことにします。

悪い行動には方言が豊富

どちらかと言えば悪い行動から見えてきましよう。

「いたずらする」「駄々をこねる」ことをヤンチャコクと言います。「いたずらする」でも「親しい友だち同士で」いたずらする、ふざけることはカスゲル、カスオコスと言うようです。「いたずらっ子」の方言には、ヤンチャゴ、ヤンチャボーズ、ヤンチャボーのほか、ワルボーズ、ワルボーな

どが聞かれました。

「いじめる」ことをイタメルと言います。イタメルの場合、言葉でいじめるのではなく、「手を出して力でいじめる」ことをさします。また、「いびる」「いじめる」に近い「ちよっかいを出す」の意味でイジルも聞かれました。「人を馬鹿にする」「人を軽蔑する」「人を見下げる」ことは、メトニスル（メトンシルとも）と言います。例えば、馬鹿にされた人は、「ヒトオメトニシテ」（人を馬鹿にして）と言って怒ったりします。「皮肉を言う」「意地悪を言う」ことはアテコスルです。

子どもが親に何かを欲しいと「ねだる」ことを、セブルシエブルとも、ムセルなどと言います。赤ん坊などが「むずかる」ことは、グズルのほかにグズレルとも言います。

逆に子どもが親に逆らったり、口答えしたりすることを、ハゴタエスル（「歯答えから」、ハゴムク、ハガムク、ゴタムクなどと言います。「オヤニ ハゴムクナ」（親に口答えするな）のように使われます。

「つねる」ことは、チミル、チミカク、ツメル、ツメカクなどと言います。「つねる」よりチミルの方が痛そうに感じるのは筆者だけでしょうか。

「うそをつく」はウソコク（「うそつき」はウソコキです。「だます」はダマカスで、「ダマ、カイテ ツレテイク」（だまして連れて行く）のように言います。大杉では「おおげさなうそをつく」ことをテンポコク、ホラコクとも言っています。

動詞の形ではありませんが、「喧嘩」の意のイサカイがあります。共通語的にも言わないわけではありませんが、やや古めかしい言い方との印象があります。小松ではイサカイ、そしてイサカイから発音が変化したエサカイ、ヨサカイがよく聞かれ、さらにそれが変化したエサキ、ヨサキも聞かれます。

来月からは本連載もいよいよ7年目に突入です。ここしばらくは、多様な人の行動に関する方言をご紹介します。

連載
73

行動に関する方言 その2

連載7年目のスタートに当たる今月は、先月に続いて〈行動に関する方言〉を見ていくことにします。

江戸期上方語に由来するワナル、ボーなど

まわりの迷惑も考えずに、人前で子どもを大声で叱りつけたり、どなったりする人がいますが、はた迷惑な話です。そのように「大声を出す」こと、「こなる」ことをワナルと言います。「ドレダケ ワナッ テモ デデコン」（どれだけ大声で呼んでも出てこない）のように使われます。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「叫ぶ」となる、わめくといった意味のワナルということは、小松以外の石川県内をはじめ、山梨、新潟、富山、滋賀、兵庫、鳥取などにも分布し、江戸期の上方系の文献例も見られることから、かつての中央語（京都語）が伝播したものと考えられます。

かつての中央語と言えば、「弁償する」

の意のマドー、「追う、追いかける」の意のボーもそうです。「ジェンデ マドー」（お金で弁償する）、「ボーテキタ」（追ってきたの）のように言います。現代語としては、共通語でこそ使われないものの、新潟から北陸三県、愛知や近畿地方、そして中国・四国・九州地方の広い範囲にマドーの分布が見られ、ボーも北海道・東北地方から中部・北陸・近畿・中国・四国地方に分布します。『日本方言大辞典』には浄瑠璃・夏祭浪花鑑（1745年初演）の「往なずば早うぼひ往なせ」（「行かないならば早く追って行かせろ」の意の文献例が載ります。「追いかける」の意ではボイカケルの形も使われます。

「やきもちを焼く」の意味で使われるリンキスルのリンキは、漢語「慍気」に由来するものです。

子どもが大人にクドクって？

男性が女性をクドク（口説く）というならわかりますが、それとは別に、小松では「コドモガ オトナニ クドク」（子ども

が大人に告げ、口をする）と言うこともできます。共通語的にもクドクで（「愚痴などをくどくど言う」ことを表すことができますが、それに近い意味と言えるでしょう。

ヘンガイスルは「断る、拒絶する」の意味です。「タノマレタケンド ヘンガイシタワー」（頼まれたけれど断ったよ）のように使います。

ナゴナルは「長くなる」ですが、文字通りの意味のほかに、「体を横にして寝た形で休む」ことも意味します。いかにもゆったり休んでいる感じのする表現です。

エローは「弄う」の変化した形で、イラウ、イロウなどの形で、北陸地方のほか、近畿・中国・四国地方などにも分布します。中世末期や江戸初期の文献例も見られます。同じ手を使うものとして、ニガムという言い方があります。「力を入れて物を握る」の意味です。

今回はこれで字数が尽きました。来月もまた〈行動に関する方言〉を続けます。

連載
74

行動に関する方言 その3

チャベチャベカモーってどうするんや?

チャベチャベカモーとは「何やかやと構う」「おせっかいをする」ことを言います。チャベは「おしゃべりな人」のことで、石川県・富山県のほか、東北・関東・中部・四国の一部に分布します。「何やかやとおせっかいに口を出して構う」というわけです。ベントタレルは「お世辞を言う」ことです。「お世辞ばかり言う人」のことをベントタレとも言います。

チャベチャベカマツても、ベントタレても、どちらも嫌われそうですね。

おせっかいと言えは、人を「からかう」ことを力カリユー、チョツカイカケルなどと言います。力カリユーという言い方は、石川県・富山県西部・岐阜県飛騨地方の範囲で使われています。かつて、夏目漱石の名作「坊ちゃん」の冒頭部分の各地方方言が試みられたとき、『方言研究のすべて』至文堂 1969年）、石川県南能登地方

の方言訳（岩井隆盛訳）で、「同級生の一人が冗談に」という原文に対して、「同級生の一人やかかり言ーて」と、「冗談に（からかう）」の意の力カリユーが用いられています。反対に、人を「無視する」ことはイランモンニスル（「要らない者にする」から）です。

人を「頼る、頼みにする」ことを表すアシメル、アシメニスルは、石川県・富山県・岐阜県飛騨地方で使われます。野々市町の方言語彙を記述した『ワガミのことは辞典』（中島桂三）によると、アシミ（アシメ）が「当て」「アシミル（アシメル）が「当てる」の意とあります。

フロシキヒロゲル（風呂敷を広げる）からは「自慢することです。カスメルは「だます」「アカスは（人の秘密などを）ばらす」の意味となります。

カンニンスルは「許す」の意味で、カン、ニン、テモロー（許してもらった）のように使われます。

ヨボルは「招く、呼ぶ、大声で叫ぶ」、ヨバレスルは「人を招く、ごちそうをしてもてなす」の意味です。

ホドス、ヘグ、タコシアゲルは衣生活に関する行動

では、衣生活での行動を表す方言にはどんなものがあるでしょうか。符津町の例を中心に紹介します。

ホドスは「ほどく」ことです。イトオホドシテ（糸をほいて）のように使います。布などを「裂く」はシャクと言います。ツブクルは「繕う」、クケルは「針目を出さないように」まつり縫いをする、タコシアゲルは「着付けのときに（身長に合わせて裾の長さを調節すること）です。

ヘグは、ソナ アツケリヤー イチマイヘグコツチャー（そんなに暑かったら一枚脱ぐことだ）のように「脱ぐ」の意味で使われます。

「おしやれをする」ことは、ダテコク、ミーカーモー（身を構う）から、メカスなどと言います。

来月も、もう一度（行動に関する方言）を続けま。

連載
75

行動に関する方言 その4

水無月^{みなづき}は旧暦6月の称です。ところが新暦の6月は「水の無い月」どころか雨の多い梅雨^{つゆ}の季節です。北陸では、雪の降る冬に次いで屋外での行動が規制される時期かもしれませんね。前回まで、3回にわたって小松での（行動に関する方言）を見てきましたが、今回は、これまでご紹介できなかったものをあと少しだけ取り上げてみようと思います。

サンニョー、サンニョは「算用」から

サンニョースル、サンニョスルは「計算する」の意です。小松だけでなく全国の広い範囲で方言として使われていますが、江戸時代の上り語「算用」（「計算すること。勘定の意」）に由来するものです。

カシク、カシグは古代の中央語

読者の皆さんは、炊飯器などでごはんを炊く前に米を水洗いすることをどう言うでしょう。共通語と同じで「米を（

トグ」と言う人も多いでしょうが、少し上の世代では、カシク、カシグと言う人もいるに違いありません。カシクは非常に歴史の古いことばで、奈良時代の万葉集にもすでに例が見えますし、平安時代の竹取物語にも「おほいつかさのいひかしく、屋のむねに」とあります。「いひかしく」は「飯炊く」で、本来は「米・麦などを蒸したりして飯を作る。炊事すること」を表していました。東北地方の秋田県・青森県の一部では、今でも「ご飯を炊く」の意味でカシグを使っている所がありますが、小松を含む石川県加賀地方と福井県嶺北地方では、共通語とも一致するタクに本来の座を奪われ、カシク、カシグは、意味的に隣接する、ご飯を炊く前の「米を研ぐ」意味にずれたものと考えられます。ただ、安宅町では「飯炊き（＝飯を炊く人）」のことをカシキと言っていたとの説明も聞かれ、小松でもかつては、カシク本来の意味で使われていたことを思わせます。中央語では「かしく」が古く、江戸時代ごろから「かしぐ」に変化したようです。

食生活に関連する行動の方言には、ほ

かに「茹でる」意のイデル、「温める・暖める」意のヌクシル、「水に漬けてふくらませる、ふやかす」意のヒヤカス、「蒸らす」意のムヤス、「野菜などを切る」意のハヤス、「なめる、しゃぶる」意のネブル、「嘔吐する」意のアゲルなどがあります。ヌクシルは「温（暖かい）意のヌクイの連用形ヌクー+シル（する）」からの形です。イデル、ヒヤカス、ムヤスは、それぞれユデル、フヤカス、ムラスの音変化形でしょう。ハヤスは、「切る」が縁起が悪いというので、逆の意味の「生やす」を使った、忌詞的用法です。野菜などを「切る」の意のハヤスは、東北・中部・北陸・中国・四国・九州地方などの広い範囲にその使用例が見られます。

以上で（行動に関する方言）は終わりにします。次回からは、また新しいテーマを取り上げます。

連載 76

人体に関する方言 その1

本連載では、これまでも人体に関する方言として、98年11月号から99年2月号(連載8〜11回目)で「麦粒腫」(麦粒腫)の民間治療法「旋毛」(旋毛)、「薬指」(薬指)、「小指」(小指)、「99年12月号(連載21回目)で「尻」の方言を取り上げ、小松市内での分布を紹介したことがあります。今回からは、大杉町・尾小屋町・符津町・龍助町・安宅町での生活語彙調査資料から、それら以外の人体に関する方言を見ていきたいと思います。

オドリ、「コブラ」って体のどくをさすの？

オドリ、「コブラ」といった言葉を聞けば、普通は「踊り」「毒蛇の(コブラ)」を思い浮かべるでしょうが、小松の方言では、体の部分名称としても使われてきました。これらが体のどの部分をさすのかは、このあとの文章をお読みいただければわかります。

ではまず、頭部の方から見ていきましょう。

「コーベ」は本来「頭部全体」をさします。「されこうべ・しゃれこうべ」(「曝れ首」)が「風雨にさらされた頭蓋骨」をさすように、本来は首から上全体をさしていたものが、石川・富山両県では、額から上の部分だけをさすようになったようです。尾小屋では「コーベ」の形も聞かれました。

「コーベンパチ」は「額」をさします。これは、額が前頭部の鉢のような形をした場所ということ、で、「コーベ」(頭+ハチ)「鉢」からの変化形でしょう。「コーベンカチ」も聞かれました。

ズコ(ズコーとも)は、小松でも地域によって「頭頂部」「後頭部」「前頭部」と、さす部位が違ふこともあるようですが、もともとは頭全体をさした「すこ(素頭)」の下略形スコがズコへと音変化するとともに、頭の一部をさすようになったものと思われます。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「すかうべ」「すこ」の形で江戸時代前期の文献例も見られ、「頭」の意のズコは、新潟から北陸3県、そして長野・岐阜・滋賀・三重県などに分布するようです。

うです。符津では「額」に近い「前頭部」をさし、ズコンパチ、ズコッパチとも言うとのことでした。この「パチ」も先のコーベンパチの「パチ」と同じで「ハチ(鉢)」からでしょう。「ズコンパチガ イタイ」(頭痛がする)のように使われます。

さて、問題のオドリですが、オドリとは「ひよめき」、つまり、赤ん坊の前頭部と後頭部の間にある骨の隙間のことを言います。その部分が踊り、飛びはねるかのようにはびくはびく動いているところからの名づけだろうと思われる。キリシタン資料として有名な『日葡辞書』(1603年)にも「Vodori: (ヲドリ)」とありますので、中世末期の京都語が石川に伝わったものに違いありません。小松のほか、岐阜・奈良・和歌山・島根・山口・高知・大分県などにも分布が見られます。

今回はここまでとします。コブラが体のどこをさすかについては、次回以降をお楽しみに。

連載 77

人体に関する方言 その2

今回も小松市内で聞かれたへ人体に関する方言をご紹介します。

「斜視」の意のヘンガラメは京阪語「ひがら目」かい

「顔」はツラとも言います。カオに比べると卑語的に使われますが、日本語の庶民語の歴史では、ツラの方がカオよりも古い語とされています。「眉」はマイゲです。共通語的には眉と眉の間を言う「みけん(眉間)」からの変化と思われるメケン、は大杉では「額」をさすとのことでした。ホーベタは「頬」の意ですが、江戸時代初期に京阪語として使われた「頬垢」が北陸に伝播する過程で発音が変化したものです。

メンタマは「目」あるいは「目の玉」とのこと。特に「目の中心の黒目」をさすクロメンタマという言い方も安宅・符津で聞かれました。

ヘンガラメは「斜視」のことで、17世紀

ころの文献例も見える「斜視」を意味した京阪語「ひがら目」に由来します。ヘンガラメは小松を含む北陸三県に分布します。チカメ(「近目」から)は「近視」のこと、で、逆に「遠視」のことはトーメ(「遠目」から)とかメガトイ(「目が遠い」と言うようです。尾小屋では「老眼」のトシヨリメ(「年寄り目」)、「視力が悪い」ことを言うメガツヨイ、「視力が悪い」ことを言うメガヨワイ、「目やに」のメクソというのも聞かれました。ほかに、尾小屋・符津で「まばたきする」意のシバタク、「まばたき」の意のシバタキを聞きました。

鼻関連の方言にはハナビシヤやゴットバナなど

鼻の関係では、「鼻が低いことを言うハナビシヤ(尾小屋)、ハナペチャ(符津)、逆に「高い鼻を言うテングバナ(尾小屋)、「鼻翼の広い鼻を言うシシバナ(尾小屋・安宅)などが聞かれました。言うまでもなく、テングバナは「天狗鼻」、シシバナは「獅子鼻」の意味です。鼻と言えば、「風

邪をひいたときなどに出る粘りのある鼻汁」を「ゴットバナ」と言います。「ゴット」とは粘りのある鼻汁をかむときに出る音を表現したものでしょう。

口関連の方言のクチブラ、ワニグチ、ハギシって？

「唇」の古い言い方には、クチブラ(尾小屋)、クチベラ(安宅)が聞かれました。「大きな口」をさすワニグチは大杉・尾小屋で聞きました。

口の中の「歯茎」はハギシです。これは、平安時代の有名な漢字辞書『新撰字鏡』にすでに「歯茎」の意味での用例が見える「歯肉(ハジシ)」からの音変化形です。筆者の出身地、福井県武生市ではハジシと言っていました。

今月はこれで字数が尽きました。コブラがどの部位の名かという種明かしを含めてへ人体に関する方言は来月に続けます。

連載
78

人体に関する方言 その3

本当に今年は暑い夏でした。前々回、前回に続いて今回も「人体に関する方言」を取り上げますが、皆さんの「体」は暑さに負けずにいたでしょうか。前回は口に関連した方言の途中で終わりましたので、それに近い身体部位の方言から続けることにしましょう。

オニバ(鬼歯) つばの歯のこと?

歯の呼び名としては、まず「八重歯」をさすマサリバ(尾小屋、マサバ(安宅)というのを聞きました。石川県の方言としての報告は知りませんが、『日本方言大辞典』(小学館)に、「切り株から出た側枝」をさすマサリ(新潟県)の例が載っていますのでマサリバというのはもしかすると「側枝」のように斜めに生えた歯の意味なのかもしれません。とすれば、マサバはマサリバの「リ」が落ちた形ということになります。

尾小屋では、「出っ歯」をさすソッパ、大

きな上の前歯2本をさすオニバも聞かれました。筆者の郷里の福井県武生市では、オニバという「八重歯」のことでした。昔話や古い絵に描かれた鬼の口の牙に「大きな前歯」「八重歯」を喩えたのでしよう。

ヘラ・ヘタは「舌」、ツバキは「唾」のこと

口の中の「舌」は、大杉でヘラ、尾小屋・符津・安宅などでヘタです。『日本方言大辞典』によれば、ヘラは、県内では小松以外にも能美郡、江沼郡で、県外では新潟・長野・福井・静岡・愛知・岐阜などの北陸・中部地方に使用例の報告があります。一方のヘタも、石川以外に福井、山梨、兵庫、岡山、大分などで使用例が見られます。いずれも「舌」の形に注目した呼び名と思われ、ヘラはご飯をよそう時などに使う道具の「箸」、ヘタは柿などの実の「蒂」に似ていることから名付けでしょう。

「唾(だえき)」はツバキと言いました。ツバキのままですと植物の「椿」と同音になりますので、そのことも影響して共通語化が進み、ツバキという人は少なくなり

ました。

ノドチン「のどちん」であるの?

口の中と言えば、鏡に向かって口を大きく開けると喉の奥に上からダラリと下がっているのが見えます。ノドチンコなどと呼ばれているものです。語源は説明するまでもないと思いますが、それが何の役目をしているのかをご存じの方は少ないようです。

私たちの言語音声は、肺から放出された気流(呼吸の流れ)が主に口に抜けて発音される口音と、主に鼻に抜けて発音される鼻音(ナ行・マ行の音など)に分けられます。ノドチンコは喉の奥で、その気流を口と鼻のどちらに流すかを決定する弁のような役目をしているのです。少々難しい話になりましたが、ことばに関するトリビアとして知っておいていただくのも一興かもしれません。

今回は字数が尽きました。次回も「人体に関する方言」を続けます。

連載
79

人体に関する方言 その4

本連載をご愛読いただいている方には、毎回ご紹介している方言をご覧になって、そんな聞いたこともないし使ったこともないと思っていってしまう方が少なくないかもしれません。ここしばらく取り上げている「人体に関する方言」の中には名詞の類が多く、この類は特に方言の衰退、共通語化が進んでいます。しかし、小松でも年配の人たちは今もこんな方言を使っている、あるいはかつて使っていたということを、若い世代の方たちにもぜひ知っていただければと思います。なぜなら、それらは皆さんが今暮らす小松が育んだ大切なことばであり、日本語の豊かさの一端を示すものでもあるからです。

では、今回も「人体に関する方言」を続けます。

オシャレボトケ(おしゃれぼとけ)のこと?

顔の下の部分「顎」はアゴタと言いま

す。これは、聞いても共通語と形が似ていますので、若い方でもこのことが予想できるかもしれませんね。関連して、下顎が出た状態をさすシャクレアゴも聞かれました。

尾小屋では「髭」に対してフゲという発音が聞かれました。「口髭もクチフゲ」「顎髭」もアゴフゲとなります。単にヒゲのヒがフに変化したものかもしれませんが、中世末期まで中央(京都)語の発音だったとされ、東北方言などで確認できる「フイゲ」のフイが変化したものとも考えられます。

では、オシャレボトケはどうでしょう。符津・安宅で聞いたものですが、「喉仏」をさします。オシャレボトケのオシャレが着飾る意味の「お洒落」に關係するはずはありませんから、オシャレは「(お)舍利」、つまり「火葬にして残った骨」をさす「舍利」が変化したものでしょう。小松以外にも、「喉仏」の意のオシャリ、オシャリサンが島根・岡山・徳島県など、オシャレが岐阜県飛騨地方などに分布したことがわかっています。これなど

も、もはや忘れ去られる運命にある方言と言えるでしょうか。

ドショボネは背骨

次に体の胴体部分を見ていきましょう。

「肋骨」のことはアバラとも言います。これはアバラボネの下略形です。「脇腹」のことはヨコバラ(「横腹」の意)です。「乳首」は方言としてはチチクビという言い方が一般的です。「内臓をハランゾー(腹の臓)から」と言っのを尾小屋で聞きました。

「背骨」のことはドショボネです。ドショボネ(ど性骨)あるいはその音変化形は、方言として、地方によって、大きく二つの意味で使われています。一つは小松と同じように「背骨の意味。今一つは「精神、根性、度胸」といった意味です。どちらの意味でも江戸時代の文献例が見えます。

今回はここまでとします。来月は手から下半身関係の方言を取り上げる予定です。

連載
80

人体に関する方言 その5

旧暦11月の異称は「霜月」です。「霜月」とは、言うまでもなく「霜が下りる月」の意です。そのころになって、寒さのために手足の指などが赤く腫れてかゆくなる凍傷のことを、今は全国的にシモヤケ（霜焼け）と言います。小松を含む加賀地方ではシンバレ（シミバレ）の変化。シミバレのシミは「冷え込んで凍る意のシミルから」。シミル時期の腫れ「の意」ですが、加賀地方を除く北陸地方や、東北地方、山陰地方には、凍傷のことをかつてユキヤケ（今はユキヤケという）と、スキーなどをしていてできる紫外線による日焼けをさします」と言う地域が広がっていました。雪の降る地方では雪の時期にできるのでユキヤケ、雪の降らない地方では霜が下りる時期にできるのでシモヤケと言うようになったものです。気候の差が生んだ方言差として知られています。

ソラデの意味は？

手足と言えは指があります。本連載で

は99年2月号で〈薬指（小指）の方言を紹介しています〉が、薬指では、クスリユビのほかにベニサシユビ・ペンサシユビ、小指ではコンチビ・カンチビが小松の代表的な方言形です。それ以外の指の呼称については、特に取り上げるべき方言形は聞くことができません。

手の関係ではソラデという言い方を聞きました。尾小屋では「手首の筋肉が痛くて力が入らない状態」をさすとのことでした。同じ状態を安宅町ではカラスギとも言っていました。また、同じソラデでも大杉町では「手の甲」をさすとの説明も聞かれましたし、「手の甲」をテノオモテと言うところもあります。ニギリコブは「握りこぶし」のことです。

次に足に関連する部位の方言を見てみましょう。足の付け根の上の部分にあたる「尻」。シチベタ、ケツベタ、シリベタに代表される「尻」の方言については、本連載99年12月号でご紹介していますので、詳しくはそちらをご覧くださいだけだと思います。「腿」はモモタです。体の部位ではありませんが、符津町では歩き方の内股を

ウチクサ、がに股はソトクサと言うとのことでした。ヒザカブ、ヒザコブシは「膝頭」のことです。

コブラ（毒蛇？）が登場

ヒザカブから下に目を移すと、へ人体に関する方言 その1で予告したコブラが、いよいよ満を持しての登場です。コブラと言えは、普通には毒蛇のコブラを思い浮かべますが、小松の方言では「ふくらはぎ」のことにあります。「ふくらはぎ」の古い言い方である「腓」のムが同じ両唇音のフに変化した形です。「ふくらはぎの瘻（すく）」をコブラマクリ、コブラガツルなどと言います。

さらに下の方に進むと、「足首」を言うアシクチ、「踝」を言うクロボシなどが聞かれました。踵はキビス、カガトです。

以上で、5回にわたってご紹介してきたへ人体に関する方言を終わります。次回からはまた新しいテーマで始めたいと思います。

連載
81

食に関する方言 その1

今年もいよいよ一カ月を残すのみとなりましたが、振り返ってみれば、夏から秋にかけての台風や豪雨による被害、10月の中越地震と、自然の驚異を思い知らされた年でした。また、台風の影響もあってか、木の実などの餌不足で熊が里に頻繁に現れています。飽食の時代と言われ、つい「食」の大切さを忘れがちな私たち日本人に、自然災害での避難生活や熊のニュースは、「食」の大切さを改めて教えてくれたように思います。

衣食住でも「食」は最も重要なもの。今月から数回は、小松の「食」に関する方言を取り上げてみたいと思います。

「屋食」はヒーリ、ヒンママ、ヒラガリなど

まず、日本人の主食である米、ご飯関係からみていきましょう。

「ご飯」だけでなく「食事」のこともママと言います。ママ クオー（ご飯を食へよ

う。食事をしよう）と言うわけです。うまく炊けずに芯のあるご飯のことは、メッコメシ、メッコママのように言います。

「食事」でも「朝食」はアサメシですが、「屋食」のことは、大杉でヒーリ、ヒンママ、ヒンママ、尾小屋でヒンママ、符津でヒラガリ、安宅でヒルメシなどの言い方を聞きました。ヒーリはヒルイ（昼飯）、ヒンママ、ヒンママはヒルママ（昼飯）、ヒラガリはヒルアガリ（昼上がり）からの音変化形と考えられます。ヒラガリは、もともと「屋食のために仕事をやめて帰宅すること」をさしていたヒルアガリが「屋食」の意味にずれたものでしょう。北陸では小松以外でも、「屋食のために仕事をやめて帰宅すること」をさすヒリアガリ、ヒラガリが、富山県砺波地方や県内の河北郡、能美郡、石川郡などでみられ、「屋食」をさすヒルアガリ、ヒリアガリ、ヒリヤガリ、ヒラガリも河北郡、能美郡、江沼郡などにみられます。

「夕食」はバンメシ、ユーマシといった言い方しか聞けませんでした。

作業中の間食はコビリ、コービリなど

食事と言えは、作業の途中、午前や午後の休憩を兼ねて食べる軽い食事、間食のことをコビリ（尾小屋、コービリ（符津）、ナンカ（大杉）と言います。コビリは「小屋」に由来するものとされ、全国各地で方言としての使用例がみられます。ナンカは「何か」で、作業中の間食だけでなく、子どもがおやつを含めた言い方でしょう。子どもがおやつを要求するときに、「ナンカ、おくれ」のように言う場合のナンカが「おやつ」の意味でも使われるようになったものです。「おやつ」の意味のナンカは、福井県嶺北地方などでも聞かれますし、福井県若狭地方ではナンソ（何か）の意とも言います。安宅では子どものおやつ（間食）をさすオテマ（お手間）からを聞きました。加賀地方で（オ）テマという「おやつ」というよりも、「お駄賃（お小遣い）」をさす場合が多いように思えます。

「食」に関する方言は次回に続けます。

連載
82

食に関する方言 その2

新しい年の始まりです。今年もまた気持ち新たに本連載を書き綴っていきたいと思います。愛読ください。

前回に続いて今回も「食に関する方言」を続けませんが、正月でもあり、雑煮に関するある餅の方言から始めることにします。

餅はモチのほかにボチの発音も

餅のことは、最近ではモチが一般的ですが、小松市内では、大杉町、尾小屋町、符津町などでボチという発音が聞かれました。モチのモの子音「ㄱ」が同じ両唇音の「ㄷ」に交替した形と考えられます。

大杉町では餅の種類として、シロボチ（白餅＝餅米以外に何も入っていない白い餅）、コンボチ（米餅＝餅米にうるち米を混ぜてついた餅）、ヨモギボチ（蓬餅）、アワボチ・アワモチ（粟餅＝餅米の中に粟を入れてついた餅）、キビボチ（黍餅）、マメボチ（豆餅）、カンナモチ（かき餅。鉦で

削ったような形をしていることから）などの名を聞きました。

尾小屋町では、シロボチ（白餅）、コンダボチ（餅米にうるち米を混ぜてついた餅）、ノシボチ（伸し餅）、マルモチ（丸くて平べったい餅）、カキモチ（ピーナツを入れたりして焼いて作る、いわゆる「おかき」）、アワモチ（粟餅）、キビモチ（黍餅）、マメイタ（黒豆、白豆などの豆が8・9割入った棒状の餅。切って食べる）、ボタモチ（おはぎ）などの名を聞き、また「餅つき」をボチツキと言うとのことでした。

符津町でも、シロボチ（白餅）、ゴンダボチ（餅米にうるち米を混ぜてついた餅）、オシボチ（伸し餅）、マルモチ（丸餅）、カキモチ（おかき）、アワモチ（粟餅）、キビモチ（黍餅）、マメイタ（豆を入れて伸した餅）、アンコモチ（餡入りの餅）、サトーモチ（砂糖をまぶした餅）、ボタモチ（おはぎ）などの餅の種類名が聞かれました。

かつて冬に雪で閉ざされることの多かった北陸地方で、さまざまな種類の餅が保存食として大切にされていたことがうかがわれます。

雑煮の餅の形は東西対立、汁の味付けは周囲分布

ところで、方言そのものとは関係ありませんが、正月に食べる雑煮には意外な地域差のあることをご存じでしょうか。それは、雑煮に入れる餅の形の地域差と、雑煮の汁の味付けの地域差です。

まず餅の形は、石川県加賀地方中部から岐阜・愛知両県の西を境に東日本が角餅、加賀地方南部から近畿以西が丸餅（例外として三重県・和歌山県の海岸部と高知県が角餅）の東西対立分布＝A B型分布を見せます。また、汁の味付けは、近畿地方とその周辺の一部（北陸では、福井県以南）に味噌汁、それを取り囲むように日本の東西・北陸では石川県以北に広くすまし汁という周囲分布＝A B A型分布を見せます。すまし汁が古く、後に京都を中心に味噌汁が普及したのでしょう。

今回は餅の話題で終わってしまいましたが、次回も「食」に関する方言を続けま

連載
83

食に関する方言 その3

前回は正月にちなんで、小松での「餅」の方言と、雑煮に入れる餅の形と汁の味付けの全国の地域差をご紹介しましたが、雑煮については、餅以外に中にどんなものを入れるかという地域差がまた多彩です。雑煮という名からすれば、餅以外に色々なものを入れるのが普通なのですが、北陸の石川・福井は、餅の形や汁の味付けの違いこそあれ、中に入れるのがほとんど餅だけというシンプルさで共通しています。雑煮ならぬ「単煮」こんな言い方はありませんか」というわけで、このシンプルさは全国的にも珍しいようです。

では、今回も「食」に関する方言を続けます。前々回に続いて、「ご飯に関するある方言からもう少し見ていくことにしよう」。

ヤキメシとは「炒飯」ではなく「おにぎり」

ヤキメシというと、中国から伝わった炒飯をさすと思う方もいるでしょうが、北

陸地方などでは古くは「おにぎり」のことを言いました。かつて、農作業などのコピリ（間食）に「おにぎり」を持って行く場合には、今のように贅沢に海苔を巻いたりなどできませんから、ご飯粒がくっつかないように、握ったあと表面を軽く焼いたのでこう呼ばれたようです。今では「おにぎり」の表面に醤油や味噌をつけて焼けば「焼きおにぎり」という立派な居酒屋のメニューになるわけですが、ヤキメシと呼ばれた時代の「おにぎり」は、生活の知恵としての「焼きおにぎり」だったわけです。

お祝い事などに作られる赤飯には、コワメシ・オコワメシ・アカママ・アカゴハ・セツカンなどの色々な言い方が聞かれました。コワメシは「強飯」とも書かれます。餅米を使うことで普通のご飯より固めになることから、コワイ（固い）メシ（飯）の意味でこう呼ばれました。セツカンはセキハン（赤飯）の音変化形でしょう。「ご飯」類ではほかに、イモメシ（芋の入ったご飯）、ゾンベ・ゴツチャガユ（汁の中にご飯と野菜を入れた雑炊）、オチャカケママ・チャーカケママ・チャーカケメシ・

チャカケゴハン（お茶漬け）、コゲツキ・コゲママ（ご飯のお焦げ）、ゴモクメシ（ませご飯）、ハズシ（柿の葉寿司）、メッコメシ・メッコママ（うまく炊けずに芯のあるご飯）、オカイ・オカユサン（お粥などの方言形が聞かれました）。

炊いたご飯が傷んで臭うようになることを言う、ネグソナル（臭う）という言い方も聞きました。

若い世代にはメリケン粉が通じない！

ご飯と並んで日本人の主食として消費量が多いパン。その原料である小麦粉は、今はコムギコという言い方が共通語的に使われますが、かつてはメリケンコ（メリケン粉）と言われました。メリケンとは明治期に定着したアメリカ米国の呼び名ですが、今やメリケンは古くさい呼び名。そんな訳でメリケン粉の言い方は急速に衰退しました。皆さんの周囲にメリケン粉と言って通じる若者がいたら希少な存在でしょう。

〈食に関する方言〉は次回にまた続けます。

連載
84

食に関する方言 その4

暖冬かと思いきや、一転して2月初めには強い寒波到来と、相変わらざるの異常気象ぶりですが、その分、もうすぐやってくる春、そして桜の季節の喜びが大きくなるに違いありません。今回も、前回の最後に触れたメリケンコ（小麦粉）に近いものから、「食」に関する方言を続けます。

粉の類はダゴモン、トリコ、そしてイリコ

小麦粉のメリケンコに対して、「米の粉」のことを大杉町はじめ所々でダゴモンと言い、ほかに広い範囲でコメノコとも言います。ダゴモンは「団子もの」、つまり、かつて米の粉で団子が作られたことから名付けられたものでしょう。似たもので、餅をついた後に、臼から取り出した餅がくっつかないようにまぶした、白米を乾燥した後にひいた粉のことをトリコ・シンコ（新粉）などとも言います。トリコは「取り粉」で、臼から餅を「取る（とぎの）粉」の意でしょう。

米と言えば、普段で飯用に炊く飯米のことを大杉町でママゴメ、餅米のことを安宅町でヘイコというのを聞きました。そして米を保存しておく入れ物（ブリキ製の米櫃のようなもの）をコメガラトと言います。米をといだときに出る白い汁は、尾小屋でニゴリジルという言い方を聞きました。

一方、麦を煎ってひいた粉のことはイリコと言います。「煎り粉」です。関西地方で言うハツタイコのこと、イリコオ オユデ カイテ タベル（イリコをお湯で溶いて食べる）のように使います。大杉町では発音の変化した、イッコ、エッコも聞かれました。筆者も子どものころ、福井（武生）の実家で、冬のおやつとして、イリコに砂糖を入れお湯で溶いたものをよく食べさせられました。砂糖の代わりに甘い熟柿を入れて食べたりする所もあるようです。煎った麦の香ばしい香りが懐かしく思い出されます。

食べ物の方言あれこれ

「お菓子」の古い言い方にアンマがあり

ます。石川・福井両県で使われた方言です。「お菓子」が甘くておいしいので、その甘さの「甘」から生まれた言い方ではないでしょうか。

ハベンとは石川・富山両県では「かまぼこ」をさします。もともとは「半片」が変化した言い方で、最近では厚い板付きのものをカマボコ、薄い板付きのものをハベンというように区別して呼ぶ人もいます。すし、金沢では板のつかないものもハベンと言っています。薄い板のついたハベンというのは金沢を中心とした加賀地方に独特のものようです。

加賀地方に独特のものとえば、エビス、イビス（金沢では、エベス、エビシなどとも）があります。寒天を煮溶かして薄く醤油味をつけ、卵を混ぜて固めたゼリー状のもので、マーケツトなどで惣菜として見かけることもありますし、学校給食のメニューとしても出ることのある、今に生きる加賀の郷土料理の一つです。

今回も字数が尽きました。へ食に関する方言は次回にまた続けます。

連載
85

食に関する方言 その5

88年4月から始まった本連載も今月から8年目に入ります。同時に始まった市長さんの連載コラム「ざつくばらん」のタイトルにも、いつも小松の方言が登場して、嬉しく思っています。

では、今月もへ食に関する方言を続けます。今回は味の表現の方言世界を見ていきます。

クドイは共通語では言いかえにくい？

「塩味が濃い」「塩辛い」の意味にあたる言い方は、若い人たちでは、共通語的なシオカライ、シヨッパイが使われることが多くなりましたが、小松の伝統的方言には、クドイ、シオクドイがあります。このクドイは、共通語でも「味がしつこい」「性格がしつこい」に近い意味で使われますので、意外に方言だと気づいていない人も多く、その結果、比較的若い世代まで受け継がれている方言の一つです。実は「塩味が濃い」「塩辛い」の意味でクドイを使うのは

（意味がずれているのは、全国でも北陸の福井県嶺北地方から石川県加賀地方、そして富山県西部の限られた地域だけなのです。しかし、石川や福井などのクドイが共通語のシヨッパイに簡単に置き換えられるかという点、どこか違うようです。福井県武生市出身の筆者も、22歳から36歳までの14年間の関東地方暮らしの中で、このクドイが使えずに、どこかで欲求不満を感じていました。東京風の醤油色の汁のうどんを食べて「このうどんシヨッパイなあ」と言っても、何か異和感があります。筆者にとっては、シヨッパイではクドイの意味を十分には表しきれないという気持ちがあったのです。読者の皆さんの中にも、このような気持ちを理解していただける方がきっといるはずですよ。

そのほかの味の表現にはアマイ、スイな

どが
クドイ以外の、小松方言の味の表現にはアマイ、シヨモネー・シオモネーなどのほか、スイがあります。

まずアマイは、今では砂糖の甘さのよ

うな味を表現する形容詞ですが、小松では「塩」味が薄いこともアマイとも言っていました。ちょうど先のクドイの反対の意味に当たります。「塩味が薄い」のアマイは、近畿地方のミズクサイを取り囲むように、東日本と西の中国・九州・沖縄地方の広い範囲に分布していたことが分かります。アマイは、砂糖が普及するまでは「塩味が薄い」ことを表し、その後、砂糖の登場によって、砂糖の甘さを表すようになったと考えられます。

同じ「塩味が薄い」ことを言う、シヨモネー、シオモネー（ほかにシヨムネー・シヨンネーなども）は、全国的にも北陸の石川・富山両県にしか聞かれない言い方です。「塩も無い」「塩味無い」が語源だと考えている人が多いようです。

小松でも砂糖の甘さはアマイですが、「酸っぱい」ことはスイと言います。東北地方のスッカイ、関東地方のスッパイに対して、スイは長野・静岡から西の西日本一帯（中国・四国・九州地方ではスイ）に広く分布する言い方です。

へ食に関する方言は次回も続けます。

連載
86

食に関する方言 その6

最近小松にお住まいの方とお会いすると、本連載を読んでいるとおっしゃって下さる方が多くなりました。この1か月ほどの間にも、お二人の読者から、ご質問や激励のお電話、お葉書をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。各回ごとに、テーマに合わせてできるだけ多くの方言を正確にご紹介しているつもりですが、時に誤りもあるに違いありません。お気づきの点があればぜひお教えください。今月は〈食〉に関する動作の方言から見ます。

大根はタク？それともニル？

大根などの野菜を鍋なべに入れて火にかけると、共通語では「大根をニル」と言いますが、小松では「大根をタク」と言うことがあります。共通語的にタクというのは、「火を焚く」のような「燃やす」に近い意味のタクを除けば、「ご飯をタク」のように「ご飯」の炊飯炊飯に限定して使われます。と

ころが、近畿地方から中国・四国の瀬戸内側・九州、そして北陸と岩手県の一部は、ご飯以外の大根のような野菜をニル煮る場合にもタクと言う地域として知られています。

一方、「ご飯をたく」ことを「ご飯をニル」と言う（つまり、ご飯も野菜もニルと言う）地域が、岩手から福島、関東・中部に分布しています。

野菜をハヤスって？

小松を含め、石川県内では、キャベツ（方言ではカンランかんらん）甘藍かんらんからともなどの野菜を切ることを「キャベツをハヤス」のように言う所があります。若い読者の中には、先の「大根をタク」同様「キャベツをハヤス」なんて本当に言うの、と思う方もいるでしょうが、本当です。では、「ハヤス」とは何でしょう。ご存じの方もいらつしやるでしょうが、これは、「野菜を切る」では縁起が悪いということで、縁起の良い、新しいものが「生える」のハエルを使った忌詞いみことばです。例えば、結婚式の最後に「終わり」と言うのと縁起が悪いので「お

開き」と言うのと同じ発想です。全国的にも、東北・中部・北陸・中国・四国・九州地方などの広い範囲で聞かれた言い方です。

〈食〉に関する動作の方言については、すでに本連載の75回（2004年6月行動）に関する方言その4で紹介しているものがありますので、そちらもご覧ください。

みそ汁を表す「おみおつけ」の元となるオツケ

大学の講義などで、敬語が使い古されると敬意が次第に下がっていく「敬意減の法則」の話をすると、筆者がよく例に出す「おみおつけ」ということばがあります。共通語で「みそ汁」の丁寧な言い方とされていますが、もともと「汁」をさす「つけ」が、それを丁寧に言おうと「御つけ」になりました。小松ではこのオツケの形が方言として使われています。オツケは丁寧さが感じられなくなつてさらに「御御つけ」となり、最後に「御御御つけ」となつたわけです。

〈食に関する方言〉は次回で終わりにします。

連載
87

食に関する方言 その7

方言教材試作版に予想外の反響

昨年度後期に筆者が担当した大学院の授業で、受講生3人の協力を得て、「金沢ことば」を題材にした方言学習教材『みんなで学ぼうー金沢ことば』を試作したところ、新聞・テレビをはじめ、各方面から大きな反響があり驚いています。金沢と小松では方言に違いはありますが、共通点もまた少なくありません。国語の授業や総合学習などで方言を取り上げるときの参考に見てみたいと思われる先生方はご一報ください。なお、同じ内容はインターネットのホームページ（<http://web3.ind.ne.jp/g7p8n3/>）でもご覧いただけます。

食に関する方言あれこれ

これまで6回にわたって、小松の〈食に関する方言〉を取り上げてきましたが、今回は最終回として、これまでにご紹介できなかったものをまとめて取り上げて

みます。

「ゴツッオー、ゴツッオはもちろん「ご馳走」のこと、コーコは「沢庵」のことです。

「沢庵」にはタクアン、タツクワン、タツカン、タンカズケなどの言い方も聞かれました。「糖漬け」のことはコンカズケ、ヤドズケなどです。

「油揚げ」はアブラゲ、「がんもどき」はミーアラです。ミーアラは滋賀県大津市の三井寺（天台寺門宗総本山で正式名称は長等山園城寺の名に由来します。三井寺の精進料理に「がんもどき」が使われていたためについた名でしょうか。

食べ物関係ではほかに、ナンバ（唐辛子）、ドブサケ（どぶろく）、タイハク（白砂糖）、シヨイ（醤油）、ダシジャコ（だしをとるための煮干し）、カイブシ（鰹節）、ヒナカダマ（鰈）なども聞かれました。

また、前々回にも味の表現を少し取り上げましたが、味覚関係ではほかに、エガイ、エガライ（あくが強く喉を刺激する感じ）、ンマイ（味がよい）、ウモネー、ウマネー、ウモナイ（まずい）、シツコイ、ネバコイ（味や香りなどがあつさりしていな

い）などがあります。

食に関する道具類の方言

食に関する道具でホチャ、ホーチャが何かおわかりでしょうか。「包丁」です。種類によつて、ナボチャ（菜切り包丁）、デバボーチャ（出刃包丁）などの言い方も聞かれました。

サジは「スプーン」のことです。言うまでもなく「匙」なのですが、今や金属製の匙は完全に外来語スプーンにその座を奪われてしまいました。シャクシは「ご飯をつぐための杓子」、シャクは「ひしゃく」をさします。

陶磁器の総称にはカラツモン、カラツが聞かれました。これは、かつて九州佐賀の唐津地方産の陶磁器が北陸地方に流通していたためについた名と考えられています。キビソーはお茶を注ぐ道具の「急須」チャンバチは「どんぶり茶碗」（茶碗鉢）から、ハンゾとは「水瓶」のことです。

以上で〈食に関する方言〉を終わります。次回からはまた新しいテーマで始めます。

連載
88再び、遊びの世界の方言
その1

昔の遊びの思い出話から

A ユキア キエテ ヌクトナツテクル
ト オンミヤサンガ オモナ アソビ
バヤツカモシレンノー オトコワ(雪
が消えて暖かくなっていると、神社が主
な遊び場だったかもしれないね、男は)
B ウララ ヤツパ オテラヤ(私たち
はやはりお寺だ)。

C オジャミ ツクッテ アノ カイ
ダンノ トコデ オジャミオ シテ
アソブトカ ソーユーコト シテ フ
ユン ナルト アソンドツタシー(お手
玉を作ってお寺の階段の所でお手玉を
して遊ぶとか、そういうことをして冬
になると遊んでいたし)。

(中 略)
D ワタシラノ トキヤ コンナ パー。
ジュングリコンニ シテ コンナ
パーオ コレオ アタマニ グルグル
シテ アブラ ツケテ コンナ シタ

エ クルレント ナカエ ハイッテク
ルト トレルガヤ(私たちの時はこん
な面子。順番にして、こんな面子を、こ
れを頭にぐるぐるこすって、髪の毛を
つけて、このように下にくるんと中に
入っていると取れるんだ)。

(中 略)
A ソレト ジテンシャノ リム。アレオ
ジテンシャノ イッテ フルシーガ
モロテキテ ホイテ タケノボーデ
コーヤツテ オシテアルイテ ウンド
バデ モーテアルクカンノ。ソナナケ
ナ ゴッスンクギ ウチカラ モッテ
デテ ホシテ コーヤツテ サイテワ
スージ ヒーテ。ジントリツテユーカ
ソーユコト シタモンジャワイ。(それ
と自転車のリム。あれを自転車屋に
行って、古いものをもらってきて、そし
て竹の棒でこうやって押して歩いて運
動場で回って歩くかね。そうでなけれ
ば五寸釘を家から持ってきて出して、そし
てこうやって刺しては線を引いて。陣取
りというか、そういうことをしたもの
だよ)。

(以下 略)

〔注A～Dは大正生まれの4人の話し手の略
号。A・Dが男性、B・Cが女性。方言の片
仮名表記の後の()内が共通語訳。(加藤
和夫「石川県小松市符津町方言の自然談
話」『小松市立博物館研究紀要 第36集』
2000年3月より抜粋)〕

右の方言談話は1998年8月2日に
符津町で収録した30分余りの談話を文字
化したものの一部です。4人の方が、昔の
遊びを思い出しながら、懐かしそうに、楽
しそうに話しています。時代が変わり、子
どもたちの遊びも変わりましたが、中に
は昔の遊びが受け継がれているものもあ
ります。

遊びの世界の方言については、本連載
開始直後の1998年5月から7月
にかけて、「肩車」(雪渡り)、「片足跳び」の方
言、1999年9月に「面子」、2000年
3月に再び「雪渡り」の方言の市内の分布
を取り上げたことがあります。次回か
ら改めて、市内で聞かれる(聞かれた遊
びの世界の方言を見ていきたいと思います)。

連載
89再び、遊びの世界の方言
その2

女の子の遊びから

暑い毎日です。前号で紹介した方言談
話や写真にも登場したオジャミなど、女
の子の遊びの方言からまず見ることにし
ましょう。

オジャミは言うまでもなく「お手玉」の
ことです。『日本言語地図』(国立国語研究
所)で「お手玉」の方言の全国分布を見ると、オジャミは近畿地方から中国・四国・
九州地方にかけての西日本に広く分布し
ます。北陸地方では、福井県の嶺北地方か
ら、小松を含む石川県加賀地方と、それに
続く富山県西部に分布が見られます。市
内では、オジャミの発音も聞かれました。
オジャミの袋には小石や小豆(あずき)を入
れ、片手で2個以上、両手では3・4個使っ
て遊んだとのこと。

オハジキはハジキとかハジキイシとも
言います。最近のようなガラスのきれいな
「おはじき」などなかったころは、小さく

平べったいきれいな石を探してきて、そ
の小石を手の甲に乗せて投げ、手の平で
受け取るような遊びをしたと聞きました。

「あやとり」はチドリです。チドリ以外
では大杉でモンドという言い方も聞かれ
ました。チドリオ トル(あやとりを取
る)、チドリデ アソボ(あやとりで遊ぼ
う)のように言い、太めの糸を使って、川
や山、ビブラ(熊手の方言)など、様々な形
を作って遊んだものです。主に女の子の
遊びではありましたが、筆者も小さいこ
ろはやった記憶があります。

遊びの鬼を決めるにはアイケン(じゃん
けん)で

「かくれんぼ」やオニツコ(鬼ごっこ)の
ことをするときには鬼が必要で、その鬼
を決めるのに使われるのが「じゃんけん」
です。ほかにも物事の順番を決めたり、
グループ分けをするときなどにも使わ
れます。小松市では「じゃんけん」をアイ
ケンなどと言います。「相拳」の文字があ
てられるのでしょうか。アイケンの掛け声

は、アイケン ポイ(同じ時は、アイコデ
ホイ)です。面白いのは、「ぐー・ちょき・
ぱー」にあたるアイケンの三つの手の呼
び方です。大杉ではイシ・ハサミ・ヘラ、尾
小屋ではグー・カイ・パー、符津ではグー・
ハサミ・パーが聞かれ、市内でも色々違い
があります。読者の皆さんの集落では何
と言っていたでしょうか。

遊びの中断はイップク

遊んでいる途中に、トイレなどに行き
たくなって遊びの中断を頼むとき、皆さ
んは何と言ったでしょうか。共通語的に
はタイムなどの言い方が聞かれますが、
筆者は子供のころ(福井県武生市)「ミッキ
と言っていました。これまでの調査では、
小松市内ではイップクという言い方を聞
きました。チョット イップク シンカイ
(ちょっと一休みしようよ)、イップク シ
ヨーサー(休みしようよ)などと言い、
遊びを終えるときには、オーイタ(やめ
た)、モー オコサ(もうやめようよ)と
言ったそうです。このテーマは次回に続
け

連載
90再び、遊びの世界の方言
その3

長い夏休みが終わりました。普段は仕事に忙しいお父さん、お母さんたちの中には、夏休み中、子どもの相手で久しぶりに懐かしい遊びを体験した方もいらっしゃるのではないのでしょうか。今回もそんな〈遊び〉の方言を続けます。

主に男の子の遊びから

主に男の子がやった遊びに「面子^{めんて}」があります。筆者も小学校の頃は、丸いボール紙に絵を描いた紙面子（小さいサイズと大きいサイズがありました）をおもちゃ屋で買い求め、近所の友達と面子遊びをよくやりました。遊び方は何種類もありましたが、一番よくやったのは、地面や室内の床に置いた相手の面子めがけて自分の面子をたたきつけ、その風圧で相手の面子をめくり、めくれたら自分のものにするというものでした。あまりに熱中しすぎて、右の肩を腫^はらして親に叱られたのも今となっては懐かしい思い出です。

が、最近の子どもたちは面子そのものを知らない子が多くなりました。筆者の郷里（福井県武生市内）ではパシンと言っていました。が、小松市内では、マルウチ、マル

ケン、パス、パッチ、カッタなどの多彩な方言が聞かれました。マルウチ、マルケンの類は面子の丸い形から、パス、パッチ（筆者のパシンも）の類は面子をたたきつけた時の音から、カッタは「かるた」からと考えられます（詳しくは連載1999年9月号参照）。

筆者が小学校高学年のころ、冬の学校の教室で（もちろん休み時間にですが）熱中した遊びがウマトビです。小松でもやはりウマトビが聞かれました。二つのグループの片方のリーダーが壁を背に立ち、その子の股にかがむように頭を入れ、その子の股にまた次の子がというように次々とつながって馬を作ります。片方のグループがその馬に次々と飛び乗り、リーダー同士がアイケン（じゃんけん）をして、その勝ち負けで馬が交代する（それまでに馬がつぶれても負け）という、今から思えばかなり乱暴な遊びでした。

餓鬼^{がきだいしょう}大将の男の子たちがやったものといえ「通せんぼ」があります。符津でバンシヨという方言を聞きました。「通せんぼをする」ことはバンシヨースルとも言ったようです。バンシヨは「番所」からと思われますが、遊びというよりは意地^{いぢ}悪に近いものだったのでしょうか。

男の子の遊びと言えば「鉄砲」類もあります。市内で聞いた種類としてはスギデッポー（杉の実をメダケⅡ笹竹に詰めて、自転車のスポークで鉄砲のように勢いよく押し出して遊んだ、カミデッポー（同じくメダケに紙を嚙^かんで丸めて玉にして押し出して遊んだ、ミスデッポー（竹で手作りした）、キカンジュー（連続して音が出るものを手作りした）などがあります。昔の子どもはみんな、こういうものを手作りしたものです。

季節外れですが、男の子は冬に雪が積もると悪戯で「落とし穴」を作ったものです。小松でもオトシアナと言う所が多いのですが、雪の多い大杉地区ではオチンコという方言を聞きました。

次回も〈遊び〉に関する方言を続けます。

連載
91再び、遊びの世界の方言
その4

10月と言えば美りの秋。福井の山村育ちの筆者にとっては、秋の山に分け入って栗を拾い集めたり、そう簡単には見つけられないはずもない松茸^{まつたけ}を求めて赤松の下を這い回^はったりというのが、遊びそのものだったようにも思います。そういう自然を相手に遊ぶことのできる場所で生まれ育ったことに今さらながら感謝したい気持ちになります。

では、今回も〈遊び〉の方言を取り上げます。

「えらび歌」の歌詞にも地域差が

目の前に欲しいものが二つ置かれ、どちらも欲しいけれど一つだけというときに、二つを交互に指さしながら、「どちらにしようかな…」と言葉を唱えたことがあるでしょう。この時の唱え言葉を「えらび歌」と言つことがあります。数年前に東京の某女子大の学生が卒業論文の研究で全国の「えらび歌」を調べたいとい

ので、その調査に協力したことがありますが、その結果からは全国に実に多彩な歌詞が分布することがわかりました。こういうものも、遊び（言葉遊び）の一つと言つていいでしょう。

皆さんはどのように言っている（言っていた）のでしょうか。同じ小松市内でも、世代や地域によっても違いが見られそうです。家族のそれぞれの言い方を確認してみても面白いかもしれません。

筆者も数年前に金沢市内のある看護専門学校で「えらび歌」のアンケートをとったことがあります。その学校には、石川県内の様々な地域から学生が集まっていますが、その結果、実に多様な歌詞が集まりました。その中で、小松出身の学生が教えてくれた歌詞は次のようなものでした。

♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つて3番目、1、2、3」（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン、1、2、3、
4、5、6、7、8、9、10」（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つて3番目、1、2、3」（串町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン」（矢田町）

♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバンバン、あのねのね
1番目からう番目、1、2、3、」（大野町）
前半の「どちらにしようかな、神様の言
うとお」までは共通ですが、その後が微妙に違っています。小松近辺では次のようなものもありました。

♪「どちらにしようかな、天の神様の言
うとお、鉄砲撃つてドンドンドン、さわ
やかなコカコーラ」（旧能美郡寺井町）
♪「どちらにしようかな、神様の言うとお
り、鉄砲撃つてバンバカバン、もひとつ
おまけにバンバカバン、グリコ、柿の種」
（旧松任市）

金沢市内でも、♪「どちらにしようか
な、天の神様の言うとお、鉄砲撃つてバ
ンバンバン、太鼓打つてドンドンドン、赤
とんぼ白とんぼ」という長いものをはじ
め、まるで校下（校区・学区）ごとに違っ
たのではと思えるくらいに多彩ぶりでした。

「えらび歌」が基本的に子どもたちの世界のものだからこそ生まれたバリエーション
なのでしょう。

次回も〈遊び〉の世界の方言を続けます。

連載
92再び、遊びの世界の方言
その5

先月は、遊びの中でも、言葉遊びとしての「えらび歌」を取り上げましたが、今月はまた一般的な遊びの世界の方言に話を戻して、小松市内で生活語・調査を行った地点で聞かれたもののうち、これまで取り上げなかった遊びの方言をご紹介します。

大杉町の遊びの方言

村の中にある「遊び場」は発音が少し変化したアソツバという言い方が聞かれました。遊びの中には、「鉄棒で一回転する遊び」を言うチンククリ、「隠し芸のようなくことをさすシンガイ」、「駆けっこ」をさすハシリキョーソー（走り競争）、「手つなぎ鬼にあたる鬼ごっこ」を言うオイコミ（追い込み）などがありました。このうち、シンガイは、「へそくり金」のことを小松でシンガイジエン（新開銭）と言いますから、江戸時代の隠し田（新開田）に由来する「隠し事をする」意味の「しんがいがす

る」から「隠した芸」の意味合いでシンガイと言ったものでしょう。女の子が遊んだニンギョ（人形）を、チヨゴとかチヨゴモンとも言ったようです。

尾小屋町の遊びの方言

「遊び場」はアソンバという言い方を聞きました。大杉とは微妙に違います。「駆けっこ」はヨードンでした。ヨードン、ショーカ（駆けっこをしようか）と言うわけです。「腕相撲」はウデクミ、「謎々遊び」はアカシモンです。約束をするときの「指切り」はユビキリカミキリ、「仮の勝負」のことはタダです。イマ シルガ タダヤゾ。コレカラ ホントヤゾ（今するのは仮の勝負だぞ。これからが本当の勝負だぞ）のように言ったようです。水関係の遊びでは、「川で泳ぐこと」をカワオヨギ、マイナス評価的な（いたずらな）「水遊び」をミズチヨンゴ、「泥あそび」をドロチヨンゴと言いました。富山の置き薬屋さんが置いていてくれたような「ゴム風船」はフクレンボです。縄跳びをしている人への掛け声として、「ホラトベ ソラトベ」とい

うのも聞きました。

符津町の遊びの方言

「遊び場」は尾小屋と同じアソンバです。「泳ぐ」ことはアベル、アビルです。カワデ アベル（川で泳ぐのように言います。泳ぎ方ではガメオヨギというのを聞きました。ガメ（亀）のように手足をもがくように泳ぐ泳ぎ方をさします。「謎々遊び」はナツカケアソビ、「仮の勝負」はウソツゴです。

では最後に、小松の遊びの方言を今少し挙げてみます。

「おもちゃ」にチヨーゴ、チヨン「モン、テゴズリ」、「独楽」にゴマ、「相撲の五人抜き」にトビツキなどがあります。「遊びの仲間に入る」ことをマジルと言い、入れて欲しいときにはマイテと言います。一方、「遊んでいる仲間から外す」ことをハネダスと言ひ、「仲間はずれ」のことはハネウマ、ハネダシモン、ハネダシなどと言いました。

連載
93

住居に関する方言 その1

今年もいよいよ師走を迎えました。年賀状のこと、ボーナスのこと、忘年会のこと、クリスマスのことと、人それぞれにいろんなことが気になり始める時期でもあります。

そんな中で、正月を前に年末の大掃除のことが気になる人もいるでしょう。筆者が小学生のころは、実家にまだ囲炉裏がありましたので、年末の仕事の一つは囲炉裏の煙で黒くなった壁や天井の煤（すす）払いでした。鼻の中まで黒くなって、決して楽な仕事ではありませんでしたが、普段はあまり見ることのない天井に近い場所をのぞき見るような楽しみもありました。筆者の郷里（福井県旧武生市）では、「煤払い」をススバキと言っていました。「煤（すす）＋掃（は）き」の意味です。

今月からは、そんな住居に関する方言について、小松市内の方言の例を見ていくことにします。

家、そして家の中の場所をさす方言あれこれ

まず、「家」のことはイエよりもウチと言ったのが一般的です。国立国語研究所編『日本言語地図』で「家」の方言の全国分布を見ると、北陸地方、中部地方、関東地方にウチが集中して分布し、その両側をイエが取り囲むように分布しています。その分布状況（こういう分布をABA型分布とか周囲分布と言います）から、日本語では、イエの方が古い言い方で、後にウチが発生したと考えられています。

家の入口の「玄関」はゲンカ、ゲンクワン、またはハイトなどと言われます。中でも、ゲンクワンのクワという発音は、加賀地方でも最近ではめったに聞かれなくなった合拗音と呼ばれる古い時代の発音の名残です。平安時代に中国から漢字音として伝わり、日本語に定着した発音です。現代方言としては、高年層で東北の青森・秋田、新潟から北陸の富山・石川、そして四国の徳島・九州・沖縄などに分布しましたが、全国的に衰退が著しく、消滅の危

機に瀕している発音の一つです。

玄関を入ると二フと呼ばれる土間があります。現在では、二フというと家の前や裏に植木などを植栽した「庭」をさすことになりましたが、本来は、北陸地方を含む日本幅広い範囲（関東地方と中部地方の一部は除く）で「玄関を入った土間」をさしていました。

二フから囲炉裏があった居間に上がる所については、符津でアガリクチ、尾小屋でハマイカという言い方を聞きました。囲炉裏があった居間（板の間）のことはオエなどと呼ばれます。筆者の郷里でも土間をさす二フは同じで、囲炉裏のあった板の間は、ちよつと発音が異なるオユエでした。囲炉裏のことは、大杉や丸山、花立といった山間部でジロが聞かれました。ジロというのは、白峰を始めとする白山麓に連続した分布が見られます。これら以外の地域ではイリリ、イロリなどが一般的です。

次回は、家の中の部屋の名前などから始めて、さらに（住居に関する方言）を続けます。

連載
94

住居に関する方言 その2

あけましておめでとうございます。

今年も引き続きさまざまなテーマで小松の方言をご紹介します。いきなりと思ってしまう。

前回の最後の方で紹介した、囲炉裏のある板の間をさす方言「オエ」に続いて、今月は、まず家の中の部屋や場所をさす方言から見ることにします。

家の中の部屋や場所の方言

「台所」をカッテバとかナガシバ、ナガシなどと言います。

カッテバは「勝手場」でもともととは「調理に便利な、勝手のよい所」という意味で使われた「勝手」に由来するようです。今でも、共通語的に台所のことを「お勝手」と言ったりします。カッテバデ チャワカス(台所でお茶を沸かす：符津)のように使われます。ナガシバ、ナガシは「流し場」「流し」です。文字通り、食器や食べ物を洗い流す場所ということでナガシと呼

ばれたものでしょう。

カッテバ、ナガシバ、ナガシなどと呼ばれた「台所」にあった炊事用の「かまど」は、ヘツツイ、ヘツツイサンなどと言います。

以前は、食事をするカッテバの脇に木の扉付きの食器を入れる棚がありました。符津ではそれをフンダナと言っていました。フンダナはフロダナが変化した形です。この場合のフロは、入浴するための「風呂」ではなく、もともと漆器を入れて乾かす箱をさした「風呂」が食器棚に近いものをさすようになったと考えられます。では、入浴するための「風呂」というと、フロバ(風呂場)です。

家の中にあつた梯子状の階段は、ハシゴダン、ダンバシゴなどと言っていました。そのハシゴダンを使つてのぼつた中2階を尾小屋ではアマと言ったりもしました。アマでは藁仕事などをしたようでした。ただ、同じアマでも符津では、2階の天井部分をさすとの説明が聞かれました。アマガ ススケタ(天井が煤けた)のように使つたようです。

話は戻りますが、囲炉裏のあつたオエの天井には、囲炉裏で焚いた煙を出す場所がありました。それをケムリダシとかケムリヌケなどと言いました。

家の中心の太い柱、いわゆる「大黒柱」は、尾小屋でゴテバシラ、符津でダイコクバシラという言い方を聞きました。ゴテバシラは「ご亭柱(亭主、主人の柱)」の意でしょう。

便所の方言に古語が残る

ところで以前は、大便是家の中ではせずに屋外にあつた大使用の便所小屋でしたものです。その便所小屋のことを大杉でセンチャゴヤ、尾小屋でガンシヨと言っていました。センチャゴヤのセンチャは「雪隠」、ガンシヨは「閑所」という、ともに便所をさす古い漢語に由来する呼び名です。

新年早々、便所の話で終わってしまい恐縮ですが、(住居に関する方言)は来月に続けます。

連載
95

住居に関する方言 その3

20数年ぶりの大雪です。平成8年から12年にかけての小松の方言調査で訪れた大杉地区、尾小屋地区、新丸地区などの山間部では、とりわけ雪の量も多いことでしょう。筆者も小学2年生の時に郷里(福井県越前市)で経験した38豪雪のことを久々に思い出しました。屋根の上に降り積もつた重い雪にも耐えられるように作られた北陸の住居の工夫とはどんなものだったのでしょうか。

住まいの中の道具類の方言

食に関する道具(「包丁」「スプーン」「陶磁器」「急須」「茶碗」など)の方言については、連載87回(05年6月号)で紹介していますので、ここでは、それ以外の住まいで使われる道具類の方言を取り上げます。

室内の部屋と部屋の仕切りの戸である「襖」はカラカミとも言いました。元来、中央語としても使われた言い方で「唐紙」の字があてられます。

「布団」はフトギと言いました。フトギのギを「着」の意味と解して使っていたのかもしれません。フトギの種類に、カケフトギ、ウフフトギ(掛け布団)、シキフトギ(敷き布団)、ナツフトギ(夏布団)などがありました。「枕」を大杉町ではマツガとも言つたようです。

ジブキとは「雑巾」のことです。「地拭き」の意味で、北陸三県に分布した方言です。カトー ジブキ シボレヤ(かたく雑巾を絞れよ)のように言い、「雑巾がけ」をジブキガケとも言いました。同じ掃除道具の「箒」は、発音が少し変化してホーケと言われました。ホーケには、タケボーケ(竹箒)、クサボーケ(草箒)、ヌイゴボーケ(尾小屋町ではニンゴボーキとも。脱穀の終わった稲藁の芯「ヌイゴ」で作つた箒)などの種類があります。「ちりとりに」は、ゴミトリ、チットリ(大杉町)が聞かれました。

囲炉裏や火鉢で使う道具の方言には、センバ、サントクがあります。センバは炭や灰をすくうのに使う、スコップを小さくしたような柄のついた金属製の道具、

十能のことです。サントクは囲炉裏や火鉢で金や薬缶をのせるために置いた三本足の金属製の道具の名前です。囲炉裏と言えば火を使う場所。火をつけるのに使うマッチには、日本にマッチが普及し始めたころに呼ばれた「早つけ木」に由来するハヤツケン、ハイツケンという言い方が聞かれました。

「鍵」のことはジョーと言いました。ジョー カケル(鍵をかける)、ジョー シトケヤ(鍵をかけておけよ)のように言います。これもカラカミと同じで、元来、中央語でも使われていた「錠」(主に南京錠のような種類)に由来するものであり、新しく「鍵」が共通語として普及したために、古い言い方のジョーが方言と意識されるようになったものです。

夏の強い日差しを避けるための「簾」はヒヨケ、スー(簾)からなどと言います。ヒヨケは言つまでもなく「日除け」からです。

来月も(住居に関する方言)を続けます。

連載
96

住居に関する方言 その4

厳しい寒さに見舞われた今冬もようやく終わりを告げようとしています。こしばらくの暖冬傾向で忘れかけていた雪国の春の喜びが何倍にも感じられる3月になるのではないのでしょうか。

重く冷たい雪にじつと耐えた雪国の住居。その住居に関する方言を今月も続けます。

囲炉裏の座名の方言

かつての住居と言えば忘れられないのが囲炉裏の存在です。筆者の実家にもオコエ（小松ではオエなど）と呼んだ板の間に小学生の頃まで囲炉裏がありました。今は上に床板を張ってふさいでしまいましたが、時にくすぶる煙に目を痛くしながらも、家族が囲炉裏の周りに座って暖をとった冬の風景が懐かしく思い出されます。

囲炉裏の方言には、昨年12月号でもご紹介したように、市内山間部に白山麓と

同じジロ、そのほかの地域でイリリ、イロリが分布しますが、今回は囲炉裏の周りの四つの座名について見ることにします。住まいから囲炉裏が消えたことで忘れ去られようとしている方言です。

囲炉裏の四隅の座の中で最も重要な場所が、玄関から見て奥にあたる座です。そこは家の戸主の指定席でした。全国的にはヨコザの名が広く使われていたが、小松ではムコザ、ムコーザが一般的で、これは北の辰口や寺井（現能美市）と同じです。ムコザは「婿座」、ムコーザは「（玄関から見えて向こう座の意味と解している人が多いようですが、地域によつてはオトコザの名もよく聞かれることから、前者、つまりその家の主人となる「婿の座」の意と考えた方がいいでしょう。

そのムコザ（ムコーザ）の両脇の座は、一般に、台所に近い方には家の主婦が座り、その向い側に客や戸主以外の男性が座りました。ですから、地方によつてはこの二つの座を別の名で呼ぶ場合も多いのですが、小松市内ではやはり辰口などと同様に両方を区別せずヨコザと呼ぶこと

ろがほとんどです。例外としては、尾小屋で主婦の座る方をヨコザ、他方を「コデザ」と呼び分けていました。これは、本来、ムコザにあたる座をヨコザと呼んでいたのが（この座だけ莫座のような敷物を横向きに敷いたところからの名と言われています）、その語源が理解されなくなつてムコザという新しい名に取つて代わられたため、ヨコザのヨコが主人の座の「横」の意と解されて、文字通り両脇の座名に横すべりしたものと考えられます。

ムコザの真向かいの座はシモザ（下座）です。この名もまた辰口などと同じです。ちなみに、小松に近いところでは手取川を隔てた川北町・旧鶴来町で、主人の座がヨコザ、両脇が座名なし、そしてシモザとなり、旧鳥越村で、ヨコザ・オトコイリ（客座）・タナマイ（主婦座）「棚前」の意か）ーシモザとなります。

物がなくなつて言葉が消えることを「廃物廃語」などと言います。囲炉裏の消滅とともに、ここでご紹介した囲炉裏をめぐる方言も、遠からず人々の記憶の中から消え去る運命にあります。

連載
97

民俗と方言 その1

今年も卯月4月を迎えました。本連載も今月からいよいよ9年目に入ります。

前回は〈住居に関する方言〉の最終回として、囲炉裏の座名の方言をご紹介しました。従来、このようなものは地域の民俗として取り上げられることも多いものです。というわけで、今回からしばらくは、小松の民俗と関係の深い方言を見ていきたいと思ひます。なお、今回から取り上げる方言は、市内符津町での調査結果を中心としたものです。

年中行事にまつわる方言

マユダマは養蚕業の正月のお祝いです。戦前、養蚕が盛んなころに行われました。柳の木や竹にマユダマ（繭玉）をまねた餅、さらに小判型や打出の小槌の飾り物などを下げ、家の大黒柱に付けました。エビスコは繊維業関係者の正月のお祭りです。女工さんに饅頭やキンカトー（「金花糖」。砂糖菓子（かんすい）の一種）を配つてお

祝いをしました。旧小松町や長崎・安宅などのエビスコは、女工さんや親戚の人を呼んでごちそうでもてなしたそうです。京都の丹後から注文をとつてきて小松のハタバ（機場）に仕事をさせるトイヤ（問屋）さんには、一流の料亭で芸者さん（かみもも）を呼んででもてなしたとのことでした。

オカガミは正月の鏡餅（かがみもち）のことです。カンサマ（神様）のお飾りをするために、床の間や神棚のほかにも、ナガシバ（台所）の水の出る所と火を使う所にも置いて、水の神様と火の神様を祭つたと言います。カンダラは正月料理に使う固く乾燥した棒鱈（ばらご）のことです。「乾鱈」あるいは「寒鱈」の意味でしょう。

3月3日のおひな様をモモノセック、5月5日をタンゴノセックと言いました。もちろん、共通語としても通用する言い方です。モモノセックはおひな様や菱餅を飾り、タンゴノセックは男の子が生まれると、家紋の入った幟旗（のぼりばた）を立てたことでした。幟旗には、侍が馬に乗った絵などが書いてあつたと言います。なお、尾小屋では3月3日をヒナサン、5月

5日をオトコノセックとも言つたそうです。

オヒガンは言うまでもなく春と秋の彼岸のことです。おはぎを食べたそうですが、昔は墓参りはお盆のときだけで、ヒガンにはしなかつたとも聞きました。

オチユーゲンもお中元で言い方は共通語と同じです。7月に娘の実家から嫁ぎ先に、また仕事関係でお世話になった人に対する贈り物だつたそうです。嫁がせた家は、鱈や河豚を開いて干したものを肴として酒といっしょに嫁ぎ先に贈つたとのことでした。

ドヨは立秋の前の18日間、つまり「土用」のことです。今と同じように鱈を食べたり、7月25日過ぎには餅をついて食べたよつで、小豆餡（あずきあん）を入れた餅を豆餅などといっしょに娘の嫁ぎ先に持つていったそうです。

〈民俗と方言〉は次回に続きます。

連載
98

民俗と方言 その2

年中行事にまつわる方言(続)

前回に続けて年中行事にまつわる方言を見ていくことにします。

ドヨ(土用)が立秋の前の18日間を指すことはすでに触れましたが、梅雨が明けて天気の良い時期だからでしょう、ドヨボシ(土用干し)をしました。昔は家中の部屋に衣類を吊って干したり、オミヤサン(神社)では祭りに使う幟旗などを干したりしました。筆者も子どものころ、この時期に父親と、普段しまい込んでいる掛け軸を広げてドヨボシしたことを懐かしく思い出します。

8月と言えばお盆です。ですから8月のことをボンノツキとも言いました。符津では昭和40年ころまで、オボンには夜の7時半から8時から夜中の12時か1時ころまで盆踊りをしたそうです。村中の若者を総動員して、青年団が主催で太鼓を鳴らし、みんなで盆踊り歌を歌いな

がら踊り、特に8月17日の夜は踊りの輪が四重にもなるほどのぎやかさで、夜明けまで踊ることもあったと言います。

ニーボン(新盆)は、ある人が亡くなって初めて迎えるお盆のことです。葬式が終わった後の遺骨をニーボンの間際にお墓に納めてお坊さんにお経をあげてもらったそうです。ちなみに、小松ではニーボンですが、全国各地では「新盆」のことをハツボン(初盆)、シンボン(新盆)、アラボン(新盆)など、いろんな言い方をします。

夏の行事にムシオクリ(虫送り)があります。夏に各家々で2メートルほどの竹や薪などを束にして松明を作り、それに火をつけて太鼓をたたきながら田んぼを歩き、その火に虫を集めて殺す行事です。今のように農業などがない時代の素朴な害虫退治の行事です。符津あたりでは、木場潟の広場に松明の残りを集めて篝火をたくように燃やしたそうです。

真宗王国の北陸地方に広く普及している行事にホンコサンがあります。「報恩講さん」の発音が変化した形です。ホンコサ

マと言う集落もあります。親鸞上人に報恩感謝の気持ちで行うお寺の行事で、10月になると各お寺で始まるそうです。

アキヤスミは、秋の稲刈りが終わったあとに村全体で一斉にとる休みのことです。ヤスギヨと言う集落もあります。仕事を休んで餅をついたり、おはぎを作ったりして食べたと言います。

シチゴサンはもちろん11月の「七五三」のこと、ハリクヨ(針供養)は12月の行事です。ハリクヨは和裁や洋裁をやっている人がした行事で、饅頭やこんにやくなどに折れた針をサイテ(刺して)お寺に持っていき、お経を上げてもらったそうです。

師走もオートシ(大晦日)が近づくとき各家でススハライ(煤払い)が行われたものです。昔は囲炉裏でも風呂でも竈でも薪を燃やしたので煤がたまり、それを竹の棒に縄を切った道具で落としました。大杉ではススハキ、尾小屋ではススバライとも言いました。そして、ポチツキ(餅つき)をして新年を迎えることになりました。

次回も「民俗と方言」を続けます。

連載
99

民俗と方言 その3

前回まで2回に分けて年中行事にまつわる方言を見てきましたが、今月は「民俗と方言」に関する新しい話題を取り上げます。

神仏に関する方言

カミサンとは、夫が妻のことを言うカミサン(余談ですが、以前NHKで放送されていた海外ドラマ「刑事コロンボ」の名台詞に「うちのカミサンが…」というのがありましたね)ではなく、「神様、神社の氏神様」のことを言います。尾小屋などのようにカミサマと言う所もあります。したがって、「神棚」のことをカミサンダナとも言います。そのカミサンを祀る神社はオミヤサンです。

カミサンに対して「仏様」のことはホトケサンです。幼児に向かってはマンマンちゃんという言い方も聞かれます。マンマンちゃんはいわゆる育児語です。マンマンちゃんのマンマンは、仏壇に供える仏飯

(ご飯)のことを言う幼児語・育児語のマンマ、あるいは、北陸に多い浄土真宗で仏様を拝むときに唱えるお経のナンマンダブ(南無阿弥陀仏)のナンマンに由来するものではないでしょうか。符津では正月に雑煮を食べる前に、サー マンマンちゃん イツテキテカラ ゴハン タベルガヤソー(さあ、仏様に行ってきたからご飯を食べるんだよ)などと言って、先祖を拝ませたと言います。仏様のいる「仏壇」のことはオブツタン、ブツタンが一般的な言い方ですが、大杉でブツタン、尾小屋でオジョーダン(「お上壇」の意味。仏壇のある部屋もさします)というのを聞きました。

「寺」のことをオテラ、オテラサンなどと言い、「寺の僧侶」のこともオボーサン以外にオテラサンとも言います。

冠婚葬祭関係の方言

お祝いの結婚関係から始めます。

結婚が決まると結納を交わしますが、シメダイとは「結納金」のことです。結納のときの手打ち酒のことをイッショウザケ

(一升酒)といい、結納のこともさしたそうです。結納のお返しはユイノーガエシですが、符津あたりでは、相手の家からもらった酒樽や三方(供え物をのせる四角い台)の上のつけた品物などを床の間に一定期間飾り、あとで三方などの道具を返すときに、生鯛や酒をつけてお礼に行つたと言います。鯛は2匹を腹合わせ(夫婦を意味する)にしたそうです。

「仲人」のことをカンサマ(神様と呼びます。大事な仲人を「神様」に見立てたわけです。ナカウドサン、ナコード、ナコードサンとも言います。「結婚(式)」はヨメドリです。もちろん「嫁取り」の意味です。「結婚すること」を、ミョート(メオト)ニナル、イッショニナルとも言います。「花婿」はムコサン、「花嫁」はヨメサンです。結婚式をすませて1週間目に実家に里帰りすることをナカガエリ(尾小屋ではナカモドリ)と言うそうです。

さて、次回で本連載もいよいよ節目の100回目を迎えますが、「民俗と方言」をこのまま続けます。

連載
100

民俗と方言 その4

平成10(1998)年4月の第1回から早いもので足掛け9年、本連載も今回で100回目を迎えることになりました。連載開始当時に比べると、ふるさと学習の気運の高まりもあって、最近では地域の方言がずいぶん見直されてきているように思います。共通語にはない方言の役割や魅力に注目が集まり、昨年から今年にかけては、『ちかつばめんこい方言練習帳』(主婦と生活社)をはじめとする若者向けの方言本も多く出版されています。昨年11月に筆者の監修で出版した『新 頑張りまつし金沢ことば』(北國新聞社)も、こうした方言ブームの中で予想以上にたくさん読者を得ています。本連載が、小松の皆さんにとつての方言再発見のきっかけとなれば幸いです。

冠婚葬祭関係の方言(続)

では、前回の後半で取り上げた冠婚葬祭関係の方言を今少し続けます。

連載
101

時間に関する方言

今年も暑い夏、8月となりました。連載も区切りの100回をこえて今回が101回目。また気持ち新たに、さまざまな小松の方言をご紹介します。今回は時間に関する方言を取り上げます。

年をとると時間のたつのが早いとはよく言われるところですが、筆者も最近はその実感することが多くなりました。小松では、「時間がたつ」ことを、トキヤータツと言ったりします。

今日を中心に昨日、一昨日、明後日などの方言

「今日」はキヨーですが、「昨日」のことはキンノです。キンノノアサは「昨日の朝」のことです。「昨日」のことをキンノという地域は、長野南部、静岡西部、愛知、岐阜に北陸三県、そして近畿地方の範囲に及びます。石川県内では、キンノのほかキンニョーという言い方も聞かれます。ま

村で人が亡くなると、オクワン(棺桶)に入れます。棺桶のことを大杉や尾小屋ではドバコとも言いました。「お通夜」のことはヨトギ(夜伽)からと言いました。棺桶は、以前は最近のような寝棺ではなく、真四角なオクワンに亡くなった人の膝を折って座らせて入れ、それをコシ(興)に乗せて4人でカイト(担いで)運び、村のヤキバ(火葬場)サンマイ、カソバなどともで燃やしました。骨拾いは翌日の朝に行つたそうです。

墓地のことをハカバ(墓場)と言います。ハカバにある墓石の上部方形部分をサオ(大杉ではドボ)と言います。

産育習俗と方言

〈民俗と方言〉の最後に、冠婚葬祭の「婚」と関連の深い産育関係の方言を取り上げます。

結婚して妊娠することを、デキル(子どもが)できる、ハラデコナル(お腹が大きくなる)、ハラニクル・オナカニクル(お腹にくる)などと言います。例えば、アニキントコ デキタサケーニ オイワイ

た、キンノの晩、つまり「昨晚」のことはヨンベ、ユンベです。

「昨日」はオトツイ、「昨日」はサキオトツイです。「昨日」の方言の全国分布を見ると、関東・中部地方から東にオトイ(東北地方を中心にオトイナも)、岐阜・愛知から西にオトツイという東西対立分布を示します。ただ、本来西日本方言の特徴を基礎とする石川・富山では、西のオトツイとともに東のオトトイも聞かれ、この地域がオトツイ勢力とオトトイ勢力の接触地帯であることがわかります。オトツイは「をとつひ」の形で古代の万葉集にすでに用例が見え、オトトイよりも古い形と考えられています。

次に、今日の翌日「明日」はアシタ、「明後日」はアサツテ、そして「明後日」はシアサツテ、さらにその次の日「明後明日」はゴアサツテです。ゴアサツテは、かつて北陸を含む西日本全域に分布したもので、最近では使う人はほとんどいなくなりましたが、シアサツテのシを4、つまりキヨー(今日)を基準の1として、アシタが2、アサツテが3だからシ(4)アサツテ

モツテカンナン(兄のところに子どもができたからお祝いを持って行かなければならない)のように言います。妊婦のことをニンプ以外にデンバラ(出腹)からとも言つたそうです。

そして、子どもが生まれることを、ネンネ デキルと言います。ネンネとは「赤ん坊」のことです。助産婦、以前のサンバサン(産婆)の古い言い方にトリアゲババー(取り上げ婆)があります。ババーですから、若い産婆さんには言わなかったのでしょうか、どちらにしても俗な言い方です。その産婆さんが、産後3日目に産湯を使いに来ることを、ミツカノオユ(三日のお湯の意)と言いました。また、出産後に嫁の親族が婚家に招かれてごちそうされることを、ネンネヨバレとかネンネンコヨバレと言いました。子どもをアヤスことを、オダテルとも言いました。子どもをおんぶするときに着る袖付きの綿入れ半纏はネンネコタンゼン、袖なしの綿入れ半纏はガメと言いました。

次回からは、また新しいテーマで続けます。

と解釈して、ゴ(5)アサツテという言い方が生まれたと考えられています。

朝から夜までの方言

「朝」はアサが一般的ですが、大杉では白山麓の白峰方言などに共通するアサギリという言い方が聞かれます。例えば、大杉では時間帯によって一日を、ヨアケ(午前4〜5時)、アサギリ(6〜7時)、ヒルマエ(8〜11時)、ヒラガリ(11〜12時の昼食前)、ヒンマ(午後0時ころ)、ヒンニヨマ(昼食後の昼寝時)、ヒリオリ(昼食後の時間、ヨサガタ(5〜6時半ころ。尾小屋でタツチとも)、バン、ヨサリ(7〜10時)、ネシナ(10時過ぎころ)、ヨナカ(12時過ぎ)のように分けて呼んでいました。ほかに、夜に対して日中のことを、ヒダナカ(ヒノナカとも)と言っていました。「今夜」はコンニヤ、「明日の朝」はミヨアサです。

次回も〈時間〉関係の方言を続けます。

連載
102

時間に関する方言 その2

遅い梅雨明けとともに猛暑に見舞われた8月でしたが、これをお読みいただくころには、涼しい秋風が吹き始めていることでしょう。

では前回に続いて、時間に関する方言を見ていきます。

「日おき」のイチニチハサミなど

「晩中」のことをヨドーシ(夜通し)と言います。ヨドーシ シャベットツタ(一晩中、話していた)のように言います。

「日おき」の部分を小松の方言では、イチニチオキ以外にイチニチハサミとも言います。

「月末のことはゲツマツとも言いますが、ツキジマイという言い方もされます。

エマ(今)とその周辺

エマワ ヨイ ジダイヤ(今はよい時代だ)のように、「今」のことはイマの発

音が変化したエマも聞かれます。トーニオワットルのトーニは「とづくに」、ヤガテクルヤローのヤガテは「もうすぐ」の意味です。モトカラは「もともと」。昔からの意味で使われます。

「急に」の意味ではニワカニが使われます。ニワカニ オイデタ(急にいらっしやった)、ニワカニ トンデデル(急に飛び出す)のように使われるほかニワカノ オキヤクサン(急なお客さん)のようない方もされます。シエーテ コイ(すぐに来い)、シエーテ ヤレ(すぐにやれ)のシエーテは「急いで」を「し損じる」の「急いて」と同じで「すぐに、早く」の意味の副詞として使われている例です。「すぐに」の意味では、ほかに、ジキ ヘンジシ テモラエンカ(すぐに返事をしてもらえないか)のように、ジキジキニも使われます。

副詞の「早くも」に当たる言い方には、ハヤがあります。ハヤ キタガ力(早くも来たのか)のように使います。

へシネーって「遅い」「待ち遠しい」

一方、「遅い」とか「待ち遠しい」意味を表す方言に、へシネーがあります。アルクノガ へシネー(歩くのが遅い)とか、長く待ちくたびれて、へシネーナー(遅いなあ)のように言います。逆に約束の時間に間に合うことは、マニオーと言います。

「ものごとはじめ」のことをカカリと言ったことがあります。シゴトノ カカリ(仕事のはじめ)のように使われます。

イッ力は「何日」の意味です。イッカタタイナ(何日経ったかな)のように使います。「七日」のことは、発音が変化した、ナヌカ、ナンカがよく聞かれます。「初七日」のことはシヨナヌカ、シヨナンカであり、1週間、2週間、3週間、4週間を、ヒトナンカ、フタナンカ、ミナンカ、ヨナンカのようにも言います。

次回は、〈空間〉に関する方言をご紹介します。

連載
103

空間に関する方言

今回は、〈空間〉に関する方言を見ていきます。最近になって本連載をお読みいただいている人はご存じないかもしれませんが、で説明しておきますと、連載55回目(2002年10月)以来ご紹介している方言は、小松市立博物館の委託で平成8年から12年にかけて実施した市内全域の方言調査のうち、大杉町、尾小屋町、符津町、安宅町、龍助町での生活語彙調査(約2,300項目)で得られたものです。

「後ろ」の意味のウッソー、ウラ

「前」と「後ろ」の「前」はマエですが、「後ろ」の意味では、ウシロのほか、ウッソー(尾小屋、符津が聞かれました。ウシロからの音変化形(ウシロ→ウッソー→ウッソ)でしょう。尾小屋、符津では「後ろ向き」をウッソームキとも言ったようです。珍しいところでは、龍助町で「後ろ」をウラとも言つ、との説明を聞きました。「後ろ」のことをウラなんて間違ひでは、と思

う人もいらつしやるかもしれませんが、実は全国的にも「後ろ」の意味のウラが、千葉、長野、京都など、点々と確認できます。例えば、家の後ろ側をオモテに対してウラと言ったりしますが、本来「裏」を表したウラが「後ろ」の意味でも用いられる可能性は十分あるのです。龍助町のウラは日常的にどの程度使われているものなのでしょうか。

「間」の意味のアイサ、アワシャ

人と人、物と物の「あいだ(間)」のことを、アイサ(尾小屋)、アワシャ(尾小屋、符津、龍助)などと言います。このうち、アイサは「(時間的、空間的な)間」をさした古語「あい」に由来すると思われる、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、アイサの形は、小松以外にも関東の栃木、群馬、そして新潟、長野、山梨、静岡、愛知、岐阜、富山、西の三重、滋賀、和歌山、島根、岡山、徳島、香川、熊本などの広い範囲に分布します。また、「ツクエト ツクエノ アワシャ(机と机の間)」のように使われるアワシャも、「(時間的、空間的な)ものとも

のとの間、間隔、すきま」をさした古語「あわい」に由来すると思われる。「あわい」から、アワイサ→アワサ→アワサイ→アワシャのような変化が推定されます。アワサイの形は、新潟・佐渡、富山、福井、岐阜・飛騨、滋賀、京都、兵庫、和歌山、島根など、近畿およびその周辺に分布が見えますから、小松のアワシャは、近畿から福井を経て伝播したアワサイが変化したものとみて間違ひないでしょう。

〈空間〉に関する方言としては、ほかに「周り」をさすグルリ(大杉、符津、龍助)、グルジ(尾小屋)、「玄関の外の家の中の空間」をさすカド(大杉、尾小屋)、「一番端っこ」をさすトツパナ(尾小屋、符津)、「中心から離れた端の方」をさすハナツパ(大杉)などがあります。尾小屋のグルジは、音声学的には、グルリの「リ」が発音の仕方が似ている「ジ」に変化した形と説明できます。

次回からは〈数量〉に関する方言をご紹介します。

連載
104

数量に関する方言

今年も早11月となり、あとチヨッコシ（少し）を残すのみとなりました。今回は、小松での数量に関する方言を取り上げます。

量が多いことと少ないことを表す方言

量の多いこと、つまり「たくさん」ということを表す方言には、「デカイ（コト）」に由来すると考えられるデカト（尾小屋・安宅）、デカト（尾小屋・デコト（符津・デーコ（大杉、デッカイコト（大杉）などのほか、「ヨケー（余計）」に由来すると思われるヨーケ（大杉・尾小屋・符津）、「イッパイ（一杯）」の音変化形エツペ（尾小屋・符津）、さらにタント（符津・龍助）など、多くの言い方が聞かれます。それぞれ、タンポデコト、アル（田んぼがたくさんある）、ヨーケ、モロタ（たくさんもらった）、オチャワ、エツペ、ツグモンデネ（お茶はいっぱい注ぐものではない）、タント、ヒトガ ヨットルヨー（たくさん人が集まっ

ているよ）のように使われます。

反対に、量が少ないこと、つまり「少し」ということを表す方言には、チヨッコ（大杉・尾小屋・符津）、チヨッコリ（尾小屋・符津・龍助）、チヨッコシ（符津・安宅）などがあります。これらもそれぞれ、モーチ、ヨッ、コデ、スンダガニ（もう少しで済んだのに）、チヨッ、コリシカ ナイ（少ししかない）、チヨッ、コシカ フラナンダ（少ししか降らなかった）のように使われます。

そのほかの数量に関する方言

数量というよりも基本的には程度の甚だしいことを表し、それが時には数量的な多さも表す方言にテンポがあります。テンポは形容動詞的に、テンポナ、コトヤ（大変なことだ）、テンポニ、ヤカマシー（大変騒がしい）、テンポナ、ヒトデヤッタ（予想以上に）たくさんの人出だった）のように、また副詞的に、テンポ、タカナイ力（すごく高くないか）のように使われることもあるようです。「てんぽ」は、元は中央語（京阪語）として江戸初期の文献使用例も確認できる「思い切つてするさま」

を表したテンポが北陸に伝播した後、福井県北部から石川県加賀地方などで「甚だしいさま。大変。たくさん」の意味に変化したものと考えられます。

数量的に不定のことを指す、ドンダケ（どれだけ）は、ドンダケ コータ（どれだけ買った）のように使います。ドンダケは、ドレダケの「レ」が「ン」に音声変化した形です。

量が足りないことは、タランと表現されます。現在では一段活用動詞「足りる」の否定形タリンを使う人が多くなりましたが、近畿地方を中心とした西日本地域（北陸地方を含む）では、本来は五段活用動詞「足る」が使われたため、その否定形もタランでした。

数を数えることを、カソエル以外にヨムと言う地域（尾小屋など）もあります。カズ ヨンドケ（数を数えておけ）のように使います。数字の「七」はヒチと発音されることが多く、「4人」のことをヨッタリとも言います。符津では、「人為的に数量が減る」ことをスバルとも言つうようです。

連載
105

程度や物の様子に関する方言 その1

本連載を始めてから9回目の師走を迎えました。昨年の12月は突然の寒波襲来で交通網が大混乱しましたが、今年は暖冬との予報も出ています。穏やかな年の瀬になることを祈りたいものです。

今回からは、〈程度や物の様子〉に関する方言をご紹介します。

ウマソーナ子どもって言われても

しばらく会わない間に背が伸びた知り合いの子に、デコ ナッタと言えば、「大きくくなった」の意味です。つまり、「大きい」の意味でデカイが使われます。デケーハタケ（大きいへ広い畑）のように、デケーと発音されることもあります。また、「大きい」と言えば、「子どもが丸々と体が大きく、丈夫そうである様子」をウマソイ、ウマソ（ー）ナのように言います。小松をはじめ石川県内に広く聞かれますが、子どもの様子にウマソーナとは、県外の人に恐怖とともに誤解されそうない方

ペッターコイってどんな意味？

物の様子をさす方言に、ペッターコイという言い方がありました。どんな意味かわかるでしょうか。「平たい」の意味です。言われてみればいかにも「平たい」感じのする面白い言い方です。

高さや値段が「高い」ことはタケー、「狭い」ことはシェマイ、シェバイ、シェメーです。「短い」ことはミシカイとも言います。

12月になり、これから段々寒さも厳しくなりますが、「寒い」ことをサバイと言います。これは、サムイの「ム」が、同じ両

唇を使う似た発音の「フ」に交替したもので、マ行とバ行の交替例は、「サビシー」と「サミシー」、「ケブリ」と「ケムリ」などにも見られます。

カタガルは北陸の気付かれにくい方言

ハスカイン ナットル（斜めになつていく）のように、「斜め」のことはハスカイと言つことが多く、大杉では、ヒシニ ワタル（斜めに渡る）のように、ヒシという言葉方も聞きました。

斜めと言えば、北陸地方の広い範囲で、「傾く」ことをカタガルと言います。ウチャ カタガットル（家が傾いている）、エガ カタガットル（絵が傾いている）のようになっています。今も若い世代によく使われています。方言の衰退傾向の中で、カタガルが若い人たちにも使われるのは、カタガルを方言だと思っていない人が多いためです。このような方言を研究者たちは「気付かれにくい方言」などと呼んで、注目しています。

このテーマは次回（来年）に続けます。

連載
106程度や物の様子に関する
方言 その2

あけましておめでとございます。今年も引き続き、小松の方言のさまざまな世界を取り上げていきたいと思っています。

今回も前回に続けて「程度や物の様子に関する方言」の中でも「物の様子に関する方言」をみていくことにします。

イチチョーライが歌になる

筆者の郷里福井には「いちちやらい節」という民謡があります。子どもころ、盆踊りなどで踊った「いちちやらい節」は歌手の島倉千代子と守屋浩が歌っていました。「いちちやらい節」の「いちちやらい」とは元来「丁蝋燭」だった一本でもし替えるならろうそく」の意が「張羅」(「たった一枚しかない晴れ着」の意)と変化した語に由来する方言です。福井では「晴れ着」の意味だけでなく「番よいこと」「番よいもの」の意でも使われ、「いちちやらい節」の歌詞は福井が一番だよと

福井自慢を歌ったPRソングのような民謡です。最近では全国的に踊りのYOSA KOIソーランがブームですが、福井ではYOSA KOIイチチョーライというのもあるようです。小松でも「新品の服。流行の服」といった意で、イチチョーライノフク キテキタ(新品の服を着てきた)のように使われます。「とっておきの着物。最上の衣服。晴れ着」の意味でのイチチョーライ、イチチョーライは、北陸以外にも、中部・近畿・中国・四国地方などの広い範囲に分布します。

トグロマイているのは蛇?

トグロマクと言え、普通に思い出すのは蛇が丸く体を巻いている様子をさす言葉ですが、小松では、トグロマイテスワル(丸く輪になってすわる。車座になる)、トグロマイテ ハナシトル(丸く輪になって話している)のように、人に対しても使うということを符津の人から聞きました。

蛇と言え、蛇は獲物を丸呑みしますが、「丸呑み」のことを、マルノミ以外に、

グットノミとか、マルンママ ノム(丸ま吞む)とも言います。

「新しい」の反対は「古い」

正月と言え「新年」、つまり「新しい年」なわけで、小松でも「新しい」はアタラシイですが、「古い」はフルシーと言います。不思議な言い方のようにも思いますが、反対の意味の「新しい」が古典文法(文語文法)で言うシク活用型の「〜シー」となるため、ク活用のフルイをシク活用型に類推変化させたものと思われ、発想的には有り得ない形ではないのです。フルシー以外に、オソイ(尾小屋など)を使う人もいます。「古い」の意味のオソイは福井県嶺北地方にも分布します(福井には地域により「ひどい」「恐ろしい」の意のオソイも聞かれます)。「古い」と言え、魚が「古くなる」ことを、アノ サカナワ ナレトル(あの魚は古くなっている)のようにナレルと言います。「熱れ鰯」の「熱れ」と同じでしょう。

「程度や物の様子に関する方言」はさらに次回に続けます。

連載
107程度や物の様子に関する
方言 その3

今回も前回に続いて「程度や物の様子に関する方言」のうちから「物の様子に関する方言」を紹介していきます。

チゴーは古い時代の発音の名残

物の様子で、ほかの物と「違う」ことを、年齢の高い人たちは、「チゴー、モン(違ふもの)」のようにチゴーと言います。学校文法で言うところのアワ行五段動詞(文語文法のハ行四段動詞)の「買(う)がコー、買(う)がモローと発音されるのと同じような特徴です。この特徴は、小松だけでなく石川県内の広い範囲で聞かれるものです。

少し難しい話になりますが、このチゴーのような発音は、かつて中世の時代に中央語(京都語)で起ったアウ[ɤ]連母音の長音化(アウ→オー)の名残です。京都などの近畿地方や福井ではいったんチゴーに変化したアワ行五段動詞の終止形・連体形が、「ちがう」「かう」のような表

記に影響されてチガウ、カウに戻ったのに対して、石川県では古い形をそのまま残したのと思われ、終止形・連体形でチゴー、コー、モローなどの形が根強く使われてきた結果、別の活用形にもそれが影響し、チゴワン(違わない)、コワン(買わない)のような形さえ生じているのは興味深い現象です。

ヨテは得意の意味

「ある人にとって」向いている「得意な様子」を表す言い方にヨテがあります。ヨテノ シ「トニ アタツタ(自分に向いた仕事にあたった)、ヨテンネー シ「トヤ(自分には向いていない、得意でない仕事だ)のように使われます。「得意」の意味の「得手(えて)」の音変化形です。

ヒドイは共通語より意味が広い

ヒドイという形容詞は、共通語と同じ意味のほかに、「肉体的につらい」様子をさしても使います。例えば、酒を飲んで顔色の悪い人に「ヒドイケ」と聞いたりします。共通語と同じ形のために、それが方言

的な使い方と気付きにくい例です。

ホセホセンナルってどうなるの?

尾小屋で聞いたものに、ホセホセンナルという言い方がありました。「干せ干せになる」にあたる形で、「乾いてからからになる」様子を表したものです。ノドガホセホセンナル(喉がからからになる)のように使われます。

逆に物や食べ物水分を含まず、湿度を帯びることをシミルと言います。センベীগ シミツトル(煎餅がしけっている)といった具合です。シミルはほかに、冬に物が凍ること、凍るような0℃以下に気温が下がることを言う場合もあります。ケサワ テヌグイガ シミツトル(今朝は手ぬぐいが凍っている)のように言ったりします。

関連して、シムは、シャツニー アセガシユンダ(シャツに汗が染み込んだ)のように、液体がものに染み込むことを言います。このテーマはさらに次回に続けます。

連載
108程度や物の様子に関する
方言 その4

いつもの年なら春の訪れが待ち遠しいこの時期ですが、この冬は暖冬で、冬の生活・雪の生活にまつわる方言、例えば「氷柱」をさすタロキ・タルキ、「雪かき」をさすユキスカシ、「雪に足がはまる」ことをさすゴボルなどを使う機会が少なかつたのではないでしょうか。普段、当たり前のように使っていたこれらの方言も、冬の気候が変われば使われなくなる。改めてそのことに気付かされた冬でした。

今回も〈程度や物の様子に関する方言〉のうちから〈物の様子に関する方言〉を続けて見ていきます。

近畿地方から伝播した古語に由来する
方言

これまでにも様々取り上げてきたように、北陸地方の方言の多くは、かつての中央語地域であった近畿地方の言葉が伝播したものを基層としています。小松の物

の様子を表す形容語の方言から、そのような例を見てみましょう。

ヤクチャムナイ、コトオ スル(いい加減なことをする)のように、「いい加減な様子」「たわいもない様子」を言うヤクチャムナイは、古語の「益体もない」に由来します。意味はほぼそのまま引き継がれましたが、「益体も」の部分が、ヤクタイモ↓ヤクチャモ↓ヤクチャムと変化した形です。似た意味では、ソソナ、エーカゲンナなどの言い方もされますが、それぞれ「粗相な」「いい加減な」に由来します。

ソソナモンワ ダチャカン、ソソんなものは駄目だぞのように、「駄目だ」の意味で、ダチャカン、ダチカン、ダツチャカンなどと発音されるのは、現代語でもやや固い表現で使われることのある「埒が明かない」の京都語「埒明かん」が変化した形です。ダチャカン、ダチカンの場合は、ラチアカン↓ラチャカン↓ダチャカン↓ダチカンのような音声変化過程が想定できます。ダツチャカンもダチャカンからの変化です。ラチャカンからダチャカンへの変化は、語頭の「ラ」と「ダ」が音声学的に似た

調音方法による音声であるために起こった子音交替の例です。

ガンコナはタルイの反対の意味でも使われる

オビガ タルイ(帯がゆるい)のように、「ゆるい」の意味でタルイが使われます。反対の「きつい、強い、固い」の意味では、キツイ、ツヨイのほか、ガンコも使われます。オビガ ガンコ、シメタル(帯がきつく締めてある)といった具合です。「固い」の反対で、物が「柔らかい」ことは、ヤワコイ、ヤラカイなどと言います。

「丁寧な」ことをネン「ロナ」、「乱暴な、ぞんざいな」ことをヤンチャナと言います。アノ ヒトワ ネンゴロナ アイサツオ スル ヒトヤ(あの人は丁寧な挨拶をする人だ、ヤンチャナ コト スルオトコヤ(乱暴なことをする男だ)のように使われます。

〈物の様子に関する方言〉は一旦これで終わります。来月は4月で、そろそろ田んぼの季節。次回からは農業に関する方言を取り上げます。

連載
109

農業に関する方言 その1

98年4月にスタートした本連載も今月からついに10年目に突入です。これまでも、たくさんさんの小松の方言を取り上げてきましたが、話題はまだまだ尽きません。これから気持ち新たに様々な方言をご紹介します。と思っています。

今年は暖冬でほとんど雪が降りませんでした。北陸の4月と言えば、雪解けを待つ田んぼや畑で農作業が本格化する時期。というわけで、今回からは〈農業に関する方言〉を取り上げます。

農業全般に関する方言から

「農家」は今でこそノーカと言ったことが多くなりましたが、古くはヒャクシヨ(百姓。大杉でヒャクシヨの発音も)という言い方が普通でした。ヒャクシヨシゴトで農業や野良仕事をさし、関連して、タンボシゴト(田んぼ仕事、ハタシゴト(畑仕事)という言い方もあります。今や死語化してしまいましたが、かつては、ミ

ズノミヒャクシヨ(水呑み百姓)という、農家や農業従事者に対する蔑称もありました。

田んぼの性質をさす方言

田んぼの性質に関する言い方(方言)には次のようなものがあります。

ヌマダ(沼田)は小松の広い範囲で、1年中水の抜けない湿田のことを言います。

符津では、カワダ(川田)か)が水持ちの良い深い田んぼをさし(大杉ではフカダとも)、逆に、水持ちの悪い乾きやすい田んぼをオカダと言います。チューカワダ(中川田)か)とは、オカダとカワダの中間程度の田んぼのことです。シミダシは田んぼの中で出る冷たいわき水のことです。これがカワダの原因の一つとされますが、最近では少なくなったようです。

尾小屋では、ハンヌマは半分ほど水がある田んぼのこと、ハサバダはまったく水がない田んぼのことを言い、晴天が続いて田んぼの水がなくなることをホシアガルと言います。

大杉では、米の取れ高の違いで、よく取

れる最上級の田んぼをイワリ、次の等級の田んぼをロワリと言ったそうです。イワリ、ロワリの「イ」「ロ」はイロハ順による呼び名でしょう。畑を田んぼに変えた田をハタケダ、新しく開墾した田んぼをカイデン(開田)の意か)と言います。

田植え前の仕事と方言

田植え前、最初に田んぼを荒く起こすことをアラオコシ(荒起こし)と言います。スキオコシ(鋤起こし)は馬に鋤を引かせて田んぼを起こすこと、キザミは荒起こした田んぼの土を細かくすること、アラゴナシ、アラゴネは荒起こした田んぼに水を溜めて馬鋤で柔らかくすることです。イブリは、水を入れて柔らかくした田んぼの土を平らにならすYの字型の棒に横長の板がついた道具の名です。苗代を作る田んぼはナワシロダ、ノシロダ(ナワシロダが変化)と言い、苗代を大杉ではナウツソ(ナワシロが変化)と言ったそうです。

今回は田植え関係の方言から続けます。

連載
110

農業に関する方言 その2

北陸地方の5月は田植えの季節です。筆者も金沢大学着任後は、郷里に近くなったこともあって、毎年5月の連休には福井(越前市)の実家に田植えの手伝いに行きます。新緑の里山を眺めながらの田植えはとても気持ちのよいものです。

という訳で、前回に続ける形で、田植えに関する方言から始めることにします。

「田植えをめぐる方言」

前回の最後で紹介したように、ナワシロダ、ノシロダ(苗代田)で苗代を作って育てた苗を、代掻きをした田に植えることとなります。今のように田植えが機械化される前は、苗を植える位置を決めるために、ワクという六角の木枠を転がして(ワクコロガシをして)田の表面に格子状の筋をつけました。その筋をつけた田のあちこちに、植えるための適量の苗を投げておくことを、ナエウチ(苗打ち)と言いました。

田植えが一旦終わったあと、植えた苗と苗の間に苗を植え足すことをマザシ(間挿し)と言います。また、田植えが終わったあと、植えもらした所や苗が浮いた所に補植することをウセウエ(失せ植え)、そのための苗をウセナエ(失せ苗)と言いました。マザシやウセウエは、田植えが機械化した現在でも行われますから、言葉としても生きているはずですが。

ところで、田植え前の田のアラオコシは前回も取り上げましたが、荒起こしのことを、ほかにタウチ(田打ち)とも言います。田の荒起こしなどに使った耕作用の馬は、タンマヤとかタンボウマと言ったようです。ニグシは、その馬に飲ませる米のとぎ汁のことです。

労働交換のイーは「結」から

田植えに限りませんが、農繁期などにお金(賃金)のやり取りをせずに労働を交換し合うことをイーと言います。ユイとも言い、「結」の字があてられる、れつきとしたかつての中央語です。イー(結)の存在は、農村社会の強固な共同体社会を

支えていた要因の一つです。尾小屋では、イーシアンコ ショーサ(お互いに仕事の手伝いをし合おうよ)のように、イーのほかにイーシアンコとも言ったそうです。イーシアンコは「イー(結)し合いこ」からの変化形でしょう。

田植え終わりの一斉の休みはヤシコ

タウエ スンダラ ヤシコ センナンナ(田植えが済んだら田植え休みをしないではいけないうね)。

かつての田植えというところ、朝の日の出とともに始め、夕方暗くなつて苗を植える手許が見えなくなるまで続ける、そして、それが何日も続くという重労働でしたから(筆者の小学校低学年のころまではそうでしたから、昭和30年代半ばころまではそんな状況だったと思います)、田植えが終わって村全体で一斉にとる休み、ヤシコは重要な年中行事の一つでした。

〈農業に関する方言〉は次回に続けます。

連載
111

農業に関する方言 その3

6月は田植えが終わり、北陸の田には稲の苗を成長させるために水が張られます。現在の6月は旧暦の皐月。皐月の語源は、「サナエツキ(早苗月)」の略称との説もありますが、皐月のサは、「耕作」あるいは「田の神」を意味した古語「サ」で、「稲作の月」、「田の神の月」の意味として名付けられたとの説の方が説得力があるように思います。

ちなみに、小松では、サツキは旧暦5月をさす以外に、「田植え時期」の意味でも使われます。

では、今回も〈農業に関する方言〉を続けます。

「田植えをめぐる(続)」

今は田植機用の箱苗を育苗センターなどで作りますが、昔は自宅で種粉を発芽させ、それを苗代に蒔いて苗を育てました。その種粉のことはタネモン(粉がモンに変化)といい、それを発芽させることを

メダシ(芽出し)、そのために種粉を漬けた池をタネイケと言いました。池を使わずに2日ほど湯につけることもありましたが。

アトとは代掻きのことです。アト シニカカル(代掻きを始める)のように使いました。苗代を作って種蒔きの準備をすることを、ナワシロオシメルとも言ったそうです。

ヤシコ以外の農繁期後の休み

5月の田植え時期の農繁期をサツキマエ(皐月前)と言いました。

前回の最後で紹介したヤシコは、石川県に特有の言い方ですが、ヤシコが田植え終わりの一斉の休みを言うのに対して、稲刈り終了後の祝いの休みはカリアゲと言いました。また、ヤシコやカリアゲが田植えや稲刈りといった特定の作業の後の休みをさすのに対して、ヤスミギョー、ヤスンギョーは、農繁期の後の休み全般をさす言い方です。「休み業」に由来するものと思われます。

アジエ(アゼ)とクロ

デンチ(田地)は田畑全般をさし、デン

バタとも言います。符津町では、開墾して田んぼにした土地をヒラギ、山を切り開いて畑にした土地をヤマヤブリ(「山破り」の意か)と言ったそうです。ムシカエシとは畑を耕すこと、尾小屋で聞いたナギバタ、ナギハタは焼き畑のことです。

平ら地での田んぼの境の畦はアジエ(アゼ)です。アジエ(アゼ)に多く植えて作ったことから、大豆のことをアジエマメ、アゼマメ(畦豆)と言いました。畦に対して、田んぼと田んぼに高さの違いがある場合、境の高い土手のことをクロ、ドイなどと言います。クロカ力はクロの草刈りです。

用水から田んぼへの水の取り込み口をミトグチ、ミナクチ、田んぼから水を出すための水の落とし口をシリミト、シリントと言います。ミトグチ、シリミトのミトは水の出入り口をさす「水門」が変化した形で、シリミト、シリントは「尻水門」です。ミナクチは「水の口」の意味で、ミナクチのナは今の「の」にあたる格助詞のナです。

次回もまた〈農業に関する方言〉を続けます。

連載
112

農業に関する方言 その4

水無月は「水涸れる月」の意味？

前回は、田んぼへの水の取り込み口であるミトグチ、ミナクチや、逆に水の落とし口のシリミト、シリントの話で終わりました。田植え後の田んぼには水が十分に必要で、それを取り入れるのがミトグチ、ミナクチなわけですが、7月は陰暦6月の水無月。漢字で「水無月」と書くことから、暑さがひどくなり水が涸れる月の意と解している人が多いようですが、水無月の「無（な）」は、本来「の」にあたる連体助詞「な（水上へみなかみ、水底へみなぞこ、水面へみなも）」で、むしろ陰暦6月が、田に水を引く月、田に水をたたえる月であるから、「水な（の）月」の意味という説が有力です。今回はそうした田んぼの水と関係のある方言から続けます。

ツツミは堤防にあらず

ツツミというと「堤」の字を思い浮か

べ、堤防の意味と理解されそうですが、小

松を含む北陸地方では広く、田んぼに水を供給するための「灌漑用の溜め池」をさします。灌漑用の溜め池を作るために人工的に堤（堤防）を築いたことから付いた名でしょう。ツツミの本来の目的は灌漑用なのですが、筆者の子どものころは、ちよつぱり危険な遊び場でもありました。というのも、山ぎわや村の外れにあるツツミには鮒や鯉などの魚がいることが多く、休みの日によく釣り竿を持って釣りに行ったからです。

用水に水を引くために掃除などの作業をする雇われ人を大杉や尾小屋ではヨースイニンブ（用水人夫と言ったとのこと）です。

大杉では、用水路に水を入れることをミズアゲ、用水へ水を取り入れるための堰（せき）をユーと言いました。エザシとは、符津で用水と排水を兼ねた水路の言い方です。

水車はスイシャにあらず

かつて、米を搗いたりするのに使われた水車を、今ではスイシャと呼ぶのが普

通ですが、小松ではミズグルマと言ったようです。スイシャが「水車」の音読みであるのに対して、ミズグルマは訓読みの言い方になります。

ところで、かつては水車なども使っていたことのあった精米作業（玄米を白米にすること）をウススリとかコメカチと言いました。ウススリは「臼摺り」、コメカチは「米かち」で、「米かち」のカチは動詞カツ（打つ、殴る）の連用形が名詞化した形です。同じ精米作業でも、ウススリという機械化された作業が想起されますが、コメカチというと、水車の力で玄米を搗いて白米にする、のどかな農村風景が目に見えます。

ウススリにまでたどり着くには、タカリ（田刈り）稲刈り）をし、ハサガケ（稲架掛け）をした稲のイネコキ（稲抜き）脱穀をした後、籾から籾殻を取り去って玄米にするモミスリが必要です。そのモミスリで出た籾殻をニカ、ヌカ、モミヌカなどと言います。

次回は「農業に関する方言」その5で

連載
113

農業に関する方言 その5



現在ではほとんど見られなくなったハサに稲を掛ける様子

言って、天気の良い日に家の玄関先Ⅱカド（大杉ではバンバとも言う）に籾を敷いて籾を乾燥させたものです。今は乾燥機で乾燥するようになり、そんな風景も見られなくなりました。

イネコキをするのは脱穀機ですが、脱穀機が登場する前に使われていた農具を大杉ではマンワと言ったそうです。筆者の郷里（福井・越前市）をはじめ、全国の広い範囲で、センバ（千把）とかセンバコキ（千把抜き）と呼ばれた農具のことです。

脱穀のときに出る藁屑（わらくず）をワラスベと言います。共通語的にはワラシベという言い方がありますが、その音変化形と考えていいでしょう。ワラシベに対して、稲の穂がついていた藁の芯の部分はヌイゴです。稲藁に対して麦藁をムンガラとも言いました。また、稲や藁を積み上げた稲藁（いねわら）はニューと言います。

消えゆくハサ（稲架）の風景

これもまた、最近ではめったに見られなくなったものに、刈り取った稲を乾燥させるために立てるハサがあります。大杉

では、自分の家から離れた場所に立てたハサをノバサ（野稲架）とも言ったそうです。大杉では昔は8段、あとで7段で作ったと聞きました。ハサの横木はハサノコなどと言いました。

刈り取った稲を束ねるときには、後でハサにかけやすいように、また稲束を立てたりしやすいように、1把の半分ずつを交差させて縛ったものです。このようにすることをイナムジリと言いました。大杉で聞いた方言です。

稲の病気でいもち病というのがありますが、小松ではネツと言いました。ネツガ ツイタは、「いもち病になった」の意味です。また、ネツの中でも、用水から田んぼへの水の取り込み口（ミトグチ、ミナクチ）付近が冷えて発生するいもち病をヒエネツと言いました。

農作物の収穫量は、サク（作）とかツクリ（作り）と言います。サクガ（ツクリガ）ヨカツタ（よく収穫できた）と言ったりします。作物がよく実る年はナリドシです。

次回は「農業に関する方言」を取り上げます。

忘れられつつあるモミホシやジボシの風景

早場米地帯の北陸では、8月末になると早稲の刈り取り風景が見られるようになり、今回の「農業に関する方言」はそんな稲の刈り取り時期に関する方言から始めます。

前回の最後でも紹介したように、稲刈りをしてハサガケ（稲架掛け）をし、イネコキ（稲抜き）脱穀をすると、以前は、モミホシ（籾干し）とかジボシ（地干し）と

連載
114

職業に関する方言 その1

今回からは〈職業に関する方言〉を取り上げます。この世界には、そもそもそれほど多くの方言が存在するわけではありませんが、古くからある職業や、今ではあまり見られなくなった職業の言い方には方言形も見られます。共通語化が進む中で、職業に関する方言（共通語形と同じものもあります）にはどんなものがあつたかを見てみることにしましょう。

僧侶の言い方は宗派によって違いが

僧侶一般の呼び方はオボーサン、ボーサン、ボンサン、女性の僧侶の呼び方はアマサンですが、お寺の僧侶や住職の言い方は宗派によって違うことがあります。

北陸地方は真宗王国とよく言われますが、小松では浄土真宗のお寺の僧侶のことをゴボサン、ゴボーサマ、ゴボサマなどと言ひ、特に住職のことをゴインサン、ゴエンサン、ゴエンジョサンなどと言います。ゴボサン、ゴボーサマ、ゴボサマのゴ

ボ（ー）は「御坊」で、元来、吉崎御坊、尾山御坊のように浄土真宗のお寺を指した言い方が僧侶を指す言い方に転化したものでしょう。また、ゴインサン、ゴエンサンは浄土真宗の住職の呼び名である「御院さん」、ゴエンジョサンは「御院住さん」に由来します。ワカサンは、若い後継の住職の言い方です。

同じ住職でも、浄土宗などではオシヨースン、曹洞宗などではホージョ（ー）サンとも呼ばれます。ホージョーとは「方丈」で、本来は一丈四方四畳半程度の広さを指し、そこに全宇宙が内在するという仏教思想から住職が生活する建物を指すようになり、それがまた住職そのものの呼び名になったと考えられます。

神社の神主のことは、カンヌシ、カンヌシサン、また、祈祷師のことはマジナイシという言い方がされました。

ダンナサンとは警察官のこと

ダンナサンと言えば夫婦の夫に対する丁寧な言い方ということになりますが、以前は警察官、例えば村の駐在所のおま

わりさんのこともダンナサンと言ったそうです。その呼び名からは、かつて警察官が村の中でいかに敬愛されていたかが想像できます。もちろん、ジュンサ、ジュンサン、オマワリサンという言い方もあります。

医者については、オイシャサン、イシャのほかに、イシャのイがエに変化したエシヤの発音も聞かれました。

バーコヤのバーコって何？

バーコヤと聞いても何の職業が分かる人は少ないでしょう。市中心部の龍助町で聞いた言い方ですが、バーコとは着物のことで、バーコヤは着物を売っている呉服屋の古い言い方です。ほかに呉服屋のことをタンモノヤ（反物屋）とも言ったようです。反物や着物を担いで売り歩く行商人はカズキウリと呼ばれました。カズキ（カズク）は「担ぐ」の意味です。

〈職業に関する方言〉は次回に続けます。

連載
115

職業に関する方言 その2

今年の夏は、8月に入って記録的な猛暑に見舞われましたが、この暑さのせいで得をした職業、損をした職業、様々な影響を受けた職業があつたに違いありません。今回も前回に続いて〈職業に関する方言〉を取り上げます。

飲食業などを指す方言

「仕出屋」のことは、そのままシダシヤという言い方がある一方で、発音が少し変わったシダツシャが市東部の山間部（大杉、尾小屋など）で聞かれました。リョーリヤという言い方がされることもあります。

ノミヤは、文字通り「飲み屋」、あるいは「居酒屋」のことです。これも発音が少し変わったノンミヤという言い方が大杉、尾小屋などで聞かれました。

つい先ごろ終了した、NHKの連続テレビ小説「どんど晴れ」は岩手・盛岡の老舗旅館を舞台にしたものでした。「旅館」のことは、最近でこそリョカンという

言い方が多くなりましたが、以前はヤドヤという言い方の方が普通で、龍助町ではハタゴとも言ったようです。モクチンとも言ったというキチンヤド（木賃宿）は、内湯のない食事と寝るだけの安宿を指し、それに対してウチユヤドとは内湯のある宿を指しました。旅館の「仲居」とは、ナカイのほか、ナカエの発音も聞きました。

マッサージ師のアンマサは「按摩さん」から

マッサージ師のことは、共通語でもアンマ（按摩）という言い方がありますが、小松の方言ではアンマ、アンマサンのほか、末尾の「ン」が落ちたアンマサという形が大杉、尾小屋で聞きました。

今だとサラリーマンと言われるような人を、以前はツトメニン（勤め人）、ゲツキユートリ（月給取り）と言ったことの方が多かったように思います。肉体労働を伴う日雇いの労働者のことは、ヒヤトイ、ヒヤトイニンブ、ニンブ、ニンブ、ニンソクなどと言いました。関連して、尾小屋では、

日雇いの労働のことをニンブシゴト、ニンボなどと言ったそうです。土木作業をする人はドカタです。

大工さん、左官屋さんの言い方

「大工」は、ダイクサン、ダイクで共通語形と同じですが、面白いのは龍助町や尾小屋町で聞いた「下手な大工」の言い方です。龍助町で聞いたカツツケダイクの語源は、よくはわかりませんが、金槌で釘を打つときなどに、下手で必要な場所以外にカツツケル（打ち当てる）という意味での言い方かもしれない。一方、尾小屋で聞いたカンシヨダイクのカンシヨ（閑所）は便所の意味です。「便所しか作れない下手な大工」とでもいうことなのでしょう。

「左官屋」のことは、共通語形と同じサカンヤサン、サカンヤもありますが、カベヤサン、カベヤが一般的な言い方でした。

大工さん、左官屋さんなどの弟子は「デシ」また大工の手伝い人を「テゴ」と言ったようです。

〈職業に関する方言〉はさらに次回に続けます。

連載
116

職業に関する方言 その3

今回も前回、前々回に続いて「職業に関する方言」を取り上げます。

さまざま「商人」のさまざまな言い方

商売をする人、つまり「商人」については、大杉でアキナイヤ（商い屋）、ショールバイヤ（商売屋から）、尾小屋でアキンド（「商人」から変化した語）、ショールバイヤ、符津でアキナイニン（商い人）、そして龍助町でアキンド、ショールバイヤ、ショールニンなど、いろんな言い方が聞かれました。こうした言い方が存在することからもわかるように、「商売」そのもののことをアキナイと言ったようです。

小売の商人に品物を卸す「問屋」のことは、トンヤのほかにトイヤ（問屋。トンヤの元の形）という言い方も聞かれ、集落によってはオロツシヤ（卸屋）の音変化形）と言ったところもありました。

商人でも店を構えない「行商人」のことは、ギョーショニン、ギョーショーという

言い方のほかに、カズキウリという言い方もあります。カズキウリのカズキは「両肩で荷を担ぐ」ことを意味する方言の動詞カズクの連用形にあたるもので、行商人の人が荷を両肩で担いで売り歩いたことから名付けられたものです。

行商でも特に魚を売り歩く人をボテと言いました。ボテは「棒手」で、魚を入れた籠や容器を天秤棒で担いで売り歩いた「棒手振り」に由来する言い方と思われる。

今は鍋などが傷むとすぐに捨てて買い換える時代ですが、以前は鍋や薬缶に穴があいても修理して大事に使ったと言います。そのような傷んだ鍋や薬缶などを修理する職業が「鑄掛屋」でした。「鑄掛屋」のことはイカケヤとも、イカケ、エカケとも言いました。

♪ 暫時（しばしば）もやまずに槌（ち）うつ響（ひびき）。（中略）。仕事に精出す村の鍛冶屋（かじや）と文部省唱歌「村の鍛冶屋」にも歌われた「鍛冶屋」のことは、カジヤのほかに、少し発音が変化したカンジャという言い方が聞かれました。

「八百屋」は、まさに八百屋が野菜（あお）草を売るといってことで、アオクサヤ（青草屋）という言い方がよくされたようです。龍助町ではアオモノヤ、アオモンヤ（青物屋）、大杉ではヤサイモノヤも聞きました。龍助町では、ほかに「米屋」でヘギヤ、ヘンギヤ、「乾物屋」でシオモンヤ、「酒屋」でニゴリヤという言い方も聞きました。シオモンヤは塩圧（お）した魚も売ったこと、ニゴリヤは濁り酒（にごり）を売ったことによる呼称でしょうか。

その他の職業の言い方

木を切ることを職業にしている人は大杉でコビキ、コビキヤサン、尾小屋でコビキ、コビキサン、龍助町でコビキサン、コビキサなどの言い方を聞きました。コビキは言うまでもなく「木挽（こひき）」です。

山野で鳥や獣を捕らえることを生業とする「猟師」のことはリョーシ、あるいはテッポウチ（鉄砲撃ち）です。

「職業に関する方言」は今回で終わります。

連載
117衣生活に関する方言
その1

いよいよ今年も師走を迎え、寒さも一段と厳しさを増してきます。雪国で暮らしていると、寒さを防ぐ冬の衣類には苦労するもので、今のように暖房器具が十分でなかった頃は、さまざまな衣類の工夫があったはずです。

今回からは、そんな衣生活に関する方言をしばらく取り上げることになります。

着物類を指すさまざまな方言形

日本人の衣服も、今はすっかり洋服中心になってしまいましたが、一昔前は着物中心でした。今回はまず、そんな懐かしい着物（和服）関係の衣類の方言から見ていきます。

着物の総称として、大杉や尾小屋などでキモンという言い方を聞きました。キモンとは、キノノ（no）の母音「o」が脱落してンに変化した形です。

冬用の二重の着物をフタヨと言いい、逆に浴衣のような、夏用の単の着物をヒト

ヨと言いました。

ところで、入浴後や夏に着る木綿の二重の着物をなぜ「ゆかた」と言うかご存じでしょうか。「ゆかた」というのは、昔入浴の時に着た二重の着物をさす「ゆかたびら（湯帷子）」の下略形なのです。漢字では「浴衣」のほかに、「內衣」とも書くことがあります。

大杉では、上着になる和服のことを言うナガギというのも聞きました。アワシエ（アワセ）は、裏地を付けた着物のことです。

冬も寒さが厳しくなると、中に綿を入れた着物、ワタイレを着ることがありました。小松でも場所によつて、ワタイレが綿の入った着物の総称として使われたり、綿入りの袖のない着物など、その種類の称として使われたりするようです。

さて、ワタイレの中でも「袖無し」の胴着をさす言い方には、複数の言い方が聞かれました。大杉ではドンブク、尾小屋ではドンドコ、符津ではワタイレ、安宅ではドンギリでした。市内では、ほかに別の言い方も聞かれることでしょうか。このうち、

大杉のドンブクはドーブク（胴服）から、安宅のドンギリはドーギ（胴着）からの音変化形と思われる。

ちなみに、筆者の郷里、福井県越前市の方言では「袖無し」の胴着のことをドーギンと言っていました。今でも正月に実家に帰ると、寒いときには洋服の上からそのドーギンを着ることがあります。ドーギンもドーギ（胴着）が変化した形です。綿入りの胴着でも袖があつて、着物の上に羽織るものをハンチャと言います。ハンチャはハンテン（半纏）からの音変化形の可能性があります。

サックリとは、農作業など屋外作業用に着た上着で、ちょうど柔道着のような感じの着物のことを言います。サックリは畑仕事や山仕事などで着ることからノラギ（野良着）とも言われました。ナガギの下を切つて作つたりもしたようです。

ほかに大杉では、単（ひとえ）もので着物の上から羽織るウワツパリの語も聞きました。

〈衣生活に関する方言〉は次回に続けます。

連載
118衣生活に関する方言
その2

あけましておめでとうございます。今年もまた小松の方言について、さまざまな角度からご紹介していきたいと思ひます。引き続きご愛読下さい。

昨年一月の本連載の中では、晴れ着を着た女性の写真とともに、イッチョーライ(張羅)たった一枚しかない晴れ着」という方言形を取り上げました。正月には、晴れ着を着て初詣に出かけた方も多いことでしょう。そんな晴れ着にちなんで、今回も衣類に関する方言をご紹介します。

晴れ着と普段着の方言

「晴れ着」や「よそ行きの外出着」のことは、「一番良い着物」をさす、イッチョーライ、イッチョーラのほか、尾小屋でエーモン、イーモン(振り袖や留め袖といった女性の晴れ着。よそ行きの着物)、安宅でヨソキ、エーキモノなどの言い方を聞きました。また、大杉では「普段着よりも少し良い外出着」をチヨッチヨギと言うとの

ことでした。チヨッチヨギのチヨッチヨが何の意味なのかは今のところよくわかりません。

それに対する「普段着」の方言には、ヘーゼーギ(ヘーゼーギ、ヘーゼーギの発音も)が多く聞かれました。「平生着」です。この、ヘーゼーギには、前号で紹介したドンブク、ハンチャ、ウワツパリなどが含まれます。「普段着の裏地」をトーシノウラというのを大杉で聞きました。

上半身に付ける衣類の方言

では、衣類の中でも上半身に身に付ける衣類の方言を見ていきましょう。

市東部の大杉で聞いたものとしては、「寝巻(寝間着)」の古い言い方というネンネバ(小松ではネマキが一般的な言い方です)、「夜に子どもを背負ったときなどに羽織る防寒着」のハオリバ(安宅ではドテラとも)、「死んだ人に着せる白い着物」のカンレーシャ(目の粗い薄手の綿織物を言う「寒冷紗」からか)があります。

同じく東部の尾小屋では、「よそ行きに、子どもを背負うときに着る袖付きの

綿入れ半纏」をさすネンネコタンゼン、「子どもを背負うときに着る普段着の袖なしの綿入れ半纏」をさすガメというのを聞きました。「着物の上に羽織のかわりに着る衣類で、単袖にカフスを付けたものをヒュージュンフクとも言うたようです。

海岸部の安宅では、「腰までの丈で、袖にレースが付いたガーゼの襦袢」をさすチンコジュバンという面白い方言も聞きました。符津のハンジバンと同じものでしょうか。

市南部の符津で聞いたものとしては、「ワール素材でできた防寒用肌着」をさすジャケツ、「襦袢」の類の「ガーゼ素材の肌襦袢」をさすハダコ、「番下に着る袖の短い襦袢」のシタジバン(下襦袢)、「浴衣を着るときに着る袖部分がレースの襦袢」のハンジバン(半襦袢)、「冬用の襦袢」のフタヨノジバン(二重の襦袢)、「下着」のハダシャツ(肌シャツ)、「半袖の下着(特に綿素材のもの)」のシタジャツ(下シャツ)があります。

〈衣生活に関する方言は次回に続けます。

連載
119衣生活に関する方言
その3

今回は前回に続ける形で、まず上半身に身に付ける衣類の方言から始めて、次に下半身に身に付ける衣類の方言をご紹介します。

上半身に身に付ける衣類の方言(続)

まず、前回で紹介できなかったものに、アッパツパがあります。アッパツパというのは、女性が夏に着る、作りの簡単なワンピースのような衣類の呼称です。ご存じない方は、ハワイのムームのようなものを想像していただくといいかもれません。

男性が和服の上に着た袖のある防寒具、外套のことをトンビと言いました。トンビは鳥の「鷲」で、形が似ていることから付いた名です。また、マントは洋服の上に着る袖なしの防寒具です。

ほかに、主に農村部で雪が降った時にかぶったゴザボシがあります。かつては農作業などで雨よけに来たミノもありましたが、どちらか最近では古民具、民芸品

として見るくらいになりました。

トンビ以下のものは、いずれも全国的に広く使われたもので、方言と言うにはふさわしくないかもしれませんが、最近ではほとんど使われなくなったものの呼称として取り上げてみました。

下半身に身に付ける衣類の方言

下半身に身に付ける衣類の方言としては、まずパッチがあります。安宅町ではパッチパチとも言ったそうです。もとは木綿の布を縫って作った男性用の下穿きである「ももひき」の言い方として使われましたが、後には、男性がズボンの下にはいた下着であるズボン下、つまり今のスパッツに似た下着の呼称として使われました。パッチは、袴に似た衣服をさす朝鮮語バジが変化したものとも言われます。

また、尾小屋で聞いたコシタ(股下)からかは、今で言うステテコの言い方です。同じく尾小屋で聞いたタツツキは、「もんぺ」が登場する以前に女性がいいた下穿きをさした方言で、後にモンペと言われるようになりました。

サルマタは男性用の下着パンツの古い

言い方、オコシ(「お腰」からは女性が和服を着るときに身につけた腰巻をさす言い方でした。安宅町ではオコシをさすユモジという言い方も聞きました。このユモジは、室町時代に宮中の女房たちの間で発達した女房詞のうちの「文字詞」と呼ばれるものに由来します。「文字詞」とは、本来の語の一部に「文字」を付けて隠語的に使用された女房詞で、「しやもじ(杓子)」「ふもじ(鮎)」「こもじ(鯉)」などはその例です。ユモジは湯を使うとき、つまり入浴時にこれを腰に巻いたことから「湯文字」と言うようになったもので、それがその後都の庶民語になり、それがまた地方にも伝わって方言として残ったものです。

男性の使った褌はモッコフンドシとも言われたようで、エッチューフンドシはモッコフンドシの半分の長さのもの、ロクシヤクフンドシは長さ6尺の長い褌のことです。なお衣類としては新しいものですが、裾の広がったズボンをラッパズボンという言い方が、小松に限らず全国的に使われました。次回も衣生活に関する方言を続けます。

連載
120衣生活に関する方言
その4

今回は、前回の「下半身に身に付ける衣類の方言」との関連で、履物はきものの方言から見ていきます。

ハクモン(履物の方言)

履物の総称としての方言はハクモンです。

伝統的な履物である下駄げたの類では、まず雨が降った時など、足下の悪いときに履く高い歯の下駄、つまり「高下駄たかげた 足駄あした」をアシダ、アシタと言います。アシダアシタの先につけて泥や雨水を防ぐ「爪皮つまかわ」のことは、ツマカケ、ツマガケです。

アシダ、アシタに対して、歯の低い下駄の類の呼び名で、カンカラ、ブクリを聞きました。カンカラとは、歯の高さが普通の下駄と高い足駄の中間ぐらいの高さの下駄をさすようです。大杉で聞いたブクリは普段履きの歯の短い下駄のことだそうです。女の子が履く歯のない下駄には、カップリ(龍助町、符津、尾小屋、カップリ

(大杉)、コッポリ(符津)、コップリ(安宅)など、市内でも微妙に発音の違う言い方が聞かれました。

「草履そうり」にはジョーリの発音が聞かれました。大杉では、草履や下駄の「鼻緒はなぞ」をハナズル、「鼻緒を上げる」ことを、ハナズルタデルと言ったそうです。

「靴」のことは、クツのほか、旧能美郡地域の方言の特色とされるクーツの発音(2拍名詞の1拍目の母音が伸びる)が安宅ほかで聞かれました。子どもが履いたゴム製の短い靴はタングツ(短靴)から、今で言うサンダルのような履物の総称はツツカケです。作業用に履くゴム底の地下足袋かたびは主にジカタビと言われますが、大杉ではチカタビの発音も聞きました。

衣類の紐ひもや糸に関する方言

衣類と言えば、紐や糸がつきものです。「紐」のことはヒボという言い方が聞かれます。ヒモのモ「mo」の「u」が、発音の仕方が似ている「u」に変わったものです。「赤ん坊を背負うときに使う紐」はオンブヒモ、オブヒモです。大杉では紐の類で

ホソクグリ(腰紐)、シャデ(真田紐)なども聞きました。

「糸 木綿糸」の言い方には、中世末期の古語に由来するカナが尾小屋や符津で聞かれました。布団の綴とどじ糸に使う太い木綿糸をトーキョーガナ(龍助町)とも言ったそうです。紐や糸というと、結び方の種類を言う方言もあります。「2回結び」にはカナムスビ、カンカラムスビ、カンカムスビ、「ほどけないように固く結ぶ1回結び」にはツノムスビ、オトコムスビ、「蝶々結び」にはチョームスビ、オンナムスビ、「片方だけの蝶々結び」にはカタムスビ、ヒットキムスビなどの言い方が聞かれました。

「糸がもつれる」ことは、市内でも、ムスバル(大杉、尾小屋、ムダケル(大杉、符津)、ムスバカル(尾小屋、ムダカル(安宅)、ムタムタニル(龍助町)など、いろいろな言い方があります。

来月は4月。学校もまた新年度が始まります。〈衣生活に関する方言〉はここで一旦終わり、次回は〈教育に関する方言〉を取り上げる予定です。

連載
121

教育に関する方言 その1

今年もはや4月。新しい年度がスタートします。すでにご存じの方もいらっしゃると思いますが、金沢大学は、開学以来の大規模な改組で、新年度より、これまでの8学部体制から3学域16学類体制に移行します。私の肩書きも人間社会学域教授に変わることになりました。

本連載も98年4月にスタート以来、今月からいよいよ11年目に入ります。今後ともご愛読下さい。

ところで、新年度と言えば、子どもたちを含めて、誰もがまず思い浮かべるのが学校生活での新年度でしょう。今年も全国各地で、さまざまな入学や進級の風景が見られるに違いありません。学校と言えば「教育」。そこで、今回からは〈教育に関する方言〉を取り上げてみようと思います。

学校教育と方言の関係

〈教育に関する方言〉と聞くと違和感

を覚える人がいるかもしれません。明治

後半から戦前まで、我が国の学校教育は、「方言撲滅・方言矯正」をスローガンに掲げ、子どもたちに原則「標準語」(戦後は「共通語」という言い方がされるようになりました)を教えてきました。戦後から現在までも、学校(特に教室場面)は一般に共通語中心の世界と認識されています。最近のように方言が見直される時代になっても、教科書に方言が登場するのは国語の教科書のごく一部くらいでしかありません。そのために、私たちは学校で使うことば、特に先生が授業で使うことばは共通語なのだと思ひ込んでしまっているところがあるようです。

しかし、教育の世界とて方言と無縁なはずはありません。教科書の中のことばは確かに原則共通語ですが、地域の子どもたちが学校で共通語だけの生活をしているわけではありません。場面や相手によつて無意識に使われている話しことばとしての方言は、まだまだ健在です。先生が授業で使っていることばにも、意外な方言が含まれていることがあります。

気づかれない「学校方言」の世界

学校で校歌の練習をするときなど、歌詞のまとまりをさして皆さんは何と言うでしょう。小松出身の人であれば卒業式の練習のとき、音楽の先生が、「今日は校歌の1ダイメの練習をしましょう」と言うのを聞いたとしても不思議に思う人はいないはずです。ところが、この歌の歌詞のまとまりをさす「ダイメ(題目)」という言い方は、石川・富山両県でしか通じない、れっきとした方言なのです。隣の福井県を含め、他の45都道府県では1バン(番)、2バンとしか言いません。「ダイメ」は、学校で先生が使っているから共通語(つまり方言ではない)と思われているのです。このような例を方言の専門家は「学校方言」と呼んだりしますが、次回の〈教育に関する方言〉は、「学校方言」として知られる全国のいくつかの例のご紹介から始めたいと思っています。

連載
122

教育に関する方言 その2

前回ご紹介した、石川・富山両県における「学校方言」(「教育方言」とも言われる)の代表とも言える、歌の歌詞のまとまりをさす「くダイメ(題目)」に似た例は、全国的にも少なからず存在しています。今回は、石川県以外の地域での「学校方言」の例のご紹介から始めたいと思います。

富山県のガンピ、愛知県のビシなども学校方言

学校、特に小学校で掲示物などによく使う模造紙と呼ばれる紙があるのをご存じでしょうか。この模造紙の呼び名には、全国でいくつかの「学校方言」が見られ、例えば、お隣の富山県だけで通用する呼び名に「ガンピ」、愛知県、岐阜県で通用する呼び名に「ビシ」というのがあります。ガンピは模造紙が高級和紙の「雁皮(紙)」「金沢の金箔の箔打ち紙に使われているものでそれを利用した油とり紙を想像していただくといいでしょう)に似

ていたところから、ビシは模造紙がA4とかB5とかいう紙の大きさのB規格の最大の大きさであることからついたものです。

ほかには、宮城県で運動着のジャージのことを言う「ジャス」、山形県で①(マルイチ)、(一)(カッコイチ)を言う「イチマル、イチカツコ」、新潟県で教師が生徒をあてることを言う「カケル」、九州の宮崎県、鹿児島県などで黒板消しのことを言う「ラーフル」なども「学校方言」の例になり、それぞれの地域では、学校で先生が使っていることから、方言だと気づかれていない場合がほとんどです。一般には共通語が使われる場面と思われる学校で通用しているからこそ、逆に若い世代にもしつかり方言が受け継がれているという興味深いケースです。

コーカ(校下)も北陸を中心とした方言

では、あらためて小松の方言に話を戻し、「教育に関する方言」を見ていきます。小松を含んで、石川・富山両県で使われる、歌の歌詞の「くダイメ(題目)」に似

たものに、「コーカ」があります。コーカとは、小中学校の通学区を指す言い方で、共通語は「学区」ということになっています。コーカには「校下」の漢字が当てられ、明治以降に学校行政用語として用いられるようになったと考えられるものです。

もともと「県下」「城下」の「く下」と同じ言い方として関西地方で生まれたものが、北陸にも伝わったのだらうと考えていますが、関西から西の広い地域では、その後西日本共通語的に「校区」が使われるようになり、「校下」は現在では、北陸三県と岐阜県の一部を中心に使用されています。これも行政用語として用いられていることで方言とはあまり意識されていないものですが、れっきとした方言なのです。

ちなみに、外からの人の入り込みが多い金沢市内では「校下」「学校の下」の意味あい)に反発する保護者もいて、学校によつては、西日本共通語の「校区」への言い替えを始めています。

次回も「教育に関する方言」を続けま

連載
123

教育に関する方言 その3

今回も「教育に関する方言」を続けま

学校で使用する道具の方言

「筆箱」「筆入れ」には、フデバコ、フデイレバコなどを聞きましたが、フデバコの方が一般的な言い方だったのでしょうか。その中に入る「消しゴム」はゴムケシ(「ゴムケシ」では、「ゴムを消す」の意味に取れ、日本語の語構造からすると例外的ですが)で、ジケシ(字消し)という言い方も聞かれました。

今では知る人はほとんどいなくなりましたが、昔まだノートなどなかった時代に、ノート代わりに使った石の板をシェキバン(セキバンとも)と言いました。「石板」からです。そのシェキバンに小さな字を書くときに使った筆記具をシェケツと言ったそうで、今で言えば鉛筆にあたるものです。80歳代のある人からは、学校で鉛筆を使うようになったのは高等小学校

の頃からこの話を聞きましたので、今から70年ほど前まではシェケツを使っていたことになるのでしょうか。

「鉛筆」に対しては発音レベルで、かつてエンペツの発音も聞かれました。

同じシェキバンに大きな字を書くときに使った筆記具はゴフンと言ったそうです。「胡粉」からでしょうか。今のチョークのようなものですが、昔はそのチョークのようなゴフンで教師は黒板に、生徒はシェキバンに字を書いたそうです。

そのゴフンに代わって使われるようになったのが、今のチョークです。そのチョークのことを以前はハクボクと言いました。「白墨」です。おそらく、今は小学校でハクボクと言う先生はほとんどいなくなってしまったでしょう。

「ノート」も、今や学校ではノート以外の言い方が使われることはないと思いますが、現在の50歳代以上の世代ですと、小学校時代あたりにチョーメンと言っていたという人も多に違いありません。筆者もその一人です。チョーメンは漢字で「帳面」と書きます。そのチョーメンの間

に挟んで字を書くときに使う「下敷き」を、以前はシキバンと言ったそうです。尾小屋で聞いた語です。「敷き板」からでしょう。

「本棚」のことは、ホンダナ以外にホンバコ、ホンタテが聞かれました。ホンバコの方が古い言い方のように思いますが、人によつては、大きいのはホンダナ、小さいのはホンバコと区別するという人もいました。

子どもを評価することばの方言

教育と言えば評価がつきものです。「利口で聞き分けのよい子」はカタイコ(カテーコの発音も)と表現されます。形容詞カタイ(カテー)が「利口で聞き分けのよい」の意味となります。ハツメーナコ(発明な子)は「知恵のある利口な子」の意味です。逆に、「出来の悪い、駄目な子」はダツチャンボー、ダツチャンネンネのように表現されたようです。ダツチャンは「埒明かん」からの変化形で、「駄目だ」の意味です。

連載
124家族以外の人の呼び方の
方言 その1

今回は、前回までの〈教育に関する方言〉とも関係の深い〈人の呼び方〉に関する方言を取り上げたいと思います。ただし、〈人の呼び方〉の中でも、本連載の27回(2000年6月)から35回(2001年2月)にかけてすでにご紹介した、家族の「祖父」「祖母」「父」「母」「兄」「姉」の呼び方、そして「男の子」「女の子」「お転婆」の呼び方の方言は除きます。

自分をさすウラと「まづ芸術劇場うら」

人の呼び方の方言として、まずウラから見ることにしましょう。

ウラは北陸地方では福井県から石川県加賀地方に使われた、自分をさして言う場合の自称代名詞の方言です。小松でも男女ともに使われた方言です。最近では共通語形ワタシの普及で、ウラを使う人はあまりいなくなりましたが、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、ウラは北陸地方以外にも、関東地方の一部から中部地

方、そして近畿・中国・四国地方の広い範囲に分布していることがわかります。

ウラというと、今では、いかにも変わった言い方と思われるがちですが、もともとは「おいら」から変化した「おら」の「お」が「う」に変わった形と考えられています。「うら」は、中世末期にキリスト教布教のために日本にやってきたポルトガル人宣教師たちが残したキリシタン資料(当時の京都語の様子を知る貴重な資料とされています)の一つである『日葡辞書』(1603年)に、「Vraga(ウラガ)」。また「は、Vraga(ウララガ)」。〈訳〉俺が。卑しい人々が使う語(『邦訳日葡辞書』による)とあり、中世末期には京都で庶民語として自分をさす言葉として用いられていたウラ、ウララガが、福井を経由して石川にも伝わったものと考えることが出来ます。小松でもウラのほか、ウララも使われました。ウララというウラの複数形、つまり「私たち」の意味と思われるのですが必ずしもそうではなく、『日葡辞書』にもあるように、「私」一人をさしてウララが使われることもあります。この点は、福井県

の方言でも同じです。

ところで、ウラと言えば、石川県こまつ芸術劇場の愛称「うらら」を思い出す人も多いでしょう。劇場のホームページには「うらら」の名付けの理由は載っていないが、確か「私(たち)」をさす方言の「うらら」も意識した(ほかには「麗らか」の「うらら」も意識した)名付けだったように記憶しています。

余談ですが、これと同じ発想は、福井県を代表するタウン誌『月刊URARA』の名前にも見られます。このURARA(ウララ)も、「自分(たち)」をさす福井方言のウラの意味が込められていると聞いています。自分をさして使った方言ウラには特別な思い入れがあるようです。ただ、ウラをローマ字で表記して(しかもRAとララの部分をいかにも意味ありげにRとLで書き分けているところが、日本人の外国語・外来語嗜好の姿が垣間見えて、少々気に入ります。

今回はウラ、ウララの話で終わってしまいました。家族以外の人の呼び方の方言は次回に続けます。

連載
125家族以外の人の呼び方の
方言 その2

前回は、自分(自分たち)をさすウラ(ウララ)の話で終わってしまいましたが、今回もそんな家族以外の〈人の呼び方〉の方言をご紹介します。

自称代名詞はウラ(ウララ)のほかに、女性が使うワテがあります。また対称代名詞には、目下に使うワレ(複数形はワツラ)のほか、最近ではアンタ(アンタラ)がよく使われます。

オジは「伯父・叔父」にあらず

共通語でオジと言えば親の男兄弟の総称ですが、小松を含む北陸地方では男兄弟の「弟」をさす言い方として知られています。もちろん、小松市内での「弟」の言い方にはオジ以外の方言もあり、オジボー(大杉、符津など)、オッサ・オッサマ(尾小屋、オッサボ(符津)などが聞かれました。ただし、日本語の親族呼称には、自分より年下の者を呼ぶとき(呼称)は名前で呼ぶというルールがありますので、これらは

すべて人に説明するときの言及称です。

大杉では「二番目の弟」をニバンオジ、「三番目の弟」をサンバンオジとも言ったようです。「下の弟」をチサボーとも言いました。

では、「弟」をオジのように言うとしたら、本来の「伯父・叔父」のことはどう言うたのでしょうか。両方ともオジと言って同音衝突を起こしていたのかというと、そうではないようです。例えば、大杉ではオッサマ(伯父・叔父)対オジ・オジボー(弟)のような区別が聞かれました。尾小屋ではオッサン・オッサン対オッサ・オッサマ、符津ではオッサン・オジサン対オッサ・オッサボ、オジボー、安宅ではオジサン対オッサ・オッサボのような区別が聞かれました。

一方、「伯母・叔母」の呼称・言及称は、オバサン、オバチャン、オバサ(大杉)などです。

コッパオジは男兄弟の末っ子

性別に関係のない「末っ子」の総称(言

及称)はオトコです。

それに対して「男兄弟の末っ子」の言及称には、コッパオジ(大杉、尾小屋、龍助町)、コッパ(尾小屋、龍助町)、オトンボ(安宅)などが聞かれました。中でも、コッパオジ・コッパは卑称的で、コッパとは「木っ端」のことですから、人間扱いされていないかのようでかわいそうな気がします。

「孫」「曾孫」「玄孫」などの言及称は?

小松では「孫」はほとんどマコです。それに対して「曾孫」はヒコです。ヒコとは、もともと「曾孫」の雅語であったヒココからの変化形と言われます。「玄孫」のことは、大杉でマタゴ、尾小屋でシャシャコ、符津でチャシャゴという言い方を聞きました。

「実子」はワガコ(我が子)、「養子」はモライゴ(貰い子)、ヤシナイゴ(養い子)です。逆に養子から見た「義理の親」のことは、ヤシナイオヤ(大杉)と言います。「継父」はママチチ、「継母」はママハハです。

連載
126家族以外の人の呼び方の
方言 その3

前回、前々回に続いて今回も家族の「祖父」「祖母」「父」「母」「兄」「姉」を除く「人の呼び方」の方言を取り上げたいと思いますが、その前に前々回取り上げたウラ（自分をさす言い方に関連した話題から始めます）

大杉のゲアは白山麓の白峰方言につながら？

前々回に「自分」のことをさすウラ（複数形はウララ）を取り上げたときに合わせてご紹介すべきでしたが、小松市内でも東部山間地の大杉で、女性が主に使ったという自称代名詞のゲア（ゲア、ギャー、ゲーなどの発音も）という珍しい形を聞きました。

その由来等についてはつきりは分かっていませんが、周囲の方言とは異なる特徴を多く持つことから、専門家の間で石川県の「言語島」「言語の島」ともして知られる、白山麓の白峰方言の自称代名詞ギラ、そしてギラからの音声変化形として40歳代以下の若い男性に使用が見られるギャー

に酷似している点が注目されます。このことはその歴史的・地理的条件から、大杉、そしてさらに奥の旧新丸村（丸山・花立・新保）が、峠越えで白峰との交渉があつたらしいことと関係があるかもしれません。

「婿」と「嫁」、その他

小松市内では、「婿」のことはムコサン、「嫁」のことはヨメサンという言い方が一般的です。それぞれのことを話題にして話すときに使われる言及称です。ムコサン、ヨメサン以外では、尾小屋でムコサ、大杉でヨメサという言い方も聞かれました。龍助町や安宅町ではムコドンも聞きました。龍助町では、ムコドンが一般的言い方で、ムコがそれよりもぞんざいな言い方、ムコサは逆にそれよりも丁寧な言い方とのことでした。

「夫婦」のことはミョートという言い方が一般的で、妻が夫をさして言う言及称には、「父親」に対するトート、ツーツなどの呼称・言及称のほか、ダンナン、ダンナ、ウチノヒトなど、逆に、夫が妻をさして言う言及称には、「母親」に対するカーカ、

オッカーなどの呼称・言及称のほか、ヨメ、そしてジャーマ（大杉ではジャーマは使わないとのことでしたが）などが聞かれました。結婚しない「独身」の人のことは、ヒトリモン、ヒトリミです。

婿や嫁の立場から言う「舅」はオトコジュート、「姑」はオンナジュートと言ったようです。「養父母」のことはギリノオヤ、ヤシナイオヤです。

「夫をなくした女性」は、コケサン（尾小屋では「コケサ」とも）、コケで「妻をなくした男性」はヤモメですが、符津ではヤマメとも言ったようです。「やもめ」は本来、配偶者をなくした男女のどちらもさしましたが、「妻をなくした男をさすのが普通で、符津のヤマメはヤモメの音変化形です」。

アトツイは「再婚相手」のことです。「継母」はママハハ、「継父」はママチチと言い、そのどちらもさしてママオヤという言い方もしたようです。ママコは「継母」から見た子どもをさします。

以上、へ人の呼び方に関する方言を三回にわたって見てきました。次回は別のテーマにします。

連載
127

道具に関する方言 その1

今年も早10月を迎えました。秋といえど台風が多い時期だったはずですが、これも異常気象のせい、最近では北陸を襲う台風がめつつきり少なくなりました。そんな中で、田を黄金色に染めていた稲の刈り入れも早場米地帯の北陸では、ほぼ終わりを迎えます。

昨年4月から8月にかけて5回にわたって農業に関する方言をご紹介しましたが、今回は道具の中でも、農業と関連した道具類から取り上げてみたいと思います。

オドシとは恐喝のことではなく、藁山子のこと

文部省唱歌に「♪山田の中の一木足のかし 天気の良いのに みの笠つけて…♪」と歌われた秋の風物詩「かかし」のことをオドシと言いました。「かかし」をさすオドシは、小松をはじめとする北陸地方の広い範囲で聞かれます。オドシと

言えば、今では「恐喝」のことをまづ思い浮かべますが、実った田の稲をついばみにくる雀などの鳥をおどすのでオドシと言ったわけ。したがって、オドシは「かかし」に限らず、鳥をおどすための道具全般をさして使われた言葉です（筆者も福井の農家で育ちましたが、子どものころ見た、田に張り巡らしたキラキラ光るテープのようなものもオドシと言っていました）。

トミミは「唐箕」

トミミ（トミミと発音される場合も）というのは、豆や粉、麦などの穀物を上から入れて、風を起こす羽板を手で回して回転させ、その風で軽い殻を飛ばして、実と殻を選り分けるための農具です。以前はどの農家にもあったものですが、最近ではめつたにお目にかかれなくなりました。

もともと「唐箕」の字が当てられ、小松に限らず全国でこう呼ばれたので方言と言つべきではないようにも思いますが、その道具自体がほとんど使われなくなつて、共通語の世界でも一般の人の理解

語からは消えつつあり、農村部を中心にかるうじて理解され、使用されているという点で、方言に近い存在になっているように思いましたので、取り上げてみました。

トミミではなく、普通の箕（穀物を中に入れ、上下に振り動かした勢いで塵・殻などを飛ばすようにして取り除く道具）で塵・殻などを取り除くことをアオツと言ったようです。それに対して、トミミを使つてアオツことは、トミアオチと言ったそうです。市内南部の符津で聞いた言葉です。

収穫した野菜などを入れたテゴ

最近では使う人もめつつきり少なくなりましたが、以前は農家ですと大抵の家にテゴと呼ばれる入れ物がありました。テゴとは口が丸い形の藁製の入れ物で、肩からかけて使いました。筆者も子どもの頃は、畑で収穫した野菜を入れたり、春の山菜採り（ぜんまいや蕨採り）などでよく使ったものです。

〈道具に関する方言〉は次回に続けます。

連載
128

道具に関する方言 その2

今回も主に農業と関連した道具類の方言を取り上げます。

鎌の種類と方言

草刈り用の小型のクサカリガマに対して、木の枝などを切るための刃の厚い大型の鎌を符津でキガマ、大杉・尾小屋でネカリガマ、大杉でシタカリガマなどと言ったようです。それぞれ「木鎌」「根刈り鎌」「下刈り鎌」の意味でしょう。

稲刈り用の、刃が鋸のようになった鎌は、場所によってイネカリガマ（「稲刈り鎌」の意）、ターカリガマ（「田刈り鎌」の意）、ノコギリガマ（「鋸鎌」の意）などと言ったようです。ちなみに「鋸」のことはガンド、ガンドーなどと言います。

鎌の種類と方言

鎌の種類としては、田の畦塗りに使うヨツグワ、ヨツグワ（鎌の刃先が四つに分かれたもの）、畦塗りの仕上げに使うア

ゼヌリグワ、土起し用の刃先が三つに分かれたミツグワなどがあります。

鎌と関連しては、マクワ、クソクワという面白い言い方を符津で聞きました。マクワとは、右利きの人が左手を手前にして鎌を持つことを言い、逆に、右利きの人が右手を手前にして鎌を持つことをクソクワと言ったことでした。

「熊手」の方言ビブラの語源は不明

「熊手」とは長い柄の先に熊の手のような先の曲がった鉄の爪をつけた道具のことです。同じような形で竹製のものもあり、落ち葉などを掻き集めるのに使われる道具です。今でも屋外の掃除で使われることが多いので、「熊手（クマデ）」の名前を知っている人は多いでしょうが、一方で、ビブラという方言を知らない人が確実に増えています。「熊手」の方言ビブラは、その発音が変化した形を含め、福井・石川・富山の北陸三県と新潟県にその分布が見られました。ビブラに似て、田の土をならすための鉄製の熊手状の農具を符津などではカクサキと言ったようです。

「石臼」「篩」などの方言

「石臼」のことはヒキウスと言いますが、そのヒキウスで挽いたものを粉と皮に分けるときに使う、最も目の細かな篩をスイノと言いました。スイノと逆で、目の粗い篩をトーシカゴ、米用の篩をケンドンと言ったことです。

「藁を打つ槌」のことはワラカチキネ、ワラカチです。ここでのカチは、「うつ、殴る」の意味の動詞カツの連用形にあたるものです。

「肥料にする糞尿を運ぶための肥桶」は、タゴケ、タモケ、コヤシオケなどと呼ばれました。

「背負って物を運ぶための木製の道具」には、大杉でセータ（背板）から、尾小屋でセナカチ（背中当て）から、符津でニドラなどの名を、また大杉では、物を背負うときに、主に男性が使った藁製の厚い背中当てのカンザ、主に女性が使った薄い背中当てのコモの名を聞きました。

〈道具に関する方言〉は今回で終わります。

連載
129

勤勉に関する方言

いよいよ今年も師走を迎えました。今年最後の回の〈勤勉〉というテーマは一見難しそうに思われるかもしれませんが、わかりやすく言えば〈勤勉〉とは「一所懸命励むことと怠けること」ということで、それらに関する方言を取り上げてみます。

「励むこと」に関連する方言

一所懸命仕事に励むような真面目な人のことを、マメナ人と言います。マメナはまた、「マメニ」するののような言い方で、「頻繁に」といった意味でも使われます。

大杉で聞いた表現に、「手が（よく）動く」にあたるテガイノクがあり、共通語で言う「まめな」ことを表します。同じく大杉で、「仕事が早い、人より多く仕事をすること」をさすというテガツシヨナという言い方も聞きました。テガツシヨナについては、粟津方面で同様の意味のテゴシヤナ（「手（が）巧者な」に由来する）

という言い方があるとの情報を得ましたので、テゴシヤナがテゴツシヤナ、テゴツシヨナのような形を経て変化したものと考えられます。

リキムは「力を入れる」の意味もありますが、転じて「頑張る」の意味が生じて、リキンデ スル（頑張っている）のようにも使われます。

ショワシナイは「せわしない」の発音が変化した形で「忙しい」の意味になります。が、似た意味で大杉ではアツシエゴシ、尾小屋でアシエゴシエーという珍しい言い方が聞かれました。アツシエゴシ、アシエゴシエーのアツシエ、アシエは「焦り」の「あせ」に通じる形かもしれません。

一所懸命仕事に励むためには健康で、丈夫であることが大切です。そんな「元気な、体が丈夫な」といった意味で、ソクサイナが使われます。「元気で健康な」様子を表す方言のソクサイナは、小松に限らず、石川県内の広い範囲で今も方言として使われています。ソクサイは、「無事」の意味の漢語「息災」に由来します。かつての中央語であり、現代共通語でも使われ

なくてはなりません。が、共通語では極めて限られた場面での使用となっています。

「怠けること」に関連する方言

一方、「怠け者」をさす言い方として、符津でシエナハゲという言い方を聞きました。が、語源は不明です。

「酒ばかり飲んで怠けている人」はドンダクレです。ドンダクレは「飲んだくれ」の最初の「の」「三」有声歯茎鼻音）が、発音の仕方の似ている「ど」「ロ」（有声歯茎破裂音）に変化した形です。尾小屋では、「怠け者」のことをドンダクモン（「どうらくもん（道楽者）」からの変化）とも言ったそうです。

ドンダクレに似た言い方では、尾小屋でドンダフルという動詞を聞きました。ドンダフルというのは「仕事をしないで遊んでいる」ことをさす言い方だそうで、ドンダフツテヤーナンネ（仕事をしないで遊んでいて嫌だね）のように言うとのことでした。「横着な人」はオーチャクモンです。

連載
130

難易に関する方言

あけましておめでとつございます。本連載がスタートした98年4月から数えて足かけ12年目の年を迎えました。今後も引き続き、小松のさまざまな方言をご紹介します。いきたいと思いますので、愛読ください。

さて、アメリカのサブプライムローンに端を発した金融危機は日本経済にも大きな影響を与え、自動車業界の大量リストラ、就職内定学生の内定取り消しなど、多くの深刻な社会問題を抱えながらの難しい年越しとなりました。そんなわけで、今回は「難しい」こと、そしてその反対の「易しい」ことに関する方言を取り上げることになります。

ムツカシーとラクヤ、ラクナ

「難しい」は少し発音が変わってムツカシーと言います。例えば、ムツカシーヒトヤ（難しい人だ）のように使われます。逆に「易しい」ことはラクヤ、ラクナー（「楽や・楽な」）のように言います。

ジャマナイは気づかれない方言の二つ

筆者が金沢に来て間もないころの話です。ある銀行のキャッシュコーナーで操作に手間取っていたら、そばにいた係の男性に「ジャマナイカ？」と言われて、一瞬戸惑ったことを覚えていますが、まだ金沢の方言に慣れていなかったため、なぜ「邪魔じゃないか？」と言われるのかと不思議に思ったのです。

小松の方言でも使われるこのジャマナイが「大丈夫」の意味だということは間もなく知りましたが、銀行の係の人が初対面の筆者に「ジャマナイカ？」と語りかけたのは、その人が「大丈夫」の意味のジャマナイを方言だと気づいていなかったどこでも通じる言葉だと思っていたせいだろうと思います。共通語でも「邪魔」「邪魔じゃない」といった言い方をするので、「大丈夫」の意味のジャマナイも共通語だと思っている人が少なくないのです。方言研究者は、このようなものを「気づかれない方言」「気づかない方言」などと呼んで注目しています。方言だと気づかれない

くいせいで、若い世代にも受け継がれ、使われ続けているケースが多いからです。

「苦しく困難な目にあう」の意味のナンギスル、「困難な」の意味のナンギナのナンギは、いずれも「難儀」で、共通語の話しことばではめったに使われませんが、小松ではまだ方言として生きています。

アバヨの語源は「塩梅良う」

「調子、具合」のことをアンバイと言います。アンバイガ ワルイで「体の具合が悪い」といった意味にもなります。アンバイは「塩梅（えんばい）」と「按排（あんぱい）」の混合した語と言われています。

小松の方言ということではありませんが、「さようなら」の意味の俗語的表現として使われることのあるアバヨは、別れのあいさつとして用いられたアンバイヨ（具合よく）の短縮形なのです。

「何かが不足していて困る」ことを、フンジョナと言いました。フンジョナは「不自由な」の発音が変化した形です。

今回は「経済」に関する方言を取り上げます。

連載
131経済に関する方言
その1

世界的な経済不況の嵐の中で2009年がスタートしてはや1か月。そんな世相に合わせるわけではありませんが、今回は「経済」に関する方言、つまりお金にからむ方言を取り上げます。

コー（買う）は中央語（京都語）の古い姿

筆者の出身地福井県ではまず聞かれないのですが、小松を含む石川県の多くの方言では、学校文法で言うところのアワ行（古典文法で言うハ行）五段動詞の基本形（終止形）がアロー（洗う）、モロー（買もう）のような形になります。したがって、お金を出して「買もつ」という場合もコーとなります。

これらの、アロー、モロー、コーなどの発音は、かつての中央語である京都語の歴史で言えば、中世の時代に起こった古い発音の変化が方言に残った例です。少し専門的な話になりますが、「洗う」にあたるアロー、「買う」にあたるコーなどの発音がどのようにして生じたかを説明し

ましよう。

「買う」を例にすれば、古くはハ行四段動詞で基本形が「買みふ」だったものが、平安時代の11世紀ころに一般化したとされる「ハ行転呼音」という現象（語中・語尾のハ行音がワ行音に変化する現象）によって「買みう」になり、さらに「買みう」「kau」に含まれるアウ[u]連母音が中世に入って長音化してコーと発音されるようになったものです。西日本地域で共通語の「買みう」にあたる方言形がウ音便形と呼ばれるコーテになる（買みひて→買みういて→「買みつて」→コーテ）のも同じような音声変化の結果です。

西日本地域では、その後、音便形コーテ以外の基本形は文字表記に引かれて再びコーからカウに戻った地域が多いのですが、小松などの石川県内では古いコーの形を今に残しているというわけです。基本形がコーであるために、小松方言などでは活用語幹がコで統一され、打ち消し形「買みわない」にあたる形も伝統的方言ではコワン（西日本方言の一般的な形はカワン）となります。

「お金の意味のジェンは「銭」から

ものをコー（買みつ）ためにはお金が必要ですが、「お金」のことは小松の方言でカネとかジェンと言います。ジェンは言うまでもなく「銭（ぜに）」の最後の母音「が」脱落した形です。また、ジェンのように、現在のゼにあたる発音がジエとなる（セもシエとなる）のも、中世末ころまで中央語（京都語）の標準的発音とされたものの残存です。ジェン ハロー（お金を払う）、デコト ジェンガ カカル（たくさんお金がかかる）のように使われます。

そのジェンを数える、計算することはサンニヨスルと言います。サンニヨは「算用」が変化した形です。関連して「利害の打算をする」ことをソロバンスルと言うようです。ものの値段のことは、ネタン以外にただネ（値）とも言います。ネの方が古い形です。

「お金持ち」「資産家」のことは、ジェンモチ（「錢持ち」の意、オヤケ「大きな家」の意の「大宅」から）、ダンシヨ（「檀那衆」から）などと言います。「財産」のことはシンダイ（「身代」から）です。

連載
132経済に関する方言
その2

ゾーヨがかかっている分、華やかですね。
(今年の成人式会場から)

今回も前回に続いて〈経済〉に関する方言を取り上げます。

「費用」の意味のゾーヨは「雑用」から

あることにかかるお金、「費用」のことをゾーヨと言います。例えば、ゾーヨカカル(「お金がかかる」の意)のように言います。

「費用」のことをゾーヨと言つのは、小

松を含んだ北陸三県に、新潟、岐阜、そして近畿・中国・四国・九州北部地方などの西日本の広い範囲に及びます。これらの地域では、ゾーヨ以外にゾーヨーと最後を伸ばす形も聞かれることがあります。が、これはもともと「雑用」(歴史的仮名遣いでは「ざふよう」という漢語に由来するもので、ゾーヨーの形は、中世末期の京都語を記録した『日葡辞書』(1603)などにも載っています。従って、小松のゾーヨはゾーヨーから変化した新しい形ということになります。

マンゾー、マンゾは「万雑」から

費用と言えば、ゾーヨと関連の深い方言にマンゾー(マンゾとも)があります。マンゾーとは、村の共通経費を分担して納めること、その分担金のことを言います。一般にお盆と年末の年2回徴収されます。

マンゾーには「万雑」の漢字が当てられ、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)の「まんぞう(万雑)」の項によれば、「①『まんぞうくじ』(万雑公事)」の略。②江戸時

代の北陸地方で、一般の課役や村入用(村費)をいう」とあり、富山県、石川県、岐阜県、岐阜県大野郡の方言資料の存在が記されています。この記述から考えると、「平安中期以来、公領・荘園の土地に賦課されるようになった雑役(夫役)・雑物(現物納)。また、転じてその賦課権」(『日本国語大辞典 第二版』の「まんぞうくじ」の説明より)のことを言う「万雑公事」が中央から伝わり、北陸地方で語が略されるとともに、地方の生活の中で意味を変えた可能性があります。あるいは、先の「雑用」の語が中央から伝わった後、「万の雑用」の意味で北陸地方で「万雑」という言い方が生まれた可能性もあるかもしれません。

「算盤がツエー」ってどんな意味?

お金に関する慣用句として、大杉でソロバンガ ツエー(算盤が強い)というのを聞きました。「お金の使い方が上手だ」という意味です。

次回も〈経済〉に関する方言です。

連載
133経済に関する方言
その3

大事なシンガイゼン、家のどこに隠す?

いよいよ今月から本連載は12年目に入ります。連載が始まった平成10年に生まれた赤ちゃんが4月からはもう小学校5年生になるわけですから、つくづく時の速さを感じます。気持ち新たに12年目をスタートしたいと思いますので、引き続きご愛読下さい。

今回も前回、前々回に続いて〈経済〉に関する方言を取り上げます。

シンガイゼンとはどんなお金?

シンガイゼン(シンガイゼンの発音も)と聞けば、何かお金のことだろうとは想像できても、正確な意味が分かる人は少ないでしょう。小松の方言でシンガイゼンとは「へそくり」のことを言います。語の後半部のゼンは「銭」の古い発音「ゼ」がゼ二となり、最後の「二」が「ン」に変わったものです。

では、シンガイとは何でしょうか。初めてこの語を聞いたとき筆者は、シンガイとは「心外」、つまり、人に隠れてこっそりと貯めたお金ですから、周囲の人からすれば「意外なことをされて裏切られたような気になる」、つまり「心外な金」という意味だろうと思ったことを今でも覚えています。しかし、調べてみると、シンガイゼンのシンガイとは「新開」に由来することがわかりました。

江戸時代、農民がひそかに開墾したたんぼ(隠し田)は登録されず、そのため年貢米を納める必要がありませんでした。そのような隠し田のことを「新たに開墾

したたんぼ」の意味で「新開田」と呼び、隠語のように使われたところから「隠し事をする」意味の「しんがいする」という言葉が生まれたようです。そして、さらに「しんがいご(隠し子)」、「しんがいぜに(へそくり)」などという語も生まれたと考えることができます。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「へそくり」のことを小松と同じように、シンガイゼン、シンガイゼン、その下略形シンガイのように言うのは、長野、新潟、富山、石川、福井そして岐阜、奈良、島根、山口などの広い範囲に及びます。

「もったいない」はアッタラヤ

お金にもからむことですが、「もったいない」という意味を表す方言にアッタラヤというのがあります。このアッタラヤは、「惜しくも」の意味の古語「あたらし(可憐)」を形容動詞化したものと考えてよいでしょう。

今回で〈経済〉に関する方言は終わります。

連載
134地理・地形に関する方言
その1

鉱山跡のマンボ(トンネル)

本連載で取り上げている小松の方言のデータの多くは、これまでに何度か書いているように、筆者が小松市立博物館方言調査委員会の委託を受けて1996年から5年計画で実施した市内全域の調査で得られたものです。5年間、夏休みを利用して金沢大学の学生とともに調査で市内各地を動き回りながら思ったことは、安宅などの沿岸地域から小松バイパ

ス沿いの平野部、そして中ノ峠、大杉、尾小屋などの東部山間地まで、小松は実に多彩な地理・地形に出会える市だということでした。という訳で今回からは「地理・地形」に関する方言を取り上げます。

「トンネル」を指す方言マンボ、マンブ

小松の皆さんでマンボ、マンブという方言を聞いて「トンネル」の意味だとわかる人はどれくらいいるでしょうか。50歳代以上の人でぎりぎり使っていた、聞いたことがあるといったところでしょうか。

それほど忘れられかけているマンボ、マンブですが、小松のように「トンネル」をマンボ、マンブのように言った地域は意外に広く、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、マンボが石川県江沼郡、福井県、滋賀県栗太郡、マンブが福井県、京都府竹野郡、そしてこれらに似たマンボーが富山県砺波、福井県遠敷郡、マンボが山形県最上郡・西田川郡、新潟県岩船郡・中頸城郡、静岡県、愛知県北設楽郡、三重県、滋賀県彦根、京都府、マンブが山形県、奈良県生駒郡、島根県出雲、マンボーが富山県東

礪波郡、長野県東筑摩郡、静岡県、愛知県豊橋市、三重県飯南郡、滋賀県蒲生郡、京都府、奈良県吉野郡で使われていたことがわかります。福井県越前市(旧武生市)生まれの筆者も小さいころはマンブと言っていました。

「トンネル」を指すマンボ、マンブ及びそれに似た言い方の語源は、漢字で「間府、間歩、間分」などと書く「まぶ」だと考えられます。2007年にユネスコの世界遺産に認定された島根県大田市の石見銀山が話題になり、かつての鉱坑がテレビに登場したとき、「龍源寺間歩」のように「間歩」と呼ばれていたのを覚えている人もいるでしょう。この鉱山の鉱坑を指した「まぶ」がその後、道路や鉄道に作られたトンネルも指すようになり、方言として発音を変えてマンボやマンブなどと呼ばれるようになったわけです。

連載
135地理・地形に関する方言
その2

「ツツミ」は、もともと田の用水確保のために作られたものですが、プールの無い時代は、子どもたちの貴重な泳ぎ場所でもあった。(写真は昭和30年ころ)

前回は「トンネル」の意味の方言マンボ・マンブを取り上げましたが、今回もそれに続けて「地理・地形」に関する小松の方言を見ていきます。

「ため池」を指すツツミ、ツズミも方言

「灌漑用^{かんがい}に水をためた池」つまり「ため池」のことをツツミ、ツズミと言います。ただ、人工的なため池だけでなく、自然

に水がたまった池のこととも言うようです。ツツミがもともとの言い方で、ツズミはその変化形として生まれた形です。ここまで読んで「えーっ！ツツミって方言なの？」と思う人もいるでしょう。確かに『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「用水池。ため池」をツツミと言う地域は、小松などの石川県をはじめとする北陸三県のほか、北は青森県から南は九州の大部分・熊本県までの広い範囲に及んでいることがわかります。したがって、「ため池」の方言ツツミは少なくとも現代共通語では「ため池」をツツミとは言いませんから、方言とは言いがくても、特に中年層から高齢層にかけては、東北から九州までの非常に広い範囲で通用した方言ということになります。

ツツミと言えば「堤」という漢字があらわれるように、「土手。堤防」を指すツツミの存在も考えなくてはいいませんが、文献上では「土手。堤防」の意のツツミは、『万葉集』(巻14・三四九二)にすでに使用例が見られますから、東国語としてのツツミは(巻14は当時の東国出身者の歌を

集めたとされる「東歌」の巻です)相当古い可能性があります。それに対して「ため池」を指すツツミも、平安時代にはかつての中央語(京都語)としての使用例が確認できますので、小松での「ため池」の方言ツツミも、そうした古語の名残であることは間違いありません。

ほかの地形関連の方言から

「平らな土地」のことをヒラチと言います。言つまでもなく「平地^{ひらち}」の意味です。ヘーチとも言います。

ヒラチに対する「山」は「山」の中でも岩でできた山、「岩山」のことをイシヤマ、イッシヤマのように言います。イシヤマは言うまでもなく「石山^{いしやま}」からで、イッシヤマはそれからの変化形です。

「清水」の字があてられるシヨースは、「湧き水」を指すとともに、「湧き水が出る場所」をさしても使われます。

連載
136地理・地形に関する方言
その3

「サワ」から連想されるものの一つには滝がある。
写真は小松で1、2と言われている「西俣大滝」。

今回も〈地理・地形〉に関する方言を取り上げます。前回に続けて〈地形〉関連の方言から、今回は「サワ」という言い方について考えてみることにします。

サワは東日本と西日本で指すものが異なる

サワ(沢)という言い方は、実は長野県と岐阜県を分ける北アルプスを境に、東

日本では、北陸も含む西日本で言うタニ(谷)にあたる言い方として使われていることをご存じでしょうか。つまり、日本国内では、山地にある谷状の地形を表す地名の代表的なものとしてサワとタニの2通りの方言対立があるということなのです。

ところで、小松でサワと言うと、タニにある水の流れる場所、湿地を指すのが普通です。福井県の方言でも同じでしたから、筆者もかつては、東日本で聞く「沢」という地名、例えば長野県の有名な観光地である上高地から穂高連峰に向かう途中にある涸沢などの「沢」は、そこに水が流れているからそのように呼ばれるのだと思っていました。しかし、本来はそうではなく、「涸沢」の沢は西日本で言う「谷」の意味の「く沢」だったのです。

しかし一方で、国語辞典には、「谷」は「両側が台地や山にはさまれて低くくぼんだ地形の、細長い一続きの土地」、「沢」は「くぼんでいて、草の生えている湿地。山間の、源流に近い谷川」(『新明解国語辞典 第六版』三省堂)などのように記述され、

現代共通語としては、むしろ小松方言での使い分けに似た意味であることがわかります。このことは、かつての中央語(京都語)での「谷」と「沢」の意味が江戸時代中期以降に江戸に伝わって、明治時代以降それが標準的意味になったことを示すもので、それ以前の東日本地域での「谷」を指すサワ(沢)という言い方は、地名の中にしつかり残ったのだと考えられそうです。

かつての江戸語(関東方言)が明治時代以降に共通語標準語となったものが多く中で、西日本方言である「魚の鱗」のウロコ、「明後後日」のシアサツテが局地的に江戸(東京)に伝わって普及し、本来の江戸語(関東方言)のコケラ(鱗)やヤナアサツテ(明後後日)を押しのけて共通語になったのと似たケースと言えます。

サワも前回のツツミ同様、小松だけでなく全国の広い範囲で使われる方言の例でしたが、今回は、語形が同じでも意味に東西対立がある例(小松は西的)としてご紹介しました。

連載
137地理・地形に関する方言
その4

安宅のウミベリでは、たくさんのウミネコの姿を見ることができます。

前号ではタニ・サワとの関係で、夏にふさわしい、涼しげな滝の写真を載せましたが、暑い8月の〈地理・地形〉に関する方言ということで、海に関する方言から見てみることにします。

海に関する方言あれこれ

「海」は最近ではウミとしか言わなくなりつつありますが、伝統的な小松方言で

は、ウーミのように、ウの後が伸びて発音されたものです。この発音の特徴は、以前にも触れたことがあります。旧能美郡地域の方言(能美郡こたば)の代表的な特徴の一つで、ウーミと同じように「沖」もオーキと言います。「牛」をウーシ、「靴」をクーツと発音するのも同じ特徴ですが、最近では高年層の人からもあまり聞かれなくなっています。

海の〈地理・地形〉関係の方言には、「海岸」を指すウミベリ、「海岸の入り江で船が入ってくる場所」を指すフナミチ(船道)の意、「砂浜」を指すハマ、「海の近くの集落や砂浜」を指すハマトコロ、海の中の「暗礁」を指すノリアゲ(「乗り上げ」の意)、「浮いているように見える島」を指すウキジマなどがあります。

〈地理・地形〉というわけではありませんが、「海」に関する方言に「波」を指すノタがあります。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「波、波のうねり」を指す方言のノタは、北の青森県(旧南部藩域)から山形県庄内地方、そして新潟県、富山県、石川県、福井県、そして少し離れた島

根県(八束郡、隠岐島)に分布し、ノタの变化形と思われるネタが山口県阿武郡に分布しています。この分布から、北陸で使われたノタが北前船ルート(海上伝播)で新潟、山形(庄内)、青森へと日本海側を北上した可能性が高いと考えています。

川などに関する方言あれこれ

カワは、一般的に「川」のほか、「田畑に水を引く用水」も指して使われます。「川の淵」のことは、フチのほか、岸側の淵を指すカワブチ(「川淵」の意)やカワノアゲという言い方が聞かれました。「沼地」はヌカルミとかヌカと言ったようです。

ところで、前々号で「ため池」を指すツツミを取り上げましたが、それとの関連で、安宅町で「ため池」を指すタナケという方言が聞かれたことを紹介しておきます。

連載
138形容語の方言あれこれ
その1

「お陰さんでソクサイやし、
毎日歌で楽しんでるわいね」(市民センターのカラオ
ケ教室にて)

今回からは「形容語」(学校文法で言う「形容詞」「形容動詞」)の方言を取り上げることになります。

〈形容語〉の方言については、本連載でもすでにいろいろなものを取り上げていますが、今回からは、これまでにまだ紹介したことのない〈形容語〉を中心に取上げていきたいと思います。全国的に方言の共通語化が進む中でも、〈形容語〉の方

言には共通語にびったり置き換えられないものも多いため、比較的伝統的方言が使われ続けていることがあります。

健康状態に関する形容語

「元氣な」ことをソクサイナと言います。ソクサイは漢語の「息災」(本来は仏教用語で「災難を防ぐこと」を表し、一般的には「無事なこと」を意味します)に由来する語です。現代共通語から完全に消えてしまった言葉ではありませんが、現在「息災な」と言えば、ずいぶん古めかしい日本語という印象を与えるに違いありません。そんなソクサイナが、小松をはじめ石川県内の方言では、今も高年齢層を中心に比較的良好に使われているのです。大杉町ではソクサイナの形も聞かれました。似た意味でタツシヤナ(「達者な」)からも聞かれます。

「元氣な」の反対で「病気で体調が悪い」「つらい」などの意味を表す小松の方言には、ヒドイ、モノイ、タイソナなどがあります。珍しいところで、尾小屋で「コワイ」という言い方も聞きました。

「体調が悪い」ことを言うヒドイは金沢あたりでもよく使われ、加賀地方の人は「体調が悪い」意のヒドイも共通語だと思っている場合が少なくありません。こういう方言を専門家は「気付かない方言」とか「気付かれにくい方言」などと呼んでいます。他地域の人には誤解されやすい方言ですから気を付けましょう。

モノイは古語「物憂い」に由来する方言です。モノウイの「ウ」が脱落した形です。タイソナは「大層な」が意味と形を変えたものでしょう。

気温(温度)に関する形容語の方言

「暑い・熱い」は小松でもアツイ(「大変暑い・熱い」ことはテンボナ アツイ)ですが、「暖かい」にあたる言い方はヌクイが使われます。ヌクイは小松だけでなく石川県の広い範囲と富山県の一部でも聞かれます。南の福井県ではノクトイ、ノクテイが使われます(福井ではノクトイ、ノクテイは「頭があたたかい」の意味でアホ・バカの意味で使われることもあります)。ヌクイの関連語として、「生暖かい、生温かい」の意味のナマヌルイ、ヘナマルイも聞きました。

「蒸し暑い」は一般的にムシアツイですが、尾小屋ではムシヌクイという言い方も聞かれました。

「暑い」の反対の「寒い」は、サムイのほかにサブイが聞かれます。サブイの方が方言としては古い言い方です。関連して、「寒がりの人」をサムサガリとかサムガリヤと言います。

「熱い」の反対の「冷たい」は、チビタイ、チッターなどです。

臭い(におい)の一種のネグサイとは

梅雨時や夏など、ヌクイ、ムシヌクイ季節になると、食べ物が腐りやすくなります。そのようなものが腐ったような悪臭をネグサイと言います。

カイとエテの意味は?

暑くて汗をかいたりすると体が痒くなったりしますが、「痒い」をカイあるいはカイと言います。カユイのユイが融合してカイ、さらにその短縮形でカイになったものか、カユイのユが落ちてカイ、そして最後が伸びてカイとなったものでしょう。

エテは「痛い」の意味の方言です。イタイがエタイ、さらにエタイがエテと変化した形でしょう。「痛い」がエテと発音されるように、「痛み」をエタミと発音する人もいます。このようなイとエの混同、交替は東北地方から北陸にかけて広く見られる現象です。

次回も形容語の方言を続けます。

連載
139形容語の方言あれこれ
その2

寒い季節になると、ヌクイ食べ物が増えます。
「肉まん大好き〜!」(竹田知起くん、真彩ちゃん)

今回も形容語の方言を引き続き取り上げます。

今年の夏は梅雨明けも遅く、例年のような夏の本格的な暑さを体験しないまま、涼しい秋になってしまった感があります。というわけで今回は、暑さ・寒さなど、気温(温度)に関する形容語の方言から見ていきます。

連載
140形容語の方言あれこれ
その3

「あら、かわいらしい～。将来はキリョーヨシやね」
「えへへ、キリョーヨシってな～に？」(安宅町の北村芽衣ちゃん)

今回も前号、前々号に続いて形容語の方言を見ていきます。

イ 容貌に関する形容語の方言キリョーガ

「美しい」こと、「美人な」ことをキリョーガイーと言います。漢字を当てれば「器量がいい」です。キリョーガイーも、前々号で紹介した「元氣な」の意味のソク

サイナ(息災な)、タツシヤナ(達者な)と同じように、共通語として今も使われますが、やや古めかしい言い方に属するものであり、それが小松では高年層の方言として普通に使われているところに注目したいと思います。

「醜い」の意味のメンデは「面倒い」から

「美しい」の反対の意味の形容語「醜い」にあたる方言には、キリョーガイーの反対の言い方であるキリョーガワルイ(器量が悪い)のほかに、メンデ、メンデー、メンダイ、メンデクサイなどの言い方が聞かれます。メンデ、メンダイなどの言い方は「面倒」の語が形容詞化したメンダイに由来するものと考えられ、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「めんどう」の形で、①「めんどうだ。めんどうくさい」、②「困難だ。難しい」、③「気難しい。意地悪い」、④「恥ずかしい」、⑤「じれったい。もどかしい」、⑥「騒がしい。やかましい」、⑦「醜い。見苦しい。体裁が悪い」など、さまざまな意味で使われていることが分かります。小松のメンデの類は⑦の意味に

あたる例ということになるでしょう。『日本方言大辞典』では⑦の意味のメンダイの分布地域として、石川県、福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、和歌山県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、愛媛県、高知県が載っており、そこには、小松市内で聞かれたメンダイも石川県能美郡の例として載っています。メンダイ(面倒い)が元の形と考えれば、メンダイがそれにより近い古い形で、メンダイの「ダイ」の「e」の部分の融合・長音化して「a」となったのがメンデー、さらに最後の長音部分が落ちた形がメンデと考えられます。関連して、「美人ではないけれどもかわいい」人を指すメンドガワイラシーという言い方も聞きました。

「みすばらしい」様子を言うヒンソナ(貧相な)から、ビンボタラシー、ビンボクサイ、「みつともない」「不潔な、汚い」様子を言うヤンチャクサイ、ヤンチャナも聞きました。

次回もさらに形容語の方言を続けます。

連載
141形容語の方言あれこれ
その4

「図書館に来たら、オトナシーガニハナサンナンヨ」
(芦田町の民谷英祐くん)

今回はまず前回取り上げたメンデについての補足から始めます。

小松にもメンダイがあった

前回は、「醜い」の意味の方言として小松で聞かれるメンデ、メンデー、メンダイなどは、「面倒」が形容詞化したメンダイに由来するものだろうと書きましたが、これまでの小松での調査資料を詳しく見

ていましたら、符津での記録に「顔形が醜い」の意味のメンダイ、「器量が悪い、体裁がよくない、みつともない」の意味のメンデクサイがありました。これで、メンデ、メンデーなどが「面倒い」が元の形であることが証明されたと思います。

ちなみに、「めんどう」の「面倒」の字は借字で、そもその語源は「ぞつすること」がむだだの意の雅語「だうな」に「目」を冠した「目だうな」の変化。原義は「見るのも大儀な」の意(『新明解国語辞典 第六版』三省堂)とありますから、「醜い」もその原義から派生したものと考えればいいでしょう。

メンダイ、メンデとメンダナは別語?

メンダイ、メンデなどに触れたついでにメンダナという方言も取り上げておきましょう。こちらも漢字を使って書けば「面倒な」で、語源は先の「目だうな」に同じでしょうが、メンダナ(コ)と言えば「醜い(子)」ではなく「厄介な子」の意味になります。語源はもともと同じなのに、形や意味が微妙に変化し、メンダイ、メンデ

という形容詞形とメンダナという形容動詞形の二つが小松では併用されていることになりました。

オトナシーも共通語とは異なる意味が

オトナシーと聞けば、最近では共通語的な「大人しい」の意味を思い浮かべる人がほとんどかもしれませんが、小松では「静かな」の意味で使われることもあります。「静かな」の意味で使うという高年層の人の中には、オトナシーは「音無し」で「静かな」の意味になると思っている人がいますが、それが本当なら、こちらは「大人しい」(本来「いかにも大人らしい。大人びている」年配で分別がある「穏和だ。穏やかだ。すなおだ」などの意味)と「音無し」という別語に由来するオトナシーが併用されていることになり、すが、「音無し」は民間語源(正しい語源ではないが民衆が自分の使う語を合理化するために生まれた語源)と考えるべきでしょう。

連載
142

小松方言の世代差 その1

「ケンケン何回できる〜?」「よ〜し、競争しよっさ!!」
(安宅学童クラブにて)

明けましておめでとございます。今年も引き続きご愛読ください。

原稿を書いている今は12月初め。言葉に関して言えば、毎年恒例の現代用語の基礎知識選「ユーキャン新語・流行語大賞」が話題になる時期です。2009年は「政権交代」が大賞を取りましたし、年も改まりますので、本連載も今回から新たなテーマと交代することにします。

新しいテーマは「小松方言の世代差」です。

これまでも様々なテーマとの関連で小松方言の変化(高年齢層で使われている方言が若い世代で衰退している例)に言及したことがあります。江戸期の強固な幕藩体制下で全国各地に花開き、長く地域で受け継がれてきた伝統的方言は、テレビに代表されるマスメディアの影響や、最近のネット社会に象徴される情報化時代の中で衰退が進んでいます。全国的に見ても北陸地方の伝統的方言の衰退が目立ちます。

そこで今回は三つの方言調査テーマを参考に、小松市内での方言の世代差(世代的变化)の状況を見ていきたいと思います。三つのデータとは、一つ目が平成10年に田中鉄哉氏(当時金沢大学教育学部4年生)がJR金沢駅から大聖寺駅までの12の駅周辺集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、八日市町、島町)での調査結果、二つ目が平成11年に小川有美氏(当時金沢学院大学文学部4年生)が旧市内の龍助町・東町の70歳代から

10歳代の189名に行ったアンケート調査の結果、そして三つ目が筆者が金沢大学学生の協力を得て昨年(平成20年)JR倶利伽羅駅から大聖寺駅までの17の駅周辺集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での調査結果です。

遊び言葉の世代差から

今回は残りの字数も限られていますので、まず田中氏のデータをもとに遊び言葉の世代差を少しだけ見ておきます。

「片足跳び」の方言では、長田町の70歳代にシトンコというのが聞かれた以外は全ての世代でケンケンが使われていて、共通語形カタアシトビはまだほとんど使われていませんでした。「お手玉」の方言では、50歳代以上でオジャミ(30歳代の一部も)が聞かれたものの、30歳代以下では共通語形のオテダマに変化していることがわかりました。

では次回以降も世代差について続けます。

連載
143

小松方言の世代差 その2



「よ〜し、じいちゃんがサルコボンボしてやるぞ」「え〜!? カタグルマじゃないの?」(本折町の中谷武志さんと孫の武寛くん)

代差を見ることにします。

「肩車」方言の世代差

小松市内の高年齢層における「肩車」方言の分布については、すでに本連載の2回目と43回目でもご紹介しましたが、今回は長田町、八日市町・本折町、島町・符津町に絞って、あらためてその世代差とともに見ることにします。

全国の他の地域に比べて、北陸地方にはなぜか「肩車」方言の種類(バリエーション)の多いことが、国立国語研究所編『日本言語地図』や筆者自身のこれまでの北陸地方での分布調査などから明らかになっています。その種類の多さは、連載43回目(2001年10月)でも紹介したように、当時までに調査を終えていた小松市内約110地点で74種類もの方言形が聞かれたことからわかるでしょう。ただ、その多彩だった「肩車」の方言形も確実に共通語形カタグルマに取って変わられようとしているのです。

田中氏の調査結果によれば、長田町と八日市町では、70歳代(現在であれば80歳

代)でチンマンダが聞かれ、50歳代以下ではカタグルマが多くなり(30歳代で長田町にチンマンダ、八日市町でサルコボンボが少し聞かれています)、10歳代ではカタグルマだけになっています。島町も似た状況で、50歳代以上でハツンマが聞かれたものの、30歳代以下ではカタグルマだけとなっています。

一方、その10年後である一昨年、筆者たちが行った長田町、本折町、符津町での4世代調査では、長田町の70歳代でチンマンダ、本折町の70歳代でサルコボンボが聞かれた以外は、カタグルマの回答のみでした。やはり、この10年間で確実に共通語形カタグルマが浸透していることがわかりました。

「肩車」と言えば、遊び言葉の中でも、前回取り上げた「片足跳び」や「お手玉」と違って大人が介在する遊びであることと、「片足跳び」に比べると、「お手玉」と同様に共通語形の情報が比較的多いことが、共通語化が進んでいる理由と言えるでしょう。

遊び言葉の世代差(続)

前回に続いて今回からいよいよ本格的に小松方言の世代差について見ていくことにします。今回は田中鉄哉氏の平成10年の調査(長田町、八日市町、島町)での4世代調査と、筆者たちの一昨年、平成20年の調査(長田町、本折町、符津町)での4世代調査の結果から、「肩車」の方言の世

連載
144

小松方言の世代差 その3



カルタ型の四角いメンコ。「カットタ」という言い方は、カルタからの変化形と考えられます。

今回は遊び言葉の世代差から「面子」方言について見てみたいと思います。データーは筆者たちの一昨年(平成20年)の長田町、本折町、符津町での4世代調査によるものです。

「面子」方言の世代差

小松市内の「面子」方言については、これまでにも連載18回目(1999年9月

号)と連載90回目(2005年9月号)で高年齢方言の分布をご紹介したことがありますので参照していただければと思います。

ボール紙製の紙面子が流行したのは明治後期からと言われますが、今のようゲームなどなかった時代、つまり筆者も含めて50歳以上の人(特に男性)には懐かしい子どものころの代表的な遊びの一つだったと思います。

まず長田町では50歳代以上でカットタが使われているのに対して30歳代以下では共通語形と同じメンコでした。本折町では60歳代以上がマルチで30歳代以下がメンコ、また、符津町では60歳代がパス、50歳代がパーで20歳代以下がメンコでした。長田町のカットタは「カルタ」からの変化形と考えています。「面子」というと丸い形が普通ですが、昔は四角いカルタ型の紙面子もあったようですから、その名残の呼び方かもしれません。カットタの類は市北部や大杉谷川上流域、加賀市に近い日末・佐美などにも分布します。本折町のマルチは「マルウチ(丸打ち)」の変化形

でしょう。マルウチ、マルチは郷谷川流域の尾小屋から金野までと、大杉谷川・梯川流域、そして本折町など旧小松町域に分布が見られます。符津町のパス、パーは「面子」をたたきつけたときの音に由来するものでしょう。パスの類は市内沿岸部と木場潟周辺、大杉谷川中・下流域、日用川流域を含む市南部に分布します。

このように、50歳代以上では各地点での「面子」の伝統的方言形が聞かれるのに、30歳代以下では明らかに共通語化していることが分かりました。筆者が金沢大学学生の協力を得て平成19年夏から20年夏にかけて実施したJRR北陸本線沿線の石川県加賀地方の俱利伽羅から福井県嶺北地方の今庄までの、地域差と世代差の掛け合わせによるグロットグラム調査(32の駅周辺集落での4世代調査)の結果からは、50歳代以上では各地域の「面子」の伝統的方言形が見えるのに40歳代以下ではメンコ一色となっている状況(小松市内3地点と同様の状況が確認できます)。

連載
145

小松方言の世代差 その4

「おばあちゃん、こっちのえんぴつの方がとがつとるね」
「う〜ん、こっちもケンケンやけどなあ」

「鉛筆の芯がとがつた状態」の方言の世代差

今回は前回までの〈遊び言葉の世代差〉からいったん離れて、誰もが学校で使った鉛筆、その「鉛筆の芯がとがつた状態」を言う方言の世代差について見てみたいと思います。今回も前回同様、筆者たちの長田町、本折町、符津町での4世代調査(平成20年調査)の結果によるものです。

小松を含む北陸地方では、年齢に関係なく「鉛筆の芯がとがつた状態をどう言うか?」と尋ねると、富山であればツクツク、ツクンツクン、ツンツン、石川であればケンケン(「剣剣」からか)、キンキン、福井であればツンツンといった言い方を当たり前のように答えてくれます。ところが全国的に見ると、北陸地方のように「鉛筆の芯がとがつた状態」をさす擬態語の方言を持っている地域は意外に少なく、北陸以外では岐阜・愛知両県(岐阜ではチョンチョンなど、愛知ではトキトキ、トキントキンなど)と近畿地方の一部ぐらいで、それ以外の地方ではただ「トガッテル

(西日本ではトガトル)」としか言わないのです。ある状態をさす方言の擬態語が存在する地域としない地域があるという珍しい例です。

そんなことも知っていたいた上で、改めて小松方言の世代差を見てみると、長田町では40歳代以上でケンケン、本折町では80歳代でケンケラケン、符津町では30歳代以上でケンケンという伝統的方言形が聞かれました。それに対して、長田町では10歳代でトガッテル、本折町では60歳代でトガットル、30歳代でトンガットル、10歳代でトゲトゲが聞かれ、若い世代に向かって伝統的方言形の衰退が確認できます。一方、符津町では20歳代以下でトガッテルとともにピンピンが聞かれました。ピンピンは加賀地方で伝統的方言形のケンケンに代わって若い世代で勢力を伸ばしている新方言形で、その影響かと思われまふ。

なお、加賀地方でケンケンからピンピンへの交替が見られるのとは対照的に、福井県では今なお全世代で伝統的方言形ツンツンが健在です。

今月も「小松方言の世代差」というテーマで続けますが、4月はまた新しい年度のスタートでもあります。本連載は1998年4月の連載開始から、今月でいよいよ13年目に入ります。この間、一度も休まずに続けてこられた自身の健康に感謝するとともに、今後もできるだけ長く続けたいと思います。

連載
146小松方言の世代差 その5
「味の表現」の世代差

カライもんばっかり食べると体に良くないね。給食で使う塩分は2〜3グラムって決まってるよ。(南部中学校栄養職員 勇ノ上春美さん)

今回は「味の表現」から「塩辛い」の意味の表現と「塩味が」うすい」の意味の表現の世代差(変容を、前回と同様筆者たちの長田町、本折町、符津町での4世代調査(平成20年調査)の結果から見ることにします。

「塩辛い」の意味の方言の世代差

料理などの味付けで塩分が多過ぎる場

合に、その味を読者の皆さんは現在どのように表現するでしょうか。共通語の世界では、「塩辛い」「しょっぱい」にあたる言い方です。

長田町では30歳代以上がカライを、20歳代・10歳代がシヨッパイを使用していました。本折町では80歳代でシオカライとクドイが聞かれたほかは長田町とほぼ同じ状況でした。符津町では60歳代でシオカライ、シオクドイが聞かれましたが、比較的上の世代でも共通語と同じシヨッパイが聞かれました。確実に話し言葉の共通語形シヨッパイが若い世代を中心に浸透していることが分かります。

北陸地方では、石川県能登地方・富山県東部・福井県嶺南地方に、近畿地方から西日本に広く分布するカライ(富山東部にはシオカライも)が見えるほかは北陸地方特有の方言形クドイが分布します。加賀地方のJ・R沿線では旧松任市以北でクドイが使われていますが、南の美川駅から大聖寺駅間にはなぜかクドイがあまり使われていません。大聖寺を過ぎて福井県嶺北地方に入ると40歳代以上でクドイ

の広い分布が見られますから、なぜ小松などの加賀地方南部にクドイが使用されなかったのか(かつては使用したけれども後に近畿方言カライに追いやられた可能性も)は今のところよく分かっていません。

「塩味が」うすい」の意味の方言の世代差

加賀地方では「塩味が」うすい」ことをシヨモナイ、シヨムナイ、シヨムナイ、シヨモネー、シヨムネーなどと言います。この類の方言形は石川・富山両県と福井県嶺北地方の福井市以北に特有のもので、小松では、長田町・符津町が60歳代以上の高年齢層でシヨモナイ、50歳代でシヨモネーが聞かれ、20歳代以下では共通語形と同じウスイでした。それに対し、本折町では高年齢層でもウスイが聞かれ、30歳代でシヨモナイが聞かれたものの、若年層はウスイでした。やはり市内中心部の方が周辺部に比べて共通語形ウスイの受け入れが早かったのでしょう。

連載
147小松方言の世代差 その6
「疲労感」を表す形容詞の世代差

子守りはエレーけど、やっぱり孫はえちゃけやわ。(本鍛冶町の西出一美さんと孫の拓郎くん)

続「塩味が」うすい」の方言の世代差

前回は、筆者たちが平成20年にJ・R倶利伽羅駅から大聖寺駅までの17駅周辺集落で行った4世代調査の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「塩味が」うすい」の意味の方言に、50歳代以上でシヨモナイ、シヨモネーが聞かれたと書きましたが、平成10年の田中

鉄哉氏の同様の4世代調査の結果を見ると、長田町の70歳代と島町の50歳代以上でアマイが確認できました。「うすい」の方言の全国分布から、アマイがシヨモナイの類より古いことは明らかですが、この10年間でアマイが急速に衰退してしまっただけが分かります。

疲労感を表す形容詞の世代差

では、次に「疲労感」を表す方言の世代差を見ます。今回は、田中鉄哉氏の平成10年の調査で「(疲労などで)体に元気がなく、思うように動けなく感じたり、面倒臭く感じたりする状態を何と言いますか?」という質問に対して得られた結果を見ます。

田中氏による小松市内3地点(長田町、八日市町、島町)の4世代調査からは、同じ小松市内でありながら、3地点それぞれに少しずつ違った状況が見られます。

長田町では、50歳代以上でダーイ、70歳代でエレー、50歳代以下で共通語形と同じダルイが見られ、八日市町では、70歳代でエレー、50歳代以下でダルイ、30歳代で

ヒドイ、島町では、50歳代以上でヒドイ、50歳代以下でダルイが見られます。そして3地点ともに共通して10歳代ではダルイからの音声変化形タリーが見られる点にも注目したいと思います。

ちなみに、長田町の上の世代に特徴的なダーイは、金沢市や旧松任市で使われるダヤイの影響を受けたものと思われる。一方、島町の上の世代に特徴的なヒドイは金沢市にも少し見られるヒドイよりも、南の加賀市の高年齢層で使われているヒドイの影響を受けたものと思われる。

なお平成11年に小川有美氏が龍助町・東町の70歳代から10歳代の189名に行ったアンケート調査の結果では、50歳代以上で2割程度見られたヒドイが古い形と思われる、ほかにエレーが全世代で2割前後、ダルイが同じく3割前後見られ、10歳代・20歳代ではやはりダルイから変化した新しい形のタリーが2割程度見られます。

連載
148小松方言の世代差 その7
「たくさん」と「恐ろしい」の
世代差

楽しい昼食の時間。タント食べて大きくなってね(写真：中海保育所)。

今回は再び、筆者たちが平成20年にJR倶利伽羅駅から大聖寺駅までの17駅周辺集落で行った4世代調査(平成18・22年度科学研究費補助金基盤研究(C)「北陸新方言の地理的社会的動態の研究」[研究代表者 井上史雄]の成果の一部)の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「たくさん」と「恐ろしい」の意味の方言の世代差について見ることに

します。

「たくさん」の方言の世代差

ここでは『たくさん食べなさい』と言ったときの『たくさん』の部分はなんと言いますか』という質問に対する回答を見ます。

長田町では、70歳代でデカト、50歳代でタント、30歳代・10歳代でタクサンが、本折町では、70歳代でデカトとタント、50歳代・30歳代でタント、10歳代でイッパイが、符津町では、60歳代でタントとイッパイ、50歳代でエツベ、30歳代以下ではイッパイが聞かれました。高年層の一部で聞かれたデカトが最も古い形で、タントがその次、30歳代以下で主に聞かれた共通語形とも一致するタクサン・イッパイが新しい形と考えられます。

タントは、JRの駅で言うところ粟津・西金沢駅間の30歳代以上で使われていることが分かりました(20歳代・10歳代はタクサン・イッパイ)。能美市根上総合文化会館音楽ホール「タント」の名は、「たくさん」の意味の方言タントも意識されている

名付けと聞いています。

南の加賀市ではタントがほとんど使われず、代わりに50歳代以上で福井県に続くギョーサンが使われています。また、金沢・倶利伽羅駅間では倶利伽羅・津幡・森本の高年層でデカイコトが少し聞かれたほかは、タクサン・イッパイの普及・共通語化が目立ちます。

「恐ろしい」の方言の世代差

「恐ろしい」にあたる方言としては、小松市内3地点ともに、50歳代以上ではオトロシー(かつての中央語⇨京都語オトロシーからの変形)、30歳代以下の若年層ではコワイ(音変化形コウエー、コエーを含む)が聞かれました。コワイはオソロシーの後に関西地方で流行した形ですが、それが東京にも取り入れられて話し言葉の共通語形の地位を得たものです。オソロシーは書き言葉の共通語形のイメージが強いので、小松の若年層にはコワイの方が人気があることが分かります。

連載
149小松方言の世代差 その8
「馬鹿」を指す方言ダラの行方

「王手!」「あれ?ちょっと待った」「ダラ言うな。『待った』は反則やぞ」(撮影は、市民センター)

ていると、ヒロインの父親、そしてヒロインの夫やその両親が、石川県で『馬鹿』を指す方言として盛んに使われるダラやそれに似たダラスを使っている。どうしてあんなに離れた場所でも同じ方言が使われているのか』といった内容です。地元の新聞の投稿欄でも似た内容の投稿を何度か見掛けたことがあります。

そういう質問をする人たちの多くは、ダラが石川でしか使わない独特の方言だと信じていたようです。そして、真宗王国と言われる信仰深い土地柄ですから、『馬鹿』を指す方言でさえ仏教に由来すると考える人が出てきたのです。

小松でも使われるダラについては、本連載の60回(2003年3月)で「ダラは本来『知恵が足りない』の意の『足らず』が、タラス→ダラス→ダラと形を変えたものと考えられます。仏教用語の『陀羅尼教』(だらにぎょう)の『陀羅』とは関係ありません」と、ごく簡単に触れています。

つまり、ダラは決して石川だけの方言でも、また仏教用語「陀羅尼」に由来する方言でもなく、もとはかつての中央語地

域・京都あたりで生まれた「馬鹿」を意味するタラス(足らず)が周囲に分布を広げる中で、北陸の石川・富山両県ではダラと形を変えました。また、同じように西に向かつて京都を旅立ったタラスが、山陰の鳥取(ヒロインの夫の出身地・境港)や島根(ヒロインの出身地・安来)にたどり着いたのが、『ゲゲゲの女房』に登場するダラス、ダラなのです(新編の一部にはタラスも分布します)。なお、「アホ・バカ」方言の全国分布は、大阪の某民放局のテレビ番組「探偵・ナイトスクープ」で1991年に放送された「全国アホ・バカ分布図の完成」で研究者の注目するところとなりました。

そんな歴史を持つ小松のダラも、筆者たちのJR北陸線沿線の4世代調査によれば、30歳代以下でアホの使用が少し見え始め、10歳代ではダラよりもアホが優勢となっています。今後のダラの行方を見守りたいと思います。

この4月からNHKで放送されている連続テレビ小説『ゲゲゲの女房』をご覧ください。筆者も毎回欠かさず見ていますが、このドラマが人気を博しているせいで、最近は方言に関する講演の際や身近な人たちから、ドラマに登場するある方言について度々質問を受けるようになりました。

その質問とは、「ゲゲゲの女房」を見

連載
150

小松方言の世代差 その9
「かわいい」と「おもしろい」
の世代差



あら、エチャケナ子やね〜。
(にっこり笑顔の太田和真ちゃん)

今回も、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の結果から、小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「かわいい」と「おもしろい」の意味の方言の世代差について見ることにします。

「かわいい」の意味の方言については、3地点ともに50歳代以上ではエチャケナが聞かれました。50・60歳代ではカワラシ

も聞かれましたが、代表形は何と言ってもエチャケナです。それに対して、40歳代以下ではエチャケナは聞かれず共通語形と同じカワイーを使っていることが分かりました。

エチャケナは古語辞典にも載る、かつての中央語(京都語)の「いたいけな」に由来する方言です。元は「痛い気」の意味で「幼くて痛々しいさま」を表し、さらに「幼くてかわいらしいさま」も表すようになり、それが北陸地方に伝わって、発音を少し変えた形で今も方言として使われているのです。

現代共通語でも「いたいけな」は使われますが、「幼くて罪がない、いじらしい」といった意味で、古語「いたいけな」が表した意味の中の「幼くてかわいらしい、さま」の「かわいい」の意味は、むしろ小松などのエチャケナが受け継いでいるのです。

ただ、今回の筆者たちの調査で分かったことは、志受俊孝『金沢の方言―金沢弁のいろいろ―』(北国出版社 1983年)にも載っていて、以前は金沢でも使われたはずのイチャケナ(「かわいらしい」)

が、松任駅以北ではカワイラシ、カワイーに席巻され、聞かれなくなっていることです。それに対して、加賀笠間寺井駅間では60歳代以上でイチャケナ(加賀笠間、小舞子)・エチャケナ(寺井)が聞かれ、小松市内3地点では50歳代以上、さらに動橋大聖寺駅間では30歳代以上でまだエチャケナが聞かれ、金沢から離れるほど共通語化(カワイーの普及が遅れていることも分かりました。ちなみに、富山県内、福井県内のJR沿線ではエチャケナの類は聞かれませんでした。

「おもしろい」の意味の方言については、小松の3地点も含めてJR北陸線沿線の石川・富山両県の範囲で、世代を問わずオモシーが聞かれました。金沢・松任駅間では関西方言の影響を受けたオモイも少し聞かれましたが、現在のオモシーの使用状況を見る限り、当分はオモシーが使われていくことになりそうです。

連載
151

小松方言の世代差 その10
「自転車」と「とても」の方言
の世代差



「通学は、毎日チャリです」(中高校生にとって、自転車は大切な移動手段)

今回は、伝統的小松方言が若い世代に向かって変容する中で、若い世代が関西方言の影響を受けている例として、「自転車」の方言と「とても」の方言の世代差について見てみたいと思います。これまで同様、筆者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心とします。

「自転車」については、物そのものが新しいですから江戸時代以前からの伝統的方言が存在するわけではありません。小松市内3地点の50歳代以上では共通語と同じジテンシャのほか、方言的なジデンシャも少し聞かれました。そして、興味深いのが40歳代以下で聞かれるチャリンコとチャリです。

チャリンコは東京発信型の「自転車」を指す新方言で、1970年代に全国に広まったと言われているものです。小松市内の3地点もそうですが、JR北陸線沿線の4世代調査の結果からは、北陸地方では、まず全国区のチャリンコが先に使われるようになり(石川・福井両県では主に50歳代からチャリンコの分布が見え始めます)、後にチャリンコの後を追うようにチャリが新たに侵入しているように見えます。チャリはチャリンコの下略形として生まれた関西発信型の新方言です。小松中心部の本折町では20歳代以下で、長田町と符津町では10歳代以下で使われていることが分かりました。チャリンコ、チャリが普及し始めたことで、若い世代

ではゲンチャリ(原動機付自転車)、ママチャリ(主婦層向け買い物用自転車)などの言い方もよく使われています。

次に「とても」の意味の方言の世代差を見ます。調査では「とても暑い」という場合の「とても」にあたる言い方を聞いていますが、小松市内3地点では、50歳代以上でテンポニとエライが聞かれました。エライは北陸3県に広く聞かれる形ですが、テンポニはJR北陸線沿線では小松市と加賀市を中心とした範囲にだけ聞かれる方言形です。それに対して30歳代以下ではタツダ(タツタも)とメツチャが聞かれました。タツダは小松市と加賀市を中心に「ただ」の強調形として独自に生まれた新方言と考えられます。一方、関西発信型の新方言形メツチャは、「めっちゃめっちゃ」の「めちゃ」の強調形です。北陸地方でも30歳代以下、特に20歳代以下で急速に普及していることが今回の調査で明らかになりました。

連載
152小松方言の世代差 その11
「しもやけ」の世代差

昭和38年の「三八豪雪」(撮影地は寿町)。雪かきで、シンバレに悩まされた人も多かったことでしょう。

100年ぶりとも言われた「猛暑」「酷暑」の夏も9月下旬にはようやく終わりを告げ、一転秋の気配が濃くなりました。間もなく北陸はまた冬、そして雪の季節が訪れます。今回は少し気が早いですが、その冬の生活と関係の深い「しもやけ(霜焼)」の方言の世代差を見ることにします。

「しもやけ」の方言の世代差

冬になって低温環境が続くと、手足や耳などが赤く腫れてできることのある「しもやけ」。筆者も「しもやけ」の得意な体質で、毎年のように痒い思いをしてきました。全国的に見ると、共通語と同じシモヤケは、ほとんど雪の降らない関東地方から南の太平洋側を中心に分布しており、「霜」が原因でできるとの語源意識に支えられた語形と考えられます。一方、東北地方から本州の日本海側の降雪地帯にかつて広く分布した方言形はユキヤケです。雪が降る地域では「雪」が原因でできるとの語源意識が働いたためでしょう。北陸地方でも富山県、福井県のほか、石川県の能登地方にユキヤケが分布していましたが、今回のJ R北陸線沿線での4世代調査では高年層でもユキヤケはほとんど聞かれませんでした。「しもやけ」を指すユキヤケの衰退には、スキーなどをしている紫外線が肌が焼けることを指して使われることの多い共通語ユキヤケとの同音衝突が影響したと考えられます。

す。

では、北陸地方で「しもやけ」の方言形ユキヤケの分布が見られない石川県加賀地方での方言形が何かと言うと、シンバレ、シンバリでした。今回のJ R沿線調査でも70歳代以上で比較的多く聞かれ、旧松任市から旧寺井町にかけては50歳代でも聞かれました。小松市内でも長田町と本折町の70歳代でシンバレが確認できましたが、それ以外ではシモヤケしか聞かれず、近い将来、シンバレは小松の方言から消え去る運命にあると言えそうです。

シンバレのシンは「霜」ではなく、東北から日本海側の降雪地帯で、ひどく冷えること、濡れた洗濯物などが冷えて固まることを指す方言シンバルに由来する「凍腫れ」の変化形と考えられ、加賀地方のほか、東北地方北部や岐阜県北部にも分布が見られます。北海道方言として有名なシバレル(とても冷える、凍る)の意)は、このシミバレから変化したシバレが動詞化した形と考えられています。

連載
153小松方言の世代差 その12
「(雪に足が)はまる」の世代差

昭和56年の「五六豪雪」。足がゴボルほどの大雪も近年は少なくなりました。

今年もまた年の瀬、師走の月を迎えました。小松でもそろそろ雪の便りが聞かれることでしょう。そこで、先月の「しもやけ(霜焼)」に続いて、今回は冬の生活語彙の中から「雪に足がはまる」の世代差を見てみたいと思います。

なお、「(雪に足が)はまる」ことを指す方言の市内での地域差については、本連載23回(2000年2月号)でも取り上げ

ています。

共通語にはない「(雪に足が)はまる」の方言

共通語のお膝元である東京ではほとんど雪が降りません。ですから、雪国北陸の冬の生活にとっては基本的な言葉であっても、東京では使う必要がないので共通語形が存在しないというものがあります。主に「(雪に足が)はまる」ことを指す方言もその一例と言っています。

小松市内での「(雪に足が)はまる」の世代差

筆者たちが平成20年にJ R北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)の結果を見ます。

長田町では70歳代でオチルが聞かれたものの、50歳代以下ではハマルでした。本折町では60歳以上でハマルとの併用で「ゴボルが聞かれましたが、50歳代以下ではハマルでした。符津町では50歳代以上ではやはりハマルとの併用で「ゴボルが聞か

れ、それより若い世代ではハマルでした。つまり、J R沿線の市内3地点では、中高年層でこそ伝統的方言形である「ゴボル」やオチル(寺井駅周辺の高年層で使われるウツルは、小松市の北の能美市に広く分布する伝統的方言形で、オチルあるいはオツルからの変化形と考えています)の使用が確認できたものの、急速に共通語化(雪に限らず使われるハマルの使用)が進んでいることが分かりました。これと似た状況は南の加賀市の三駅(動橋、加賀温泉、大聖寺)周辺でも確認できました。一方、今回のJ R北陸線沿線調査では、松任駅以北の北加賀地方で「ゴボル」が根強く(30歳代以上で)使われていることが確認でき、「(雪に足が)はまる」については、金沢市を含む北加賀地方より南加賀地方の方が共通語化が進んでいるという意外な結果となりました。「ゴボル」が金沢市方面から南に勢力を拡大したものの、小松市や加賀市ではそれが50歳代以下にまで普及する前に共通語ハマルが勢力を伸ばしたためかもしれません。

連載
154小松方言の世代差 その13
― 接続助詞「から」の世代差 ―

「先生、外で遊びたいよー!」「雨降つとるしだめやわ。じゃあ部屋の中でジャンプして遊ぼう」

明けましておめでとーございます。引き続き本連載をご愛読ください。

今年も昨年1月号から始めた「小松方言の世代差」のテーマを続けます。今回は文法事象の世代差を取り上げますが、これまで同様、筆者たちが平成20年にJRR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心に述べることにします。

順接の接続助詞「から」の方言の世代差

「普段家の人や昔からの友達と気を使わずに話すとき』『雨が降っているから行くのはやめろ』『降っているから』のころはどう言いますか」という質問に対して答えられた、理由を表す順接の接続助詞「から」にあたる方言の世代差を見ます。

小松市内3地点での調査結果を見ると、長田町、本折町、符津町のいずれにおいても、50歳代以上では「アメ フットル サカイ」のように、「サカイ(サケー、サケの形も)」類が使われています。それに対して30歳代以下では、サカイ類は聞かれず、「アメ フットルシ」のように「シ」が使われています。

50歳代以上で聞かれたサカイ類のうち、サケーはサカイ「sakai」の「e」が母音融合で「a」と長音化した形で、サケはさらに「e」の長音が脱落した形です。つまり、サカイが最も古い形で、その音声変化形としてサケー、さらにサケが生まれたと考えられます。サカイ類の全国分布

を国立国語研究所編『方言文法全国地図』(第1集33図)で見ると、近畿地方を中心に、北陸地方から東北地方の日本海側にサカイ、サケ、スケ、シケなどの形で連続した分布を見せており、室町時代以降の京都語サカイが、かつての日本海側の海上交通路によって北に運ばれた結果と考えられています。

一方、「シ」は順接の接続助詞として関西地方で新しく生まれた新方言形です。南の福井県では、高年層のサカイ、サケに、愛知県など中部地方からの伝播と思われる「デ」の広い使用に阻まれて、シは10歳代の一部を除いてまだほとんど使われていませんが、石川県では金沢市がいち早く関西新方言形のシを受け入れ(50歳代でもシを使用)、サカイ類に代わるものとして金沢市から周辺に著実に勢力を伸ばしていることが今回の調査からも確認できています。

連載
155小松方言の世代差 その14
― 「買わない」の世代差 ―

「いいちゃん、このおもちゃ欲しい〜」「さっきもコータシ、もうコワンよ」

今回も前回に続いて文法現象の世代差を取り上げます。今回は否定形「打消形」の「買わない」の世代差を見ることにします。これまで同様、筆者たちが平成20年にJRR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での結果を中心に述べます。

「買わない」の方言形の世代差

長く京都を中心とした近畿地方の方言の影響を受けてきた北陸地方の方言では、「買わない」にあたる方言形はもともとカワンでした。学校文法的に説明すれば、カワンは動詞「買う」の未然形カワに否定(打消)の助動詞「ず」の連体形(後に終止形としても使われた)「ぬ」から変化した形が付いた形です。

ところが、小松市以北の加賀地方の方言では50歳代以上の世代で「コワン」の形が聞かれることがあります。今回の筆者たちの調査でも本折町の70歳代と符津町の60歳代で「コワン」が聞かれました。もともとカワンが使われていた小松市以北の加賀地方でなぜ「コワン」という形が生まれたのか。このことについては、ことばの体系性という点から興味深い事実が確認できます。

京都語を中心としたかつての日本語の歴史を見ると、中世時代にアウ「u」連母音がオー「o」に変化しました(中世末期までは現在のオーよりも口の開きの大き

いオーだったと考えられています)。例えば「道具(だうぐ)」がドーグと発音されるようになったのも、この時代の変化によるものです。この時期に、「買う(買ふ)」のような、かつての八行五段動詞の終止・連体形も「買う」がコー、「洗う」がアローのように変化し、それが北陸地方に伝わり、中央語ではその後、表記に引かれて再びカウやアラウに戻ったのに、石川県方言では今も中年層以上でコーのまま使われているのです。その結果、終止・連体形「コー」の「こ」で活用語幹を統一しようとして、ある時期「コワン」(場所によっては「コイタイ」「コエバ」などの形も)が生まれたと考えられるわけです。

その「コワン」も今や衰退しつつあり、長田町では4世代とも、本折町と符津町でも50歳代以下ではカワンしか聞けませんでしたが、多くの方言が共通語化に向かう中で、「買わない」のような動詞の否定形(打消形)では「コワン」こそ使われなくなりつつあるものの、中学生を含む若年層まで、方言形カワンがしっかり使われていることは頼もしいことです。

連載
156小松方言の世代差 その15
「行かなかった」の世代差

「去年はどこもイカンカッタね」「今年は旅行したいね。沖縄とか?」「行きたーい!」

今回も前回に続いて否定形の世代差を見ることにします。今回は共通語の「行かなかった」にあたる方言の世代差を取り上げることで、小松での否定過去表現の変化について見てみたいと思います。

否定過去表現の世代差

否定過去表現は、共通語では「動詞未然形＋なかつた」の形で表現されますが、筆

者たちが平成20年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点での結果では、「行かなかった」にあたる方言形として、本折町の80歳代でイカンダが聞かれたほか、70歳代以下の広い世代でイカンダ、そして50歳代以下、特に30歳代以下でイカンカッタが聞かれました。

このような状況から、小松では古くはイカンダが使われていましたが、その後にはイカンダが使われるようになり、さらに新しくイカンカッタが使われ始めたという歴史が推定されます。つまり、小松での動詞未然形に付く否定の過去を表す方言形式は、「ナンダ」「ンカッタ」「ンカッタ」と変化したことが分かります。

否定過去表現の全国分布を見ると、ナンダはかつての中央語地域の近畿地方を中心に、北陸全域も含んで、長野・山梨・静岡の一部から西、四国の瀬戸内海側、鳥取・岡山から東の広い範囲に分布していた、かつて京都を中心に東西に分布を広げた跡を見ることが出来ます。一方のナンダは、ナンダの分布域の中の加賀地

方南部(松任から南)と三重・奈良の一部にまとった分布が見えます。

ナンダの分布域でナンダが生まれていることについては、「ナンダのナが落ちた」と考えれば分かりやすいのですが、ナンダとは関係なく、否定のンに過去のダ(過去のタは「読ンダ」のようにンに続く場合はダになることへの類推で)を付けた結果と解釈する研究者もいます。

ンカッタは、本連載の45回(2001年12月)でも取り上げていますが、専門家の間で「ネオ方言」と呼ばれている、共通語の干渉を受けて成立した方言と共通語の中間的スタイルの一つで、ンカッタの場合、方言形の行カ(「行かない」)＋共通語形の行カナカッタの傍線部が組み合わさった形と考えられます。近畿地方を中心に西日本地域で勢力を拡大している新しい方言形です。

連載
157小松方言の世代差 その16
「高くない」「行かなくて」等の世代差

「立派なカニ。高いんでしょう?」「シーズン終わりのカニはタコネーし、お買い得だよ」(3月15日、本折町の山岸鮮魚店にて撮影)

今年もまた4月の新年度を迎え、本連載も14年目に入りますが、テーマは当分の間、「小松方言の世代差」ということで、さまざまな方言事象の世代差(変化)を取り上げていくことにします。今回も前回、前々回に続いて、否定表現関連の事象の中から、共通語の「高くない」(形容詞の否定形)、「ない」(あるの反対語)、そして「行かなくて」にあたる方言形の世代差

を取り上げることにします。

「高くない」「ない」の世代差

JR北陸線沿いの小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での「高くない」にあたる方言形の世代差については、3地点ともに、50歳代以上ではタコネーが使われていますが、30歳代以下では共通語化したタカクナイが使われています。

タコネーのタコの部分は、本来タカクだったものが、中央語(京都語)で平安時代に発生した音便現象によって、タカク↓タカウ↓タコーの変化が起こり、それが北陸にも伝わって最後の長音を落とした形と考えられます。一方、タコネーのネーは、ナイ[na]の[ai]の部分で[e]に変化した形で、このような変化は「ある」の反対語の「ない」にあたる方言形も含めて、加賀地方の金沢市以南から福井県の嶺北地方にかけて集中して見られる現象です(それに対して、金沢市から北と福井県の嶺南地方や滋賀県ではナイが分布します)。

ところで、「高くない」の「高く」の部分

がタコ(滋賀県ではタコー)となるのは金沢市以南で、金沢市でも森本から北では富山県も含めてタカ(タカナイ)となります。

「行かなくて」の世代差

小松市内3地点での「行かなくて」にあたる方言形については、3地点ともに、50歳代以上で伝統方言形のイカンデが見られ、30歳代以下ではイカンデに混じって新しい方言形であるイカンクテの使用が見られます。先ほどの「高くない」では30歳代以下で共通語化が見られましたが、「行かなくて」のイカンクテは、「行かない」にあたる伝統方言形イカンに共通語形のイカナクテが干渉し、「イカン(方言形)＋クテ(共通語形)」となったネオ方言形と呼ばれる形です。近畿地方で生まれて北陸に勢力を伸ばしている形で、加賀地方では、金沢、松任方面にいち早く普及して、それが小松にも影響を与えているようです。

ところで、「高くない」の「高く」の部分

連載
158

小松方言の世代差 その17
「正座する」と「胡座をかく」
の世代差



「オツクバイしとつたら足がしびれたわ」「わしゃアグチカイとつたし大丈夫じゃ」

前号まで3回にわたって取り上げてきた否定表現関連の項目は一旦終え、今回は座る動作としての「正座する」と「胡座をかく」にあたる方言の世代差について見たいと思います。

「胡座」と「正座」の方言の小松市内の広い範囲(市内80集落)での分布については、本連載15回目(1999年6月号)でも取り上げていますので、参照していただ

だければと思います。

「正座する」の世代差

本連載15回目的の記事を見ていただくとは分かりますが、1996年から1998年にかけての調査では、小松市内で50種以上の「正座(する)」にあたる伝統的方言形の分布が見られました。その多くは動詞「つくばう(蹲う)」に由来すると考えられるオツクバイ(カク)の類で、オツクバイのほかには、ウツブラ、ウツブカイ、ウツブキなどが代表的な方言形として聞かれました。

ところが、筆者たちが2008年に「R北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)」での結果では、長田町の70歳代でウツブカイ、本折町の80歳代でオツムカイ、符津町の80歳代以下でオツムカイが聞かれただけで、60歳代以下ではセーザスルしか聞くことができませんでした。高年齢層でこそ、かつて伝統的方言形が聞かれるものの、「正座する」にあたる言い方は急速に共通語化が進行していることが分かりました。福井県嶺北

地方(大聖寺)では、今もなお若い世代にまで伝統的方言形のオチヨキンスルが根強く使用されていますから、対照的な現象と言えます。

「胡座をかく」の世代差

「正座する」の伝統的方言形には多様な語形の分布が見られたのに対して、「胡座をかく」にあたる伝統的方言形は、小松市内ほぼ全域でアグチカクが使われていました。本連載15回目でも述べているように、アグチカクのアグチとは、足袋などの足のはき入れる口を意味する「開口(あきくち)」の部分で足を組むことに由来します。アキクチがアキグチ→アイグチ→アグチと発音を変えた形です。ところが、「R北陸線沿線の4世代調査では、本折町の高年齢層(80歳代)でアグチカクの使用が確認できるだけで、長田町、符津町では全ての世代がアグラカクでした。ここでも、共通語形アグラカクの急速な普及が確認できるのです。

連載
159

小松方言の世代差 その18
「くすぐる」と「くすぐつたい」
の世代差



「コチョバシあいつこしょ〜」「お兄ちゃん、やめて〜」

今回は「くすぐる」と「くすぐつたい」にあたる小松方言の世代差を見てみたいと思います。これまで同様、筆者たちが2008年に「R北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)」の結果からご紹介いたします。なお、これらについては、普段家の人や友達と気楽に話す場合の言葉(「テレビに出てアナウンサーと話す場

合の多少改まった言葉」の2つの場面に分けて使用語形を聞いていますので、そのことについても触れてみたいと思います。

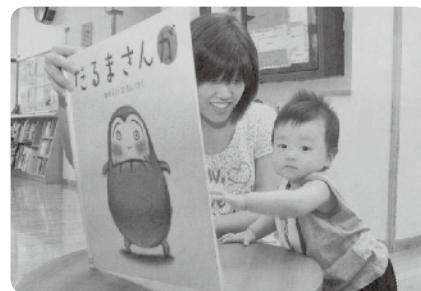
「くすぐる」の方言形の世代差

「普段家の人や友達と気楽に話す場合」については、長田町では4世代全てでコチョバスが、本折町では50歳代以上でコチョガス、30歳代以下でコチョコチョスルが、そして符津町では30歳代以上でコチョガス、10歳代でコチョバスが聞かれました。つまり、普段気楽な相手と話す場合には伝統的方言形コチョバス、コチョガスが若い世代にまで比較的良好に使われていることと、本折町では若い世代でコチョガスからコチョコチョスルに変化していることが確認できました。一方、「テレビに出てアナウンサーと話す場合」では、長田町・符津町の50歳代以下でコチョバス、コチョガス、本折町の30歳代以下でコチョコチョスルを使う人がわずかにいたものの、ほとんどの人が共通語形クスグルを使うと答えています。

「くすぐつたい」の方言形の世代差

次に、「普段家の人や友達と気楽に話す場合」での「くすぐつたい」にあたる言い方を見てみます。長田町では50歳代でコソバイ、10歳代でコチョバシ(70歳代と30歳代でクスグツタイも)が、本折町では80歳代と30歳代でコショガシ(30歳代ではコソバイも)、10歳代でコチョガシが、そして符津町では全世代でコチョバシ(50歳代以上でわずかにクスグツタイも)が聞かれました。「テレビに出てアナウンサーと話す場合」では、粟津の50歳代以上でコソバシ、20歳代以下でコチョバシが聞かれたものの、長田町と本折町では全世代が共通語形クスグツタイのみでした。

以上のように、「くすぐる」と「くすぐつたい」については、普段の気楽な場面では方言形を使う人も、テレビに出たら共通語形というように、場面によって使い分けようという意識の人の多いことが分かりました。

連載
160小松方言の世代差 その19
―「大きい」と「小さい」の世代差―

「この絵本、すごくデッカイね」（空とこども絵本館にて）

今回は日常的にも使用頻度の高い形容詞の「大きい」と「小さい」にあたる小松方言の世代差を見たいと思います。これまで同様、筆者たちが2008年にJR北陸線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点（長田町、本折町、符津町）の結果からご紹介しますが、「地元で、自分の親や仲の良い古くからの知り合い・友人とくつろいで話す場合の言い方」を教

えて下さいということで、「こんなに大きい魚が釣れた」と言ったときの「大きい」の言い方と、「こんなに小さい魚しか釣れなかった」と言うときの「小さい」の言い方を尋ねた結果を取り上げます。

「大きい」の方言形の世代差

「大きい」の方言形については、小松市以北の加賀地方で、60歳代以上の高年層に「デッカイ」の分布が見られます。ただ、小松市内の3地点では、「デッカイ」が聞かれたのは60歳代のみで、70歳代以上では「デカイ」が聞かれていますので、「デカイ」の变化形（強調形）として促音が挿入された「デッカイ」が生まれたと考えて良さそうです。50歳代から30歳代にかけては「デカイ」「デッカイ」の「カイ」の部分が「ke」に変化した「デケー」「デッケー」（「デッケ」も）が多く聞かれます。そして、20歳代以下では再び「デカイ」が聞かれ、特に中学生ではオーキーも聞かれます。オーキーが共通語の影響であることは明らかですが、20歳代以下の「デカイ」は、高年層の伝統方言形「デカイ」と同じではなく、いわゆる共通語の

俗語形としての「デカイ」を受け入れたものと考えられます。

「小さい」の方言形の世代差

「小さい」の方言形については、まず長田町、本折町の70歳代以上で「チンコイ」が聞かれました。似た形の「チッコイ」は、本折町の60歳代と小松市の北、JRの駅で言うところの小舞子、松任、野々市の周辺集落の高年層でも聞かれましたが、「チンコイ」は、今回の調査では小松市内にのみ確認できます。50歳代以下の使用状況は、長田町が50・30歳代で「チッチャイ」、10歳代で「チーサイ」、本折町が30歳代で「チンコイ」、10歳代で「チッチャイ」、符津町が50・30・10歳代全てで「チッチャー」でした。50歳代以下で聞かれた「チッチャイ」も話し言葉を中心とした共通語形と見れば、共通語化と言ってよさそうですが、書き言葉としても使われる共通語形の「チーサイ」はほとんど聞かれませんでした。

連載
161小松方言の世代差 その20
―「自動車学校」の呼称の世代差―

自動車学校（シャコー）で基礎をしっかりとマスターして、安全運転でいきたいですね。

今回は、上の世代では地域差がなかったのに、若い世代で新たな地域差が生じている例として、「自動車学校」の呼称の世代差を取り上げます。上の世代の方は、ジドーシャガッコ以外に言い方があるのかと思われるかもしれませんが、若い世代（運転免許証がまだ取れない17歳以下は別として）では、別の言い方をする人が増えているのです。

石川県と福井県ではシャコー

これまでも紹介してきた、筆者が金沢大学学生の協力を得て石川県加賀地方から福井県嶺北地方のJR北陸本線倶利伽羅駅から今庄駅までの33の駅周辺集落で行った4世代調査の結果をはじめ、新潟県谷浜駅以南から富山県、さらに福井県に続く滋賀県の湖西線ルート（京都駅まで）の4世代調査の結果を収めた科学研究費研究成果報告書『北陸方言の地理的・年齢的分布（北陸グロットグラム）』（研究代表者・井上史雄、2011年3月刊）で小松市内3地点の結果をまず見ると、長田町では30歳代以上でジドーシャガッコのみ、本折町と符津町では50歳代以上ではジドーシャガッコ、20・30歳代でシャコーが聞かれました。小松市から北の加賀地方でも20・30歳代（二部地点では40歳代でも）はシャコーが広く普及していることが確認できますし、福井県嶺北地方では20・30歳代だけでなく40・50歳代でもシャコーがかなり聞かれ、石川県よりシャコーの普及が早かったらしいこと

が分かります。シャコーは「自動車学校」の傍線部をつなげた形の略称です。ただ、小松市以北と福井県嶺北地方に挟まれた加賀市の3駅周辺集落ではシャコーがほとんど聞かれず、金沢方面から普及し始めたシャコーは加賀市までは及んでいないことも分かりました。

富山県ではジコー、新潟県ではシャガク

先の報告書で富山県と新潟県の結果を見ると、20・30歳代で、富山県ではジコー、新潟県ではシャコーのほかにシャガクが聞かれ、北陸地域で新しい地域差が生まれていることが分かります。ジコーは「自動車学校」の傍線部、シャガクは「自動車学校」の傍線部による略称です。一方、滋賀県ではキョーシュージョが多く聞かれます。滋賀県では、正式名称に「自動車教習所」が多く使われているためです。正式名称が「自動車練習所」の沖縄県ではジレンの言い方も生まれています。

連載
162小松方言の世代差 その21
—「うつつうしい」の呼称の世代差—

まだまだ暑い日が続くけれど、キミたちのフサフサな毛はイジクラシくないのかな？(木場湯公園中央園地のドッグランにて)

今回は、前回取り上げた「自動車学校」の呼称(略称)に見られた、若い世代での新方言の新たな地域差の世界とは逆の現象を見ることにします。取り上げるのは、石川県加賀地方から福井県嶺北地方の、J・R北陸本線倶利伽羅駅から今庄駅までの33の駅周辺集落で行った4世代調査の結果から、「うつつうしい」にあたる方言の世代差です。

「うつつうしい」の方言形の世代差

「うつつうしい」の方言形とは、調査で「忙しいときに子どもがまとわりついたりしたときの、うるさい、いらいらするような気持ちを何と言いますか」という質問に対して回答された方言形です。

結果は、長田町では、70歳代がイジクラシーとイジッカシー、50歳代がイジッカシー、30歳代がウザイ、10歳代がウツトーシー、本折町では、80歳代がウザクラシー、50歳代がウザクラシーとイジッカシー、30歳代がイジクラシーとイジッカシー、10歳代がウザイ、そして符津町では、60歳代がウザクラシーとイジクラシー、50歳代がウザクラシー、20歳代がイジッカシー、10歳代がイジッカシーとウザイでした。

以上、3地点での結果を整理すると、50歳代以上の世代ではウザクラシーとイジクラシー(イジッカシーも)が主に使われ、50歳代から30歳代にかけてはイジクラシーからの音声変化形として生まれたイジッカシーが中心となり、10歳代ではイ

ジッカシーと共に、東京発信型の新方言として全国に広がりつつあるウザイ(新方言として広がり始めた当初はウザッタイでしたが、その後、短縮形のウザイが生まれました)が小松市内でも使われ始めていることが分かりました。

イジッカシーとウザイの闘いの行方は？

南の福井県嶺北地方では、高年層を中心としたウルサイの使用に対して、ウザイが50歳代あたりまでいち早く普及しているのに比べ、石川県加賀地方(倶利伽羅駅・大聖寺駅)では、似た意味の方言形イジッカシー(イジクラシー)が今もよく使われているために、ウザイの侵略を阻んでいたのですが、今回の調査結果からは、10歳代ではウザイの侵略が始まっていることが確かめられました。今後の加賀地方でのイジッカシーとウザイの闘いの行方を見守りたいと思います。

連載
163小松方言の世代差 その22
—「ありがとう」「大丈夫だ」の世代差—

「お茶でもどうぞ」
「あら、アンヤト、キノドクナ」

今回は、感謝の挨拶言葉の「ありがとう」、そして「大丈夫だ」にあたる方言の世代差を見てみたいと思います。

「ありがとう」の方言の世代差

人に感謝の気持ちを述べるときの小松での方言的表現は、私たちのJ・R北陸本線沿線世代別調査では、長田町と符津町の50歳代以上でキノドクナが聞かれたほ

か、本折町では70歳代から30歳代の範囲、符津町では50・60歳代でアンヤトが聞かれました。しかし、20歳代以下では3地点ともアリガトーだけでした。

キノドクナは、全国的に見ても北陸三県でしか聞かれない「ありがとう」にあたる特徴的方言形です。北陸以外の人には、感謝されることをして、なぜキノドクナと同情されるのかと不思議がられます。北陸方言のキノドクナは、本来、自分によくしてもらったことで相手に負担をかけたことを気の毒に思いつ、そしてそのことに感謝の気持ちを込めたキノドクナであつたわけですが、共通語の「気の毒な」は他人に対する同情の意味で使われるので誤解されやすいのです。一方、アンヤトはキノドクナよりも新しく金沢を中心に加賀地方で分布を広げた形と考えられます。アリガトーの発音が変化した形で、加賀地方南端の大聖寺までの範囲に聞かれます。

ただ、今回の調査結果からは、キノドクナもアンヤトも若い世代では使われなくなり、共通語形のアリガトーに取って代

わられていることが分かりました。

ちなみに、南の福井県嶺北地方でもキノドクナは50歳代以上でしか聞かれず、多数派は近畿地方から伝わったオーキニとなつています。そして、30歳代以下ではアリガトー一色になりつつあることも分かりました。

「大丈夫だ」の方言の世代差

「謝る友達に『だいじょうぶ(だ)』と答えるとき何と言いますか」という質問に対する回答の世代差です。

小松市内3地点では、50歳代以上で加賀地方に特徴的なジャマナイや福井県嶺北地方に通じるダンネが聞かれ、50歳代から30歳代の範囲ではドーモナイと、それからの変化形のドモナイ、ドモネ、ドーモネ、ドンネなどが聞かれました。ドモナイは符津の20・10歳代でも聞かれましたが、20・10歳代の中心はダイジョーブでした。

連載
164

小松方言の世代差 その23
「くっしまった」と「くけれど」の世代差と場面差



「このDVD、借りてみようか?」
「それ、この前見デシモタし、別のにしよさ」

今回も、J R北陸本線沿線世代別調査（グロットグラム調査）の結果から、長田町、本折町、符津町の「くってしまった」と「くけれど」にあたる方言の世代差についてご紹介するとともに、場面差についても見ることにします。

普段の言い方と、テレビに出たときの言い方

場面差とは、「この番組はもう見てし

まった」という例文と「寒いけれどもがまんしよう」という例文を示して、傍線部にあたる普段家で話す場面での言い方と、テレビに出て話す場面での言い方を尋ねたことを指します。

「くってしまった」の方言形の世代差と場面差

普段家で話す場面での「見てしまった」にあたる言い方は、50歳代以上では3地点ともミテシモタでした。つまり、「くってしまった」の小松の伝統方言形は「テ」シモタであることが分かります（南の加賀市では、ミテシモタは60歳代以上でしか聞かれず、50歳代から30歳代にかけては福井県嶺北地方の影響を受けたと思われるミテモタが使われています）。それに対して30歳代以下では、ミタかミタワが多くなり、長田町の10歳代では話し言葉の共通語形ミチャッタも聞かれました。

一方、テレビに出て話す場面では、小松市内の3地点いずれも、世代に関係なく、全員が共通語形ミテシマッタを使うと答えていて、普段の場面で伝統方言形を

使っている上の世代の人たちも、テレビ出演のような改まった場面では共通語に切り替えようとしていることが分かりました。

「くけれど」の方言形の世代差と場面差

普段家で話す場面での「寒いけれども」の「くけれど」にあたる言い方は、3地点とも世代に関係なく「ケド」が使われていました。ただ、「寒い」にあたる部分では、本折町、符津町を中心に、サムイに混じってサバイを使っている人が全世代にわたって半数近くいることも分かりました。

テレビに出て話す場面では、「寒い」の部分は全ての世代がサムイを使うと答え、サバイを使うという人は見られなくなります。「くけれど」にあたる言い方については、50歳代以上では「ケレドモ」の使用が多くなる（場面で切り替えている）のに対して、30歳代以下では普段の場面と同じ「ケド」を使うと答えていました。

連載
165

小松方言の世代差 その24
「選び歌」と「組分け」じゃんけんの掛け声の世代差



「二組に分かれるよ～」
「グートパーデ ワカレマシヨ!」

今回は今年最後の月。来年が良い年になるかどうかを占うわけではありませんが、複数あるものから一つを選ぶときの「どちらにしようかな」といった言い方で始まる「選び歌」と遊びの時に二つに分けずるときに「じゃんけんの掛け声の世代差を取り上げます。

「選び歌」の世代差

筆者もそうですが、比較的上の世代の人にとって、複数あるものから一つを選ぶときの選び歌は、「ドチラ（ドレ）ニシヨーカー カミサマノ ユートリ、と」いった短い詞章で終わつたように思いますが、選び歌の全国分布を調べた最近の調査結果をいくつか見てみると、若い世代に向かって次第に詞章が長くなる傾向が見られ、その詞章に様々なバリエーション、新たな地域差が生まれていることも分かっています。

前号までと同様、J R北陸本線沿いの小松市内3地点（長田町、本折町、符津町）での4世代調査結果を見ると、全世代で、「ドチラニ シヨーカー カミサマノ ユートリ」の詞章は共通していましたが、40歳代以上がそこで終わるのに対して、30歳代以下では、本折町でそのあとに「アノネノネ」が続く、10歳代では「テッポーウツテ バンバンバン イチ ニーサン シー」と続きます。符津町でも30歳代で「テッポーウツテ バンバンバン、10歳

代で「テッポーウツテ バンバンバン モヒツオマケニ バンバンバン」というのが聞かれました。「鉄砲打ってバンバンバン」の詞章は東北、関東、北陸地方などによく聞かれるものです。

「組分け」じゃんけんの掛け声の世代差

これについても興味深いのは、小松市内3地点に関しては、30歳代以下でしか組分け「じゃんけんの掛け声」が得られていないことです。30歳代以下では、いずれの地点でも「グートパー」を含み、本折町の10歳代では「グッパ」の形も聞かれました。長田町の10歳代では「グートパーデ ワカレマシヨ」、本折町の30歳代以下では「グートパーデ インジャンホイでした」。

このように、同じ加賀地方でも、小松を含んだ松任以南では「グー」と「パー」で分かれるのに対して、野々市から北では、「グーキー」「グーキー」で始まる掛け声からも分かるように、「グー」と「キー（チヨキ）」で分かれるのが一般的という地域差も見られます。

連載
166小松方言の世代差 その25
「もつれる」の方言の世代差

「イヤホンつてすぐムダカルさけ、いやなんや」

明けましておめでとうございます。

昨年は、3月11日に起こった東日本大震災によって、我が国にとっては悲しく、つらい年となりましたが、今年是被災者の皆さんにとって少しでも良い年になることを祈りたいと思います。

さて、一昨年の1月号から始めた「小松方言の世代差」のテーマも、今月から足か

け3年目に入りますが、今しばらくこのテーマで続けたいと思います。これまで同様、筆者たちが平成20年に加賀地方のJ R北陸本線沿線17集落で行った4世代調査の、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)の調査結果を中心に取り上げていきます。

今回は「もつれる」にあたる方言の世代差を取り上げます。

「もつれる」の方言ムダカルの衰退

調査での「もつれる」にあたる言い方を聞く質問文は、「細い紐ひもや糸、あるいは髪の毛などが、からまってもつれるもつれることを何と言いますか」というものでした。

長田町では、70歳代、50歳代では伝統方言形ムダカルが聞かれましたが、30歳代、10歳代ではカラマルでした。本折町では、50歳代でムダカルが聞かれた以外は、70歳代と50歳代でモツレル、カラム、30歳代でカラマル、10歳代でカラマル、カラムでした。そして、符津町では60歳代でモツレル、カラム、50歳代以下はカラマルのみが聞かれ、ムダカルは聞かれませんでした

た。
以上から、J R北陸本線沿いの小松市内では、伝統方言形ムダカルの衰退が確実に進みつつあり、共通語形モツレル、カラマル、カラムに取って代わられていることが分かります。

ちなみに、小松以外での世代別調査の結果を見ると、金沢市中心部や旧野々市町、旧松任市域では、小松よりもさらに共通語化が早く、全ての世代でムダカルを聞くことができませんでした。それに対して、金沢市の森本以北や能美市、そして南の加賀市域では、小松と同様に50歳代以上でムダカル(モダカル、モダケルを含む)、30歳代以下でカラマルが使用されていました。

このように、加賀地方では50歳代以上でしか使われなくなっているムダカルですが、南の福井県嶺北地方では30歳代まで使用が確認でき、加賀地方の共通語化の方が早いことが私たちの調査で分かっています。

連載
167小松方言の世代差 その26
「命令形」しろ「見る」の方言の世代差

「お母さん、絵を描いたから見て～」
「忙しいから後でね」「え～、ちゃんと今見テマ～」

小松方言の世代差として、今回は、サ変動詞「する」と二段動詞「見る」の命令形の「しろ」と「見る」にあたる方言形の世代差を取り上げます。これまで同様、筆者たちが加賀地方のJ R北陸本線沿線17集落で行った4世代調査の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)の調査結果を中心にすることにしますが、「見る」の世代差については、本連載の47回「新しい方

言④ オキレ、ミレ、アケレ」(2002年2月)でも取り上げたことがあります。

「しろ」の方言形の世代差とシロマの発生

「しろ」にあたる方言形は、市内3地点ともに、30歳代以上で、伝統方言形のセーあるいはセーマが根強く使われています。セー、セーマより強い命令形としてセンカイ、センカイヤが使われることもあります。しかし、セー(セーマ)、センカイ(センカイヤ)などの伝統方言形は10歳代ではほとんど使われなくなっていて、この世代では、共通語化によるシロ、そしてわずかですが、共通語形シロの干渉を受けて方言形セーマとの中間スタイルとして生まれたシロマが使われています。

方言形と共通語形の中間スタイルとしてのシロマについては、小松市内よりは金沢市近辺の若年層により多く聞かれる形です。数年前のある日、県内のある警察から筆者の研究室に電話があり、県内のあるコンビニに押し入った強盗が、お金を出すのにぐずぐずしている店員に向

かつて「はよシロマ」と叫んでいるのが監視カメラの音に入っているのだが、シロマという言い方はどの辺で使うのかと聞かれて、考えを述べたことがあります。その強盗が捕まったのかどうかは知りませんが、金沢市近辺から小松市あたりにかけての20歳代以下の若者だったのではないかと考えています。

「見る」の方言形の世代差

「見る」にあたる方言形も、30歳代後半以上の世代では市内3地点ともに、伝統方言形のミーあるいはミーマが使われています。一方、30歳代前半以下の世代では、少し優しい命令形にあたるミテ、ミテマが使われています。また、本折町の30歳代前半から20歳代後半にかけてはミレも聞かれました。ミレは、連載47回でも説明したように、ラ行五段動詞の命令形「走レ、取レ」などの形に類推して生じた形です。全国的には東北地方の日本海側や九州地方にまで広がって見られるものです。

連載
168小松方言の世代差 その27
「買った」「借りた」の方言の
世代差

「今日はこの本をカッテいこうか」
「えっ、図書館なのに借りるんじゃないかって買うの?」

前回に続いて、小松方言の文法事象の世代差を取り上げます。具体的には、小松市内の長田町、本折町、符津町での4世代調査の結果から「買った」と「借りた」にあたる方言の世代差です。

「買った」の共通語形カッタと「借りた」の
方言形カッタの同音衝突をめぐって

今回取り上げる「買った」と「借りた」の

方言の変化(世代差)については、「同音衝突」という現象がからんでいます。

同音衝突とは、「科学」と「化学」、「市立」と「私立」のように、発音が同じで意味の違う単語が同一の場面で使われるような場合を言います。この場合、発音を聞いただけでは意味が区別できませんから、「科学」に対して「化学」、「市立」に対して「私立」のように、片方あるいは両方の発音(語形)を変えて同音衝突を避けようとしているわけです。

「買った」と「借りた」の方言をめぐっても、小松市を含む北陸地方の方言、さらには北陸地方を含む西日本の広い範囲の方言で、伝統方言の「借りた」の意味のカッタと、共通語化で新たに使われ始めた「買った」のカッタが同音衝突を起こすことになったのです。

ところで、北陸を含む西日本の方言で「借りた」の伝統方言形がカッタであったのは、共通語の「借りる」が一段動詞でタ形は音便化せずカリタであるのに対して、西日本では「借りる」の意味の五段動詞(古くは四段動詞)「借る」が使われたた

め、同じ五段動詞「取る」のタ形が促音便形「取った」になるのと同様にカッタであったためです。

そこで、小松市内の「借りた」と「買った」を比べると、「借りた」の方言形カッタが「買った」の共通語形カッタとの同音衝突を避けるため、いち早く「借りた」の共通語形カリタを受け入れていることが分かりました。長田町、本折町、符津町のいずれにおいても、50・60歳代で伝統方言形カッタもわずかに聞かれたものの、全世代でカリタが使用されています。

一方、「買った」の伝統方言形コータは、当面衝突する語がなかったので50歳代以上では比較的根強く使われていることが分かりました。しかし、皮肉なことに「借りた」がカッタからカリタに変化したことで、「買った」との同音衝突が回避できるようになり、「買った」の共通語形カッタが40歳代以下で急速に広まっているのです。

連載
169小松方言の世代差 その28
「お父さん」の呼称の今昔と
世代差

「たくさん練習してオートサンみたいに強くなりなさい」。山元大輔さんと娘の優奈さん(小松桜木剣正会)。

今年は寒い冬でしたが、新年度を迎えて、また桜の季節がやってきました。東日本大震災から1年が過ぎましたが、被災地の皆さんの心にも少しずつ暖かな春が訪れることを願いたいと思います。

1998年4月にスタートした本連載は今月からいよいよ15年目に入りますが、今しばらく「小松方言の世代差」の話題にお付き合いください。

「お父さん」の呼称の方言、今昔

平成20年に加賀地方のJ R北陸本線沿線17集落で行った4世代調査では、「お父さん」の呼称について、①子どもの頃はどっつていたか、②今はどっつて聞いているか、という2つの場合に分けて聞いています。今回はその時の小松市内3地点(長田町、本折町、符津町)での調査結果から、小松方言の「お父さん」の言い方の個人の中での変化と、現在の世代差について見てみたいと思います。

小松市全域(105地点)の「お父さん」の呼称の方言分布については本連載29回(2000年8月号)でも取り上げたことがあり、「お父さん」の呼び方の多様な方言形を紹介しています。市内の広い範囲で確認できたトート類(トート、トートー、トト、トー)、ツーツ類(ツーツ、ツーツー、ツー)、のほか、オートー類のオートー、オットーが津上川流域の一部と梯川流域、オトトが大杉谷川上流域、日本海沿岸部、南部の日用川流域などに見え、トート類、ツーツ類より古い方言形と思われる

マ、マーマも比較的広い範囲で聞かれました。

J R沿線ではトーチャン、オートサンが主流

今回のJ R沿線の4世代調査では、本折町の80歳代で子どもの頃も現在も共にオトツァンが聞かれた以外は、子どもの頃の呼称で50歳代以上では3地点ともにトーチャンが、30歳代以下ではオートサンが聞かれました(符津町の20歳代以下の一部にパパも)。つまり、市内の周辺地域に比べ、J R沿線の町部では新しい呼称がいち早く受け入れられていることが分かります。一方、現在の言い方では(20歳代以下では子どもの頃も現在もほとんど時間差がないので同じですが、長田町の70歳代でオトンが聞かれた以外は60歳代から30歳代まででオヤジが聞かれました。成人後もトーチャンと呼ぶのには抵抗があり、オヤジと呼ぶようになったためと考えられます。

連載
170小松方言の世代差 その29
―「あざができる」の世代差と
場面差―「いたーい! 転んじったよ!」
「おひざ、シンダね。大丈夫?」

今回は、J R北陸本線沿線世代別調査（グロットグラム調査）の結果から、長田町、本折町、符津町での「あざができる」（質問文は「足をぶついたりすると、そのあとが青黒くなって2〜3日消えないことがあります。どう言いますか?」）にあたる方言の世代差と場面差について見ることにします。場面差とは、①〈普段家で話す〉場合と②〈テレビに出て話す〉場合

合の違いです。

〈普段家で話す〉場面での「あざができる」

〈普段家で話す〉場面では、3地点とも30歳代以上でアザ・シナル、アザ・ニナルが多く聞かれました。ただ、「あざ」にあたる名詞形がないシンダという言い方が長田町の50歳代と10歳代・本折町の70歳代、符津町の10歳代で聞かれました。シンダという形は、小松市だけでなく、福井県嶺北地方の一部（筆者も出身地である越前市の方言として使っていました）と石川県・富山県そして新潟県南部でも聞かれる形で、アザが体の一部をぶついたりした場合にできる内出血による「あざ」と生まれつきの「あざ」の両方を指して使われるのに対して、シンダは内出血による「あざ」だけをさす方言形です。（「皮下に血が染みる」の「染みる」の意の動詞シムが基本形と考えられますが、シムという形は聞かれず、シンダ（過去形）だけが使われます。

また、世代差で注目したいのが、本折町

の20歳代・10歳代で聞かれたアオタン・ガデキルです。「あざ」を指すアオタンは、北海道で新方言として生まれたものがまず東日本各地に広がり、首都圏や大阪でも使われ始めてから、そこを新たな発信地として全国に広がりつつある方言形であることが最近の研究から分かっています。ただ、北陸地方では、アオタンは10歳代よりも30歳代によく使われていることから、一度は新方言として広がりかけたものが、共通語形アザにまたその座を奪われようとしているのかもしれない。

〈テレビで話す〉場面での「あざができる」

〈テレビに出て話す〉場面では、アオタンは聞かれず、3地点ともアザ・ニナル・アザガデキルが多く答えられています（長田町と符津町の10歳代ではシンダも）。アオタンは方言と意識されているためにテレビ場面で避けられたのに対し、シンダを答えた中学生はシンダを方言形とは思っていないでしょう。

連載
171小松方言の世代差 その30
―「びり」の方言の世代差―

「ありやりや、ビリは誰?」

今回も、J R北陸本線沿線世代別調査の結果から、長田町、本折町、符津町の「びり」（質問文は「運動会の競争などで足が遅くて最後になること、あるいはそういう人のことを何だと言いますか?」）の方言形の世代差について見ることにします。〈普段家で話す〉場面での言い方の世代差です。

ところで、小松市内高年層の「びり」の

伝統方言の分布については、すでに本連載20回目（1999年11月号）でご紹介したことがあります。「びり」が公然とは口ににくい隠語的性格を持つことから、1つの集落内で何種類もの方言形が使用されているという特徴が見られました。市内で聞かれた主な方言形はゲット類（ゲット・ゲットクソなど）、ゲベ類（ゲベ・ゲベタ・ゲベットなど）、ゲス類（ゲス・ゲスベ・ゲスツペなど）で、ゲベ、ゲットともに「尻」の意の方言形から、ゲスは「下衆（げず）」の意から生じたものだろうと書きました。そして、「最近ではビリと言う人が増えていますが、これらのうちのいくつかは、ビリとの併用という形で隠語的に使われていくかもしれません」とも書いたのですが、その世代的变化の様相を今回の調査結果から見てみたいと思います。

普段の場面での「びり」の方言形の世代差

長田町では、70歳の男性でゲットが聞かれましたが、52歳・35歳・14歳の男性は

全てビリでした。本折町では、79歳男性でケツ、27歳女性でゲベが聞かれたものの、60歳男性・26歳女性・13歳女性はビリでした。そして符津町では、55歳男性でゲベタ、24歳女性と19歳女性でゲベが聞かれましたが、62歳男性と13歳女性はビリを答えています。

「びり」の方言形については、加賀地方のJ R北陸本線沿線での調査結果から小松市以外の様子を見ると、最も年齢の高いところでゲット類がわずかに聞かれ（津幡、森本、美川、小舞子、明峰、動橋、加賀温泉、大聖寺の各駅周辺集落の70歳代が主に使用）、ゲベ類はそれよりも少し下の世代に広く聞かれています。このことから加賀地方では、小松でも長田町（明峰駅）の70歳で聞かれたゲットの方が古い形で、本折町と符津町で聞かれたゲベタ、ゲベが次に使われ始めた形だと思われるます。しかし、そのゲベ類も次第に使われなくなりつつあり、今や共通語形のビリが急速に勢力を拡大しているのです。

連載
172

小松方言の世代差 その31
「苦しくなった」の方言の世代差―



「よいしょと、あーエロナッタ」

今回は、これまでと同じく、JR北陸本線沿線世代別調査の結果から、長田町、本折町、符津町の「苦しくなった」(調査での質問文は「4階まで階段を駆け上ったら苦しくなった」と言うとき、「苦しくなった」を何と言いますか?)の方言形の世代差について見ることにします。

ちなみに、筆者はこういう場合、出身地の福井県越前市方言でエロナッタと言う

ていました。ただ、エロナッタという言い方は、他方言の人からは「偉くなった」の意味と誤解されやすい方言です。

中・高年齢層はエロナッタ、エレナッタ

小松市内の3地点での調査結果を見ると、長田町の70歳代・50歳代でエロナッタが、本折町の50歳代・30歳代でエロナッタが、そして符津町の70歳代でエロナッタが聞かれ、中・高年齢層での代表形がエロナッタ、エレナッタであることが分かります。筆者が福井で使っていたエロナッタと同じような言い方です。

「疲れる 苦しい」などの意味でエライが使われる地域は、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、北陸の石川・福井のほか、中部地方の長野・静岡・愛知・岐阜、そして近畿地方から中国・四国地方の広い範囲に及び、江戸時代初期の浄瑠璃作品の中にも用例が見られますから、本来、近畿地方で使われていたものが周辺地域に分布を広げたものと考えられます。

なお、長田町の30歳代、本折町の70歳代では、北加賀地方でよく使用されるヒド

ナッタも聞かれました。

青年層はシンドナッタ

中・高年齢層で多く聞かれたエロナッタ、エレナッタに対して、本折町・符津町の30歳代(青年層)で聞かれた形がシンドナッタです。エロナッタ、エレナッタより新しい言い方と考えられます。10歳代では、クルシクナッタ(本折町)、キツクナッタ(符津町)などが聞かれました。

シンドナッタのシンドイは、青年層の人たちが子どもの頃、つまり1980年代に起こった第一次漫才ブームに乗って、主にテレビを通じて全国に広がった「つらい」意味を表す関西方言形です。そして、シンドイは今では関西方言という意識が薄れ、共通語意識で使われている場合が多いようです。

連載
173

小松方言の世代差 その32
「玉蜀黍」の方言の世代差―



「最近は一キビっちゅう人、めったにおらんよなったなあ」

本誌が皆さんのお手許に届く頃には、近くの畑に「玉蜀黍」が実っているのではないでしょうか。今回はその「玉蜀黍」の方言の世代差、共通語化について見ることにします。

市内の「玉蜀黍」の伝統方言形の分布

小松市内での「玉蜀黍」の伝統方言形については、小松市立博物館の依頼で

1996年から2000年にかけて小松市内全域で行った調査結果をもとに、本連載の63回目(2003年6月号)「植物の方言あれこれその2」で次のように紹介しています。

『「かぼちゃ」と同じ渡来作物と言えば、『唐辛子』や『玉蜀黍』がありますが、南蛮渡来ということで(中略)、『玉蜀黍』にナンバキビの方言が聞かれます。『玉蜀黍』には、ほかにトーキビ、サトキビも聞かれました。トーキビは南の福井県嶺北地方から加賀地方に広く分布の見られるものです」

つまり、小松市全体で見ると、「玉蜀黍」の伝統方言形の多数派はナンバキビ(「南蛮黍」が語源)であったことが分かっています。

JR沿線での「玉蜀黍」方言の共通語化

しかし、筆者たちが2008年にJR北陸本線沿線で行った世代別調査では、加賀地方の17駅周辺集落で高年齢層を中心にトーキビという形が聞かれるのみで、ナンバキビという形は全く聞かれません

でした。小松市内ではナンバキビの方が古い形で、JR沿線ではそれよりも新しいトーキビに取って代わられたのでしょう。そして、そのトーキビは、北の津幡、寺井駅、南の動橋、大聖寺駅の駅周辺集落では70歳代以上(地点によっては60歳代以下でも)で何とかが使用が確認できたものの、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)では聞くことができませんでした。JR沿線地域では、トーキビが急速に衰退し、共通語化が進んでいることが分かりました。

ただ、共通語形「モロコシ」がマスメディアの影響や商品名などとして普及していることは同じはずなのに、私たちの調査では、富山西部では伝統方言形のトナワが30歳代あたりまで、南の福井県嶺北地方の武生以北でもトーキビが30歳代あたりまで根強く使用されていることがわかっています。「玉蜀黍」については、北陸の中核都市金沢を擁する加賀地方の共通語化が、富山や福井に比べて早く起こっていると考えればよいのでしょうか。

連載
174

小松方言の世代差 その33
「麦粒腫」と「氷柱」の方言の世代差



「メモライって方言なんけ?」

30回余りにわたって筆者たちが2008年にJR北陸本線沿線で行った世代別調査結果をもとに小松方言の世代差を見てきましたが、調査した項目の全てで世代差が見られるとは限りません。今回は世代差があまり見られなかった例として「麦粒腫」と「氷柱」を取り上げ、なぜ世代差が見られないのかについて考えてみたいと思います。

「麦粒腫」の方言は全世代でメモライ

小松市内の「麦粒腫」の方言分布については、本連載の8回目(1998年11月号)で取り上げましたが、ずいぶん時間が経ちましたので、今一度おさらいをしておきます。

市内の広い範囲に分布していたのが、メモライとその音変化形であるエモライ、イモライ、メモレ、メモロー、イモリなどでした。一方、大日川上流部の丸山にはホツテ、大杉谷川上流部にはメブツテ、ネブツテなど、埴田・古府・平面にはメチンポ類の分布が見られました。ホツテ、メブツテなどは、メモライよりも古い方言形「目陪堂」(「陪堂」は^{めばい}こじま)の古語に由来します。

2008年のJR北陸本線沿線での世代別調査結果に目を移すと、小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)では70歳代から10歳代までの全ての世代でメモライが聞かれました。「麦粒腫」では若い世代での共通語化(モノモライの侵入)が見られないのです。これは、共通語モノモラ

イの情報が少ないこと、メモライが福井県北部から石川県の加賀地方・口能登地方、そして富山県までの広い範囲に分布する地方共通語的存在であることが理由です。若い世代も含めて、メモライを方言だと気づかず、共通語だと思っている人が多いのです。

「氷柱」の方言形タルキは死語化寸前

本連載では、22回目(2000年1月号)で「氷柱」の方言形をご紹介したことがありますが、かつては、福井県嶺北地方から石川県にかけて、古語「垂氷」(平安時代の『源氏物語』などにも登場する)から変化したタルキが広く分布していました。しかし、2008年の世代別調査では、唯一、本折町の70歳代でタルキが聞かれたほかは、長田町、本折町、符津町とも全ての世代でツララが使われています。共通語形ツララの急激な普及とともに、伝統方言形タルキは今や死語化寸前の状況であることが分かりました。

連載
175

小松方言の世代差 その34
「タイム」と「割り込み」の世代差

「あ、ちよつとタイム」
「ダメ、この勝負、タンマなし」

これまでに取り上げてきた小松方言の世代差では、古くから小松で使われていたであろう伝統方言が若い世代に向かつて衰退、あるいは変化している例が多かったのですが、今回は、2008年のJR北陸本線沿線での世代別調査結果から、「タイム」(質問は「遊びで鬼に追いかけて逃げているとき靴が脱げた」とします。そのとき「ちよつと待って」と頼むの

に何と言いましたか」と「割り込み」(質問は「電車やバスに乗るときなど、並んでいる列に横から入り込むずるい人がいますが、そつすることを何と言いますか」という、比較的新しく生まれたと思われる方言の世代差について見てみたいと思います。

「タイム」の方言の世代差

共通語形はタイムと考えていいでしょう。小松市内の3地点(長田町、本折町、符津町)でも、10歳代では共通語形と考えられるタイムが答えられています。それより上の世代ではというと、本折町の60歳以上で「チョットマッテ」のような言い方が聞かれたものの、3地点の20歳代から70歳代にかけてのほとんどの人がタンマを使っていることが分かりました。タンマは、そもそも関東地方で使われていた方言とされ、現在の共通語とされるタイムが変化した形との説が有力です。となると、10歳代で聞かれたタイムは最新の共通語形で、上の世代で聞かれたタンマはそれ以前に東京を含む関東地方での言

い方が伝わったと考えられそうです。

なお、関東方言のタンマに対して、関西地方ではある時期「タイム」にあたるミツキという言い方が生まれ、北陸を含む西日本各地に広がったとされています。筆者も子どもの頃、福井(越前市)でミツキを使っていました。しかし、今回の調査結果からは、ミツキは福井県嶺北地方の50歳代・70歳代と富山県内の一部で使われたものの、加賀地方ではほとんど使われなかったことが分かりました。

「割り込み」の方言の世代差

小松市内の3地点では4世代全ての人がワリコミを使っていました(本折町の20歳代、30歳代では併用でジュンバンヌカシも)。そして、福井県の武生以北と富山県の広い範囲の50歳代以下では新しくヨコハイリが使われ始めていますが、加賀地方では、まだ金沢、野々市あたりでしか聞かれませんでした。

連載
176

小松方言の語源 その1

—京都語由来の方言について(1)—



「この本もオゾなったなあ」

2008年にJR北陸本線沿線で行った4世代調査の結果をもとに、およそ3年間にわたって続けてきた「小松方言の世代差」を終わり、今回からは小松の方言の語源について考えていきたいと思います。語源については本連載ですでに言及したものも少なくありませんので、それらとの重複をなるべく避けながら紹介していきます。

オゾイは古語「憚し」から

本連載の106回(2007年1月号)で「古い」の意味でのオゾイ(尾小屋など)を紹介したことがあります。小松市内で聞かれるオゾイは「古い、粗末な、下手な」といった意味で使われます。オゾイは平安時代の『源氏物語』などに「恐ろしい」の意味で見られる「憚し」、特に江戸時代初期の上方語文献などに「よくない」の意味で見られる「おぞい」に由来するもので、小松のオゾイは近世上方語の「おぞい」の意味に近いことがわかります。「古い、粗末な」の意味のオゾイは、小松だけでなく、北陸の富山、石川、福井(嶺北地方)の広い範囲と中部地方から近畿地方の一部に分布が見られます。また、「憚し」の古い意味(「恐ろしい」に近いオゾイは、北陸では福井県嶺北地方南部と若狭地方の一部を中心に石川県内にも点々と分布が見え、様々に発音を変えて関東地方から西日本の広い範囲でも確認できます。

連載
177

小松方言の語源 その2

—京都語由来の方言について(2)—

「ごっつおさん。もう腹いっぱいや」
「あらオトマシー、こんなに残いて」

「もったいない」が国際語MOTTAINAI。2004年にノーベル平和賞を受賞したケニア人のワンガリ・マタイさんは、2005年の来日時に「もったいない」という日本語を知り、それが、マタイさんが取り組む資源の有効活用、3R(Reduce、Reuse、Recycle)を簡潔に表す言葉であり、さらに命の大切さや、かけ

がえのない地球資源に対するRespect尊敬の念の意味も込められていると考え、MOTTAINAIキャンペーンを提唱しました。こうして、日本語「もったいない」は一躍、国際語「MOTTAINAI」として世界に知られることになりました。

小松ではアッタラ、オトマシー

ところが、小松の伝統方言でモッタイナイというと、共通語とは少し違って「ありがたい。ありがと」に近い意味で使われます。では、共通語「もったいない」にあたる小松方言は何かというと、アッタラかオトマシーだろうと思います。

アッタラは古語「惜」に由来

小松方言のアッタラは古語「あたら(惜)」に由来します。中央語の「あたら」は奈良時代には形容詞「惜し」でしたが、「新し」が平安時代に「新し」に変化したために、「惜」「あたら」ともはそれとの同音衝突を避けて副詞・連体詞として残ったと考えられています。小松のアッタラは、その副詞・連体詞の「あたら(惜)」が

伝わったものでしょう。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「惜しい。もったいない」の意味の「あたら」は、小松のほか、岩手県、宮城県などの東北の一部、埼玉県、長野県、新潟県、富山県、岐阜県などの関東・中部・北陸地方の一部で使われていることがわかります。

オトマシーは「疎ましい」からの変形

同じく「惜しい。もったいない」の意味の方言オトマシーも、かつての京都語「疎ましい」に由来するものです。古語「疎ましい」の意味「気味が悪い、いとわしい、嫌な感じだ」の「嫌な感じ」の意味が、方言として形と意味を変えたものと考えています。前出の『日本方言大辞典』によれば、「惜しい。もったいない」の意味のオトマシーは、小松を含む北陸三県のほか、岐阜県飛騨地方、愛知県、三重県などで使われているようです。

連載
178小松方言の語源 その3
—京都語由来の方言について
(3)—「あらー ウマソナ子やねえ」
「うん、ほく元気もりもり!」

明けておめでとございます。本連載をこの言葉で始めるのも今回が14回目。今月から連載も足かけ15年目に入ることになります。今後ともご愛読下さい。さて、前回から始めた「小松方言の語源」シリーズ。今回も、京都語由来の方言について見ることにします。

ウマソナ子って「おいしそうな子」?

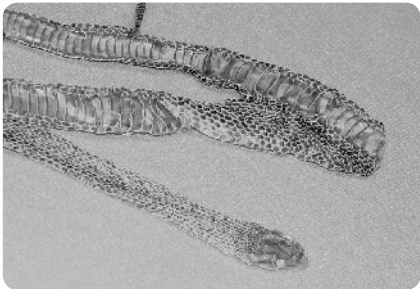
小松をはじめ、石川・富山両県の範囲で広く聞かれる方言に、丸々と太った健康そうな子どもをさして言うウマソナ子といった言い方があります。地域によってはウマソーナ、ウマソイ、マソイなどの発音も聞かれます。

ただ、石川・富山以外の出身の母親が、ふくよかで健康そうな子どもを抱いていて、地元の人から「ウマソナ子やねー」と言われたら、さぞ驚くことでしょう。人の子を見て「おいしそうな子」とは何事だ、というわけです。「ウマソナ子」と言った人はほめているつもりなのですが、「おいしそう」な味が良き「うま」の意味の共通語のウマイ、ウマソナ子がありますから、その意味と誤解されることになるのです。石川・富山以外の人からすれば、ずいぶん人騒がせな方言ということになります。

「おいしい。味がよい」のウマイは、すでに奈良時代の中央語(当時の奈良、その後の京都)に使用例が見られるク活用形容詞「うまし」に由来するものと考えられ

ますが、「ウマソナ子」と言う場合のウマソナは、奈良時代の万葉集に「うまし国そあきづ島大和の国は」のように登場する、「十分整って美しい。すばらしい」の意味のシク活用形容詞「うまし」が北陸に伝播し、「すばらしい」の意味から、石川・富山の旧加賀藩域ではさらに、「ふくよかで立派な」の意味を持つに至ったと考えています。

なお、語形的には、シク活用形容詞の「うまし」が「うましい」を経てウマソイに変化し、ウマソイが一方ではンマソイ、マソイに変化し、一方ではウマソナ(形容詞型に変化したものと思われまゝ。ウマソナ子のウマソナのように、ある方言形と同じ形の共通語形があると、他地域の人には誤解されることがあるので注意が必要です。「もらえる」の意味のアタル、「利口で聞き分けのよい(子)」のカタイ(子)、「程度が大きい」ことを言うガンコナなどもそのような例と言えるでしょう。

連載
179小松方言の語源 その4
—京都語由来の方言について
(4)—

「このキン、財布に入れとくとお金貯まれんよ」

今年の干支は巳、つまり蛇の年です。そこで、今回は巳年にちなんで、京都語由来の小松方言の例として、〈蛇の抜け殻〉を指すキン、ケンを取り上げます。ちなみに、小松市内での蛇の抜け殻の方言については、本連載の41回(2001年8月号)で一度紹介したことがあります。

〈蛇の抜け殻〉を言うキン、ケンは衣きぬから

連載41回目でも書いたように、蛇が脱皮したあとに残される蛇の抜け殻の小松市内での方言の代表形がキンあるいはケンでした。そして、わずかな地点ではありますが、キヌも聞かれました。このことから、小松で聞かれるキン、ケンは、キヌがキンに、さらにキンがケンに変化した形であることがわかります。

現代日本語でキヌというと、普通は絹織物の「絹」を指すと思ってしまうますが、蛇の抜け殻をいうキヌは、衣服・着物を指す古語の「衣」が語源です。『日本国語大辞典』(小学館)によれば、衣服・着物を指す「衣」という語は、奈良時代の古事記万葉集、平安時代の源氏物語、更級日記などにすでに登場する古い言葉です。

現在、共通語も含めた本土の方言では、衣服・着物の意味でキヌを使う地域はほとんどありませんが、琉球方言地域では「衣」から変化したキン、チンが今も使われています。

次は、沖縄の首里方言(現在の県庁所在

地的那覇市方言)で語られた昔話の「桃太郎」の一節です。

(前略)アルフィー タンメーヤ ヤマンカイ タムン トウイガ ンメーヤ
カーランカイ チン アレーガイ
チャビタン

(共通語訳…ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました)

(NHKサービセンタ―CD教材『日本の方言』より)

この中の「チンアレーガ」は「着物を洗いに」洗濯に」の意味で、このチンが「衣」から変化した形なのです。

ところで、中世末期の京都語を記録していることで知られる、キリシタン資料の『日葡辞書』には、「Oinno(キヌ)ヌグ(訳)蛇が脱皮する」の記述が見られます。昔の人は〈蛇の抜け殻〉を蛇が脱いだ着物にキヌに見立てたのでしょう。中世末期に京都で使われていた〈蛇の抜け殻〉をも指すキヌが小松にも伝わり、それに音声変化が起こって、キンやケンが生まれたと考えられるのです。

連載
180小松方言の語源 その5
—京都語由来の方言について—

「ここにメブツテできてしもた。眼医者行ってこんな」

今回は「麦粒腫」の方言を取り上げます。

「麦粒腫」の方言については、小松市内での分布については本連載の8回目で、JR沿線での世代差については174回目でも取り上げたことがあります。市内で広く聞かれる「麦粒腫」方言の代表はメモライ(音声変種としてのエモライ、イモライ、メモレ、メモロー、イモリなどを含

む)でしたが、今回はそこでも紹介した、大日川上流部の丸山に分布するホツテ、そして大杉谷川上流部に分布するメブツテ、メブツター、ネブツターと、かつての中央語(京都語)との関係について考えてみたいと思います。

メブツテ(一)、ネブツターは「目陪堂」から

小松市内で比較的古い方言の分布が見られることが多い山間部の大日川と大杉谷川の上流部で聞かれたホツテ、メブツテ、メブツター、ネブツターは、かつて中央語で使われた可能性のある(文献例は確認できていませんが)「目陪堂」に由来すると考えられます。国立国語研究所編『日本言語地図』で「麦粒腫」方言の全国分布を見ると、東日本では東北の秋田県、西日本では中国地方の鳥取、島根、岡山、広島県にホイト、メボイトのまとまった分布が見えます。小松のホツテ、メブツテ、メブツター、ネブツターも、このホイト、メボイトと語源を同じくするものだろうと考えられています。

ホイトとは、本来仏教用語で「禪宗の僧が僧堂の外で食事の末をなしを受けること」を意味した「陪堂」で、後に「人に施しを受ける人(こと)」、「つまり「乞食」の意味となりました。よって、メボイト(目陪堂)は「目十乞食」の意味です。ホイト、メボイトが「麦粒腫」の方言となったのは、この眼病に関して、「他人から何か物をもらうと治る」という俗信が全国各地に見られることと関係があると考えられています。かつて中央語で「麦粒腫」の意味で生まれたメボイトが近畿地方から周辺に分布を拡げたと考えるわけです。『日本言語地図』では、ホイト、メボイトの分布の内側にメコジキ(ホイトをコジキに変えた)やメボ(メボイトの下略形)の分布が見えます。福井県嶺北地方北部から石川(奥能登を除く)、富山にかけて広く聞かれるメモライも、「メ+モライ(人から物をもらう)」の意味で生まれた方言と考えればいいでしょう。

連載
181小松方言の語源 その6
—京都語由来の方言について—

「コーヒーをどうぞ」「あらイトシゲニ」

今年もまた4月を迎え、本連載は16年目に入ります。こうして長く書き続けて来られたのも、小松の皆さんが読んで下さっているからこそと、感謝申し上げます。

連載16年目のスタートも、前回までに続いて京都語由来の小松方言の話題です。

アテガイナは古語「あてがい」から

小松市内の広い範囲で聞かれた「いい加減な」の意味のアテガイナ(アテゲナの形)もは、かつての中央語(京都語)の名詞「あてがい」(漢字では「宛行」「充行」と書かれます)に由来するものと考えています。古語「あてがい」は現代語の動詞「あてがう」のもとになった語と考えられ、「見込み。予測」、「心配り。取り計らい」、「割り振って与えること」、「職務に対する報酬」として与えられる土地・金銭などといった意味がありますが、小松のアテガイナ、アテゲナは、この中でも中世の仏教説話集『沙石集』(1283年成立)などに用例が見える「見込み。予測に近い意味の「あてがい」が、形容語(形容動詞)化して小松に伝わる過程で「いい加減な」の意味で使われるようになったものと考えられます。石川県内では、小松市以外でも「いい加減な」の意味のアテガイナが使われる地域は少なくありませんし、富山県砺波地方などでも使われるようです。

相手の労をねぎらう感謝の言葉も京都語由来

小松で使われる「ありがと」にあたる感謝の言葉の方言というと、金沢や小松の町部で使われるアンヤトのほかに、北陸地方の広い範囲で聞かれるキノドクナ、市内の南部地域や東部地域で聞かれるイトシゲニ(エトシゲニとも)、そして東部地域の山間部、丸山、大杉、尾小屋などで聞かれるシヨーシャ(シヨーシャ、シヨッシャナーとも)があります。キノドクナ、イトシゲニ、シヨーシャは、いずれも自分に気遣いをしてくれた相手のことを気の毒に、かわいそうに思う気持ちが感謝の表現となったものと考えられます。キノドクナが「気の毒」に由来することは明らかですが、イトシゲニとシヨーシャも、それぞれ「かわいそうだ」の意味のかつての京都語「愛し」「形容詞」、「笑止(形容動詞)」に由来するものと考えられます。市内での分布からは、シヨーシャ→イトシゲニ→キノドクナの順で変化したと考えられています。

連載
182小松方言の語源 その7
—京都語由来の方言について
(7)—

「普段はイチガイ(?)なおじいちゃんも孫の笑顔には負けるなあ」

今回も京都語由来の小松方言の話題を続けます。

今回は、本連載の60回(2003年3月)に「人の性向(性質)を表す方言」として尾小屋の例を紹介した「頑固な人」の意味のイチガイモン、「徹な。強情な。偏屈な」の意味のイチガイナのイチガイを取り上げます。

意外に広いイチガイの分布

小松方言のイチガイについては、先の尾小屋の例のほかにも、小松市教育研究所『町史にみる小松の方言』(1993年)によれば、「思いを通す」の意味の形容語イチガイナが『軽海町史』に、「途な」の意味の形容語イチゲナが『中海町史』に、「二つのことにこだわる。堅苦しい」の意味のイチゲナが『草野町史』に載っていることがわかります。イチゲナはイチガイナの一部がゲーに変化し、さらにその長音が脱落した形です。

石川県内では、小松以外にも、「短気な」の意味のイチガイナ、「短気者」のイチガイモンが新田露子『七尾地方の方言集』(1996年)に、「強情な」の意味のイチガイナが志受俊孝『金沢の方言』(1983年)に見えるなど、各地の方言集等で確認でき、県内のかなり広い範囲で使われているようです。また、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、石川県以外にも新潟、富山、岐阜、鳥取、島根、岡山、広島、山口、愛媛、高知などの県、つまり、か

つての中央語地域の近畿地方の周辺に分布していることがわかります。

イチガイはかつての京阪語「一概」に由来

右で述べたイチガイの全国的な分布状況からも推定されるように、イチガイはかつての京阪語「いちがい」(漢字をあてると「概」)に由来するものです。

『日本方言大辞典』によれば、文献例として、中期の『毛詩抄』(1532~55年成立)の使用例をはじめ、江戸期の『日葡辞書』(1603年)や浄瑠璃「八百屋お七」(1714~17年頃初演)の例が見えます。

その意味は、『日葡辞書』に「chigauo (イチガイユ) タツル(訳)自分の意志を強情に通す」とあるところからも、中世末期から江戸初期頃の京阪語の意味とほぼ同じ状態で小松に伝わり、方言として使用されてきたことがわかります。それに対して、七尾方言の例は、意味が少し変化した結果「短気な」の意味を表すようになったと考えられます。

連載
183小松方言の語源 その8
—京都語由来のイッケとイッ
チョライ—

「生まれて初めてのイッチョライ」
(3歳の七五三参りにて)

今回は京都語由来の小松方言の中から、「親類(親戚)」を指すイッケと「一番上等の晴れ着」を指すイッチョライを取り上げます。

イッケは「一家」から

現代共通語で「一家」と書くと、「いっか」と読んで、「一家でピクニックに出かける」のように「一つの所帯」を指したり、「団結の固い組織」を指したりするのが一般的ですが、小松方言で広く全域で聞かれ

る「親類」を指すイッケも、漢字で「一家」と書いて「いっけ」と読む、かつての中央語(京都語や大阪語)に由来します。文献例としては、13世紀前半頃の成立とされる中世を代表する説話物語集の一つである『宇治拾遺物語』に「親しき一家の類はらから集めて」の例、江戸時代前期の井原西鶴の浮世草子『好色一代男』(1682年)に「左の方に一家の女郎十一人」の例などが見られます。前者は「門。一族」の意味、後者は「家中の人」といった意味で使われていると考えられます。つまり、これらのかつての京都語・大阪語の「家」が、「一家」と読みを変えて、ほぼそれらに近い意味で現代語共通語に受け継がれたのです。

それに対して小松方言では、かつての中央語が、本来のイッケの形のままで伝わり、現在まで前者の「一門。一族」に近い「親類」の意味で使われてきたのです。ちなみに、「親類」を指す方言イッケは小松を含む北陸地方の全域をはじめ、関東・中部地方から西日本の広い範囲に分布しています。

イッチョライは「一張羅・二張来」から

小松方言で「一番上等の晴れ着」を指すイッチョライ。南の福井県では、置県80周年と北陸トンネル開通(1962年)を記念して発表された新民謡「イッチョライ節」のタイトルにも使われている方言です。

イッチョライは、かつて中央語で、同様の「一番上等の晴れ着。たった一枚きりの衣服」といった意味で使われた「一張羅」に由来する方言です(現代共通語でも「一張羅」が使われないわけではありません)。江戸時代前期の近松門左衛門の浄瑠璃『心中天網島』(1720年)に「黒羽二重の「一張羅」のような例が見えます。文献に「一張来」の例も見られますから、小松方言のイッチョライはその「一張来」の形が伝わって、方言として使われていると考えることができそうです。

連載
184

小松方言の語源 その9

—京都語由来のモノイとテキナイ—



「ばあちゃん、もつとボール遊びしょ〜!」
「あ〜しんど。孫守りもモノイわ」

今回は京都語由来の小松方言の中から「精神的につらい。疲労で体がつらい」とを表すモノイと、「疲労や病気などで体調が悪い」ことを表すテキナイを取り上げます。

モノイは「物憂し(物憂い)」から

「精神的につらい」ことや「疲労で体がつらい」ことを表すモノイは、古語(かつ

ての京都語)の「物憂し」(後に「物憂い」に変化)に由来するものです。

古語としての形容詞「物憂し」の意味は『日本国語大辞典』(小学館)によれば、①「気が進まずおっくうである。何となく倦みつかれて身心がすっきりしない。だるくて大儀である」、②「何となく心がはればれとしない」、③「何となくつらい。いやである。やりきれない。わびしい。苦しい」と説明されており、本来は精神的に苦しいことを表していた語であることがわかります。

小松方言と似た意味で使われるモノイは、小松だけでなく、石川県加賀地方と富山県の広い範囲に分布します。京都方面からモノイが北陸地方に伝わる過程で、モノウイ↓モノイと変化したと考えられています(富山県東部にはウイの形も)。それに対して、南の加賀市と、それに続く福井県では、モノウイ↓モノグイを経て生まれたと考えられるモノグイが使われています。筆者(越前市出身)の場合は、「精神的につらい」はモノグイ、「疲労や病気」で肉体的につらい」はエライ、テキ

ネーで使い分けていたように思います。

テキナイは「大儀な」からか?

「疲労や病気などで体調が悪い」ことを表すテキナイは、小松をはじめ、北陸三県の範囲で使われるものです。能登地方では発音の変化したテキナイが使われています。語源ははっきりしませんが、古語「大儀(な)」に、意味を強調し形容詞を作る接尾辞「ない」を付けた「大儀ない」に由来するものと筆者は考えています。

「大儀ない」から変化したと考えられる「てきない」は、江戸時代前半の浄瑠璃「心中宵庚申」(1722年初演)に「喉がつまってぎゅぎゅち、てきない」こんでござりまする」の例が見えますし、江戸時代の全国方言集『物類称呼』(1775年)には、「劣して苦しむことをせつないといひ又じゆつないといふを加賀にて○てきない」と云とあり、江戸時代半ばにはすでに加賀地方で使われていたこともわかります。

連載
185

小松方言の語源 その10

—京都語由来のカザとテンポ



「テンポにええカザしてきたな」
「もうそろそろ食べ頃だよ」

今年も暑い夏になりそうです。暑い時期は食べ物腐りやすく、危ないと思っただけ「におい」をかいで大丈夫か判断している方もいるでしょう。今回は京都語由来の小松方言の中から、その「におい。香り」を指すカザ、そして「大変な。法外な」など、「程度が甚だしい」ことを指すテンポを取り上げます。

カザは中世期以降の京都語に由来

「におい。かおり」の方言として使われるカザについては、本連載のどこかですでに取り上げたような気がしていましたが、確認したところ、今回が初めてのようです。「においをかぐ」ことは、カザカク、カザガスのように言います。

国立国語研究所編『日本語地図』で「におい」の方言の全国分布を見ると、カザは佐渡島を東端として、北陸三県と岐阜県から西(近畿地方、中国地方の鳥取・岡山・広島県、四国地方、九州地方東南部と沖縄県)の広い範囲に分布していることから、かつての中心地・京都を発信地として、小松を含む北陸地方をはじめとした西日本各地に分布したものと考えられます。

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、カザの文献例として鎌倉時代の語源辞書『名語記』(1275年成立)に「香をかさいへり、如何。くささまを反せばかさ也」の例が紹介されていて、京都語として鎌倉時代にはすでにカザが使われていた

ことがわかります。

テンポは近世初期の京阪語に由来

テンポについては本連載の104回(2006年11月号)の「数量に関する方言」でもご紹介したことがあります。テンポ、タカナイカ(すごく高くないか)のような使い方のほか、テンポナ、ヒトデヤッタ(大変な人出だった)、テンポニヤカマシー(とても騒がしい)のように、テンポナ、テンポニの形で使われることの方が多いようです。

テンポについても『日本方言大辞典』によれば、「思い切つてすること。また、そのさま」の意の「てんぽ」の文献例が、江戸時代の浮世草子『日本永代蔵』(1688年刊)に「吉人に銀四匁つ取て突当りたる方へ家を渡すなれば、てんぽにして銀四匁と札を入れる程にのように見え、この意の方言例として石川県鳳至郡の例も載ることから、近世初期の京阪語「てんぽ」が北陸に伝わる中で、小松方言のような意味でも使われるようになったと考えればよいでしょう。

連載
186小松方言の語源 その11
—京都語由来のイサル、カサ
ダカナ—

「窓の上のハチの巣、オトロツシャー」
「なーにカサダカナ、たかが虫やがい」

すでに10回にわたって、かつての中央語であった京都語由来と考えられる小松方言をご紹介してきましたが、読者の皆さんの中には、それらが中央語とは無縁な地域独特のことばと思っていた人もいるに違いありません。

今回も引き続き、京都語由来の小松方言と考えられるものの中から、「いばる。憤る。騒ぐ」といった意味を表すイサル

(「イサルの形も」と、「大げさな」の意味のカサダカナを取り上げます。

イサルは自動詞「勇む」からの変化か

『日本方言大辞典』(小学館)によれば、「いばる。自慢する。見えを張る」の意味のイサルが、石川県金沢市と石川郡のほか、福井県、岐阜県、福岡県、「憤る」の意味のイサルが石川県能美郡、「騒ぐ」の意味のイサルが石川県と新潟県西頸城郡にあるとの記述があります。同辞典には、ほかに「叱る」の意味のイサルが石川県と富山県の氷見、砺波にあるとありました。小松でも「叱る」の意味でイサルを使う地域はあるのでしょうか。

ところで、イサルについては、北陸三県のほか、新潟や岐阜、そして西の福岡に分布することから、かつて京都を中心に分布を広げたものの名残かと思われます。

語源については、古語の自動詞「勇む」(「気負つてはやり立つ。勢い込む」の意味)が、ラ行五段動詞、一段動詞、力変・サ変動詞の基本形が全て「ル」で終わることへの類推で、北陸に伝わるうちに、イサム

からイサルに変化したものだろうと考えられています。小松市内では、イサルの語頭イがエに変わったエサルもよく聞かれます。

カサダカナは「嵩高な」に由来

小松方言で「大げさな」の意味で使われるカサダカナは、古語辞典等によれば、「数量が多い。おおげさだ」の意味の近世語とあります。カサダカは漢字で表すと「嵩高」となります。

『日本方言大辞典』(前出)によれば、使用地域は新潟県西頸城郡と富山県とあり、「大げさなさま。たいそうなさま」の意味での文献例として、近世前期の浄瑠璃・妹背山婦人庭訓(四(1771年初演)の「いかに嘉例の祝ひでも、あんまり騒ぎがかさ高な」を挙げています。同辞典には石川県での使用例は載っていませんが、少なくとも金沢市から加賀市にかけての加賀地方では間違いなく使われています。

連載
187小松方言の語源 その12
—京都語由来のウタテナ、オ
クモジ—

「このオクモジ、うまそうに漬かったぞいね」

今回も引き続き、かつての中央語であった京都語に由来すると考えられる小松方言を紹介します。取り上げる方言は、「困った様子」を表すウタテナと、「野菜の葉や茎を漬けたもの」を指すオクモジです。いずれも、本連載ではこれまで一度も取り上げていないものです。

ウタテナは中世京都語に由来

「困った様子」を表す小松方言ウタテナは、市内全域で使われたものではないようです。小松市内の町村史の類では、市の北東部にあたる「軽海町史」にウタテナ、「中海町史」にウタテナが変化したと思われるウタツチャが載っているだけです。

かつての中央語としては、古代の万葉集にすでに用例が見える副詞「うたて」があり、平安時代に入ると、それから生じたと考えられる形容詞「うたてし」がありますが、小松方言のウタテナは、中世の説話集「宇治拾遺物語」(13世紀前半成立)などに用例の見える形容動詞「うたてなり」(「憎むべきだ。情けない」の意)に由来すると考えられます。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、方言としてのウタテナ、ウ

タテナは、北は東北・青森から南は九州・鹿児島までの広い範囲に分布していることが分かりますし、ウタテナと関連すると思われる、「うるさがるさま。めんどろがるさま。ものういさま」の意味のウタチ、タッチが石川県江沼郡の例として載っ

ています。

オクモジは中世の女房詞に由来

「野菜の葉や茎を漬けたもの」を指すオクモジは小松市全域で使われていた方言です。小松市を含んで北陸三県の広い範囲で使われ、『日本方言大辞典』によれば、北陸以外にも近畿・中国・四国・九州の西日本各地に分布していることがわかります。

オクモジは、室町時代に宮中に仕えた女房が使いつづけた女房詞に由来します。女房詞の中でも「文字詞」(語の末尾に「もじ」(文字)を付けて隠語化する)と呼ばれるものの一つで、オクモジは、丁寧さを表す「お」と、「きき釜」の「き」を略した「く」に「もじ」を付けた「くもじ」との合

成語です。オクモジと同じように中世の女房詞に由来する文字詞には、今も共通語として使われている「しゃもじ」(「杓子」の「しゃ」+「もじ」)や、女性の「腰巻」を指した「ゆもじ」(「浴衣」(「浴衣」ゆかた)の「ゆ」+「もじ」)などがあります。

連載
188小松方言の語源 その13
— 京都語由来のオードナ、オツケ —

「今朝のオツケは豆腐と油揚げ。ウラの大好きやわ」

「小松方言の語源」シリーズも今回が13回目となりますが、皆さんがお使いの、あるいはご存じの小松方言の中に、かつての中央語（京都語）に由来するものが意外に多いことがわかりただけでしよう。

今回もそんな京都語由来の小松方言から、「惜しげなく」「横着な」といった意味を表すオードナと、「みそ汁（汁もの）」を

指すオツケをご紹介します。

オードナは漢語「横道」から

オードナのオードは、漢語「横道」に由来します。「横道」は本来「本道からそれた道。わき道」を指しましたが、転じて「人間としての正しい道からはずれたこと。人道に背いたこと」の意味で15世紀頃には中央語（京都語）として使われていたことがわかります。中世末期の京都語の記録として知られる『日葡辞書』（1603-04）には、「Vōdō（ワダウ）。ミシマノ ミチ（訳）生活、習慣における邪悪。Vōdōna（ワダウナ）モノ」と載っており、オードナの形もすでに使われていたようです。このオードナが伝わって石川県ではオードナと変化し、意味もずれたと考えられます。その意味のずれにも、石川県内で違いがあり、金沢では「おおげさな」に近い意味で使われるのに対し、小松では「惜しげなく」「横着など」といった意味で使われています。県内では、ほかに「大胆な。無鉄砲な」や「おっとりしている。のんきな」の意味で使われる所も

あって、中央語の原義からの多様な派生が確認できます。

オツケは中世の女房詞に由来

オツケは、動詞「付ける」の連用形が名詞化した「つけ」に丁寧さを添える接頭辞「お」が付いたもので、前号で紹介したオクモジ同様、室町時代に宮中に仕えた女房が使い始めた女房詞に由来し、本膳で飯に並べて付ける意味で「吸い物の汁」を指したものです。前出の『日葡辞書』にも「Votuge（ヨツケ）（訳）飯とともに食べる汁。女性語」とあり、かつての京都語オツケが小松にも伝わって汁ものでも主に「みそ汁」を指して使われているわけです。

汁ものを指す方言オツケは、小松だけでなく北の東北地方から、関東・中部・北陸・近畿・中国・四国・九州と全国の広い範囲に分布します。

ちなみに、みそ汁の丁寧な言い方の「おみおつけ」は、「おつけ」にさらに「み」と「お」が加わった形です。

連載
189小松方言の語源 その14
— 京都語由来のオヤケ、カンシヨ —

「カンシヨはもう見んようになったなあ。あ、現代のカンシヨ、あった!」（すわまへ芭蕉公園にて）

今年もまた師走を迎えました。「小松方言の語源」シリーズもかなり回を重ねてきましたが、今しばらく続けたいと思います。

今回は、家に関係のある二つの方言、オヤケとカンシヨについて、かつての中央語（京都語）との関連をご紹介します。

オヤケは「大家・大宅」から

小松の方言でオヤケというと「お金持ち、財産家」のことを指します。

オヤケは、現代語の「公」と語源を同じくする古語（京都語）の「おほやけ（大家・大宅）」に由来する方言です。古くは「大家・大宅」、つまり「大きい家、第一の家」の意味だったものが、平安時代には皇居・天皇、朝廷も表すようになり、さらに現代語と同じ「（私に対する）公共、公」の意味に変化したと考えられています。

ということは、小松方言で「お金持ち、財産家」の意味で使われるオヤケは、「おほやけ」本来の意味を残しているということになるでしょう。

『日本方言大辞典』（小学館）には、「資産家。素封家」の方言「おやけ」の分布域が、青森県、秋田県、石川県河北郡、福井県、奈良県南部、沖縄県宮古島とあります。また、文献例として、中世末期の狂言にある「去ながら、こなたはおほやけな事でござれば、少し斗は出たのが無いと申事は御座るまい」の例を載せています。

カンシヨは「閑所」から

小松の方言でカンシヨとは「便所」のことです。「便所」でも、屋外にあった大使用の便所小屋を主に指したようです。本連載の2006年1月号（94回）、2007年10月号（115回）でも簡単に取り上げたことがあります。

カンシヨは、古い漢語「閑所・閑処（かんしよ）の読みも」に由来します。元は文字通り「人気がない、静かな所」を指しましたが、中世後期には「便所」の意味でも使われるようになったようです。中世末期の京都語を記録した『日葡辞書』（1603-04）には、「Cano（カンシヨ）（訳）便所」と出ています。このカンシヨが小松にも伝わったと考えればいいでしょう。全国的には、カンシヨの形で方言として使用している地域が多く、小松のようにカンシヨと言うのは『日本方言大辞典』によれば、石川・富山両県の範囲だけのようです。

連載
190

小松方言の語源 その15
—京都語由来のガンドの二つの意味—



「ブリオコシが鳴って、今年もうまそなガンドがあがった」

新たな年、2014年を迎えました。気持ち新たに本連載の執筆に臨んでいきたいと思いますが、テーマは今しばらく「小松方言の語源」で続けていくことにします。

正月の祝い魚「鰯」の呼称ガンド

北陸を代表する魚「鰯」は、成長につれて呼び名が変わる出世魚ということで、

成長していく様子を子どもの成長に重ね合わせて、縁起が良い魚として正月の祝い魚としても珍重されます。北陸地方では嫁いだ娘の夫が出世するようにとの願いを込めて、お歳暮に鰯を一本丸ごと贈る習慣も根強く残っています。

成長とともに変わる鰯の名前は地方によっても違いがありますが、小松を含む石川県内では、小さいものから順に、「コソクラ（15センチ程度）→フクラギ（40センチ程度）→ガンド（60センチ程度）→ブリ（60センチ以上）」と呼ぶのが一般的です。

このうちフクラギは、形や大きさがちよつと足のふくらはぎ（脛）に似ているところから生まれた方言的呼称と思われるのですが、60センチ程度のものを言うガンドは、かつての中央語（京都語）に由来すると考えられます。ではその語源は何かというと、「強盗（カンド）提灯」の略称としての「がんどう」だと考えられます（「強盗を」がんどう」と読むのは漢字音で言うところの唐音読みで、「カンド」はその当字とされています）。

「強盗（提灯）」とは、かつて盗賊が夜に

使った、銅板やブリキ板で作った釣鐘型の丸くて長い手提げ提灯のことです。その「がんどう」と形や大きさが似ていたため、北陸地方では60センチ程度のものをガンドーと呼ぶようになり、さらに最後の長音が落ちてガンドとなったと考えています。

「鰯」の方言としてのガンド、ガンドー

ところで、小松の方言には、鰯の呼称としてのガンド以外に、もう一つガンド（ガンドー）と呼ばれるものがあります。そして、このガンド、ガンドーも同じく「強盗」が語源と考えられています。『日本国語大辞典 第二版（小学館）』では「強盗の説明の最後に鰯の方言ガンドーを、『日本方言大辞典（小学館）』でも「がんどー」の見出しの下に「強盗」の漢字を当てています。歌舞伎の大道具「強盗返」を作るときの道具に「鰯」があることと関連があるのかもしれない。

連載
191

小松方言の語源 その16
—京都語由来のキョクナ、キョクナ—



「このねんね、ほんとにキョクナ子やわ」

今回は小松市内の広い範囲で使われる形容語の方言の中から、これまで同様、かつての中央語（京都語）由来のものと、キズイナとキョクナの2語を取り上げることにします。

キズイナは漢語「氣随」に由来

小松方言で「愛想がなく、つんとした様子」を表すキズイナは、かつての中央語

で漢語の「氣随」に由来すると考えられます。

文献例としては、中世末期の京都語の記録した代表的文献の一つである『日葡辞書』（1603〜04）に、「Qizui（キズイ）〈訳〉気ままで思ひのままであること」とあり、他の文献例からも、かつての中央語としては「わがままなこと。勝手気ままなさま」を表していたと考えることができます。また、『日本方言大辞典』（小学館）によれば、中央語本来の意味と同様の意味で、宮城県、新潟県佐渡、鳥取県、島根県、山口県、香川県、愛媛県の使用例が載っています。

この漢語「氣随」が、小松を含む石川県及び富山県の範囲にも伝わり、方言となる過程で形容語化し、「無愛想なさま。つんとした様子」といった意味に変化したと考えられます。

キョクナのキョクは「曲」から

キョクナという方言は、小松では「ひょうきんな。こつけない」といった意味で使われています。

キョクナのキョクは「曲」に由来するものと思われます。古くは、中世の京都語として「直」の反対語の「曲がっていること。正しくないこと」を指していたものが、その後「おもしろみ。興味」といった意味でも使われるようになったようで、前出の『日葡辞書』には、「Qocunuo（キョクノ）ユウ〈訳〉笑いをひきおこすようなことや冗談をいう」とあります。小松方言のキョクナは、『日葡辞書』に載るような意味の京都語が北陸に伝わり、形容語化したものに違いありません。となれば、北陸だけでなく西日本のどこかでもキョクナという方言が使われていてよさそうです。『日本方言大辞典』には「きよく（曲）」の見出しで「こつけないこと。また、そのさま。」とあり、その使用地域として「石川県能美郡、江沼郡」とだけ出ていますから、かつての中央語「曲」が方言キョクナの形で使用されていたのは、小松周辺（旧能美郡及び旧江沼郡の範囲）に限られている可能性もあります。

連載
192

小松方言の語源 その17
—コシキダの語源と京都語由来のゴネル—



「コシキダは冬場の必需品やったなあ」

今年は例年になく雪の少ない冬でしたが、かつて雪の生活に欠かせなかった道具に木製の雪かき具コシキダがありました。今回はそのコシキダの語源について私見を述べるとともに、これまで同様、京都語由来の方言の例として「死ぬ」意味の「ゴネルを取り上げる」にします。

「コシキダのコシキは「掻く」から

上の写真のような形の木製雪かき具を小松ではコシキダと言いました。最近ではプラスチック製のスコップや様々な除雪具に追いやられて、目にするものもなくなりましたが、木製で瓦を傷めにくいので屋根雪下ろしに重宝したものです。東北から北陸にかけての日本海側の積雪地帯では、木製の雪かき具にカイスキ、カイシキ、カスキ、カシキ、ケーシキ、ケシキ（以上は青森から山形にかけて）、クシキ、コイスキ、コースキ、コスキ、コスキダ、コシキ、コシキ、コシキダ、ゴイスキ（以上は新潟から北陸三県にかけて）など、多彩な方言形が聞かれました。江戸時代後期に新潟県魚沼の雪国の生活を描いた『北越雪譜』には「幾万斤の雪の重量に推せんをおさるるゆゑ、家として雪を掘らざるはなし。掘るには木にて作りたる鋤（すき）を用ふ、里言にこすきといふ、則木鋤なり。」（傍点筆者）とあり、コスキを「木鋤」からと書いていますが、東北地方の呼称から考えると、「コスキは雪を掻く鋤」つ

まり「掻く（カイスキ）」からの音変化形と思われる。小松のコシキダの「コシキ」も、このコスキの変化形で、コシキダはおそらく、その「コシキにイタ（板）を加えた」コシキイタが変化した形だろうと考えています。

「ゴネルはかつての中央語（京都語）由来

小松で「死ぬ」意味で使われることのある「ゴネル」は、かつての中央語に由来するものです。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「死ぬ」の意味の「ゴネル」は、北は東北の秋田や関東地方、長野・静岡・愛知などの中部地方、そして新潟や石川の加賀地方、さらに近畿地方から中国、四国、九州地方にも分布が見られます。江戸時代（1700年代前半）の上方語文献の浄瑠璃作品などに用いられた例も見られます。小松では「ゴネル」のほかに、「ゴネルから派生したと思われる「ゴネムクも「死ぬ」意味で使われることがあります。

連載
193

小松方言の語源 その18
—京都語由来のカシクと江戸語由来のコッパイナ—



「春なんに、米カシトルとまだ手え冷とておれん」

本連載は今月からいよいよ17年目に入ります。今後ともご愛読下さい。

今回は、小松方言の中から、かつての京都語由来のカシク、そして江戸語由来のコッパイナの2語を取り上げます。

「カシクは古代日本語の「かしく」に由来

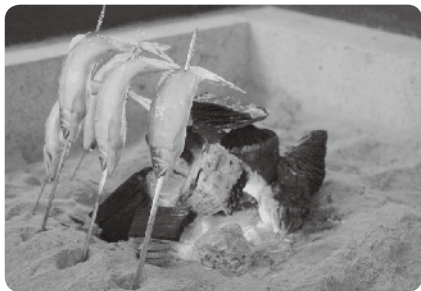
本連載の75回（2004年6月号）でも簡単に紹介した「米を研ぐ」意味の方言カ

シク（カシグとも）は、南の加賀市から福井県の嶺北地方でも使われますが、その語源は古代（奈良時代）の中央語にまで遡るとも歴史の古いことです。

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、「かしく」の発音で古くは奈良時代の日本書紀（720年）に「復、つかはるる民有りて、路頭に炊（か）しき、はむ、万葉集（8世紀後半）に「甌（こしき）には蜘蛛の巣懸きて、炊炊（か）しき、事も忘れて（山上憶良）」の例が見え、この時代には小松方言のように「米を研ぐ」意味でなく「米を蒸す」意味で、さらに後には「米を炊く」意味で使われたことが分かっています。発音もカシクのほかに、江戸時代の途中からカシグの発音も現れたようです。方言としては、八丈島の「蒸す・ふかす」、青森県津軽地方や秋田県の一部の「飯を炊く」のように原義に近い意味で使われているところもあるようですが、福井の嶺北地方から小松などの加賀南部にかけては、「米を炊く」前の「米を研ぐ」行為を表すように意味が変化したと考えればいいでしょう。

「コッパイは江戸語「骨灰」に由来

小松の方言で「始末がつかない散々なさま」の意味で使われたコッパイナ、コッパイジャのコッパイは、18世紀後半以降の江戸語文献に登場する、「さんざんな目にあうこと。大変なこと」の意味の「骨灰」（粉灰の表記もあり）に由来します。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、小松方言と似た意味で使われるコッパイは、北陸の石川、富山西部、福井の若狭地方西部のほか、東北の岩手県南部や関東地方、新潟、長野、愛知、滋賀、和歌山などに分布することがわかります。そして、近畿地方より西にコッパイの分布が見えないことは、この語が江戸語由来で、江戸時代半ば以降に、江戸を中心に東西に分布を広げた可能性を示すものかもしれません。

連載
194小松方言の語源 その19
—京都語由来のシャモメル、ジロ—

「魚をジロで焼くとてんぽにうまいげん!」

今回も、かつての中央語（京都語）由来の小松方言をご紹介します。

一つは小松市全域で使われるシャモメル、今一つは市東部の山間部集落にのみ分布が見られるジロを取り上げます。

シャモメルは「精(が)もめる」から

シャモメルは「腹が立つ」に近い意味です。小松市内のほぼ全域で使われるよう

です。発音が変化したため想像しにくいかもしれませんが、シャモメルの元の形は「精がもめる」だと考えられます。「精がもめる」の形での中央語の文献での使用例は見当たりませんが、「気力」を表す「精」という中央語をもとに、現代共通語でも用いられる「気もめる」に似た表現として、小松をはじめ、石川・富山両県の旧加賀藩領域で使われるようになったものでしょう。意味も「腹を立てる」のほかに、原義に近いと考えられる「気もめる、いらいらする」の意味で使われる場合もあるようです。

小松市内では、シャモメルに近い表現でセーモム(年齢の高い人にはシエーモムの発音も)が聞かれます。セーモムも「精もむ」でしょう。発音の変化が進んだシャモメルに比べて、「腹を立てる」の意味より、原義に近い「いらいらする」の意味で使われることが多いのではないかと予想されます。

ジロとは「地炉」と「囲炉裏のこい」

ジロとは「囲炉裏」を指す方言形です。

こちらでも、かつての中央語の文献での使用例は見当たりませんが、漢語「地炉」に由来するものと考えられます。しかし、小松の皆さんでも、ジロという方言形を使ったり、聞いたりした人は少ないでしょう。なぜなら、小松市内のほとんどの地域では、「囲炉裏」のことをイリリと言っているからです。ジロは小松では大杉・丸山・花立といった南東部の山間地地しか聞かれませんが、白山市の旧鳥越村から旧白峰村にかけての白山麓一帯にも分布していることから、イリリより古い方言形と考えられます。「囲炉裏」を指すジロは、『日本方言大辞典』(小学館)によれば、小松を含む石川県加賀地方南部以外に、東北の岩手・秋田・山形の一部や関東地方の一部、長野、新潟や福井、そして九州の熊本・宮崎・鹿児島などでも使われていたことがわかります。

一般家庭から囲炉裏が姿を消した今、ジロなどの方言形も忘れ去られようとしています。

連載
195小松方言の語源 その20
—京都語由来のセゴ、スコイ—

「お父さんのセゴって大きいなあ」

今回も引き続き、かつての中央語（京都語、上方語）由来の小松方言をご紹介します。

取り上げるのは、「背中」の意味のセゴと「悪(が)しい」の意味のスコイです。

セゴは近世上方語「背甲」に由来

身体部位の名称は学校教育などの影響で共通語化が進んでいますので、最近で

はあまり使われなくなっていると思われるですが、かつて市内の比較的広い範囲で使われていた方言に「背中」を指すセゴがあります。

『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、近世初期の上方語文献である近松門左衛門作・浄瑠璃「曾我会稽山」(1718年初演)に「せごうのはげたる盗人鹿、物構の柵をくぐる所を、大せいおり合生捕て候とひつすゆる」のような使用例が見られ、セゴが「背中」の意味のかつての中央語「せごう」(漢字は「背甲」)に由来することは明らかです。それが北陸に伝わった後、小松ではセゴの末尾長音が脱落してセゴとなったものでしょう。

「背中」の意味の方言で元のままの形であるセゴを使う地域は、富山・石川の一部や岐阜県飛騨、西の鳥取、島根、愛媛などに見られます。また、石川県内でも、本来の「背中」の意味が変化して、「亀の甲羅」や「病気で背中が丸くなった人」の意味で使う地域もあるようです。

スコイも近世上方語「すこい」に由来

「悪(が)しい」の意味の方言スコイも、同じような意味の「すこい」が江戸時代初期の浮世草子などに使用例が見えることから、近世上方語由来の方言と考えられます。筆者たちが1996年から5年間実施した市内全域の方言調査では残念ながら聞けなかったのですが、小松でかつて発行された町史類で、『浜佐美町誌』(昭和49年)と『町誌 光谷 第一号』(昭和61年)に「悪(が)しい」の意味のスコイが載っています。南の福井県でも使用例が確認できます。

浜佐美は西の海岸部の加賀市との境にある町。光谷は逆に市東部の西尾地区、旧鳥越村との境にあった町(昭和38年の豪雪により大きな被害を受け、翌年全世帯が移住し無住地となった)で、市の周辺地域に分布することから、今ではほとんど使われなくなっていることと合わせて、小松の「悪(が)しい」の意味の方言では比較的古い形と思われます。

連載
196小松方言の語源 その21
—ダンナイとテナワンの語源—「足擦りむいとらんか」
「うん、ダンナイよ！」

かつての中央語（京都語）由来の小松方言の紹介もだいたいぶ回を重ねてきましたが、今回は「大丈夫だ。差し支えない」といった意味の方言ダンナイと「手に負えない」の意味で使われるテナワンを紹介します。

ダンナイは「大事なない」が語源

「大丈夫だ。差し支えない。構わない。心配ない」などの意味で使われるダンナイは、かつての中央語（京都語）で中世末期

の文献例が見える「大事なない」が語源です。

『日本方言大辞典』（小学館）によれば、小松と同じようにダンナイが使われる地域は、新潟県南部から富山・石川・福井の北陸三県、愛知・岐阜から近畿地方、さらに中国地方から四国の徳島・香川の広い範囲にわたります。その分布域からも、かつての中央語が近畿の周辺に分布を拡げたことは明らかです。

これらの地域のダンナイは「大事なない」が地方に伝播する過程でダンナイに変化したのではなく、「だんない」の形が中央語文献にも見られることから、中央でダンナイに変化した後に北陸を含む周辺地域に伝播したと考えられます。小松では、ダンナイがダンネーを経て変化したと考えられるダンネの形も聞かれます。ちなみに、北陸三県では、石川・富山はダンナイが優勢、福井の嶺北地方はダンネが優勢です。福井では、それをタイトルに使った「だんね〜ぞー福井弁の唄」という福井井満載の歌がYouTube上で話題になっています。

テナワンは「手に合わん」から

「手に負えない」の意味のテナワンは、かつての中央語の文献例については、はっきりしませんが、その語源が「手に負えない者」の意味の「手に合わず」に由来する「手に合わん」であることは間違いないと思われます。「テナワズ」系の方言は福井の嶺北地方の一部のほか、中国地方の鳥取・島根両県に分布しますが、それからの変化形テナワン（手に合わず）↓「手に合わぬ」↓「手に合わん」がテナワン（白山麓の白峰方言や福井の嶺北地方の一部などで聞かれます）を経て変化したと考えられるテナワンは主に北陸三県に分布します。利口で聞き分けがよい子をかタイ子と言いますが、テナワン子はその反対で、言うことを聞かずに手に負えない子ということになります。

連載
197小松方言の語源 その22
—京都語由来のドクシヨナとエンゾ—「ボールどこいつてんろ」
「あつ、エンゾにあるよ！」

今回もまた小松方言の語源について考えます。取り上げるのは、いずれもかつての中央語（京都語）に由来すると考えられる、性格が悪いことを指すドクシヨナと「（道路脇の）側溝」を指すエンゾです。

ドクシヨナは「毒性」から

小松全域で使われたドクシヨナは、人の性格の悪いさま、意地の悪いさまを言う方言です。語源はかつての中央語（京都語）文献にも登場する漢語「毒性」と考え

られます。

『日本方言大辞典』（小学館）を見ると、同じ意味のドクシヨナが使われる地域として、石川県をはじめ、滋賀、京都、大阪、兵庫（淡路島）、和歌山（海草郡・伊都郡）、徳島が載り、小松と同じドクシヨナが使われる地域として、奈良（南大和）、和歌山（日高郡）が載り、これらの分布地域からも、ドクシヨナが、かつての中心地・京都から近畿地方やその周辺部に分布を拡げたものと考えて間違いないでしょう。

エンゾは「井溝」から

エンゾとは、道路脇の側溝、つまり一般的な共通語で言うところのミソやドブを指す方言です。小松では同じような側溝を指す方言としてドブソも聞かれます。

このうちエンゾは、平安時代末期の古辞書「色葉字類抄」に「牛（ウシ）の形で出ている「井溝」が変化した形と考えられます。イミゾ→エミゾ→エンゾのような変化です。『日本方言大辞典』を見ると、元の形イミゾが岐阜、愛知、静岡に、ほかに、イン

ゾが新潟、富山、石川、福井に、エミゾが新潟、岐阜（飛騨）、石川、島根に、そしてエンゾが富山、石川に分布することがわかります。なお、エンゾについては、筆者も郷里の福井県越前市で使っていた方言で、嶺北地方の広い範囲で使われています。

一方、ドブソは、かつての中央語との関係は不明ですが、明治維新直後に成立した「加賀なまり」という方言集にドボス、ドスポの見出しで、「悪水溝をこう言う。他の地方には通じない。東京ではドブと言う」のように書かれていることから、金沢辺では江戸時代後期にはドボスという言い方があったことが分かります。小松のドブソは、そのドボスの音変化形として生まれた共通語のドブの影響も受けて、可能性が高いと考えています。

連載
198小松方言の語源 その23
—京都語由来のネマル—「窓開けてネマつとると気持ちいいなあ」
「そうやねえ」

今回も引き続き、小松方言の語源について考えます。取り上げるのは、かつての中央語(京都語)に由来すると考えられる「座る」の意味のネマルです。

小松では、ネマルは「あぐら」も「正座」も含んで「腰を下ろす」こと全体を指して使われるように思いますが、単に「座る」というよりも、「ゆったりと座る」「ニユアンスがあるので、どちらかと言えば「あぐら」

ら」を指して使われることが多いように思います。

芭蕉の俳句にも登場するネマル

涼しさを我宿(わがやど)にしてねまる也

これは、松尾芭蕉が「奥の細道」の旅で、旧暦の元禄2年5月17日(5月27日)現在の7月上旬に、山形県の尾花沢に滞在した際に詠んだ有名な句です。この俳句の「ねまる也」の動詞「ねまる」については、従来から、「くつろいで楽に座る」の意味と、「寝そべる。横になつてくつろぐ」の意味の二通りの解釈がありました。そこで中央語も含めて、ネマルの意味と方言の分布地域について見ることにします。

『日本方言大辞典』(小学館)では、ネマルは、「座る」の意味で北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、新潟、富山、石川、福井、岐阜、奈良、島根、「あぐらをかく」の意味で岩手(九戸)、新潟(佐渡)、長野(下伊那)、岐阜(北飛騨)とあり、一方、「寝る」の意味で、奥羽、宮城、新潟(北蒲原・東蒲原)、長野(北安曇)、岐阜、島根、長崎、鹿児島も挙がっていて、「座る」と「寝る」の両

方の意味が見られます。また、『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によれば、中央語の「ねまる」には、「どじこまる。蟄居する。黙座する」、「すわる。しゃがむ」、「くつろいで休む。そこにどじこまる。逗留する」、「寝る」などの意味の用例が見られ、「座る」の意味の使用例は室町時代後半の古辞書や江戸時代初期の上方語文献などに見られます。以上のことから考えると、芭蕉の句の「ねまる」の意味は、芭蕉自身が使っていたネマルが山形方言のネマルかによっても解釈が違ってくるそうです。

ところで、北陸三県から新潟以北の東北地方に広く分布する「座る」の意味のネマルは、近畿地方からまず北陸に伝わり、その後東北の日本海側を海上(伝播)により北上した可能性が高いと考えられます。また、「寝る」の意味については、ネマルのネを「寝る」のネと解釈して(マルは「高まる」「深まる」「奥まる」などの「くまる」と同じような動詞化接尾辞と解釈して、「生まれたのかもしれません」。

連載
199小松方言の語源 その24
—京都語由来のカタイとハシカイ—「お茶をどうぞ」
「あら、小さいのにカタイ子やあ」

今回は、かつての中央語(京都語)由来の形容詞の方言を二つ取り上げたいと思います。

一つは「利口」で聞き分けがよい、「素直で言つことをよく聞く真面目な」といった意味で使われるカタイ、今一つは似た意味の「賢い」、あるいは「ずる賢い」とか「すばしこい」といった意味で使われるハシカイです。

中央語「かたい」の意味が伝播途中に変化

小松でカタイという方言は、共通語と同じ意味のほか、「カタイ子」とか「カタイ者」のように、「人の言うことをよく聞く利口な子」なども「素行がよくて身持ちの堅い」人などに対して使われます。中央語としての「かたい」(古くは「かたし」)は「堅」や「固」の字が当てられるように、「しっかりしていて崩れない。堅固だ。丈夫だ」といった意味や「厳しい」「堅苦しい」といった意味を表す語ですが、それが北陸に伝わり、方言化する過程で、小松を含む石川県と富山県(旧加賀藩域)では「考え方や行いの固い」ことがプラスの意味に派生し、人の堅実さや利口さを表す形容詞として使われるようになったと考えられます。

同じカタイでも、筆者の出身地である福井県の方言では、共通語と同じ意味のほか、かつての中央語の「かたい」の意味にも含まれていた「丈夫だ」の意味が少し変化し、とりわけ「体」が頑強だ、丈夫

だ、健康だ」の意味で使われることが多いのが特徴です。「カタイ子」と言っても、石川では「利口な子」、福井では「丈夫な子」と、意味が異なるので注意が必要です。

近世語「はしかい」が意味変化

小松の方言でハシカイというと、カタイに似て「賢い」の意味で使われるとともに、「ずる賢い」とか「すばしこい」の意味で使われることもあるようです。中央語「はしかい」は近世初期の井原西鶴の「嵐無常物語」(1688年)などに「敏捷だ。すばしこい」の意味の例が見えますので、小松のハシカイの意味の中では「すばしこい」が中央語の意味を引き継いでいるものと言えるでしょう。しかし、これも中央語「はしかい」が北陸に伝播する過程で、北陸三県共通に「すばしこい」ことがプラスの意味にも拡大し、すばしこさから、機転がきくこと、つまり「賢い」の意味でも使われるようになったと考えられます。

す。

連載
200小松方言の語源 その25
—京都語由来のアグチとチャット—「ちよっこしお腹空いたね」
「チャット作れるお茶漬けなんてどうや」

本連載も今回でついに区切りの200回となりました。今後も市民の皆さんに興味を持って読みただけできるよう内容も工夫しながら、少しでも長く続けていければと思います。

さて、今回も引き続き、かつての中央語（京都語 由来の方言から、「胡座」を指すアグチと、「早く」の意味で使われるチャットをご紹介します。

アグチは「開口」から変化

共通語「あぐら」の普及で、最近では小松市内でも高年層世代でわずかに聞かれる程度となったアグチですが、以前は市内全域の広い範囲で使われていました。

江戸時代唯一の全国方言集として知られる越谷吾山『物類称呼』（1775〈安永4〉年刊）には、使用地域が「加賀」とある方言が57語載っていますが、その中にアグチに変化する前の形と思われる「あいぐち」がすでに載っています。「あいぐちかく」、即ち「ゆるやかに坐する事」とあります。

「あいぐち」とは、足袋などの足を履き入れる口を指す、かつての中央語「開口（あきくち）」が変化した形です。その「あきくち」の部分を変換して足を組んで座るところから「あきくち（かく）」と言うようになり、その後、石川に伝わる過程で「あいぐち（かく）」に変化し、さらにアグチ（カク）に変化した、つまり、アキグチ→アキグチ→アイグチ→アグチのように変化したと考えています。

チャットは中世末期京都語

小松方言の副詞の一つであるチャットは、『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、中世末期から江戸初期の中央語資料、例えば日葡辞書（1603-1604）に「Casto（チャット）〈訳〉すばやく」とあります。こうした中央語の「ちゃつと」が伝播したものと考えられます。

また、「はやく」の意味の方言チャットは、『日本国語大辞典』（小学館）によれば、北海道、青森県、秋田県、山形県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県、三重県、京都府、大阪市、奈良県、和歌山県などに分布が見られ、その分布状況は、かつての中央語が周囲に分布を広げたこと、中でも北海道、東北地方、新潟には北陸を経由して海上伝播で日本海側を北上したことを示していると考えています。

連載
201小松方言の語源 その26
—京都語由来のイシナとイブル—

「イブルってあげると気持ち良さそうに寝るね」

今回も語源シリーズを続けることにします。

今回取り上げるのは、「石」の意味のイシナと「揺する」の意味のイブルです。いずれもかつての中央語（京都語 由来の方言です。

イシナは古語「石子」の下略形

「石」のことをイシナという方言は、『日

本方言大辞典』（小学館）によれば、小松だけでなく、北陸三県と新潟・山形・岐阜・愛知、そして近畿地方に分布が見られます。筆者も金沢での普段の生活では使いませんが、今でも郷里の福井県越前市に帰省したとき、道端の石を見ると自然にイシナという方言が口をついて出てきます。

ところで、このイシナは、さらにさかのぼると、かつての中央語（京都語）イシナゴにたどり着きます。中世時代の文献に「石」の意味で登場する「いしなご」は「石な子」、つまり「石の子」の意味です。イシナはこの「いしなご」の「ご」が落ちた形です。「いしなご」はほかに、「石」の意味より古いと思われる「お手玉」の意味で使われた文献例も見られ、「お手玉」の方言としてのイシナゴは、奥能登や福井の一部を含めて全国に点々と分布が見られます。

イブルの語源は古語「ゆるぶる」

「揺する」の意味のイブルも小松だけの方言というわけではなく、『日本方言大辞典』によれば、北陸三県で広く使われるほか、長野県伊那地方や島根県での使用例

が見えます。

アイツァ イスニ スワルト アシ
イサブツテバツカリ オル（あいつは、椅子に座ると足を揺すってばかりいる）のように使われます。そして、このイブルもまた、かつての中央語（京都語）に由来する方言と思われる。

鎌倉時代の語源辞書『名語記』（1275年）には「ゆるぶる」が「揺する」の意味で載っており、この「ゆるぶる」の語頭の「ゆ」が「い」に変化した形が「いぶる」だと考えられます。さらに、中世末期の中央語文献には「いぶる」の例も見えますので、この「いぶる」が北陸に伝わって、方言として使われるようになったに違いありません。

ところで、JR北陸本線で小松市から加賀市に入ってすぐの加賀市動橋町にある駅「動橋」。難読地名（駅名）の一つとされていますが、この「いぶり」も「揺する」の意味の方言イブルの連用形にあたるものと考えています。

連載
202小松方言の語源 その27
—京都語由来のヨンベとハッ
シヤグ—

「ヨンベの大雪で車埋まってもたわ」

明けましておめでとございます。今年^{とし}は未^みの年^{とし}ということ^{こと}で「ひつじ(羊)」にまつわる方言の話題でもと思いましたが、羊はもともと日本ではなじみのなかった動物なので、残念ながら方言の話題もありません。というわけで今回も語源シリーズとして、かつての中央語(京都語)由来の方言ヨンベ(「昨晚」の意味)とハッシヤグ(「乾く」の意味)を取り上げま

す。

ヨンベは古語「ゆふべ」に由来

小松市内で広く聞かれるヨンベ(ヨンベ)は、古語「ゆふべ」(平安時代後半には「ゆふべ」に変化)に由来すると考えられます。「ゆふべ」は中央語では、すでに奈良時代から使われていたが、元々は「日暮れ時。夕方」の意味でした。それが、後に「昨夕。昨晚」の意味で使われるようになり、発音も「ゆふべ」のほか、紀貫之の「土佐日記」(935年頃成立)などには「よんべ」の形も見えます。

国立国語研究所編『日本言語地図』(1957〜64年度にかけて全国2400地点で60歳以上の男性を調査で「昨晚」の方言の全国分布を見ると、ヨンベは北陸三県と岐阜県北部、近畿地方の一部と中国地方の日本海側、四国地方の一部と九州地方の福岡、大分、宮崎などに分布しています。近畿地方や中部地方、中国地方西部にはヨンベの分布も見えますので、小松のヨンベは、かつての中央語地域から伝わったヨンベがヨンベに変化し

たか、最初からヨンベの形で伝わったかのいずれかでしょう。

ハッシヤグは中央語「はしゃぐ」に由来

ヨンベと違って、最近ではあまり聞かれなくなっていると思われませんが、小松では「乾く」の意味でハッシヤグという方言も使われました。「子どもなどが元気に騒ぎ回る」意味の共通語「はしゃぐ」とは無関係で、ハッシヤグは「乾燥する。乾く」の意味のかつての(中世末期から江戸初期にかけての)中央語「はしゃぐ」に由来するものです。『日葡辞書』(1603〜04年)に「Faxigui(ハッシヤグ)」の例、浮世草子・立身大福帳(1703年)に「取おきがわるければ、葉がはい、いでくだけ」の例が見えます。この「はしゃぐ」が石川に伝わったものに違いありません。ハッシヤグの形は石川のほか、新潟県佐渡、岐阜県、近畿地方の一部と四国の香川・愛媛にも分布が見えます。

連載
203小松方言の語源 その28
—京都語由来のベンコナとヘ
ダルイ—「いっぱい遊んできてヘダルイやろ。お芋ふかしとい
たよ」

今月も引き続き、かつての中央語(京都語)由来の小松方言について見ます。今回は、ベンコナ(「賢い。口が上手な。生意気な」などの意味)とヘダルイ(「空腹だ。ひもじい」の意味)を取り上げます。

ベンコナは漢語「弁口」に由来

小松の比較的広い範囲で使われた方言ベンコナは、先にも書いた通り、「口が上

手な」「生意気な」の意味で使われることもありますが、主には「賢い」の意味で使われていました。ベンコナは、石川県内では小松以外に能登地方を中心に聞かれ、能登では主に「口が達者で生意気な」といったマイナスの意味で使われます。

ところで、このベンコナは、かつての中央語(京都を含む上方語)の「弁口」に由来すると考えられます。江戸時代初期の仮名草子・東海道中名所記(1659年頃)に「ことさら弁口才覚あるゆへに」といった使用例が見られ、「口が達者なこと。弁舌が巧みなこと」の意味で使われていることが分かります。おそらく上方語「弁口」が北陸に伝わり、方言化する中で、能登地方では元の意味に近い状態で受け継がれながら、「口が達者なこと。弁舌が巧みなこと」がマイナスのニュアンスを帯びて「生意気な」の意味でも使われるようになったのに対し、小松では、逆に「弁舌巧みなこと」の意味がプラス方向に拡張して「賢い」の意味で使われるようになったと考えられます。

ヘダルイは古語「饑るし(饑るい)」から
の変化

「空腹だ。ひもじい」の意味のヘダルイは、小松市内ではヒダルイの形も聞かれ、同じ意味の古語「ひだるし(ひだるい)」に由来します。文献には、例えば中世の説話集「古今著聞集」(13世紀中頃成立)に、「この一両日食物絶えて、術なくひだるく候ふまに」のように登場する言葉です。ヘダルイは、かつての中央語ヒダルイが北陸に伝わり、ヒダルイの語頭のヒがへに変化した形です。ゴハン、オソナツサケ、ヘダルイヤロ(ご飯が遅くなったからひもじいだろう)のように使われます。『日本方言大辞典』(小学館)によれば、(空)腹だ。ひもじい」の意味のヒダルイは、鹿児島や奄美諸島の例しか見ることができません。小松を含む北陸三県は、古語「ひだるい」の意味と形をよく受け継いでいる数少ない地域と言えます。

連載
204小松方言の語源 その29
— 京都語由来のヨークとヨサリ —

「おかわりください!」
「ヨーク食べて大きくなってね!」

今月14日にはいよいよ北陸新幹線が開業。これまで以上にたくさん観光客やビジネスマンなどが石川を訪れるに違いありません。今回はその「たくさん」の意味の方言ヨークと、「夜」の意味のヨサリを取り上げることにします。いずれも、かつての中央語(京都語)由来の方言です。

ヨークは近世上方語「余計」から

小松市内で「たくさん」の意味で使われる方言には、デカト(尾小屋、安宅など)、デコト(符津など)、デーコ(大杉など)、エツペ(尾小屋、符津など)などのほか、ヨーク(大杉、尾小屋、符津など)も聞かれます。このうち、デカト、デコト、デーコは「でかいこと」、エツペは「いっぱい(一杯)」が変化したものと考えられます。ヨークは、かつての中央語(上方語)で「程度が通常より上であること」の意味で江戸時代以降に使われるようになった「余計」に由来するものです。『日本文言大辞典』(小学館)によれば、「たくさん」の意味の方言ヨークは、富山県、福井県、岐阜県、愛知県、名古屋、三重県、滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、長崎県などでも使われることがわかり、江戸時代以降に近畿地方から西日本(北陸を含む)に分布を拡げたものと予想されます。

ヨサリは古語「夜去」に由来

「夜」の意味で使われるヨサリも、小松を含む石川県加賀地方と福井県以外に、岐阜県、三重県、滋賀県、京都府、奈良県、大阪府、兵庫県、和歌山県、島根県、香川県、福岡県、長崎県、熊本県、宮崎県などでも使われることが『日本文言大辞典』からわかり、ヨサリの形も含めると東北の一部や関東地方も加えて、西日本のさらに広い範囲に分布するようです。ヨサリは漢字をあてると「夜去」です。「さり」は本来「来ること、近づくと」の意味で、「よさり」で「夜が来ること」を表したのと考えられますが、そのうち「さり」の意味が失われ、単に「夜」の意味で使われるようになったようです。有名な清少納言「枕草子」(平安時代中期)にも「十四日よさり、雨いみじう降れば」のように「夜」の意味で登場する「よさり」が、近畿地方から加賀地方にも伝播して小松でも使われるようになったと考えればよいでしょう。

連載
205小松方言の語源 その30
— 「溝」の方言ドブソの語源 —

「ドブソに落ちないように気を付けてね」
「は〜い!」

年度が改まり、本連載も今月から18年目に入ります。今後ともご愛読下さい。これからもしばらくは小松方言の語源を取り上げていきたいと思いますが、今後は、かつての中央語(京都語、上方語)に由来するかどうか不明のものも含めて見ていくことにします。

今回は、本連載の197回(2014年8月号)で取り上げたエンソ(古語「井溝」

ドブソはドボスからの変化

から)と同じように、道路脇の「溝。側溝」を指す方言であるドブソについて考えます。

日本テレビ系の人気番組「秘密のケンミンshow」の2014年5月15日の放送で、金沢方言で「溝」を指して使われるドブソが取り上げられ、番組中でのその語源について筆者がコメントしたことがあります。

金沢辺りでは、県外の女性に聞かれると誤解されそうなドボスのほか、代表的な言い方にドボス、ドブソ、ドボソなどがありますが、小松ではドブソが一般的です。これらの言い方は、『日本文言大辞典』(小学館)によれば、石川県のほぼ全域と、加賀地方に隣接する富山県西部のごく一部に分布するようで、今のところ、かつての中央語にこれらと繋がりそうな語が見つかっていませんので、石川県に特有の方言と言ってよさそうです。

語源的には、金沢の舞台用語に、役者の顔が見えにくい花道の外側の席を指す

「どぼす」という言葉があったこと(筆者監修の『新頑張りまっし金沢ことば』87ページ参照)、明治初年成立とされる『加賀なまり』という方言集に「どぼす、どぼ」の見出しで「悪水溝ヲ此ク云フコト他方へ通セス東京ニテハ「ドブ」ト云」とあることから、既に江戸時代後期には金沢(加賀地方)で「溝」を指す「どぼす」が使われていたことが分かります。「どぼす」の「ぼ」と「す」が交替した形と思われる「どすば」は聞かれませんが。

舞台用語のドボスが先か、「溝」を指すドボスが先かは、はっきりしないものの、金沢あたりのドボス、ドボソ、小松のドブソは、いずれもドボスの発音が変化したものだろうと考えています。中でも、小松のドブソと金沢のドボスは、元のドボスが共通語「どぶ」の発音に引かれて変化した、「類音牽引」と呼ばれる現象によって生まれた形だろうと思います。

連載
206

小松方言の語源 その31
—京都語由来のメンデとヤク
チャムナイ—



「のど渴いたんならこのお茶100万円で売ってあげるよ」
「そんなヤクチャムナイこと言わんと、飲ましてちょうだい」

今回は、かつての中央語（京都語）由来の小松方言として、「醜い」の意味のメンデ、「たわいもない。役に立たない」の意味のヤクチャムナイをご紹介します。メンデについては本連載の140回と141回、ヤクチャムナイについては108回でも取り上げていますが、今回は改めてその語源について考えます。

メンデはメンダイ（面倒い）に由来

小松で「醜い」の意味で使われる方言には、多数派のメンデのほか、メンデー、メンダイ、メンDOIなどがあります。メンDOIというところ最近の若者言葉でも「面倒くさい」の意味で使われることがありますが、「醜い」の意味の小松方言メンデの語源は、江戸時代初期の上方語文獻（浄瑠璃作品など）に登場する「めんどい（面倒い）」だと考えられています。

『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、「めんどい」の意味には、①「面倒である。めんどくさい」と②「みっともない。見苦しい。醜い」の二つがあります。が、②の意味の「めんどい」が小松に伝播したものと考えられます。

「醜い」の意味のメンDOIは、北陸の石川・福井のほか、近畿地方、中国地方の岡山・広島・山口、四国地方の徳島・愛媛・高知などにも分布するようです。メンDOIがメンダイに変化し、メンダイの「ダイ」[daɪ]の部分が融合・長音化して[da:]となってメンデーが生まれ、さらに末尾

の長音が落ちた形がメンデでしょう。

ヤクチャムナイは「益体もない」から

「たわいもない。役に立たない」の意味の小松方言ヤクチャムナイは、中世末期から江戸時代初期の京都語文獻、上方語文獻に登場する「やくたい（益体もない）」が語源と考えられます。「益体」が「役に立つ」の意味で、その否定表現にあたります。中世末期の京都語が記録されている「日葡辞書」（1603-1604年）には、「Yacutaimo nai（ヤクタイモナイ）（訳）秩序も調和もない、あるいは何の役にたたないこと」といった例が見えます。ヤクタイモナイが石川に伝播する過程で、ヤクチャモナイ→ヤクチャムナイと変化したものと考えられます。石川・富山ではヤクチャモナイ、ヤクチャムナイが「むちゃだ。途方もない」の意味で使われる地域もあります。

連載
207

小松方言の語源 その32
—京都語由来のエローとワナル—



「お腹空いてもワナランと待って、偉い子やあ」

歌舞伎のまち小松の初夏を彩るお旅まつりも終わり、今年もはや6月を迎えました。

今回も、かつての中央語（京都語）由来の小松方言をご紹介します。取り上げるのは、「触る」の意味のエローと「大声を出す。どなる」の意味のワナルです。

エローは中央語「弄（な）」が語源

小松では主にエローの形で用いられますが、その語源は、中世末期から江戸初期の京都語・上方語文獻に用例が見える「いらう」（漢字は「弄」が当てられます）と考えられます。具体的な文獻例には、「其うへいらふて見ましたればまだ人肌で御座った」（狂言・仙師）、「包みは解くに及ぶまじ、弄うて見ても五十両」（浄瑠璃・冥途の飛脚）、「彼一粒の銀をいろふて見る事幾度か」（浮世草子・好色二代男―三・三）などがあります。

『日本方言大辞典』（小学館）によれば、イラウの形で、石川県南部（旧江沼郡）から福井県、そして関西地方から中国・四国地方に、イロウの形で石川県・富山県西部と愛知・岐阜の一部、関西周辺部から中国・四国地方、そして長崎県対馬などに分布していることが分かります。

小松のエローは後者のイロウ（イロー）の語頭のイがエに変化した形です。北陸地方ではあまり使われなくなっていますが、関西地方などでは今も比較的良好に使

われています。

ワナルはワメクとドナルの混交形？

「大声を出す。どなる」の意味のワナルは、小松市内のほぼ全域で使われています。「ドレダケ ワナツテモ デテコン」（どれだけ大声で呼んでも出てこない）のように使われます。ワナルの小松市以外の分布については、『日本方言大辞典』によれば、関西地方を中心に、新潟県佐渡・富山県下新川郡、石川県・山梨県、さらに西の鳥取県東部などに分布するらしいことが分かります。

はつきりしたことは分かりませんが、ワナルは元々使われていたワメクとドナルの混交形として生まれた可能性ががあります。江戸時代中期の上方語文獻である談義本「身体山吹色」三に「上張った声で、鉢水持て来ておくれと高声で鉢水取りよせ」のような使用例が見えることから、関西地方で「わなる」の形が生まれた後に、北陸地方など、周辺部に広がったものと思われれます。

連載
208小松方言の語源 その33
—京都語由来のエチャケナ—

「あらへ、エチャケナ子やねえ」

5月恒例のお旅まつりに加え、小松市木場湯公園を会場にした第66回全国植樹祭も成功裏に終わり、小松の町もようやく落ち着きを取り戻した頃でしょう。

さて、小松方言の語源シリーズも33回目。今回は、「かわいらしい」の意味の方言、エチャケナを取り上げます。NHK連続テレビ小説「まれ」でも時々登場しますが、これまで同様、かつての中央語（京都

語）に由来する方言です。

エチャケナは「いたいけな」に由来

年輩の皆さんの中には、丸々と太って元氣そうなお子を見るとき、ウマソナコヤネーという褒め言葉が口をついて出る方もいるでしょう。ウマソナの語源については本連載の178回ですに取り上げましたが、石川・富山以外の人には、「おいしそうな子」と言われていると誤解されがちな方言として、しばしば話題になります。

では、かわいらしい子どもに対しては、皆さんは何と言ってしまう。年輩の皆さんの中には、エチャケナコヤネーと言う方がいるに違いありません。小松ではエチャケナが一般的ですが、石川県内ではエチャケナの形も聞かれます。

エチャケナ（イチャケナ）の語源はかつての中央語（京都語）の「いたいけな」です。『日本国語大辞典 第二版』（小学館）によれば、中世の1500年代の文献「中華若木詩抄」（1520頃）、「運歩色葉」（1548）、「玉塵抄」（1563）などに

用例が見える「幼くてかわいらしいさま。素朴なさま。また、子どもなどのいじらしいさま」の意味を表す「いたいけな」に由来すると思われるでしょう。京都から北陸に伝播する過程で、「いたいけな」がイチャイケナ、そしてエチャケナ、さらにエチャケナと発音が変化したものと思われる。

現代語では、「いたいけな」というと、「幼くて、罪がない。いじらしい」といった意味で使われますが、これは古語「いたいけな」の意味の一部が現代の共通語に残ったものです。一方、小松方言のエチャケナは、古語「いたいけな」の意味のうち、現代共通語の「いたいけな」からは消えてしまった（幼くて）かわいらしいの意味を残したものと考えることができます。『日本方言大辞典』（小学館）を見ると、「幼児などの愛らしいさまを指す方言「いちゃけ」は、富山・石川両県と石川のすぐ南の福井県旧坂井郡に分布することが分かります。

連載
209小松方言の語源 その34
—京都語由来のケナルイとダチャカン—

「スツベスベなお肌 ケナルイわあ」

今回も小松方言の語源シリーズとして、かつての中央語（京都語）に由来するケナルイ（「羨ましい」の意味）とダチャカン（「駄目だ」の意味）を取り上げます。

ケナルイの語源は古語「異なり」

『日本方言大辞典』（小学館）などによれば、「羨ましい」の意味のケナルイは、小松を含む北陸三県のほか、東北地方の秋田・宮城、関東地方、中部地方、近畿地方、中国地方（鳥取・岡山・広島）、四国地方（徳島・

香川・愛媛）といった広い範囲に分布が見られます。同様の地域ではケナリーの形が聞かれることも多く、さらにケナリがこれらの地域の周辺部にあたる東北部や、新潟の一部、三重・和歌山・香川などに分布するようです。

これらは、古語の形容動詞「異なり」に由来します。「異なり」とは、本来は「普通と変わっている様子。特別にすぐれている様子」を表していたのですが、「普通と違っていること。特にすぐれていること」に対して羨ましいと思う気持ちから「羨ましい」の意味が生まれた後に、発音もケナリからケナリー、さらにケナルイに変化し、京都から周辺地域に広がったものと考えられます。文献では、ケナリーが室町末期の狂言・鉢印に「いつかたもにぎやかなるがけなりうて、はやしをかたらふて、いひ合て出て候に」のように、ケナルイが同じく室町時代の謡曲・輪蔵に「そのこと、めでたい折からなればいづれも賑やかなるがけなるうて、囃子を語らうて言い合はせて出て候」のような形で登場しています。

ダチャカンは「埒あかん」から

小松市内ではダチャカンのほか、ラチャカン、ラツチャン、ダツチャカン、ダチャカンなどの形も聞かれます。こちらは、その形から想像できる方も少なくないと思われるのですが、かつての京都語で、「駄目だ。いけない。役に立たない」の意味で使われた「埒（が）あかん」（「物事がはかどる。きまりがつく」の意味の「埒があく」の否定形）に由来します。こちらも北陸三県をはじめ、北は東北から南は九州までの広い範囲に様々な音声変化形が分布しています。京都方面から「らちあかん」の形で小松に伝播した後に、語頭の「ら」が音声学的に「だ」に近い音であるために、ラチャカン→ラチャカン→ダチャカン→ダチャカンのように変化したものです。

連載
210小松方言の語源 その35
—京都語由来のアゴタとキビス—「アゴタにご飯粒ついとるぞ〜」
「え〜?どこ、どこ?」

今年の夏は厳しい暑さが続きましたが、9月になり、ようやく秋らしくなってきました。

今回は、かつての中央語(京都語)由来の小松方言の中から、身体部位の「顎」の方言アゴタと「踵」の方言キビスを取り上げます。

身体部位を表す言葉にも以前は多彩な方言が聞かれましたが、共通語の急速な

普及でその多くが忘れられようとしています。

「顎」の方言アゴタは古語「あぎ」に由来

現在の共通語アゴ、そして小松方言のアゴタはともに古語「あぎ」に由来します。平安時代(10世紀)の古辞書に「髀」の意味の「阿岐」の例がすでに見えます。この「あぎ」が中央語(京都語)で、その後の11世紀頃には「あぎ」と変化した例が文献に見えます。そして、その「あぎ」がさらに「あごた」に変化して(江戸時代の1693年刊『男重宝記』に「あごたは髀也」との記述が見えます)、それが北陸にも伝わったものと考えられます。

「顎」の方言としてアゴタが分布する地域は、国立国語研究所編『日本言語地図 第3集』108、109図によれば、北陸では小松市を含む石川県加賀地方の一部と福井県嶺北地方の一部のほか、近畿地方と中国地方の鳥取・島根両県の一部、そして九州の福岡県南部などです。ちなみに、共通語のアゴは、アゴタよりも早く文献に登場しており、その分布が関東地方

にまで達していたために共通語となったものです。

「踵」の方言キビスは古語「くびす」に由来

「踵」を意味する言葉は、古くは「くびす」で、それが変化して奈良時代には「くひす」、さらに平安時代には「くびす」となり、室町時代末期の狂言台本などには「きびす」の形が見られるようになります。小松方言のキビスもこの中央語「きびす」が伝播したものと考えられ、方言キビスの分布を前出の『日本言語地図 第3集』129図で見ると、近畿地方を中心に東は北陸地方、西は中国地方ほぼ全域に分布しており、「踵」の方言としては新しい分布であることが分かります。東北地方に広く分布するアクト、九州から沖縄にかけて分布するアドの類が最も古い形で、近畿地方の一部から中国・四国地方の一部に分布するカガト、関東地方に分布し共通語にもなった力カトもキビスよりは古い形と考えられます。

連載
211小松方言の語源 その36
—京都語由来のオドリとホーベタ—

「ぼっちゃりホーベタの赤ちゃん、まんでかわらわ〜」

今回も前回に続いて、かつての中央語(京都語)由来の小松方言の中から、身体部位の方言として「ひよめき」のオドリと「頬」のホーベタを紹介したいと思います。身体部位を指す言葉は急速に共通語化が進んでいますが、読者の皆さんは、これらの方言が何を指すか分かったでしょうか。

「ひよめき」を指す方言オドリは中世末期京都語

現代共通語では「ひよめき」という言葉自体あまり使われることがなく、知らない人も多いかもしれませんが、「乳児の時期に前頭部にある骨の隙間の部分」を指す言い方です。小松の方言では、その「ひよめき」の部分をオドリと言います。

オドリとは「踊り」で、骨の隙間が踊るようにピクピク動くところからの名付けと思われるが、決して小松で生まれた方言ではありません。なぜなら、中世末期にキリスト教を広めに日本にやってきたポルトガル人宣教師が、当時の京都語を記録した辞書として知られる『日葡辞書』(1603年)に「ひよめき」を指す「voo(m)yo(d)ri」がすでに載っているからです。つまり、少なくとも中世末期には京都で使われていたことが分かるオドリ(歴史的仮名遣いではヲドリ)が、北陸(小松)にも伝わったものと考えられます。

「ひよめき」を指す方言オドリは『日本方言大辞典』(小学館)によれば、岐阜県、

奈良県、和歌山県、島根県、山口県、高知県、大分県にも分布するようです。そこには北陸地方の県名は挙がっていませんが、小松に加えて福井県嶺北地方(例えば筆者の郷里の越前市)でも使われていたことが筆者の調査でも確認できています。

「頬」の方言ホーベタは近世初期京阪語「頬垢」

国立国語研究所編『日本言語地図 第3集』の「ほほ(頬)」の方言地図(107図)によれば、小松と同じように「頬」をホーベタ(ホーベタも含む)と言うのは、近畿地方と北陸三県と岐阜県飛騨地方に分布し、離れて山口県、福岡県にも分布が見えます。その分布状況から、「頬」の方言としては歴史的に最も新しいものと考えられます。文献では、近世初期の京阪語文献である仮名草子「仁勢物語」(1640年頃)などに登場する「ほおけた」(「仁勢物語」では「ほづけた」の表記)が語源と考えられ、それが北陸地方に伝播する途中、あるいは伝播して後にホーベタに変化したものと考えています。

連載
212小松方言の語源 その37
—京都語由来のハギシとコブラ—

「コブラがつらんよう、しっかり準備運動するぞ〜」

今回も前回、前々回に続いて、かつての中央語（京都語）由来の小松方言の中から、身体部位の方言をご紹介します。今取り上げるのは、「歯茎」を指すハギシと「ふくらはぎ」を指すコブラです。

来
「歯茎」の方言ハギシは古語「齒肉」に由来

これまでも取り上げてきた身体部位

を指す方言同様、共通語の普及で使う人は少なくなっていると思いますが、小松では「歯茎」を指すハギシという方言形が使われていました。

ハギシは、平安時代中期の漢字辞書『新撰字鏡』に「齒茎」の意味で載っている「齒肉（ハギシ）」の音変化形と考えて間違いないでしょう。ジとギは音的に近い音ですから、「ジ」から「ギ」への音の交替が起こったものと思われます。筆者の出身地である越前市（旧武生市）を含む福井県の嶺北地方では、広い範囲で古語ハギシの形のまま方言として使われており、筆者も虫歯で歯茎が腫れたときに、ハギシハレテ イテーニヤ（歯茎が腫れて痛いんだ）のように言っていました。

「歯茎」の意味の古語「はじし」の「し」は、奈良時代の『万葉集』や平安初期の史書『続日本紀』（797年）などに既用例が見える「肉（主として食用となる獣肉を指した）」の意味の古語です。一方、「歯茎」の意味の「はじし」は、『新撰字鏡』のほか、平安時代中期（930年代）の辞書『和名類聚抄』に「斷、波之々、齒の肉也」、平

安時代末期の説話集『今昔物語』にも「咲へば歯がちなる者の、はじしは赤くなむ見えける」といった用例が見えます。

「ふくらはぎ」の方言「コブラ」は「腓」から

小松では「ふくらはぎ」のことを「コブラ」と言います。「ふくらはぎ」とは足のすねの後ろのふくらんだ部分を指します。筆者の手元にある現代語の辞書の一つ『新明解国語辞典 第七版』（三省堂）には「こむら」という項目があり、『ふくらはぎ』の意の老人語とありますので、共通語でも消えているわけではありませんが、「こむら」は平安時代の『和名類聚抄』に「腓、古無良、脚腓也」の例が見えるような古語です。かつての中央語でも「こむら」の「む」が音的に近い「ぶ」に変化した「こぶら」の例も見えますから、「こむら」が北陸地方に伝播する途中で「こぶら」に変化したのか、中央で「こぶら」に変化した後に北陸に伝わったのかは定かではありません。

連載
213小松方言の語源 その38
—京都語由来のイキリとイトシゲニ—

「イキリで眼鏡が曇ってしまった」

今回は、前回までの身体部位の方言から話題を変え、かつての中央語（京都語）由来の小松方言の中から「湯気」の意味のイキリと、感謝のことは「ありがと」にあたるイトシゲニを取り上げます。

「湯気」の方言イキリは中央語「いきり」由来

最近では、あまり聞かれなくなってい

ると思いますが、小松市内の広い範囲で

「湯気」のことをイキリと言っていました。このイキリも、小松で生まれた方言ではなく、かつての中央語地域である京都で使われたことが伝播したものと考えられます。「湯気」の意味の「いきり」は、江戸時代前期の俳諧『玉海集』（安原貞室編 1656年刊）に「いまだとをくはのびじ落人道筋にいきりこそたて馬のふん」（傍点筆者）のように登場しています。

また、『日本方言大辞典』（小学館）には「湯気」を指す方言イキリが使われる地域として、小松を含む石川県のほか、富山県砺波、静岡県志太郡、鳥取県西伯郡、岡山市が載り、イキリが京都を中心に、東は石川・富山西部や静岡、そして西の鳥取や岡山にと伝播したことを思わせませう。

イトシゲニはキノドクナと同じ発想

小松の方言で聞かれる感謝のことは、北陸三県に共通のキノドクナや金沢を中心に加賀地方で広く聞かれるアンヤトのほか、イトシゲニ（イトシギニも）、シヨシヤナー（シヨシヤノーも）などが

あります。

このうち、イトシゲニは、「かわいそうな」の意味の京都語・上方語「愛しげ」に由来し、本来、自分のために気遣いをしてくれた相手かわいそうに思う気持ちが感謝のことばとなったもので、北陸地方で広く用いられる感謝のことはキノドクナ（自分に気遣いをしてくれた相手が「気の毒だ」と同じ発想によるものと言えます。福井県の大野市・勝山市で聞かれる感謝のことは、ヤナコツチャ（相手にとって「嫌なことだ」も同様です。

『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「かわいそうなさま。気の毒なさま」の意味の「いとしげ」の使用地域として、富山県東礪波郡、石川県石川郡、同江沼郡、岐阜県飛騨、島根県隠岐島、香川県丸亀市、同小豆島が載り、文献例として、浮世草子『御前義経記』（1700年刊）の「いとしげさうに、『伊勢様になんのが有る事ぞ』（傍点筆者）という、江戸時代前期の上方語の例が見られます。

連載
214小松方言の語源 その39
—京都語由来のボコイとワヤク—

「ボコイことしとると子供に笑われっぞ」

明けましておめでとございます。今年も引き続き本連載をご愛読ください。今年も今しばらく、かつての中央語（京都語）由来の小松方言をご紹介しますと思います。今回は、「まぬけな」の意味のボコイと「冗談」の意味のワヤクを取り上げます。

ボコイの語源は中央語の「おぼこ、おぼこ」

小松で「まぬけな」の意味で使われるボコイは、かつての京都語で「世間知らずのうぶな子、またはそのようなさま」を表した「おぼこ」が形容詞化した「おぼこい」の語頭の「お」を落した形と考えています。この意味での「おぼこ」は、室町時代の辞書『運歩色葉集』（1548年）に「小児ヲボコ」若子 同、江戸時代前期の俳諧集『西鶴大矢数』（1681年）に「おぼこさうな其君様は時鳥」といった使用例が確認できます。

また、『日本方言大辞典』（小学館）によれば、「世慣れないで子供っぽい。無邪気だ。幼稚だ」の意味の方言オボコイが愛知県や近畿地方から四国地方に見え、同様の意味でのボコイが石川県金沢市や岐阜県、滋賀県、大阪市に見えます。一方、小松と同じような「まぬけだ。鈍い」の意味のボコイは、石川県福井県、滋賀県、香川県などに見え、「おぼこ」から生じた「世慣れないで子供っぽい。幼稚だ」といった意味

のオボコイが、近畿地方（京都）から北陸などに分布を広げる過程で、ボコイに形を変え、とともに、「まぬけな」の意味を生じたと考えています。

ワヤクは古語「枉惑」が変化

「冗談」の意味の小松方言ワヤクは、「道に外れた事をして人を惑わすこと」の意味で平安時代の『往生要集』（984、985年）や『今昔物語』（1120年頃）などに用例が見え、「ずうずうしく、ずるいこと」の意味で『日葡辞書』（1603、1604年）に用例が見える「枉惑」に由来すると考えられています。「冗談」という意味との関連を考えると、文献で早く見られる「道に外れた事をして人を惑わすこと」の「人を惑わす」の意味が「冗談」の意味に変化した可能性が高いと思われます。『日本方言大辞典』によれば、「枉惑」から変化した方言ワヤクは、実に多彩な意味に変化しながら全国に分布しています。小松と同じ「冗談」の意味のワヤクは、石川のほか、近畿地方、中国地方、九州地方にも分布します。

連載
215小松方言の語源 その40
—京都語由来のヒラガリとムサイ—

「あ〜、腹減った〜！ ヒラガリの弁当食べよっさ」

今回も引き続き、かつての中央語（京都語）由来の小松方言の中から二つの方言をご紹介します。一つは「昼食のために帰宅することや「昼食時」、あるいは「昼食」の意味で使われるヒラガリ、もう一つは「心配な」の意味で使われるムサイです。いずれも小松市内のほぼ全域で使われた方言です。

ヒラガリは「ひるあがり（昼上がり）」が変化

若い世代では、ヒラガリという発音を聞いても意味が想像できない人も多いでしょうが、本来ヒルアガリ（昼上がり）だったものが、ヒルアのルの母音「」が脱落してヒラガリとなったものです。

「ひるあがり」とは「寺子屋の授業が午前中で終わること。また、正午に授業が終わって家に帰ること」の意味で、近世前期上方語文獻である雑俳や浄瑠璃「平仮名盛衰記」（1739年）などに例が見えます。こうした近世前期の上方語が北陸に伝わる過程で、発音がヒラガリに変化するとともに、本来の意味に近い「昼食のために帰宅すること」のほか、「昼食時」や「昼食」の意味でも使われるようになったと考えられます。

小松と似た意味でヒラガリが使われる地域は、東北の岩手県・山形県の一部のほか、北陸の富山県西部、石川県の旧石川郡・能美郡・江沼郡、そして福井県嶺北地方などがあります。筆者も郷里の福井県

越前市にいた頃、午前中の農作業を終えた母親が、「ソロソロ サイレンナルサケヒラガリショーケノ」そろそろ昼を知らせるサイレンが鳴るから、家に帰ってお昼ご飯にしようか」のように言うのをよく聞いたものです。

ムサイの語源は中世京都語「むさい」

小松で「心配な」の意味で使われるムサイは、中世後期の京都語文獻に見られる「むさい」に由来すると考えられます。文献例は、①「意地や欲が強く、心が汚い。卑しい。下品だ」の意味で「史記抄」（1477年）や浮世草子「好色二代男」（1682年）など、②「汚らしい。汚くて気味が悪い。不潔である」の意味で「御湯殿上日記」（1482年）や「虎明本狂言・粟田口」（室町末〜近世初期）などがありますが、北陸地方に伝播するうちに意味をずらし「心配な」の意味で用いられるようになっているものでしょう。また、同じ加賀地方でも、金沢市付近で「嫌な」「困った」、旧石川郡能美郡で「気の毒だ」、旧江沼郡で「めんどろ」の意味のムサイも使われたようです。

連載
216小松方言の語源 その41
— 京都語由来のアワシヤとイクス —「後ろに隠しとるもん、こっちにイクソ！」
「やだよ〜」

今回は、かつての中央語（京都語）由来の方言として、「間」の意味のアワシヤと「くれる（よこす）」の意味のイクスを紹介したいと思います。

2012年11月号（連載176回目）から続けて来た京都語由来の小松方言の紹介も、3年以上経って40回を超え、代表的なものはほぼ取り上げたように思いますので、今号で終わりにして、次号（新年度）

からは別のテーマでと思っています。

アワシヤは古語「あわい」からの変化か

小松では、物と物の「あいだ（間）」「隙間」を指してアワシヤと言うことがありますが、「ツクエト ツクエノ アワシヤ、机と机の間」のように使われます。アワシヤは、「時間的、空間的なものとの間、間隔、すきま」を指し、源氏物語に「几帳（きやう）どもの立てちがへるあはひより見通されて、あらはなり」（傍点筆者）のように登場する古語「あわい」に由来すると思われる。『日本方言大辞典』（小学館）によれば、福井県の敦賀や嶺北地方北部にアワイサ、アワサの形が見え、さらにアワサイの形が新潟の佐渡、富山、福井、岐阜の飛騨、滋賀、京都、兵庫、和歌山、島根など、近畿およびその周辺に分布していますので、小松で聞かれるアワシヤは、「あわい」が京都方面から福井を経て伝わる過程で、アワイサ→アワサ→アワサイ→アワシヤのように変化したものだろうと考えています。

イクスは中世末期京都語に由来

小松の方言で「（人が自分に何かを）くれる」といった意味で使われるイクス（自分に「よこせ」と言う場合の命令形はイクセ、イクソとなります）は、かつての中央語（京都語）の「よこす」が変化した室町時代末期京都語の「いくす」に由来すると考えています。中世末期の京都語文献の一つである「狂言記」の中に「身どもにまいてとつてこいとおっしゃられましたたほどに、いくさつしやれませい」（傍点筆者）のように登場する「いくす」が見えます。イクスは『日本方言大辞典』によれば、新潟、富山、石川、そして福井の嶺北地方の範囲に分布していることがわかりますから、先の「あわい」と同様、「いくす」が京都方面から伝わったものでしょう。例えば、「キョーワ ダチャカンデモ コンダカナラス イクスカ（今日は駄目でも今度は必ずくれるか）」のように使われます。

連載
217方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その1
— 大杉町（下大杉町・大杉町）方言の自然談話① —「フレ ソクサイナカー」
「オカゲサンデ。トコロデ フレ アシタ イエニ
オルコ」

年度が改まりました。今月から本連載は19年目に入ります。今後とも変わらなくご愛読ください。

さて、連載19年目のスタートにあたり、今回からは新シリーズとして、小松市内の何地点かでの自然談話や場面設定の会話の文字化資料を取り上げ、そこに見られる特徴を見ていくことにしたいと思います。

ます。

今回から取り上げる自然談話、場面設定の会話の文字化資料は、小松市立博物館の委託で1996年から2000年にかけて実施した小松市内全域での方言調査で得られたものです。その一部は、すでに『小松市立博物館紀要』の33号、34号、36号で報告したことがあります。今号では、『小松市立博物館紀要』33号に掲載の拙稿「石川県小松市大杉谷川流域の方言」で取り上げた大杉町での方言談話の一部の紹介から始めます。

以下の方言談話は、1996年10月2日に大杉町の生活改善センターで収録した、4名の話者（A 大正6年生まれ・男、B 大正4年生まれ・男、C 大正4年生まれ・男、D 大正11年生まれ・女）による会話です。方言談話の文字化にあたっては、無意味な挿入句などは省略しつつ、表音的片仮名表記（文節分かち書き）で示し、適宜（ ）内に共通語訳を付します。なお、小松の高年層方言では、語中のガ行音は原則鼻濁音となりますが、本稿では語頭の破裂音と区別せずにガギゲゴと表記

します。

A ダイタイ トシヨリヤサカイ（年寄りだから） ミミア トイモンジャサカイ（遠いものだから） ジブンノユーコトバツカデ（言うことばかりで） テレビト イッシュヤ（同じだ）。ヨソノヒトガ ナニ シツモンシタカッテ（質問しても） ソリヤ。

B シランネ（知らないね）。
C イロンナ ハナシ マジエコジャ（でちゃ混ぜに） ユーサケナ（言うからね）。

B ソレコソ ワガ（自分が） イワンナ
ンコトダケワ（言わなければならぬことだけは） イワンナント（言わなければと） オモテ（思つて） ユートン
ニヤロ（言っているんだろう）。

C キョーシツミタイナ ワケニワイ
カンノヤ（いかないんだ）。アイテト
トックミニアツ。

今回は紙幅の関係でここまでとします。小松方言の特徴についての解説は、来月のこの続きの方言談話の紹介の後にしたいと思います。

連載
218

方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その2
―大杉町(下大杉町・大杉中
町)方言の自然談話②―



方言談話中に登場するGさんは、右の写真の大杉ミュージカルシアターのガート(Gart)さんです。

前回に続けて、1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者(A 大正6年生まれ・男、B 大正4年生まれ・男、C 大正4年生まれ・男、D 大正11年生まれ・女)による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について簡単に解説します。

文字化にあたっては、無意味な挿入句

等は省略しつつ、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜()内に共通語訳を付しました。なお、談話中に登場する個人名はイニシャルで略記しました。

A コクサイテキナ(国際的な) コトモ ハナシ シェンナンシネー(しなくては いけないねえ) チイキテキナ(地域的な) コトモ ハナシ シェンナンシネー。ココニ オイデルヨーナ(いらっ しゃるような) ホラ アノ ガイジンサン。アラ Rサンチュント Gサンチュートンネ。アンタト オンナシヤ Gサンテノアンネー アワズノ(粟津の) ホーノ タンダイノ エーゴノ シェンシエー。アノ Rサンテユノア ドッカ アタカノ(安宅の) ホーノ コーバノアメリカトノ ツーヤクオ シテオイデルミタイデネ ヨル イツ テ モー ムコア コッチャ ヨルデ モ ヒルヤサケネ(昼だからね) ソー ユーシゴト シテオイデルンデ。ガイジンサン シンシエツナケーネー(親切だからね) テー アゲテンネー ワタシラ サンキューシカ オボエト

ランサカイ ソレヨリ ユエンケドネー。

【解説】※前回取り上げた談話中の方言を含む

・トシヨリヤサカイ、トイモンジャサカイ、ユーサケナ…サカイ、サケは共通語の「〜から」にあたる理由・原因の接続助詞です。関西地方で生まれたサカイが北陸地方に伝わり、後にサケの形も生まれました。シンシエツナケーのケはサケのサがさらに脱落した形です。

・イワンナント、シェンナンシ…ンナンは動詞の未然形に接続して「〜なければならぬ」の意味を表します。

・オイデル、シテオイデル…オイデルは北陸の方言で動詞「行く、来る、いる」の尊敬表現として使われます。補助動詞「〜ていく、〜てくる、〜ている」の尊敬表現としての「シテオイデル」も使われます。

連載
219

方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その3
―大杉町(下大杉町・大杉中
町)方言の自然談話③―



話の中に登場する、公民館を改修した建物というのが、大杉ミュージカルシアター(大杉中町劇場)です。

今回も、前回に続けて1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。これまで同様、文字化にあたっては表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜()内に共通語訳を付しました。

A アノ ヒトモ ネッシンナシ(熱心だし) ソレカラ イマノ Gサンモ コナイダ トーッたら キレインナッタデショッテ キーテ オー スマートン(スマートに) ナッタネー チュテ ホラ アッコ(あそこ) ジェンフ。
D ゲンカンモ ナオイタンデ(直した)ので。
A カイシューシテ コーミンカンノ イリクチャシネ シュリシテ ナカナカノ ガイジンサン シンシエツナシネー カンシンジャッテ(感心だ)て。
D ホッレガ(それが) オッカシーツムカシノ カズキオケニ(担ぎ桶に) ナンジャラ イッパイ イレテ。
A ウン ソシテネー ムカシヤー ホラ ビールノ オケヤトカ シエメンタルミタイナ(セメント樽みたいな) アッタワンネ。アレガ シモオースギノ ミセ シタ ヒトア タクサンアッテ ホシテ ステルユトッたら アノ ヒトア キテ コレ イラン

ノカネトッタサケー(要らないかねと言っていたから) オー イランノヤツテ。ボク モロテクカッチュネ。

C アレクギ イレタンデネーカ。

A クギ イレタツタガヤ(入ってあった)んだ。

【解説】

・ジエンフ、シンシエツ、シエメンタル…小松市を含む北陸方言では、高年層でセ、ゼがシエ、ジエと発音されることがあります。中世末期までの京都(中央語)での標準的発音の名残です。

・ナオイタ…かつて西日本で広く見られたサ行四段(五段)動詞のイ音便形の名残です。

・カンシンジャ、ナンジャラ…現在には変化している断定の助動詞(共通語のダにあたる)の元の形のジャが大杉では聞かれました。

・イリクチャシネ、アッタワンネ…小松方言では終助詞ネの前に短くンが挿入される特徴が聞かれます。

・モロテク…モロテは八行四段動詞「貰う」のウ音便形モローテの短縮形です。

連載
220

方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その4
―大杉町(下大杉町・大杉中
町)方言の自然談話④―



方言談話が収録された大杉町生活改善センターです。

今回も引き続き1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した4名の話者による自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜()内に共通語訳を付しました。

A アレアー オーキー イシガネー。

B ムカシャ アーユモンニ イレテ

カンデ(担いで) アルイタンヤ。

A ムカシャーネ アノ クギバコニネ

ホラ イマカッテ(今だつて) ビール

ノ シエメンダルミタイナ(セメント

樽みたいな) アルワンネ。アレオ ア

コノ Gサンガ モロテイッテ(貰っ

ていつて) グワイジンサンニ(外人さ

んに) モッテコイノ シナモンジャワ

イッテ。

D アノ ヒトワ ナンデモ ウン。

C ソヤケドー アノ カミノ フクロ

ニ ナランサキニ(紙の袋になる前

に) シエメントア アーユー デカイ

オケヤツタンヤ。

A ウン ソーソー オケヤツタ(桶だつ

た)。

C アレ コラエテ(がまんして) アル

クノア ヤットミタイナモンジャツタ。

B ソヤ ソヤ。

C アトネア(後には) フクロヤツタン

カイ。

A オー ワタシラントコ アレデ。

C マッサキニ アレー キノ オケ

ヤツタンニヤ。ドッカデ シエメン
イレテ。ソッデ(それで) ダイブ カワツ
タンヤ。ソッデ アツコノア イマー
シエーネンノイエノ シタノ ヨー
スイ コツシエル(造る) シブンニア
(頃には) カミンフクロン(紙の袋に)
ナッテ。

【解説】

・アレア、シエメントア、アルクノア、アト
ネア、アツコノア、ジブンニア：傍点部は
助詞のワまたはガの子音が弱化して母
音のAだけが軽く添えられたように聞
こえるものです。

・カンデ：「担いで」の意味のカンデは、
白山麓の白峰方言などでも聞かれま
す。

・グワイジン：傍点部は、歴史的仮名遣
いの「ぐわ」にあたる発音(合拗音)の残
存例です。石川県加賀地方の高年層で
時々聞かれます。

・オケヤツタンニヤ：断定の助動詞ヤの
前にンがきたためにンニヤに変化した
形で、福井県嶺北地方から加賀地方南
部で聞かれる特徴です。

連載
221

方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その5
―大杉町(下大杉町・大杉中
町)方言の自然談話⑤―



神社や寺院によって、独特の盤持石があります。
(写真は菟橋神社境内に安置されている盤持石)

今回も、前回までの続きで1996年10月2日に大杉町生活改善センターで収録した自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜()内に共通語訳を付しました。

A イマ アミガ(網が) ハイットルワ

チョット。ポーシツノネ(防湿のね)

シエメンフクロン(セメント袋の) ナ

カエ ウスイ ヤツガシツケ ウケン

ヨーニネ(湿気を帯びないようにね)。

ハジメワー ロクジュッキロヤツタノ

ソツギア(その次は) ゴジュッキロ

ナッテ イマ ヨンジュッキロ。ヤツパ

リ オンナシニ(同じように) オモ

テ(重たい)。

B ソーリヤ ソヤ。イマデア ロク

ジュッキロデア ウケレン(持ち上げら

れない)。

A オー ソーソー。ムカシワ ロク

ジュッキロジューロックワン(16貫)カイ

ネー。

D イヤ オナシ(同じ) ロクジュッキ

ロデモ コメダワラナラ(米俵なら)

ウクカモシレンケドシエメントノ フ

クロデア トデモ ウケン。

A モチニクイワネー。

B タワラデ ロクジュッキロノ コメ

ノ リョーテオ ブーット カタンデ

(担いで)。

C アレア ホヤケド ウマク ナワ

カカッテ タテナワ(縦縄が) カカッ
トルヤロ。ワツリヤイ(割と) アゲルケ
ド バンモチイシツチユノア(盤持石と
いうのは) ナワ ナンモ カケトラ
ン。ホーデネ ナガサー ネーンジャ。
A イマデモ ヤツパ イシノ コノ
マルイ ヤツオンネ コノヘンニモ
マダ オミヤサンノ トコニ アン
ナー。

B シトビョー(四斗俵ほどの) ゴツツ
イヤツ(大きいやつ)。

【解説】

・シエメンフクロ：高年層でセがシエと
発音されることがあります。中世末期
までの京都語(中央語)での標準的発
音の名残です。

・ジューロックワン：前回取り上げたグワ
イジンと同様、歴史的仮名遣いの「ぐわ」
「ぐわ」にあたる漢字音(合拗音)の残
存例です。

・バンモチイシ：力試しの重い石で神社
や寺院などに置かれていました。

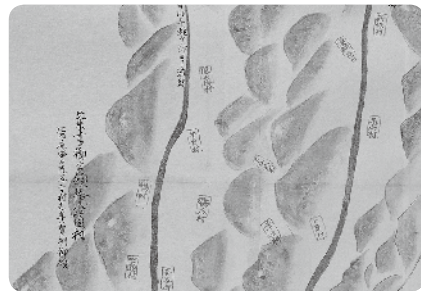
・シトビョー：米が4斗(約60キロ)入る
俵です。

連載
222

方言談話資料に見る

小松方言の特徴 その6

大杉町(下大杉町・大杉中町)方言の自然談話⑥



賀州能美郡図籍(金沢市立玉川図書館所蔵)には、天領であった丸山村や新保村(新丸村)が朱書きされています。

前回までに続いて1996年に収録した大杉町での自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜()内に共通語訳を付しました。

A トヤマノ(富山の) コトバネ コレ

連載
223

方言談話資料に見る

小松方言の特徴 その7

大杉町(下大杉町・大杉中町)方言の自然談話⑦



大杉町の人々の暮らしを見守り続けてきた大杉社のイチヨウ小松市指定文化財

今回も1996年に収録した大杉町での自然談話を紹介し、特徴的な方言(傍線部)について解説します。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記(文節分かち書き)を用い、適宜()内に共通語訳を付しました。なお、大杉町方言の談話資料の紹介は今回で終わり、次回からは丸山町の方言談話を紹介します。

デクスリヤ バイヤクノ(売薬の) マワッテ イレッサケ(薬を)入れるから) ワリカタ(割と) ハナシモ ワカリヤスイシネ キキヤスイシネ。 フクイノ コトバデ アノ チョット コノヘンノ コトバヨリ シナヤコーンヤネ(しなやかだね) ユーコトガ。 D ココワ ホンマニ コトバガ アライ トコデー。

A ホイテ(そして) コノヘンノ チョット アライシネー(言葉が)荒いしね)。シンマルムラ(新丸村) イクトーンネ コトバワ ジョーヒンナル(上品になる)。アト フクイネ(福井に) チカイ カンケーカ カガノ ヒヤクマンゴクノ ジョーカガイヤツタ(城下外だったんだ。カガノ ヒヤクマンゴクア アコニ(あそこに) ケンリア ナカタンニヤ。アコエ ンデ ドロボーシテ ニゲテ ハイッテモ カガノ トノサン トメレナンダ(止められなかった。フクイノ ホーカラ ヘーケー(平家が) ニゲテキテンネー。ホイテ モーヒトツツンネー ワタシ

ラー シランケドネ コノヘンニイ チョーノキガ 銀杏の木が) タクサンアル。コレワ ヘーケノ オチムシヤガ ジブンラ ニゲテキタ トコニイ チョーオ ショーレーシタンデ ソレデ コノヘンネモ オチムシヤガ スコシ キトツタンデ。

【解説】

・ジョー、かが、イヤツタンヤ…旧新丸村。白山麓の白峰などと同様、加賀藩の支配を離れた幕府直轄の天領であったことを言っています。

・イクトーンネ、ニゲテキテンネー、モーヒトツツンネー…小松方言では終助詞ネの前に短クンが挿入される特徴が聞かれます。

・アコ…小松ではアッコも聞かれますが、「こそあど」のココ、ソコ、ドコに対するアコ。共通語ではアソコになるところが、体系的に形の揃ったアコが聞かれます。

A ワタシラ ソンナコトア ハナシ

テイ チョーノキア(銀杏の木は) イチョー(銀杏の実が) ナルサカイ ウエタンデナイカト オモトツタケンド ヤツパリ ソーユー カンケーデ コノ オースギノホーカラ シンマルムラネ(新丸村に) イチョーノキガ ヨケー(たくさん) アルンデナイカ。ソユー コトモ ユー ヒトオイデタネー。シンマルウ イマワンネー(今はね) フユワネー イッケン イワ

ナノ(岩魚の)ヨーシヨク シテオイデルンデー ナツワー ゴロツケン ジブンノ ギイサン(財産としての山)ガ ホラ モツテオイデツサケ キター スンドルケド フユワー イッケン。ホシター フユワ ダレモ オランガヤ(いないんだ) ハナタテマチ(花立町)。デ マルヤマーネア(丸山には) ニケンホド オイデルンデイ マモ オイデツカナー フユ。 C マー フユワ ソヤンド(そうだけども)。 A ホトンド オランノヤ。

B オランノヤリヤコソニヤ(いないらしいことには) シンボネア(新保には)

ナツダケヤツ ナツダケ イッケン。 A シンマルムラヤ マルヤマネ。ナツワ ゴロツケン アノ キテオイデルワネヤマノ クワンリスルトカツテネ。

【解説】

・ナルサカイ、モツテオイデツサケ…サカイ、サケは共通語の「くから」にあたる接続助詞です。関西地方で生まれ、サケの形も生まれました。ここでは同じ話者が両方の形を使っています。

・オイデタネー、オイデルンデ、オイデツカナー、シテオイデルンデー、キテオイデルワネ…前の三つのオイデルは「いる」の尊敬表現、後の二つの「テオイデル」は補助動詞「ている」の尊敬表現として使われています。

連載
224方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その8
丸山町方言の自然談話①

丸山町で開催されるヤマメ放流と釣りのイベントには毎年多くの家族連れが訪れます。

今回からは、前回までの大杉町方言の談話の中にも登場した、大杉町よりさらに山間の集落で江戸時代は天領でもあった丸山町の方言談話を紹介します。

丸山町方言の自然談話については、『小松市立博物館紀要』34号に掲載の拙稿「石川県小松市郷谷川・淳上川流域の方言」に所収の文字化資料から抜粋します。

丸山町の方言談話は、1997年8月

A ソヤ オヒルオ クターカイト。

ソレガ ハヤイサカイ ヒリタコテ
ユートル。ホンデ アクセントワ(ア
クセントは) シンボワ(新保は) ソ
ノワリンネ(その割にない)。ハナタテガ
(花立が) アクセントア ツヨイ。

B ソーヤッター。

A ウン。ホイデ ハナタテノホ アル
シ シンボワ ワリト ナンヤシ オ
ハラモ(小原も) ワリニ マルヤマヨ
リモ(丸山よりも) コトバワ ハイカ
ラヤッターンヤ。

【解説】

・ヒリタコ：ヒリ(屋で飯)とタコ(「食べ
たか」の意味のタベタコの省略形)の合
わさった形と思われる。

・「カソン」：5カ村とは、新保(新保出^{しんぼで})、
木地小屋を含む)、須納谷(現花立町)、
丸山、杖(現在は津江と書く)、小原の5
集落を指します。

・アクセント：訛りに近い意味と思われ
ます。

A モー ゴハン タベタカテユコ
トオ ヒリタコ ホンデア マー コ
トバガ ナレンサケネ(慣れないから
ね) ハヤイヨニ(話すのが早いよ
うに) オモウ。デー チョード コー
トシヨীগッコン(高等小学校に)
ナルト ミナ 「カソン」(5カ村)
コリユオ(交流を) シタ。ホイデ
ヒリタコツテ。

C ヒリツチュノ オヒルチュー イミ
ヤロイネ。

() 内に共通語訳を付しました。



この道は近い将来、丸山町と福井県の勝山を結ぶ国道416号線です。

連載
225方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その9
丸山町方言の自然談話②

今回も前回に続いて市内南東部の山間の集落、丸山町の方言談話を紹介します。3名の話者のうちA・Bが丸山町生え抜き(A大正8年生まれ・男、B明治43年生まれ・女、Cが小松市東町生まれの同席者(大正12年生まれ・男)です。方言談話の文字化にあたっては、これまで同様、無意味な挿入句などは省略しつつ、表音的片仮名表記(文節分かち書き)で示し、適宜

A イゼンワ コノ マルヤマガネ
メージイシン ナツテ ワシラノ オ
ヤノオヤラワ(親の親たちは) ワル
ドシントシ フクイケンヤ エツジエ
ンノホーガ(越前の方が) チカイン。
ホラー コツカラ アルイデー コマ
ツニ ハハオヤラ シナ ホーコーニ
イッタンヤケドノーハチリモ(8里も)
アルデショ。ムコワ ロクリヤ。シン
ボヤッター イチジカンホドデ イ
ケル。ホンデー カツチャマエ(勝山へ)
シナモン カイニ イッタンヤ マル
ヤマデモ。

C アノ タケダゴエ(竹田越え) シン
ヤロ(するんだろ)。

A ウン ソー ソー。

C ソレ イマ タケダゴエア ミチア
ナイチュー。イマ ソコニ オッテン
ヒトアー マルヤマカラ ゴザッタン
ヤツテ。

(中略)

A イマー コクドー ハシットルト

コワ チョット ミチガ イゼンワ
コツチノホーノー ジゾーサン ア
ルケド ソコオ カヨテ ワシワ
シューセンゴ ナンベンモ カツチャ
マニー オジサンガ オルモンデー
チヨイチヨイイマユー キジゴヤワ
コツチノ ワルドシントキ ヨー コ
イヤ ユーテ ウラントコノ ジー
ジーノ アニキガ キツアンノ イ
エヤ。

B アー ソーカ。

【解説】

・ワルドシ：「悪年」で「凶作の年」の意味
です。

・エツジエン：福井県敦賀市以北の旧国名
「越前」の方言的発音です。

・カツチャマ：福井県勝山市の「勝山」の
方言的発音です。

・ウラ：石川県加賀地方から福井県嶺北
地方にかけて使われる方言の自称代名
詞で、オラが変化した形です。

連載
226方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その10
―丸山町方言の自然談話③―丸山町の大山林道の峠です。この峠を越えると
白山市鳥越の方に抜けられます。

本連載を始めて19回目の新年を迎えました。今月と来月の2回は、引き続き市内南東部の山間の集落、丸山町の方言談話を紹介します。話者Aは丸山町生え抜き（大正8年生まれ・男）、Cが小松市東町生まれの同席者（大正12年生まれ・男）です。文字化にあたっては、これまで同様、表音的片仮名表記（文節分かち書き）で示し、適宜（ ）内に共通語訳を付しました。

A ウン コッチノホーノー アレアー
ハナダテゴエ（花立越えッテ ジゾー
サンガ フタツモ アルケドー。イマ
ズイドー（隧道トトンネル）オ トー
ソート スルノワ アソコワ トーゲ
ミチワー アツカシランケド コッ
チノアレアー ヒラダニ（平谷 ジャ
ナイワ ベンテンバシ（弁天橋）ノ
チョット テマエオ ミギニ アガッ
テ カブト（兜）ノ ダイニチ（大日）ノ
チョージョーエ アガル ホンリユー
オ ヒダリノワ ホンリユーデナイサ
ケ（本流でないから） ミギノ カブト
ノガ（兜の方が） ホンリユーデ ソレ
オ ホンリユーニ ソーテ（沿って）イ
クノガ イゼンノ カイドーヤツタンヤ
（街道だったんだ）。

C ウン。ソンデ シラミネ（白峰）ニ
イカレタノ（行けたの） イツゴロマ
デ イカレタモンヤイネ（行けたも
のだね）。シェンゴ（戦後）も ヤッパリ
イットツタンヤロ。

A ンー ワシラモ イットツタ（行っ
ていた）。イッタ オン。アー ソレカ

ラ エーリンシヨノー（宮林署の）サ
ギョーインガ カツチャマ（勝山 カラ
ヨケー キトツタ）。

C ホー イヤ ソンデー シラミネモ
ヤッパリ イッタモンケネ（行ったもの
かね）。

A シラムネカ（白峰か）。

C オン シラミネヤ。

A シラムネゴエワ ワシ イッタコ
トアネー。

C アー ソースカ。フィン トユーコ
トワ シラミネト ココラガ コー
リユーガ アツテ コトバガー ニト
ランカドーヤラト（似ていないかどう
かと） オモテヤ（思ってた）。

【解説】

・ハナダテゴエ…かつて新丸村から東の
白峰村に向かうために利用された峠
道。

・カブト…山の名前。ダイニチは大日山
のこと。

・ヨケー…「余計」からで「たくさん」の意
味。

連載
227方言談話資料に見る
小松方言の特徴 その11
―丸山町方言の自然談話④―昔、丸山町の人は峠越えをして白峰まで蕪玉を売り
に行きました。

前回までと同じく、市内南東部の山間
の集落、丸山町の方言談話を紹介します。
2名の話者A・Bはともに丸山町生え抜き
（A 大正8年生まれ・男、B 明治43年生
まれ・女です。文字化にあたっては、これ
まで同様、表音的片仮名表記（文節分かち
書き）で示し、適宜（ ）内に共通語訳を
付し、傍線部には簡単な解説を付しまし
た。

B マルヤマワ シラミネカラ（白峰か
ら） キタモノア オランナー。

A マルヤマワ キタモノア オラン。ス
ノダニワ（須納谷は） オルカモシレン
オダケガ（織田家が）。ソー ユーガヤ
（言っただ）。（中略）

B ホウト マユオ カンデー ヤマ
ゴエデー アレア ドコ イッタンエ
アノ マユ ウンニ（売りに） イッ
タンニヤワレ。ホラ イチニチガカリ
デ アーシャ イテ イツテクルト
イッカモ（何日も） アーシャ イテー
ユーテワ オッタワレ。マユオ ワタ
シラ シタン。マユ カンデ ソコエー
ウンニイッタヤワレ（売りに行ったんだ
よ） マユオ。

A マユオカ。ソレアー カーチャン イ
クツグライノ トキヤ。

B ソレ イクツヤ オボエネーケド
ソレガーワタシラ マユ コシラエタ
ラ ソノ マユオー ホラ ヤマゴ
エ イクツモ コエタリ アガツタリ
ソエツテ イケテ（いらつしやって）。ホ
イト コンド アーシガ ミツカホ

ド イトーテ オエン（痛くてたまら
ない）。

【解説】

・カンデ…「担いで」の意味のカンデは、
小松市の山間部や白山麓の白峰方言な
どで聞かれます。

・イッタンニヤワレ、オッタワレ、ウンニ
イッタヤワレ…文末詞「ワレ」は、話し
手が相手に「くだよ」と訴えかける場合
に使われます。

・アーシャ、アーシ…旧能美郡の方言で
は、このように一部の2拍名詞（頭高の
アクセント）で1拍目が伸びて発音さ
れる特徴があります。

付記…本連載の第1回は1998年4月
でした。当初はこんなに長く続けること
になるとは思いもしませんでした。が、気
が付いたら19年目が終わろうとしていま
す。この度、諸事情から来月号で本連載を
終えることになりました。長年ご愛読下
さった皆様に、改めて御礼申し上げます。

1998年4月から19年間にわたって「広報こまつ」に掲載されてきた「みまつし、きくまつし 小松の方言」。最終回となる今月号では、加藤先生から執筆にまつわる思い出などを伺いました。

**Q. 加藤先生が小松の方言を調べる
ことになったきっかけは？**

平成8年度に博物館から方言調査を依頼されたことがきっかけです。金沢大学の学生と5年間で120あまりの集落を調査しました。

Q. 方言研究に興味を持ったきっかけは？

私はもともと農家の長男で、将来は農学部に進もうと思って、高校時代は理系を選択していました。しかし、3年のときに担任から「君は農業よりも教師に向いている」と助言され、祖父が教師だったこともあり、教育学部の国語科に進むことにしました。自分で言うのも何ですが、理系にいながら国語の成績だけは抜群によ

かったです(笑)。

国語科で近代文学を専攻するつもりで勉強するうちに、自分が「文学」にはあまり向いていないことに気付きました(笑)。そして、2年の夏に金沢大学のK先生の集中講義で言語地理学(※)を学んだことがきっかけで方言の研究に興味を持つようになりました。文献に載っている日本語ではなく、生身の人から方言を聞き取りながらその歴史や変化を考察していく、それがとても新鮮に感じられました。

※言語地理学…方言の現地調査を行い、その分布を言語地図に描いて言葉の変遷を考察する

**Q. これまでの連載でたくさんのお話
者や市民が登場していますね。**

学生達と市内全域で地元の方と交流で

きたのが良い思い出です。中ノ峠で宿泊したときも、大勢の学生の食事を地元のお母さん達が作ってくれました。あのときの料理やお漬物は感動するほどおいしかったです。調査が終わると「今日はいっぱい方言がしゃべれて楽しかった」と喜んでくれる方も多く、連載の写真の撮影にもたくさんの方に協力してもらいました。連載当初赤ちゃんだった子が今や大学生ですから、我ながら長く続いたものだと思います。

Q. 最後に加藤先生から市民の皆さんへメッセージをお願いします。

関西や九州など、若い人が今でも積極的に方言を使う地域に比べると、北陸は方言の衰退が進んでいます。家の中でも子供や孫に遠慮して方言がしゃべれない

お年寄りが多いのは残念なことです。

そんな中で、この連載が消えつつある方言を懐かしむだけでなく、少しでも小松の方言を見直し、次の世代に受け継ぐきっかけになつてもらえたらうれしいですね。グローバルな時代だからこそ地域を大切に、自分達の方言にも自信を持つて次の世代へ伝えてもらいたいと思います。長い間、ご愛読いただきありがとうございます。

総集編の刊行にあたって

この度、平成10年4月から19年にわたって「広報こまつ」に毎月掲載していただいた「みまつし、きくまつし小松の方言」の連載を終えることになりましたが、小松市のご好意で総集編を刊行していただけることになりました。大変ありがたく、感謝申し上げます。

思い返せば、小松市立博物館の依頼で方言調査を開始したのが平成8年。市内を10のエリアに分け、その後5年間、毎夏金沢大学の学生とともに市内全域の約120地点余りで調査を実施しましたが、その事業へのご理解とご協力をいただくために、市民の皆さんへの宣伝も兼ねて始めた連載でした。

以来19年間、様々なテーマで小松の方言を取り上げてきました。その内容を振り返ると、大杉町方言のくテガツシャイを皮切りとして、分布調査に基づく市内での方言の地域差（43回まで）、市内中心部（龍助町・東町）での方言の世代差と新しい方言の成立（44～50回）、大杉町、尾小屋町、符津町、龍

助町、安宅町での生活語彙調査に基づく分野別の特徴的方言（51～141回）、加賀地方のJ・R北陸本線沿いの17の駅（倶利伽羅～大聖寺）周辺集落での4世代調査に基づく市内3地点（長田町・本折町・符津町）での方言の世代差（142～175回）、語源から見た京都語由来の小松方言（176～216回）、そして最後に大杉町と丸山町の方言談話の紹介（217～227回）でした。

連載を通じて、小松市、そして小松の皆さんとは様々なご縁ができました。連載を読んで下さった小松の皆さんが、方言への誤解や偏見をなくして、自信を持って方言を次の世代に引き継いで下されば、これに優る喜びはありません。長い間ご愛読いただき、ありがとうございました。この総集編で、今一度、小松の方言について振り返っていたできれば嬉しく思います。

平成29年3月

加藤 和 夫 （金沢大学教授）



■著者略歴

加 藤 和 夫 (かとう かずお)

福井県武生市(現越前市)生まれ

1977年 福井大学教育学部卒業

1979年 東京都立大学大学院修了

1985年 和洋女子短期大学専任講師

1991年 金沢大学教育学部助教授

2002年 金沢大学教育学部教授

2008年 金沢大学人間社会学域教授

専攻 日本語学、方言学、社会言語学

■著書 『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ—』(共著 大修館書店 1999)、『お国ことばを知る 方言の地図帳』(共著 小学館 2002)、『新 頑張りまっし 金沢ことば』(監修 北國新聞社 2005)、『みんなで学ぼう! 金沢ことば』〈方言学習教材シリーズ1〉(科研費報告書 2007)、『石川さんの金沢弁かるた』(監修 石川テレビ 2008) など

みまっし、きくまっし 小松の方言

—「広報こまつ」連載 総集編—

著 者 加 藤 和 夫
編集・発行 小 松 市 広 報 秘 書 課

発 行 日 平成二十九年三月三十一日
印 刷 株式会社ゲンダ美術印刷

